東洋美術大観 七

Toyo Bijutsu Taikwan
No 7

東洋美術大観 七

東洋美術大觀第七冊

目次

第七編 德川時代 承前

第十一章 明淸風

歸化禪僧等の墨戲―長崎派の開祖逸然……頁數 五百九十九

小圖第四十九 逸然筆布袋渡水圖……五百六十

逸然門下秀石派―渡邊家―渡邊家の門人―若芝派―慶山派―小原慶山……五百九十九―六百七

小圖第五十 小原慶山筆竹雀圖……六百七

慶山の門人及その末流―喜多元規―大鵬流墨竹……六百七―六百十

長崎派の畫風―支那畫人の來遊―南宗山水勾花點葉沒骨花鳥及浙派末流の傳來―南蘋派―熊斐……六百十―六百十二

第三百十 熊斐筆蘆雁圖

熊斐の門人……六百十二―六百十九

第三百十一 宋紫石筆蜀葵圖

爾餘南蘋派諸家……六百十九―六百二十二

第三百十二 黑川龜玉筆柳鷄圖

小圖第五十一 田英筆蒼鷹圖……六百二十一

小圖第五十二 錢必東筆南瓜圖……六百二十一

漢源派―諸葛派―諸葛監……六百二十二―六百二十三

明淸風雜派―望玉蟾―望月玉仙―玉蟾の門人―大西醉月―醉月の門人―僧鰲山―村上東州―紀竹堂―柳里恭……六百二十三―六百三十五

第三百十三 柳里恭筆蓬萊群仙圖

第三百十四 同筆牡丹孔雀圖

邊漆水……六百三十五―六百三十六

小圖第五十三　邊湊水筆觀瀑圖……六百三十六
渡邊玄對……六百三十六—六百三十七
第三百十五　渡邊玄對筆秋景山水圖
玄對の門人—吳浚明—馬孟熙—馬文晋—鈴木芙蓉—芙蓉の門人—金子金陵……六百三十七—六百四十
文人派—南宗の山水と沒骨の花鳥と—明清繪畫の輸入—文學の趨務—祇南海……六百四十—六百四十四
第三百十六　祇南海筆秋景山水圖
彭百川……六百四十四
第三百十七　彭百川筆松下觀月圖
南宗の勃興—池大雅……六百四十四—六百五十六
第三百十八　池大雅筆白雲紅樹圖
第三百十九　同筆峽中棧道圖
第三百二十　同筆秋江釣舟、松下論古圖雙幅
玉瀾—大雅の門人—餘夙夜……六百五十六
第三百二十一　餘夙夜筆清谿小集圖
月峯—福原五岳—五岳の門人—蓬平—證覺—韓天壽—高芙蓉—木孔恭……六百五十六—六百六十二
第三百二十二　木孔恭筆松下高士圖
孔恭の門人—平安四竹—高陽山人—寶曆、明和の盛況—三大家の比較—謝蕪村……六百六十二—六百六十六
第三百二十三　謝蕪村筆秋山烟靄圖
第三百二十四　同筆溪山高隱圖
第三百二十五　同筆秋溪漁舟圖
第三百二十六　同筆新綠杜鵑圖
第三百二十七　同筆松逕歸樵圖

第三百二十八　同筆花鳥圖
蕪村の門人—寛政、文化、文政頃の諸家—十時梅厓—皆川淇園—皆川剛中—釧雲泉……六百六十六—六百七十五
第三百二十九　釧雲泉筆秋山探句圖
雲泉の門人—廣瀬臺山—村瀬栲亭—岡田米山人……六百七十五—六百七十七
第三百三十　岡田米山人筆松谿養鶴圖
岡田半江……六百七十七—六百七十八
第三百三十一　岡田半江筆雪景山水圖
第三百三十二　同筆梅林村莊圖
第三百三十三　同筆騷風急雨圖
第三百三十四　同筆浦上草堂圖
米山人の門人—柏木如亭—浦上玉堂—浦上春琴……六百七十八—六百八十
第三百三十五　浦上春琴筆琵琶行圖
第三百三十六　同筆秋景山水圖
春琴の門人—龜田鵬齋—雲室—三石—長町竹石—南溪—野呂介石……六百八十一—六百八十四
第三百三十七　野呂介石筆那智懸泉、南山黃柑圖雙幅
第三百三十八　同筆溪流梅竹圖
介石の師弟—僧愛石—天保前後の盛況—賴山陽—木米……六百八十四—六百八十六
第三百三十九　木米筆竹莊閒適圖
第三百四十　同筆溪橋歸樵圖
田能村竹田……六百八十六—六百九十七
第三百四十一　田能村竹田筆嵩山登覽圖
第三百四十二　同筆松谿聽泉圖

竹田の門人―大窪詩佛―山崎雲山―立原杏所……六百九十七―七百二

第三百四十三　立原杏所筆蘆花翡翠圖

文士の餘技と行家の精藝と―明淸風最勝の四大家―渡邊華山……七百二―七百四

第三百四十四　渡邊華山筆一掃百態（其二圖）

第三百四十五　同筆蘭竹圖

第三百四十六　同筆溪澗野雉圖

第三百四十七　同筆陽明洞圖（全圖及一部分）

第三百四十八　同筆月夜山水圖

第三百四十九　同筆蘆雁圖屏風（雙及一部分）

渡邊如山―渡邊小華―華山十哲―椿椿山……七百四―七百七

第三百五十　椿椿山筆天燭雙鷄圖

第三百五十一　同筆垂柳鸕鷀圖

第三百五十二　同筆久能山眞景圖

高久靄崖……七百七―七百九

第三百五十三　高久靄崖筆東坡誕辰圖

菅井梅關……七百九―七百十

第三百五十四　菅井梅關筆梅溪高隱圖

櫻間青厓……七百十

第三百五十五　櫻間青厓筆秋景山水圖雙幅

中林竹洞……七百十―七百十一

第三百五十六　中林竹洞筆富岳圖

第三百五十七　同筆錦鷄圖

第三百五十八　同筆敗荷雙鷺圖
山本梅逸……七百十一
第三百五十九　山本梅逸筆秋景山水圖
第三百六十　同筆溪流叢竹圖
第三百六十一　同筆秋花雙鳩圖
第三百六十二　同筆木芙蓉雙凫圖
小田海僊……七百十一
第三百六十三　小田海僊筆春嶽歸樵圖
第三百六十四　同筆水楊歸牧圖
貫名海屋……七百十一―七百十二
第三百六十五　貫名海屋筆溪山幽鄔圖
第三百六十六　同筆竹翠溪聲圖
第三百六十七　同筆林下孤亭圖
第三百六十八　同筆夏冬山水圖屏風（一雙及二部分）
日根對山……七百十二
第三百六十九　日根對山筆秋溪覓句圖
第三百七十　同筆西園雅集圖
南北合流―谷文晁……七百十二―七百十三
第三百七十一　谷文晁筆谿山疊嶂圖
第三百七十二　同筆夏山圖
第三百七十三　同筆赤壁圖
第三百七十四　同筆蘭亭圖雙幅

第三百七十五　同筆陶淵明歸去來圖
第三百七十六　同筆樓閣山水圖雙幅
文晁の門下……七百十三

第七編　徳川時代 前承

第十一章　明淸風

歸化禪僧等の墨戲

近古支那禪僧等の我が國に歸化したる者にして、畫技を能くせしは少からず。隱元、隆琦、承應三年來化、寛文十三年四月三日寂、八十二歲、拾彙に「又有自贊之畫」と曰ひ、古畫備考に、著色達磨圖の印識を載せたり、書に名あり即非、性一、寛文十一年五月廿日寂、拾彙に「自畫祖師像并題贊」と記せり、又能書木庵、性瑫、明暦元年來化、貞享元年正月廿日寂、七十四歲、拾彙に「又有墨戲、多是蘭竹、自加題詞者也」と曰ひ、展閣目錄に万福寺什松竹二幅を錄し、畫乘要略に「能書又好丹靑」とあり高泉、性潡、寛文元年來化、元祿八年十月十六日寂、古畫備考に「又作畫」と記し、その文殊像(書法探幽)の款印を載せたり心越、名興儔、號東皐、延寶五年來化、元祿八年正月十九日寂、五十七歲、畫乘要略に「善水墨畫、淸秀雅逸、價重藝林」と曰ひ、古畫備考には「印文有鷲峯野樵、樵雲、西湖一人、墨樵之字」と云ひ、渡江達磨、蘭竹等の遺作を錄せり竺庵淨印、畫乘要畧曰、「善畫」の徒、この餘、檗僧墨戲を能くせし者少からず、古畫備考多くこれを列擧せりと雖も、今省略に從ふ皆墨戲を以て賞せられ、その餘楊愼、一名遵眞、傳稱明人、工畫人物、謂從隱元國師來(拾彙)、畫隱元禪師像(備考)陳元興、又稱明人來歸、未詳、曾參木庵老師法席、又能畫、常揣黃檗諸師眞相(拾彙)、古畫備考曰、「陳玄興、或作元興」、長崎畫人傳曰、「諫元興初專業儒、授生徒、著詩苑餘草、行時旁善繪事、而其手蹟絕少、嘗於皓臺寺、觀釋迦出山像、筆意高古遒勁、不易才也、又好擊劍、以氣節自高、處世不苟求聞達、故人稱市中隱士、生平歸心佛乘、就僧潮音聽道、法名淨得、元祿癸未春寢疾、時施白紙帳、起臥其中、帳上戲書五字曰、坐臥白雲間、自書號寂齋居士、使遺命其子、刻不墓碑、三月十六日卒、時年五十六」、陳元贇近世叢語曰、「字義都、號既白山人、明虎林人、崇禎中進士下第、避亂投化、後以山人應尾張侯聘、時々來游京師、又如江都、與諸名人爲文字交、初萬治二年、於名古屋城中、與僧元政始相識、契分尤厚、元政嘗贈詩云、公本大唐賓、七十六老人、吾少公卅六、才調況非倫、不知何夙世、合如車双輪、其平生所唱酬者、彙爲元々唱和集、刊行于世、元政詩文、慕袁中郎、此邦奉中郎、以元政爲首、而元政本因元贇知有中郎也、元贇善拳法、當時世未有此技、元贇創傳之、故此邦拳法、以元贇爲開祖矣、正保中、於江都城南西久保國正寺教徒云」、羅山詩集に和大明人陳元贇沈茂人詩并序あり、序に曰く「辛酉(元和七)春大明國浙江道奉檄使單鳳翔來於洛、余於板倉伊州太守及防州太守許而相逢、蓋巳未(元和五年)西州所在投化唐人、假商人名、而出海上、帶日本刀劍、着日本衣服、掠盜自福建來日本之商船、而後又爲商人貌而歸於日本、此事福建檄浙江、浙江以聞、因是告於日本云、三月十三日、余赴戶田爲春閣、與明使晤語終日、鳳翔雖粗知字、不能詩、其下陳元贇沈茂人作詩呈余、余即和答之」、古畫備考尾張名所圖會を引いて曰く、「陳元贇寓居跡、(尾州)桑名町通袋町北艮學院の邊に住、又九十軒町にも寓居せり、明季の亂をさけて日本に來り、國祖君(義直卿)の寵遇に預り、寛文十一年六月九日、年八十五にて死、墓は建中寺に在り」、古畫備考又逸士陳法祖を錄せり等あり。然れども皆これ謂はゆる墨戲のみ。猶中古の宋元風に於ける道隆、祖元、子曇、一山等の如きなり。若夫眞に我が明淸畫風の濫觴を爲し、謂はゆる長崎派の開祖とも目すべきは、逸然を推さざるべからず。今先これを叙して、各〻その末流の作者を列擧すべし。

長崎派の開祖逸然

僧逸然釋性融、俗姓は李氏、明の浙江仁和の人、黃檗宗の僧なり。「徑山末派」、「海東衲子」の印あり崇禎十六年明朝亡びしかば、正保二年淸の順治二年亂を避けて日本に歸化し、長崎に至りて興福寺に住し、浪雲菴主と號す。寛文八年七月寂す。享年六十八。長崎畫人傳及拾彙久しく我が國に在りしかば、畧日本語に通ぜり。古畫備考所引見聞錄長崎畫人傳渡邊秀實著に曰く。「脩禪之隙、好善繪事、尤工人物佛像、門人甚多、秀石道光、殊冠其中矣、傳謂、本邦未曾有稱唐畫者、逸然剏唱之、故今稱唐畫者、皆以逸然爲開祖焉」。畫乘要略に曰く「不拘宗法、揮灑縱横」。名畫拾彙に曰く「能畫古德人物雜圖、或其畫上有隱元老師之題贊」遺作往々長崎等に存ず。纖巧の描法、明麗の設色、僧家の餘技とは云へず。殆ど行家の精藝の如し。秀石、若芝の徒のこれより出でゝ、各〻專門の一家を成せるも亦宜なり。こゝにその作例の一を掲ぐ。小圖第四十九、逸然筆布袋渡水圖、絹本著色、長崎池島正造君藏

逸然門下秀石派、渡邊家

逸然の門下には秀石、古畫備考長崎畫系は、陳元興の門に出づと爲せり若芝の二派崎陽畫家の稱呼に從ふを出せり。秀石派の祖を渡邊秀石とす。その傳記は崎陽畫家略傳、文化十年今井孝寬著長崎先民傳民一作賢及長崎畫人傳に出づ。左にこれを列擧すべし。

秀石　御用畫師兼畫目利、渡邊氏、元和三年生。

一に秀碩、字は元辛、號蠏道人、居を仁壽齋と號す。また烟霞比丘と號す。其先肥後太守菊池の族なり。菊池滅して、肥前大村に遁れ住み、漁を業とし、姓を

岩河とかふ。其後岩河甚吉といふもの長崎に來住す。秀石は其子なり。幼より繪事を好み、初め支那僧逸然に學び、後自から一家を爲せり。元祿十年八十歲、鎭臺近藤備中公、命じて御用書師兼書目利とす。（渡邊秀石家譜繪書叢誌所載に依れば、長崎奉行の下の書目利は、秀石を以て初めとし、爾後常設の員と爲れりと云ふ）寶永四年正月十六日歿す。壽九十一。法號仁壽齋元辛秀石居士。墓は源宗寺上に在り。この一門の墓はみな同所に在り（崎陽書家略傳）

渡邊元愼字周碩、從僧逸然傳書得妙、而出其門者、今尙衆、（長崎先民傳）

渡邊秀石一作碩字元章、一昭、號仁壽齋、又有嬾道人、烟霞之號、其先菊池秀朝、前肥後國主菊池武重族裔、逮足利將軍滅菊池秀朝、逃匿肥前大村之松島、改氏爲岩川、隱漁獵以度世、子孫亦尋家焉、後寬永年中、有岩川甚吉、從松平伊豆侯、討島原賊徒、歸來移居于崎陽、而生秀石、秀石成長、再改氏爲渡邊、秀石幼嗜書繪、初師明僧逸然、善學其法、後揣摩精究、青色過於藍、深得宋人妙趣、遂自成一家、彼如書山水人物、花卉翎毛、天機活動、莫一不稱至妙者、然今也世俗所蓄藏、凡多贋訛、而偶有眞、則剩不施名印、故鑒者多誤、以爲宋元名家筆蹟、而莫多識其實者、誠近世希代妙手矣、眞村蘆江嘗云、秀石之書、猶望景星瑞雲、可仰覩而不可企及、殆是書神矣、元祿年中、鎭臺近藤備中侯、召厚遇之、授鑒書職、秀石爲人温厚謹愼、不苟慕勢利、常歸佛乘、隨明僧隱元領其旨、寶永四年丁亥正月卒、時年六十九、（長崎書人傳）

享齡は後者蓋し信ずべきか。（渡邊秀石家譜及古畵備考系圖、共に六十九歲とせり）古畵

小圖第四十九　逸然筆布袋渡水圖

備考秀石の畫を評して「逸然風也、形似ハ工也、染拔タル如ク律義ニ書タル畫也」と曰へるは當れり。遺作多く長崎に存ず。款印あるもの少し。

秀石家譜亦言之 妍麗の設色、雅趣乏しと雖も、精巧亦見るべし。秀石の男秀朴嗣ぐ。傳記左の如し。

秀朴　御用書師兼書目利、本姓渡邊、壺溪源吉。

秀石の子、字は元壽、號は壺溪。元祿十年父とゝもに召されて、御用書師兼書目利となる。享保年間、鎭臺渡邊侯と同氏なるを憚りて、其號を以て氏とせり。年八十に及びて、みづから已然と號す。これより後、書くところ風狂洒落、いさゝか規矩に拘らず。最も妙に至れり。寶永六年九十五歳にて死す。法號弄花院元壽秀朴居士。（崎陽書家略傳）

渡邊秀朴字元壽、號壺溪、通稱源吉、秀石子、秀朴弱冠善寫書、六法具足、文質獲宜、及其老、運筆磊落、氣韻出塵外、乃豁然望之、猶視蓬瀛神仙、元祿年中與父秀石倶、叙鑒書職、年八十辭職、自號已然居士、後投筆不敢書、雖豪富權門之需、不復許之、偶有適意則揮毫、然豪放縱逸、不肯事肖似、故如書人物禽獸、身頭巨細、膞臂長短、手擘多寡、不苟拘其分數、乃面貌情態、怪異詭譎、反使人愛慕之、常愛鄉里小兒、雜與嬉戲、兒輩時求書、輙書與之、故人多託兒輩求其書、知則已、又生平愛逃禪、庭中有大磐石、無冬夏趺坐其上、妻子危之、秀朴哂曰、汝常因身於寒熱、投心於地獄、吾甘身於寒熱、安心於樂土、寶曆丙子七月、結跏石上而終、容貌不頽、儼然如生、時年九十五（長崎書人傳）

秀石の弟と云ふに渡邊秀岳あり。長崎書人傳に曰く。

渡邊秀岳字元英、通稱三郎兵衞、號安齋、秀石弟、甚吉次男也、學書於兄秀石、而其勁健淸潤、與秀石爭其雄、乃秀石嘗曰、吾實難爲其兄、餘暇好天文兵法、能騎射擊劍、意氣慷慨、不拘時情、故多與世不合、近藤備中侯見之甚悅、因授鑒書職、秀岳辭不就、後細川肥後侯辟之、岳亦不就、占一勝地、退居于崎陽東鳴瀧、此地也翠巒高聳谷泉響、綠蔭繞軒鳥雀囀、雲霧變幻花木委蕤、秀岳優然望之、興至則脩書畫、氣倦則游咏、或射獵山野、耘耔園圃、起居無時、出入縱其情、時聚門人、論兵法、談歷史、輙日夜欣然忘寢食、享保十九年甲寅七月卒、九十一歳、

されど崎陽書家略傳の說はこれに異なり。その何れに從ふべきやを知らず。

秀岳　御用書師兼書目利手傳、渡邊三郎兵衞。

秀石の弟なりといふ。年期を考ふるに、秀石より少きこと五十八歳。秀朴より少きこと十二歳。疑ふらくは秀石の子にして、秀朴の弟ならむか。字は元英。享保十九年七月十八日、六十歳にして死す。法號長安院元英秀岳居士。

秀岳の子に渡邊元秀あり。傳記左の如し。

元秀　御用書師兼書目利手傳、渡邊八郎兵衞。

秀石の從弟なりといふ。字は文明。享保二十年六月三日死す。法號天眞院文明普安居士（崎陽書家畧傳）

渡邊元周字文明、號眞齋、通稱八郎兵衞、秀岳子、繪事不劣其父、亦能詩好武、享保年中、鎭臺大森山城侯、辟授鑒書職、同二十年卒、時年六十歳（長崎書人傳）

秀朴の後を嗣げるを渡邊秀溪とす。

秀溪　書目利、渡邊文次郎。

秀岳の子なり。秀朴の職を嗣げり。寶暦元年三月死す。五十餘歳。法號雅德院元俊秀溪居士。(崎陽書家畧傳)

渡邊秀溪字元俊、小字文治郎、號雅德齋、元周男、秀朴族子、資性善畫、幼摸寫物象、皆能逼其眞、機巧多驚人、秀朴異之曰、是兒奇警、後當爲畫家冠冕、遂廢其子、而使秀溪繼其職、秀溪嘗爲沈南蘋、畫孔子關羽二像、以贈之、南蘋獲之歎賞、贈書以謝、其略云、先生得唐代意氣、與宋人抗衡、一洗近古丹青、更開繪事綱領、嘗使劣生徒羨想、今辱獲之、以爲鳳毛麟角、寶暦元年辛未三月卒、(長崎書人傳)

秀溪字は元俊、秀岳の孫なり。(渡邊秀石家譜)

秀溪の子秀彩嗣ぐ。

秀彩　書目利、渡邊丹次。

秀溪の子。寶暦十一年二月二十九日死す。時に四十餘歳。法號郁文院默巖秀彩居士。秀石より秀彩に至るまで、書くところ名諱を記さず。この故に世人誤りて明畫とし、元畫として賞するもの多し。(崎陽書家略傳)

渡邊秀彩字元素、號文齋、通稱丹治、能事父母、孝順、善脩繪事、苟不墜家聲、寶暦十一年二月卒、(長崎書人傳)

秀彩の子を秀詮とす。

秀詮　渡邊吉十郎。後正助と改む。

秀彩の子、字は元諭。畫はその家風を傳へ、並びに畫法を石崎元章に學べり。專ら縮み毛の虎を畫き、一家を成せり。世に吉十虎と稱す。現存(文化十年)八十餘歳。(崎陽書家略傳)

渡邊秀詮字元諭、號自適齋、又號爲章道人、通稱正助、秀彩子、性端正謹行、繪事得家法、不失令名、尤長於畫虎、故時人稱秀詮虎、秀石以降、畫上不多施名印、至此始用之、寶暦年中授鑒畫職、文政七年甲申五月沒、時年八十九、(長崎書人傳)

秀詮の子秀實嗣ぐ。

秀實　書目利、渡邊常次。

秀詮の子、字は元成。家法を父に學び、また南蘋の風を眞村蘆江より傳へたり。現存(文化十年)四十餘歳。(崎陽書家畧傳)

渡邊秀實字元成、號鶴洲、秀詮子、幼學畫於其父及蘆江、而夙有出藍之譽、及年壯則其業益進、嘗觀畫人物花卉、鳥獸山水、靡盡不極其妙、總筆力峭勁、氣韻飄舉、誠當代高手矣、其爲人剛毅方正、敢不慰姑息、苟臨書畫、則凝神通氣、敢不輕施一手、乃未嘗好會書畫遊、常謂、戲作反招醜僻、享和二年嗣父後、爲鑒畫職、後天保元年庚寅九月卒、時年五十三歳、(續長崎書人傳草稿、嘉永四年九月荒木一著)

秀實は田能村竹田と交はりきと見え、竹田莊師友畫錄にもその小傳を錄せられたり。曰く。

渡邊鶴洲、本姓大原、自道慶山之裔也、人物山水花卉、質實遒渾、自有祖風、比之一邑畫史、專尙清人畫格者不同、所謂別拔一幟、斯人是也、常從吉甫劉翁遊、翁

閉戸讀書、鶴洲性狷介、亦不喜忘交、故相得甚懽、時々過禮、講讀吟咏、評拍古今、以爲樂矣、

本姓大原と云へば、秀詮の實子にはあらで、株を買ひて畫目利の職を繼げるにもやあらむか。尙後考を期す。秀實頗る文字あり。曾て長崎畫人傳を著す。みづから序して曰く。

世或有名而無實、有實而無名者、古今皆所同也、夫有名而無實者、人以瑜爲瑕焉、有實而無名者、人以珉爲玉焉、且也名彰而物不存、物存而名不徵、則淄澠混殺、擧措失當、宜哉眞僞誑惑之所當訴也、於是乎官令設鑒職、決平是非、辨玉石、別淄澠、表隱微、闡幽晦、以復於其正、是以高夸者見度之、宛屈者見伸之、隱匿者見彰之、協實者見通之、而後使密疎巧拙、各獲其平、而眞僞誑惑之訴即息焉、吾曾加其職、評論其畫繪、且黜陟褒貶未嘗輟焉、噫吾終年褒貶其物、而未嘗識其爲人而可哉、且和漢如古畫、既各有其錄矣、恨本邑未嘗有誌畫人者、慙雖區々褊域未足錄之、然世變年移、名與物俱湮滅、而後世靡獨識者、則惟亦古人之情哉、孔子曰、君子疾沒世其名未稱也、吾爲之恕察、且以加其職、卒不能止焉、苟遺吾孤陋、搜古老、訪家翁、或徵諸遺蹟、稍輯錄之、以名長崎畫人傳、其意非將布諸世俗也、聊以佑吾子孫後世之識鑒耳、

秀實の子に秀乾あり。續長崎畫人傳に曰く。

渡邊秀乾字元巽、號龜洲、鶴洲冑子、資質溫順正直、少繪事卓絕、乃夙有鳳毛之稱、又好讀書、旁能射術、文政年中先父而卒、時年二十有二、鶴洲甚哀惜之、龜洲死後、鬱々不多認繪畫、葢是人有俊才、天如少假之年、則其極功殆不可測焉、

渡邊家の門人

渡邊家の門人少からず。略左に列擧する所の如し。

上杉桂翁　長崎畫人傳に曰く「學畫於仁壽翁、而竟入其室、筆力遒勁、實可稱能品焉、而其畫不願施名印、故鑒者多誤爲仁壽翁筆、寶永戊子、鎭臺駒木根肥後侯、辟除鑒畫助員、享保丁酉卒」。同書に又桂翁の子上杉九郎治を錄して曰く「名字不明、桂翁子、精工不減其父、其畫亦不多施名印、享保丁酉、始襲父職、同至于甲辰而沒」(崎陽畫家略傳及長崎畫系亦秀石の門人と爲せり)

廣渡一湖　長崎畫人傳に曰く「肥後侯畫家末次彌治兵衛弟也、寬文年中、擲來崎陽、學畫於廣渡心海(心海佐嘉人、倚狩野家流畫、時寓居崎陽)一湖與心海、素以其同族、復氏爲廣渡、更就淸人陳淸齋學畫、又及晩節、師仁壽翁、而終至其法、元祿巳卯、鎭臺大島伊勢侯、辟除鑒畫職、居四年歿、時年五十九」。古書備考長崎畫系亦秀石の門人とす。崎陽畫家略傳はこれを慶山派に編して、錄して曰く「畫目利廣渡一湖。字號いまだ詳ならず。初め肥後侯の臣。故ありて長崎に來り住し、畫事を嗜めり。桂翁、元德等と同時たり。その子伴吉、八平次(元厚)元章の門人猪三郎、八左衛門(湖月)虎藏、作三郎、爲八郎(虎藏以下融思門人)みな緖を繼ぎて畫目利を相續す」。一湖の子に廣渡湖春あり。長崎畫人傳に曰く「通稱伴助、一湖之子、受書法父、而襲職」。湖春の後を嗣げる湖秀は石崎元章の門人なり。湖月は眞部蘆江の門人、各〻その條に出づ。

經山　名は德。長崎の人。古今諸家人物志に出づ。以上三人は秀石の弟子なり。

經山の門人に勝野范古あり。古今諸家人物志に曰く「長崎人、東都來、後歸國」。畫乘要略に曰く「善花卉翎毛、又工墨竹」。古書備考に明和五年の平安人物志を引いて、勝野二秀と記し、又閑田耕筆を引いて曰く「三十年前(寶曆、明和頃)范古といへる畫人ありしが、長崎にて學び、京に住めり。其人業をつぐ

べき弟子なく、僅に貧生の扇面を書て食料に充たしとねがひし者兩人あり。此人を信じて、とかくの家事ども、心を付てまかなひし富商の弟子一人ありしのみ。言曰。おのれは弟子をとる事嫌ひ也。其故は、初學のほどは、夜晝となく入來て學ぶが、やゝ筆力も出來、人にもしらるゝほどになれば、誰が弟子といはるゝをにくみて、他人師の事をとへば、其人ももと知る人なりしなど、よそごとにいひなすもの、自他のうへにあまたしれり。それに懲りたりといはれき。」

渡邊寛　字子仁、號春庵、初專業儒術、除學校掌史、學畫於已然翁、意匠平淡清雅、又能詩及書、後歸釋氏爲僧、法名了諾、號十笏庵、嘗往日向、就湖月、或到駿河隨白隱、參禪問答、凡十有二年、醍醐徹底而歸、結廬於櫻馬驛而居焉、至于明和六年已丑十月而卒(長崎畫人傳)花鳥、山水、墨竹最巧なり(逸人畫史)

城恒彥　字文濤、號里風、又號遯齋、小字官助、後改氏爲東、學畫於已然翁、專寫梅竹蘭菊、間畫人物、其用筆無意思、自有雅趣、又能篆隸楷行草及國字、別成一家、又旁能國歌國文(長崎畫人傳)以上二人は秀朴の弟子なり。

荒木秀邦　字元慶、學畫法於雅德翁、補鑒畫助員(同書)畫目利手傳荒木元慶、初め和蘭陀方內通辭を勤め、畫法を秀石、桂翁等に學べり。後通辭を退隱し、專ら畫事を樂しめり。享保の頃、御用畫手張候故、時の鎭臺より畫目利手傳を仰せ蒙り、後嗣なきを以て、明和三年御役方を元融に讓り、老死す。(崎陽畫家略傳、慶山派)古畫備考長崎畫系も亦秀溪の門人と爲せり。

林堯　字時中、號天門、通稱與十郎、鶴洲門人、能畫人物花卉鳥獸、文政十一年卒、時年二十有餘(續長崎畫人傳)

久松定碩　字子德、號春谷、又號猗蘭齋、通稱碩二郎、鶴洲門人、好畫水墨蘭竹、凡其爲人溫恭愼密、好學愛衆、敢不侮鰥寡、乃崎人多慕之、天保八酉九月卒、時年四十有餘(同書)

高島茂敦　字舜臣、號秋帆、通稱四郎太夫、鶴洲門人、好畫墨梅、殊工於行書(同書)後稱喜平、慶應二年正月十四日歿。歲六十九、葬駒込東片大圓寺(忌辰錄)

桐山信直　字立夫、號桐園、通稱次郎八、鶴洲門人、能畫花卉鳥獸(續長崎畫人傳)

大城茂時　字君頤、號繡水、又號石農、鶴洲門人、畫花木鳥獸、好作寫生、旁巧彫刻、遂唱刻技、漫遊邦國、終于筑前、世人殊賞玩之(同書)

村田宗博　字文鄉、號鶴皐、通稱宗兵衛、少學畫於鶴洲、能畫人物花卉鳥獸山水、今見行于世(同書)

宗博の門人に渡邊秀彰(字元施、號晴洲、通稱喜代二郎、鶴皐門人、好畫花卉鳥獸、嗣鶴洲後、爲鑒畫職(同書)松尾重彰(字子元、號雨郊、通稱連輔、鶴皐門人、好畫人物花卉鳥獸、同書)あり

荒木千洲　續長崎畫人傳草稿に曰く「荒木一字世萬、號千洲、又號春潭、少師事於鶴洲、親傳其法、能畫人物花卉鳥獸、間作山水、其爲人溫藉恭順、苟不欲逆於人、乃爲高貴見愛稱焉、嘗繼父後、爲鑒畫職」古畫備考に嘉永四年畫く所を錄せり。以上林堯以下七人は秀實の弟子なり。

千洲の弟に平野武實あり。續長崎畫人傳に曰く「字美卿、號秋聲、通稱與市、千洲實弟、學畫於家兄、畫花卉鳥獸」千洲の子を荒木宗信と云ふ。同書曰く「字子恭、號桂州、通稱盛之助、千洲冑子、學畫於父、好畫花卉人物鳥獸」古畫備考の長崎畫系は「茨木宗信」に作れり。千洲の門人、續畫人傳錄する所左の如し。

石崎良清　號桂洲、通稱愼三郎、千洲門人、弘化年中卒、年二十有餘、

山本保之　字知謙、號春濤、通稱此二郎、千洲門人、好畫花卉人物、

溝口雅朝　(古書備考蜼朝に作る)字子旭、號春耕、通稱兎馬次、千洲門人、好畫花卉人物、

大宮良　字士貞、號荷江、通稱友太郎、千洲門人、好畫花卉人物、

今井桂相　(古書備考佳相に作る)字貴本、號翰香、通稱政治郎、千洲門人、好畫花卉人物、

鈴木禮行　字九圍、號棠皐、通稱佐野吉、千洲門人、好畫花卉人物、

吉田善寶　號雨香、通稱久之助、千洲門人、

佐藤直温　字子玉、號柳村、通稱豐吉、千洲門人、

石崎喜起　字伯熙、號蓼洲、通稱麒一郎、千洲門人、

この餘三浦梧門(後に出づ)も亦曾て秀實に學びしかど、後畫風を變じたれば、秀石派には非ず。

謂はゆる若芝派の祖は、逸然の門人河村若芝なり。左にその傳記を掲ぐ。

蘭溪若芝　河村氏。

肥前佐賀の豪族。故ありて隱遁し、長崎に來住し、歸化の唐僧等と交はり、烟霞比丘または風狂子と號し、塵外に優游して世を渡れり。畫法を逸然に學び、多く佛像を畫けり。渡邊秀石と伯仲たり。若元、慶山、一山等この門に出づ。また世にもてはやす裝劍の具に、若芝鎸と稱するものあり。黒金を腐蝕して貝貝に嵌し、物景を寫し出だす。その法を木庵禪師に受けたりと云ふ。門人喜左衛門これを傳へて、その支流今なほあり。寛永四年十月朔日死す。墓は延命寺山上に在り。(崎陽書家略傳)

若芝工畫、學僧逸然、然華人也、航海住于邑之東明山、畫技入妙、若芝從之得其祕、崎之學畫者、多出于其門也、(長崎先民傳)

釋道光號蘭溪、又號若芝、又有烟霞比丘、風狂子之別稱也、俗氏河邨、嘗學畫於逸然、專畫佛像、間寫人物花卉翎毛、頗得其妙、旁又善鎔冶、作香爐花瓶及刀劍裝飾、皆鏤嵌銅鐵、蒔金銀砂子、以摸人物山水、龍虎獅子之類、其精巧究妙、至今人多稱翫焉、世謂若芝、此技本邦時無其傳、未知其所學、但云傳於明人、寶永四年丁亥十月寂、(長崎書人傳)

逸人畫史には「紫陽山人と號す」とあり。若芝の門人に河村若元、河村若軌、僧一山及小原慶山あり。

若元

諱は道昌、號華山、別號癡翁、本姓詳ならず。師の氏を襲いで河村とす。元祿の間、鍋島侯に聘せられて佐賀に行き、祿百石を給はれり。後に郷に歸り、延享元年五月十九日死す。時に年七十七。法號蘭英若元居士。墓は皓臺寺山上に在り。この一家の墓、みな同所に在り。その子若麟、若鳳また畫に名あり。(崎陽書家略傳)

河邨若元名道昌、字蘭榮、號癡翁、又號華山、學畫於道光、襲道光俗氏、爲河邨、應肥前侯辟、食祿百石、既而致仕歸于家、延享元年甲子五月卒、時年七十七、(長崎書人傳)

一山　若芝氏

本姓字諱詳ならず。師の號を以て氏とす。享保十一年十月十五日死す。法號別峰一山居士。(崎陽書家略傳)

釋一山道光弟子也、傳繪事及鏤金法、襲號若芝、享保十一年十月寂、自此而後、鏤金門人、總相繼稱若芝、至今猶姓氏焉、(長崎書人傳)

河村若軌は古畫備考の系圖に見え、「字叔東、享保三歿、八十四歲」とあるのみ。若元の子山本若麟、蘆塚若鳳の傳記は左の如し。

若麟　唐館公用支配人、山本丹次郎。

若元の長子、名は長昭、號は瑞翁。享和三年正月四日死す。時に八十一歲。法名瑞翁若麟居士。(崎陽書家略傳)

山本若麟名長昌、號瑞翁、若元冑子、畫人物花鳥山水、享和元年辛酉正月卒、時年八十一、(長崎書人傳)

近來長崎ニ若麟ト云書工、虎ヲ畫クニ名アリ。其畫ヲ見ルニ、首長クシテ猫ニ似ズ。是寫眞ナリト云ヘリ(古畫備考所引蘭山本草譯記)

若鳳　唐物目利、蘆墳勇七郎。

若麟の弟。名は英祥、號は梧底。一に梧亭に作る。安永九年七月二十四日死す。時に五十八歲。法名若鳳文德居士(崎陽書家略傳)

蘆塚若鳳名英祥、字文德、小字勇七郎、號梧亭、又號蘆囿、若麟弟、安永九年庚子七月卒、(長崎書人傳)

若麟の子に若融、若瑞あり。崎陽畫家略傳に曰く。

若麟字は祝和、居を方壺齋と號す。今町組頭、平島甚左衞門、現存、六十歲。その弟「若瑞」字は稻光。銀屋町、河村泰助、現存、五十六歲。また書を能くす(文化十年)

慶山派、小原慶山

小原慶山は若芝派より出でゝ別に一家を成せり。古畫備考長崎畫系は「秀石の門に出づ」と爲せり謂はゆる慶山派崎陽畫家略傳これなり。慶山の傳記も亦崎陽畫家略傳及長崎書人傳最精し。左にこれを抄出す。

慶山　御用畫師兼畫目利、小原氏。

初め溪山、字は霞光、後慶山と改む。丹波の產。後京都に來り、小原に住す(古畫備考に曰く「城州小原人」)生得畫を好み、曾我蛇足を師とし、(畫纂亦言之)和繪に巧みなり。中年漢畫の筆密なるを慕ひ、終に長崎に來り、若芝の門に入り、(畫纂亦言之)專ら漢畫の法を學び、出藍の才、遂に一家を成し、古今の能手たり。元祿年間、鎭臺府の命を蒙り、御用畫師兼畫目利となり、終に小原を以て氏とす。そのころ沈南蘋海に航して來り、慶山の畫を見て、海外かくの如き能手あるを賞嘆して、館に請じ、その唐國畫室の天井に雲龍の畫を描かしめて大に悅び、歸唐後、書翰を寄せて厚く謝し、絹地に春秋花鳥の圖二張を書きて、慶山に贈れり。享保八年七月二十九日死す。法名霞光院慶山日登居士。墓は法華宗長遊寺の山上に在り。この一家及門人石崎元德、元章の墓もまたみな長遊寺に在り。(崎陽畫家略傳)

小原慶山、一作溪山、號霞光、或稱京師人非也、初學畫於廣渡心海、後更師仁壽翁(秀石なり、この書略傳と說を異にす)、遂自成一家、尤長於花鳥樹石、墨龍墨梅、其用筆豪放、意匠超逸、而不肯事精硏潤澤、可謂絕技也、然至如人物山水、未免有心海之筆意、自適翁甞謂、慶山與壽翁並妙手、而慶山所謂筆格野逸、而壽翁所謂氣韻富貴、又謂、慶山有如驍將擐甲執矛向大軍之勢、壽翁廼有王侯衣冠嚴飾、臨于廟堂之氣象、總是風塵外物、蓋確論也、(中畧)寶永中除鑒畫助員、享保十

八年癸丑七月卒（長崎畫人傳、歿年前書と異なり、非か）

山中人饒舌に曰く。京師雪溪、長崎慶山二子、初學雪舟、資質頴異、時際建櫜日久、文運漸隆、爲其所薫染鎔化、大有解悟、竟洗舊習、直法宋元諸家、然所謂仙鼠食丹、而未全化者也。竹田蓋し慶山等を以て明淸畫風の開祖と爲す。逸然、秀石、若芝を措いて論ぜざるは何ぞや。又その慶山等の畫を評して、仙鼠丹を食ひて未だ全く化せざる者と言へるは、逸然、秀石、若芝、慶山等の畫風、（望玉蟾、柳里恭等の畫風亦これに屬す）元竹田等の崇拜する所の明の吳派の風に非ずして、祇南海、池大雅、謝蕪村等以下の祖述せし謂はゆる文人畫と、初めより全くその由りて來る所の流派を異にするものなることを思はず、前者の漸して以て後者の醇に進めると謬考せしが爲のみ。竹田の未だしとする所のものは、即ちこれ長崎派の本色にして、實に元明畫派の一體なり。こゝに慶山の竹雀圖（小圖第五十、絹本着色、都筑男爵藏）を揭げて、その作風の一例を示す。

小圖第五十　小原慶山筆竹雀圖

慶山の子に巴山あり。

巴山　書物改手傳、小原勘八。

慶山の子、名克紹、字は子緒。畫は父より受く。專ら墨龍を作る。頗る經義に通じて、邑の子弟を敎授せり。性行厚謹、苟もするところなし。安永六年九月九日死す。法號克紹巴山居士。子なきを以て、門人元德の孫才藏といふもの、御役儀を仰せ蒙る。才藏は石崎文十郞（後に出づ）の三男なり。（崎陽畫家略傳）

小原克紹字子緒、小字勘八、慶山子、業儒術、以授子弟、除本邑校書助員、繪事有父慶山風格、巴山沈靜寡欲、不專修儀操、閭鄉稱其爲人、安永六年丁酉九月沒、（長崎書人傳）

小原克紹字子緒、號巴山、又號敬齋、又號敬修齋、稱勘八、謙默克讓、厚謹過人（熊野家譜）

慶山の門人及その末流

慶山の門人に石崎元德あり。

元德　御用畫師兼畫目利、石崎淸次右衞門。

慶山の門人。本姓西崎、字は慶甫、昌山と號す。享保七年、日下部丹波故ありて小幅に瀑布野馬の圖を作らむとす。苦思三年にして意の如きを得ず。元德を召して圖せしめらる。元德卒爾にこれを圖す。その妙趣公の意表に出でたり。この故に遂に召し出だされ、御用畫師兼畫目利となる。この時西崎氏を誤りて石崎を以て召さる。終に以て氏を改む。明和七年十月二十九日死す。法號昌山院元德日精居士。（崎陽畫家略傳）

石崎元德字慶甫、通稱淸右衞門、號昌山、元德幼時臨摹古蹟、全不失其神趣、後師慶山、固守其法、毫不加己意見焉、乃使人能亂其朱紫、享保甲辰、鎭臺日下部

丹後侯、辟授鑒書職佐元德本氏西崎、迺蒙辟之日、左右誤書爲石崎、因遂俯焉、元文丙辰、尋轉正職、明和七年庚寅十月卒、元德老失其明、嚴君自適翁嘗請之駐數日、元德太驩焉、迺請紙筆曰、吾聞季札掛劍於墓上、孔子脫驂於舊館人、今吾窮老、無劍驂可以脫之、則請留揮毫、以報其德、自適翁乃具紙筆、元德即摸紙操筆、涵濡水墨、忽寫破濤恐涌奔迅悍激、如洶々有聲、又揮筆洒朱一掃、則如太陽半輪出於雲霧之中、遂成海天旭日圖、位置得其處、濃淡適宜、筆意瀟落、氣韻飄舉、故觀者擊節歎賞、不肯信其盲筆、蓋其神致、非得諸心應手、則何能致之(長崎畫人傳)

元德の子(古書備考系圖養子とす)に元章あり。元章の門人に廣渡湖秀あり。

元章　畫目利、石崎文十郎。

元德の子、字は士朴。安永七年八月十五日死す。年四十八。その子元甫石崎周藏、若年にして死す。(崎陽書家略傳)

石崎元章字士朴、稱文十郎、元德養子、嗣父後爲鑒畫職、安永七年戊戌八月卒(長崎畫人傳)

元章の門人に廣渡湖秀あり。長崎畫人傳に曰く「字元厚、小字八平治、師石崎元章學畫法、襲湖春後補鑒畫職、天明四年甲辰正月卒、時年四十八歲」古畫備考は湖秀を熊斐の弟子とし「嚴斐湖秀」の款印を載せたり。

元德の門人には元鎭、篠島元淇、安田元糸(印文元志)井手定賢、松井元仲、荒木元融及元融の子荒木如元、石崎融思等あり。

元鎭　銀屋町、喜八。

元淇　東鍛冶屋町、傳吉。

有喜八者、是亦元德門人(長崎畫人傳)

みな元德の門人にして巧畫たり。清貧にして聞達を求めず。ともに安永年間に死す。傳吉家貧にして、南蘋畫の僞筆をなす。最も妙にして、みな人これを南蘋と極むるといふ(崎陽畫家略傳)

篠島元淇稱傳吉、學畫於元德、巧畫人物花鳥、雅彩出塵外、自成一家、元淇家貧無妻子、獨居陋巷、雖無儋石之儲、而晏然常耽畫、苟不求其聞達、元淇常作畫、戶外觀者如堵、然未嘗反顧焉、偶有衲僧來觀、元淇即投筆叩問、其聲如雷、觀者驚異之、元德門人亦甚多然元淇殊冠于其中矣(長崎畫人傳)

元糸　榎津町、新藏。

安素亭と號す。元德の門人。寬政年間死す(崎陽畫家略傳)

安田元糸號素亭、小字新藏、後更嘉右衛門、元德門人、元糸畫法清妍秀潤、亦自爲一家、寬政四年卒(長崎畫人傳)

井手定賢字承慶、小字茂七郎、號鶴翁、元德門人、畫法專守師傳、不敢失規則、寬政十一年己未十月沒、七十一歲(同書)

元仲　船大工町、松井潤助。

元德の門人。後に慶德と改む。號は廣山。天明二年六十二歲にして死す。その子松井代藏また諱は元仲、霞山と號す。今茲文化十二年春死す。年六十二。その子松井甚八郎、諱は慶仲、現存。二十九歲(崎陽畫家畧傳)

松井元仲字慶德、通稱順助、號廣山、元德門人(長崎畫人傳)

元融　御用書師兼書目利、荒木爲之進。

家は士長、號は圓山、居を鶴鳴堂といひ、また薜蘿館といふ。その祖は筑前長政侯の臣、中山長左衞門といふ。家嗣あるを以て、寛永のころ長崎に來り住す。その子惠平出島諸色賣込人の株を求め、氏を荒木と改む。元融はその曾孫なり。幼にして經學を眞宗の僧敎戒といふに學び、詩文を渡邊暘谷先生に學び、蠻畫の法を蘭人に受けたり。書目利手傳荒木元慶老衰して嗣なし。同氏なるを喜びて元慶の嗣となり、御用書師兼書目利を仰せ蒙る。寛政十一年甲寅病死す。享年六十七歲。法名圓山元融居士。墓は皓臺寺山上に在り。(崎陽書家略傳)

荒木元融字士長、通稱爲之進、號圓山、元德門人、襲秀邦後、爲鑒書職。(長崎書人傳)

荒木如元通稱善十郎、元融義子、嗣父後、爲鑒書職、能書蠻書。(續長崎書人傳草稿)

荒木善十郎　今紺屋町住、後善四郎と改む。

初め一瀨氏。暫く元融の書目利を相續し、氏を荒木と改む。書は元融に從ひて學べり。融思の硝子書法を偸み學び、專ら蠻書を巧にす。現存(文化十年頃)、四十歲。(崎陽書家略傳)

融思　御用書師兼書目利、石崎融思、幼名慶太郎。

荒木元融の子。師の石崎元德孫に至りて嗣なきを以て、終に石崎氏を繼がしむ。字は士齋、號は鳳嶺。書法慶山より連綿して、人物、山水、花鳥ともに巧なり。また蠻書の法を父元融に受け、硝子裏に油繪を寫照す。また硝子に水銀を着くる繪鏡の法を蠻人に受く。詩文を邑の吉村迂齋に學び、篆刻を淸水伯民に學べり。現存(文化十年頃)五十餘歲。門人僧俗女子隨從す。僧十五人、諸國士商三十一人、女子七人(中妓一人、引田屋內千代菊)邑人二百二十四人、總計二百七十七人。繪事專ら盛なり。(崎陽書家略傳)

石崎融思字士齊、號鳳嶺、又號放齡、荒木元融子、少傳書法於其父、能書人物花卉、鳥獸山水、後嗣石崎氏、爲鑒書職、弘化三年丙午二月卒、時年七十九。(續長崎書人傳草稿)

融思は竹田とも交はりき。されば竹田莊師友書錄にもその小傳あり。曰く『石融思、鎭之老書師也、予相識最舊、與渡邊鶴洲、爲書書目利職、常撿閱淸船所齎古今書畫、辨眞贋、定價直事、又鎭臺有繪事、則必與焉、如中川侯之淸俗紀聞、遠山侯之全象活眼此也、旁善西洋畫、其子融齋亦善書、不墜家聲矣』。

融思の子に石崎融濟、門人に犬塚廣業、久松忠告、三田村本義、土井有隣等あり。僧鐵翁及木下逸雲も初め融思に學びき。(續長崎書人傳草稿)

融濟　書目利見習、石崎寅太郎。

融思の子、字世美、號玉浦、また千峰と號す。書法、篆刻を父に受け、專ら花鳥を巧にす。經學は邑の峰庸四郎に從ひて學ぶ。現存(文化十年頃)二十餘歲。(崎陽書家略傳)

石崎融濟字世美、號玉浦、又號手峰、融思子、受繪事於父、而能書人物花卉、鳥獸山水、

犬塚廣業字惟勤、號荷舟、通稱幸右衞門、融思門人、後好倣張秋谷、書花卉人物、

久松忠告字子善、號靑峰、通稱辰三郎、融思門人、好書花卉鳥獸、天保六未年卒、時年二十有三、

三田村本義字秋吟、號芝溪、通稱太一郎、融思門人、畫花卉鳥獸(續長崎畫人傳草稿)

有隣　新橋町、土井京助。

名は元積、字は岨高。幼より融思に從ひて畫を學び、肖像及浮世繪を好み、寫照に妙を得、畫意に巧なり。また蠻畫と細工に巧なり。文化九年に死す。年三十餘。墓は皓臺寺山上に在り。

虎藏、作三郎、爲八郎、みな緒(廣渡一湖、元厚、湖月の後)を繼ぎて畫目利を相續す。爲八郎名は文甫、字は雲墨、現存(文化十年頃)四十餘歳。虎藏より以下、みな書法は融思の門人たり。(崎陽書家略傳)

喜多元規

秀石、若芝、慶山等と相前後して、肖像に長じたる長崎派の一作者に、喜多元規あり。長崎畫人傳に曰く。「通稱長兵衛、繪事善傳神、傳染亦有新意、凡諸寺所藏清僧肖像、多元規所畫、殊善隱元像、往々所寫天機妙會、無一違焉、然後世莫傳之者、尤可嗟嘆焉」。長崎先民傳に曰く。「工華畫法、尤能肖像、今失其傳、可惜矣」。古畫備考に曰く「明暦中人」。同書增補に曰く。「世稱長崎長兵衛」

大鵬流墨竹

逸然よりして外、歸化僧の畫を能くせる者に大鵬あり。長崎畫人傳に曰く。

釋正鯤字大鵬、號笑翁、淸人也、享保七年、登商舶來崎陽、遂爲福濟寺監院、延享元年轉徙萬福寺、而繼隱元十五世法統云、大鵬誦經之隙、好寫墨竹、其法甚奇異、枝幹節葉、總犯畫法禁忌、然至用筆潑墨、則優然有自得矣、

古畫備考畫傳燈を引いて曰く。

張伯遠弟子、大鵬和尙、享保六年來長崎、三十一歳、德濟寺七代、泉州晉江人、實爲檗普照國師七世孫也、

同書又曰く「墨竹ハ李用雲ニ似テタシカ也、又畫達磨」。畫乘要略に曰く。「寫竹得名、大鵬初隨其師歸化時、歳十七云」。崎陽畫家略傳には、大鵬流墨竹略譜ありて、彌峰基(福濟寺監院、現存八十餘歳)祖關密(現存、八十餘歳)及東雲(表具屋八郎右衛門)の三人を錄せり。長崎畫人傳に彌峰、祖關の小傳を錄して曰く。

釋圓基字彌峯、號來鳳、爲大鵬法嗣、福濟寺監院、學墨竹於大鵬、能熟其法、文化十四年丁丑六月寂、時年八十八、

釋圓密字祖關、圓基法弟、大鵬弟子也、繼圓基後、爲福濟寺監院、墨竹亦倣其師法、文政五年辛巳五月寂、年八十四、

古畫備考の長崎畫系には、圓密の弟子釋金鳳を錄せり。

長崎派の畫風

逸然一たび明畫の風を傳へ、秀石、若芝、慶山等謂はゆる長崎派の作者輩出せしは、我が明淸畫風隆興の初期にして、當時の畫風は著色の花

支那畫人の來遊

鳥尙夫の宋元以來の黃氏體、乃至明の勾花點葉體に屬し、山水は未だ謂はゆる南宗に非ず。既にして支那畫人の長崎に來遊する者甚多く、

南宗山水、勾花點葉、沒骨花鳥及浙派末流の傳來

南宗の山水は伊孚九(名海、號莘野、又匯川、也堂、吳興人。享保十一年始て長崎に來、延享中にいたり廿餘年往來す(書畫談))寶暦九年來于長崎(備考))江稼圃(名大來、字連山、杭州臨安人。文化元子年始渡來、同六巳年迄渡海仕(備考))等に由り、勾花點葉體の頗る寫生に進める花鳥は沈南蘋(名銓、字衡齋、吳興人。享保十六年始來於長崎(備考)、寓於長崎三年(畫乘要略))宋紫岩(名岳、號石耕、菩溪人。寶暦八年始渡來(備考))等に由り、惲南田が沒骨法の正體たる常州派の花鳥は張秋谷(名莘、號露香。天明中渡來(備考))等に由りて傳へられ、その餘、浙派の末流とおぼしき山水は費漢源(名瀾、若溪人。享保十九年始渡來(備考))諸葛晋(字書三、南陽人。延享五年始渡來(備考))方西園(名濟、字巨川。安永元年始渡來(備考))墨竹は李用雲(字大膽、號隨菴)等こ

れを傳へぬ。（この餘來舶諸家甚多しと雖も盡く擧げず、各家の傳は支那畫の部に讓る）こゝに於いて、初期の長崎派の後を承けて、南蘋派先興り、南宗の山水及沒骨の花鳥、これに尋いで大いに行はるゝに至る。圓山派の如きも、畢竟この影響に由りて出でしものなり。故に當時これ等の諸派を呼ぶに、唐畫又は漢畫の名を以てしき。されば安永六年の難波丸綱目には、唐畫師の下に福原五岳、森蘭齋、森周峰等の名を列擧し、天明四年の京羽二重には、應擧、在中、源琦等を亦唐畫師と記せり。山中人饒舌雪溪、慶山を叙し、これに續けて曰く「二子後尋踵崛起者、京師望玉蟾、彭百川、池大雅、謝春星、江戸邊溙水、馬晋陽、諸葛監、宋紫石、諸州柳淇園、建孟喬、高陽、熊斐、儒則祇南海、宮筠圃、僧則心越、百拙、旁及女子玉瀾、龔、取法於古、馳譽於今、或天賦其才、或好古苦學、或文史餘、寓興蘭竹、或修禪暇、游神窠石、春蘭秋菊、各有所宜、以馥郁于一時矣、嗚呼盛哉」。年暦先後し、流派雜出すと雖も、明清風の隆興は實にかくの如し。又曰く「有稱漢畫者、亦分數派、曰京派、曰攝派、曰江戸派、曰長崎派、一長一短、互有得失。」又曰く「所謂漢畫、往々有撫倣俗間所傳明清諸畫、畧得形似、而用筆卒略、施彩輕媚、其意蓋在速成以收重價、不及狩野雪舟二派也遠矣。」又復曰く「漢畫中間有筆墨清雅、風致洒然者、然家數頗小、不上作者域也」。謂はゆる京派は圓山、四條を指し、攝派は周峰、狙仙等を言ひ、江戸派は文晁を以て標するものなるべしと雖も、吾人は今この名に籍らず。各々その流風の本づく所に由りて、諸派の傳統を繹叙すべし。先南蘋派より始めむ。

南蘋派

山中人饒舌に曰く「時史花卉翎毛、多從沒骨法、（竹田の謂はゆる沒骨法は、勾花點葉體をも併稱せるなり）蓋沈南蘋後始盛、（中畧）銓畫勾染工整、賦色濃艷、時昇平日久、人漸厭雪舟狩野二派、故一時悉稱南蘋、翕然爭趨矣。」げに南蘋の我が花鳥畫を裨益して、近古に於ける一大變化を成さしめし功や甚大なりと謂ふべし。

熊斐

沈銓に學べる者を熊斐とす。熊斐本氏は神代（くましろ）、後熊代に作り、略して熊一字を用ゐる。斐はその諱なり。字は淇瞻、繡江と號す。通稱初め彦之進、後甚左衛門と改む。長崎の人にして、家世々譯官（唐通事、崎人傳曰「小譯官」）たり。初め畫を渡邊某に學ぶ。（古畫備考引く所新刻人物志、人名辭書は秀碩に學ぶとす）南蘋の至るや、即ちこれに就く。（以上畫乘要畧、長崎畫人傳、崎陽畫家略傳、逸人畫史、古畫備考に依る）森蘭齋曰く「吾師繡江始學沈氏、沈氏即寫蘭一葉與之、繡江經一兩日、畫之示沈氏、沈氏舍而不顧、人告繡江曰、子欲得先生法、學一葉三十日許而示之、繡江若其言、沈氏喜又畫梅竹與之、遂上其堂。」（畫乘要略）畫乘要略に曰く「相傳、沈氏惡邦人之無禮、不肯交遊、繡江獨恭敬沈氏、因傳其法。」近世叢話に曰く「性豪放有氣、興至即揮洒、不則雖多得金、而不肯畫也、以故家貧、妻子不免菜色、有一權貴、延斐爲畫、斐故愆期、後人而往、輒先酌酒、然後徐々展紙、施木炭未畢、投筆而睡、鼾聲如雷、坐客不懌而去、斐乃起、又酌酒而返、明日又往、飲食如昨、主人意厭之、然業已至此、不能辭也、如此五日、厘爲雞畫一紙耳、他日斐謂其友曰、如彼畫、則日寫十紙、不爲難也、但不如此、則請焉者不止也。」又曰く「熊斐能畫、豪商需之、三年不得也、一日謂斐曰、幸賜尊畫、迄令女嫁、貲奩百須、僕且任之、斐勃然怒曰、予譯官非畫人也、今苟如此、則天下士人謂我何、卒取絹素還之。」（この二條の逸話崎人傳にも出づ）近世崎人傳に曰く「一時臺命を蒙り、虎を畫くに、折しも蠻人虎を持來りしかば、紙筆を携へ、虎の檻ちかく居たりしに、虎踞りて頭を擧ず。はたらくけしきを見ばやと思ふによしなければ、みづから竹にて虎をたゝくに、やがて頭を擡ぐ。見る人皆大いに懼れて走り去り、あたりに人なくなりたるに、斐獨り自若として其さまをうつせり。其迯さりたる人かたらく、虎頭を擡る時、其眼のうへより丸き光りもの出で、人を追

かくるやうにおぼえて堪ざりしに、斐が大膽不敵いふべからずと舌をふるひしとなん。」その性行想ふべきなり。安永元年十二月二十八日歿す。（崎陽畫家略傳）享年六十一。（近世叢語及備考所引人物志に從ふ、崎陽畫家略傳は六十歳とし、忌辰錄は七十九歳とす）崇福寺上に葬り、法號を道斐淇瞻繡江居士と云ふ。（崎陽畫家略傳、同書曰く、「繡江の小傳は蘭齋畫譜に出で居申し候」、予未だ蘭齋畫譜を見ず）崎陽畫家略傳に曰く、「大坂の宿屋某といふもの、熊斐の門人にして、畫を學びて大坂に歸り、南蘋の僞畫を熊斐に送り、その畫の眞僞を問ふに、熊斐こと〴〵く南蘋と極む。某大に喜ぶ。後その事顯れて、熊斐大に後悔す。それより南蘋の畫讃下直になりしといふ。また別南蘋といひて、家の重寶とす。」

第三百十　熊斐筆蘆雁圖

長崎畫人傳に曰く、「能畫花卉翎毛、尤長墨畫、」畫乘要略に曰く、「善花鳥。」逸人畫史に曰く、「筆力强勁、虎、墨竹最よろし。又着色花卉翎毛を能くす。」今多くその遺作を觀るに、濃淡設色の花鳥、畫品さまでは高からず。南蘋に劣ること固より一等なることを免れずと雖も、略師風の概を得たり。こゝに掲ぐる淡彩の蘆雁圖の如きは、少しく明の寫意派の味を交へて、師風以外に稍自得の長所あるを認むべしとす。

熊斐二子あり。長を繡山、次を繡濟と云ふ、姪繡浦と共に、斐に學びて皆畫を能くせり。その小傳は崎陽畫家略傳及長崎畫人傳に見えたり。即ち左の如し。

繡山　樺島町組頭、錢屋利左衞門。

熊斐の子、名は章、諱は斐文。今茲六十七歳、現存。（略傳）

熊斐文號繡山、通稱錢屋利左衞門、繡江長子、學書於父繡江、而守其法。（畫人傳）古畫備考收むる所の印に「醉月」の文あり。

竹庵　唐通事、神代要八。

繡山の弟。名は斐明、號は繡濟。今茲六十二歳、現存。（略傳）

熊斐明、通稱神代陽八、號繡濟、又號竹庵、繡江次子、與兄繡山同、學書法於父、而獨守其法耳、（畫人傳）

繡浦　佐賀鍋島侯用達、大黑町屋敷住、江越六兵衞。

熊斐の甥。名は錦、字は紋穀。今茲六十四歳、現存。その女名はたき。よく墨竹等を作る。（略傳）

江越繡浦稱六兵衞、繡江從子、與斐文斐明、俱學繡江、而皆不能逮其卓矣、（畫人傳）

熊斐の門人

熊斐の門人少からず。左に略これを列擧すべし。

森蘭齋　續諸家人物志に曰く、「名ハ鳴鶴、字九江、蘭齋ト號ス。加州ノ人。沈南蘋ノ風ヲ學デ、花卉翎毛ヲ畫クニ巧ナリ。」畫乘要畧に曰く、「繡江弟子森蘭齊、名文祥、字九江、越後人、長花鳥。」古畫備考に遺跡志を引いて、「享和元年九月十八日、淺草本願寺妙淸寺」と記し、安永六年の難波丸綱目唐畫師の中にその名見えたり。著書蘭齋畫譜あり。

月湖　書乘要略に曰く「亦能書」門人三熊思孝あり。

三熊思孝は櫻花を以て名あり。書乘要略に曰く「三熊花顛、名思考、字介堂、加賀人、師月湖、喜畫櫻花。逸人書史に曰く「三熊思孝名は正觀、京師鳴瀧村の人。專ら好みて櫻花の寫生をなす。終に其眞を得たり。或人一絹本を乞ひ求めて裝潢し、壁間に展しければ、双胡蝶常に往來して狂ひ飛びけるなり。」畸人傳(思孝蒿溪共著)に曰く「介堂三熊氏、名思孝。はじめ正親と通稱す。號は花顛子。城南鳴瀧の產。幼きより畫を好みて、肥前の長崎の畫人月湖に從ひて、漢法を學ぶ。後自ら思へらく。凡麟鳳及び龍虎獅象のごとき、見もしらぬものを畫がくは、唯一旦の眼をよろこばしむるのみにて、世に益なし。古き代の公事、民間のありさまをうつして傳ふるか、あるひは今の世の人物、調度、眼にふるゝ物を圖して、後に示すなどこそよからめと、是をつとむ。つひにまた思惟すらく。櫻は皇國の尤物にして、異國にはなし。是をゑがくは國民の操ならん。はた枕の草紙に、繪に書おとりするものに、さくらをのせたるは、むかしより能ゑがく人なかりけるにこそ。いでこれをつとむべしと。研究して生花を摸したるが、しる人は、從來いまだかゝるものを見ずといへり。爲人世にすねたるやうにて、貧をうれへず、生產をことゝせず。書畫器財にいたる迄、古物を好み、自の書も亦上代樣によりてよくす。生涯すべて奇に終る。其奇のとぢめは、遺言していはく。たのむぞよ折骨にして櫻の木。此心は其體を茶毘し、骨を川に流し、なきあとの印には、さくらの木を植よといへることとぞ。此折骨といへるは、さだめて佛家に說あることならんと、諸學匠にとへどもしる人なし。此人は聞認たること有しなるべし。又手知己の人、遺言のごとく、東山にて火葬せし骨を、たゞちに携へて嵯峨に行、戶南勢の前の流に沈めぬ。こゝは櫻のいとおもしろき所なれば、同じ河の中にもよかめりと戯れしによれり。又日野の外山に、平生用たる禿筆及び其書畫の反故を埋みて、一樹の櫻を栽ゑ、一片の石碣を建、六如僧都の銘を錄す。この醍醐山素川法師の領せる地をあたへ、其肉弟山縣蕪亭生どもにはかりて、逝者の志を遂しめ、妹女露香のねがひをはたせるなり」(續近世叢語錄する所、意略同じ)寬政六寅年八月廿六日歿す。歲六十五。思孝の妹に露香あり。書乘要略に曰く「從吳月溪、學畫櫻花、艷態柔情、頗逼其眞、卓堂先生曰、露香、瑟々、相繼而寫櫻花、其體至于今不絕、然而專究形似、以脂粉點染而成、傅色鮮明艷美、易入俗眼、不足爲雅觀也」又曰く。「女瑟々、織田氏、近江人、學露香寫櫻花」古書備考引く所、橘千蔭の芳宜園文集(文化二年頃)中「林大學頭どのゝあつらへて書かせられたる書帖の跋」に曰く「櫻にくさ〴〵の品あり。みやこの花顚てふ人よくうつしたる事、世にしる所なり。こはその人のいもうと露香がかけるなり云々」。

林君棻　崎陽書家略傳に曰く「今籠町乙名淺井茂藤次徒組兄弟、林卯太夫。熊斐の門人。江戶に行き、老後鄉に歸りて、三十年前死す。また篆刻に巧なり。その印譜皐蘭印譜と題す」古書備考の熊斐系圖は林君平に作り、林叔文と註記せり。

釋淨光　崎陽書家略傳に曰く「霍亭、聖福寺四代岳宗和尙弟子、海眼。熊斐の門人。京攝に遊び、江戶に往き、天明五年下谷池の端に於いて死す。六十四歲。」長崎畫人傳に曰く「釋淨光、字海眼、號鶴亭、聖福寺四代岳宗法子、學畫於熊斐、灑落而潤澤、自成一家、復住黃檗紫雲院、聖福寺八代黃河請爲嗣、天明五年乙巳十二月寂於江府。」古畫備考に曰く「花卉、翎毛、水墨蘭竹ヲヨクス。始メ名淨博、字惠達、又號如是道人、南窓翁、米壽翁、長崎人、寓京攝間」又曰く「一ニ五字菴ノ號アリ」同書別に出せる梅窓の諸號亦これに同じ。或は同人か。北窓瑣談に曰く「梅窓が山水圖など、最初には甚不滿なりしが、甚妙絕のものにて秘藏す」假名世說に曰く「長崎の鶴亭隱士は、少年より畫をたしなみ、墨畫の花鳥など、ことによく得られたるよし。元より人目驚さんとにもあらず。みづから心のうつり行くにまかせ、或は芭蕉葉の風にやぶれ、或は若竹の雨にきほふなど、あはれにやさしくうつせり。ある時友人來りて、物

語のついでに、印の押所を問ひしに、答へていふ。印はその押しどころ定れるものにあらず。其繪が出來終れば、こゝに押してくれよと、繪のかたから待つものなりといへり。ある人これを聞きて、よろづの道是におなじ云々」書乘要略に曰く「多作淡彩雜畫、有佳趣、弟子鶴洲、名農、字登穀、其弟子鶴翁、名亮、字公明、美濃人、善梅竹蘭菊及雜畫」古今諸家人物志に、鶴亭の門人釋大海を錄せり。

眞村蘆江　崎陽書家略傳に曰く「蘆江、眞村長藏。熊斐の門人。名は斐膽。一に耕霞山人と號す。寛政七年四月二十四日死す。時に四十一歲。法名寂淵蘆江居士。大音寺山上に葬る。その子荒木眞助、字は君膽、現存」長崎書人傳に曰く「眞村斐瞻、小字長之助、號蘆江、師繡江、能得其書法、寛政七年乙卯四月卒」竹田莊師友書錄に曰く「蘆江始從熊斐、學南蘋法、後就方西園、受其指授」蘆江の子荒木君瞻は、續長崎書人傳草稿に小傳あり。曰く「號里兆、通稱眞助、眞村蘆江子、受書法於其父、後嗣荒木氏、爲鑒書職、資性放縱、不拘小節、故其書灑落、頗有風韻、文化年中卒」古書備考の熊斐系圖には、蘆江を志村氏とせり。長崎書人傳は蘆江の門人廣渡湖月を傳して曰く「字清輝、稱八左衛門、湖秀之子、學書於眞部蘆江、繼父後、補鑒書職、寛政十一年己未五月卒、時年三十九」。蘆江の門人に杜五石(森氏)あり。師友書錄に曰く「五石翁又號淮陰漁叟、姓杜、名常勝、字子賓、豐後日田郡人、家世富饒、甲於一郡、擁貲巨万、置田若干、而翁特嗜書、學雪舟、既而迺招崎人眞村蘆江者、館之其家、改轍特作清人花卉翎毛(中畧)故翁兼有二家(南蘋、西園)所長、而晩年專歸宿西園、旁出新意、如其家所藏菊花冊是也、翁又置宅於吾邑、造酒、與其子仁里、每歲往來、計其利息、留滯數旬、予與眞齋蓬島二老、松九巖江三山輩、約翁及仁里、訂書畫社、討論宋元宗派、酒茶徵逐、優遊卒歲、當時風俗敦朴、事希人簡、無所逼塞、如此、今日斯風寂然拂地矣」

松林山人　崎陽書家略傳に曰く「西築町、松林羽矢次。熊斐門人。江戸に赴き、二十年前、寛政中に死す」近世名家書畫談に曰く「松林山人名は儼、俗稱松林羽矢二。松林を修して林氏とせり。淺草傳法院前に僦居して、薜蘿軒に垂れ、疎竹窓に當り、常に多く人と交らず。閑適自ら甘じ、書名一時に高し。しかれども猥に作らず。是時處士と稱し、自は高ぶり、其實は賤しき妓或は俳優を弟子となし、これに己が名を嫁し、一時拙技を賣るものあり。山人はしからず。嘗て酒を嗜み、時々吉原に遊び、酒の爲に數日かしこにあり。娼妓其醉をうかゞひ、書を乞へども、一紙半絹を作らず。只常に世話になりし茶屋某に、墨梅一幅を作り、これを與へ、是は平生に報ゆと云しとなん。眞の書史と云ふべし。嘗て病に臥し、自ら起ざるを知り、其友に托して云。我死ば墳上たゞ一片石に南無の六字號を表して足れり。凡そ人の末景こゝに至り、あゝなむあみだなりと、一笑していはれしとなん。山人歿し、近江の彩瀾源先生の撰文にて、墓碣記あり。山人は常は先生と厚く交し故、此文能く山人を盡せり。故に全文を左に載す。(中略)松林山人墓碣記、源世元、山人姓林、名儼、字稚瞻、松林其號、肥前長崎人、以善書稱、尤巧著色、花卉翎毛、冠于一時、山人爲人、風神俊逸、嗜酒不拘、曠達之士也、七歲時、熊斐見其畫、奇之曰、此兒當不減沈衡齋、始遊京攝間、未有知者、安永末來東都、時叙王盛延文學書畫之士、乃召見便殿、大稱旨、因與諸賓客交、文酒之會、恒必與焉、於是其名靄然而興、諸公卿貴人、競求筆跡、使者踵門、絹素充室、然當其有錢、則雖權勢之需、不肯執筆、率日在妓館酒樓間、轉飲流連、動輙經旬、不知在處、至門人倩人物色搜求、若或囊中索然、則杜門謝客、孜々揮寫、雖屏障大幅、不日告成、以故請書者、或謀門人、時之云、既得霑潤、乃復如初、其曠達不拘、大抵如此矣、山人又終身未嘗爲娼妓揮片楮、有敢請者則曰、林山人不能爲汝輩書博士、此時風俗頹壞、士人無耻、輕俊之徒、或有囑娼妓唱名者、山人蓋激此也、寛政初罹病殆死、自茲遂不復飲酒、日默坐一室、焚香念佛、非復曩時山人也、知友皆憂之、居三年、賣廬治裝、將西往洛陽采隱、而未果、舊病再發、遂歿于故人之家、山人不娶、亦無兄弟、或曰、山人唐山賈人之子也」古書備考遺跡志を引いて「寛政四年八月十二日、大川端東江寺」人物志を引いて「淺草東仲町ニ住ス、稱松林才次郎、書法

沈氏ヲ宗トス、花卉翎毛尤妙」と記せり。又曰く「崎陽ヨリ東都ニ來リ當座ハ西河岸町鮫屋忠助ト云方ノ奥ニ離屋アリテ、其所ニ寓宿シ、書ヲカヽル。其頃ハ松林隼太ト稱セリ。」「尤着色花鳥、墨竹墨梅ニ工ナリ」。

松林山人の門人に小池曲江あり(古書備考、熊斐系圖)。奥州の人。弱冠家を出てて諸國を歷遊し、嘗て松島の眞景を寫して朝廷に奉る。文化九年京都に來り、加茂季鷹に就いて和歌を學ぶ。岸駒との合作などあり。後江戸に至り、佐藤一齋、谷文晁等と交る。九十の壽を保ちて家に歿せり。松島圖の銅版に、曲江の書けるものあり。(繪畫叢誌小池曲江逸事摘要)

飯田蘭溪　名は郁、古書備考の熊斐系圖に見ゆ。

伊藤皷岳　逸人書史に曰く「皷岳山人、伊藤氏、名は淨濤。書を熊斐に學ぶ。墨竹最巧なり。著色花卉翎毛これに次ぐ」。

東谷山人　古書備考栗谷に作る。逸人書史に曰く「東谷山人、下總銚子浦の人なり。幼にして東武に來り、通油町某家に奉公す。性書事を好み、造次の間も書事を忘れず。或年建氏凌岱書事修業の爲め崎陽に至る。此時東谷行李を擔ひ、共に崎陽に至り、熊斐に學び、後一家をなす。」

建凌岱　續近世崎人傳に曰く「凌岱は建部氏なれども、建の一字をもちう。はじめ俳諧を業とせる時、淺草門前に住ミ、雷神のかた〳〵に風神の袋負へる形をゝかしとて、自ラ涼袋と□□□□□、俳諧を止てのち、文字を凌岱とあらたむ。國風の哥、文章には綾足と稱へ、書には寒葉齋と號す。東奥の士にして、若き時、身のほどの高き人に思はれ、其ことあらはれんとして亡命し、平安東福寺に入て出家し、やうやく登りて喝首座といへり。性物にさとく、才藝人の跡を蹈す。或時人のもとにてはいかいするを聞て、おのれもしてこゝろ見んとて、一句を吐けるを初にて、三月許も過ては、其導し人の句を批判し、作かへなどせしを、其人閉口するほどになれり。後加賀にあそび、俳諧に名ある希因といへる人に學びしが、希因は心ある人にて、僧のあまりに此伎に耽ることを戒めければ、腹立て交も疎くなりぬ。伊勢に行て、乙由が流を學び、終に還俗して江戸に住み、俳諧をもて鳴る。風義は伊勢にて、しかも新哥自在のもの也。されば此伎をもて富をなすもの、浪華の淡々と此人に並ぶものなしと聞ゆ。然るに其間に加茂眞淵興りて、もはら、萬葉の古風を弘るにより、其妻を門人とし、おのれはうち〳〵に其說をとりて學ぶ。(この事近世叢語にも出づ)終に俳諧を止め、片哥といふことをとなふ。これは古事記に出たる日本武尊の御作哥「にひばりつくばを過ていくよかねつる」とあそばしたるに基す。これをせどう哥の片哥といひ、五七五の常のさまなるをも片うたといへり。此風を起して後いへらく。俳諧は無用のあだ言也としりたるより止メぬ。片哥の用られぬはもとよりの覺悟なれば、書といふ業をたてゝ口を糊す。人は用ずとも、片歌の興起は我也。これがために俳諧といふ寶の山を出て、片うたといふ淵に身を投たりと。つひに伊勢の能保野彼日本武尊薨じ給へるあとに石碑を建。また華山院右府公に請て、片哥道守といふ四字を書て賜りしを梁上に掲て、口ともしく心のまゝならぬ時は、これをあふぎて憂を遣るといへり。此ころ京都に正木風狀といへる俳人、岱が俳諧を誚るをにくみて、たいめしてさま〴〵難じけるを、岱わらひて、俳諧を執するは他をしらぬ故也。今試みに、しにくきこととして見せんとて、風狀があさがほの句したりといふ其題にて、古風、中古、今體の和歌三首をよみ出し、又其一首を冠にして三十一首、又舄にして三十一首、はては舄と冠にして三十一首、須臾に九十六首を成し、此うへははいかいをもせんといへりしかば、風狀も詞なくてかへりしとかや。閑田子(畸人傳の著者)もまたまさに知ることあり。いなかにて出あひし時、戯に付合の景物を人に好ませて、言下に俳諧の哥仙一卷を終たり。さし合、何句去りなどいふ法、少しもあやまたず。花の坐

に隣りて、或者梅と好みたれば、「加賀の御紋を拜領の禮と付たりしるい、達者といひ氣轉といひ、其才は七歩の作にも譲るべからず。唯よみ哥においては、元來熟せぬものなれば、風狀をおごろかしたるも、しるものはうなづくべからずとおぼし。國風の文章はもとも古雅にして、筆の皷舞比類なし。先に俳諧せし時も、其家風の文章ども人を絶倒せしめたれば、古言にかへてもかくのごとし。俳諧の書、物語ぶりの書、片うたの書、畫帖など、著述數多印行す。畫のことは、はじめ何の流を學びしやしらず。江戸に在し日、或高貴、長崎に至りて熊斐に學び、昇進すべしとの御命有て、金三百兩を賜ふに、其金もてかねて愛せし吉原の遊女を買とりて、留守に殘して旅立せしが、此女岱が門人に通せるよしを聞て、やがてうちくれて心をとゞめず。さて六とせを經て、長崎より歸りて後、彼君畫のことをとひ給ひ、何にても書て參らすべきよし命ありし時、墨ぐろにえもしれぬものを書て奉る。こは何ぞとあやしみ給へば、山ノ芋なりとまうす。嘲哢不敬の旨にて、其まゝに出入をとゞめらる。これはもとよりはかりし所にて、恩を蒙りしものから、生涯羈せらるゝをいとひし也とぞ。(この事近世叢語にも出づ)其後俳諧をも止メて京へのぼり、もはら片哥をいざなふ。はてに妻を伴ひ東のかたにあそびしが、上野熊谷の驛の門人のもとにて、病して身まかれり。此伴ひたる妻は、彼眞淵につきて學ばしめたる者なり。これは長崎より歸りて後、深川の妓の才あるものを買取たるなりとぞ。然らば古學に改し年紀知るべし。右華顚子が書置るうへに、予がしれる趣をもて潤色す。華顚附言していふ。此傳を記す時、傍人凌岱が爲人を誚りて、此傳を除クべしといへり。もとより吾もしかおもへども、およそ人として富を好まざるものはなきに、自いへるごとく、寳の山の俳諧を捨て、片哥一道の祖といはれん事をねがひたる志捨がたし。何はともあれ。此一條におきては、人のせざる所也。これをいはんとて、他のことにも及びしなれば、見ぐるしきふし〴〵も、眼の役なりと見過し給へとこたへしと□□。閑田子もむかし田舍にて、四五日がほど日々にま見えしかど、京にかへりては訪ひもせず。其人がらいぶかしく思ひしが、生涯の行狀をよく知る人に聞し所、本傳に譽るがごとし。其所行はとるべき所なけれど、全體膽勇有リ、才拔群にして、世人を見ることはみな嬰兒のごとくなれば、物にものとせられず。さるから爲す所、いふところ、虚實さだまらず。自人の恩義に背くことあれば、又人の吾恩に背くも心にとゞめず。亡命して僧になるかとおもへば、還俗して俳諧師になり、それも倦ては、又古學を唱へ、畫を業とす。生涯醉たるか醒たるか、しるべからざる人也。古本伊勢物語といふものを印刻せしを、予これはいづこよりと□て給ふものにて、眞名伊勢とも異なるは、さだめて傳來あるべしととひしかば、唯微笑してありしは、其胸臆に取りたる也。京師知恩院門前に住りし時、黑き狐の皮を得て、是をもて生るがごとく作り、其庭に莊り、黑狐神と名づけて、崇るさまなるを、ちかき花柳街の者どもは、信じて詣しなども聞ぬ。さしたる惡心といふにもあらず。兎にも角にも世を翫弄して遊びしとおぼし。おのれ先に書林の需によりて、其著せるすゞみ艸を校合し、序をも書てあたへぬ。今また此傳を除かず、潤色して花顚が意に應ずるものは、其才の企及ぶべからざるを賞するものから、予も亦此人を翫弄するなり。みる人罪することなかれ」。凌岱字は孟喬、長江、葛鼠又吸露等の號あり。尾州(古今諸家人物志)東都(逸人畫史)又は武州大宮(備考所引某書、又曰南都人)の人など云へるは誤なり。著す所の畫書建氏畫苑、寒葉齋畫譜、孟喬雜畫、漢畫指南等あり。竝に世に行はる。古畫備考に曰く「林麓の藏に費漢源が送りたる書簡、其外寒葉齋畫譜の跋を淸人の書たる眞蹟あり」。安永三年三月十八日享年五十六にて歿す。墓は牛島弘福寺に在り(墓所一覽)。凌岱の門人と云ふに揖取魚彥あり。本氏は稻生、通稱茂右衛門(畫乘要略茂兵衛に作る)茅生庵と號す。下總香取の人にして江戸に住せり。加茂眞淵に學びて國學に長じ古言梯を著す。天明二年三月廿三日、享年六十にして歿す。古今諸家人物志に曰く「性好レ畫、少學二諸家一、據二古畫一而終爲二一家一、就レ中以二

龍門之鯉及梅書、鳴、古書備考に「魚彦ハ書ヲ熊斐ニ學ブ」ともあれど、同書の熊斐系圖には凌岱の門人と爲せるを以て、今姑くこゝに編す。魚彦の門人左の如し。

源的　「號淺門、又號馬東民、東都人、居東武龜井橋」

田綱雄　「東都人、居東武葛飾」

源寛　「字子愼、東都人、居東武台嶺下」

田玉滿　「號萬山、東都人、居東武日本橋」

岡其禮　「號鳳園、東都人、居東武葛飾」（以上竝に古今諸家人物志に出づ）

山中人饒舌に曰く「師建孟喬者、余記二人、一則竹石、一則南溪」然れども後書風を變じて、復南蘋派を以て目すべからず。故にこゝに併叙せず。

宋紫石　崎陽書家略傳に曰く「長崎倉請拂改近藤右内の近緣、幸八郎。熊斐の門人。後江戸に赴けり」古今諸家人物志に曰く「姓楠本、名紫石、字君赫、號雪溪、東都人、幼好書、及長西遊于崎陽、從熊斐學、偶清人宋紫岩亦來遊于崎、紫岩能書、因託通家譯者省耕、以質書法於紫岩、久之精熟而還、遂冒宋氏焉、山水花卉、走獸翎毛、極其工緻、倡寫照之法、自爲一家、所著宋氏畫譜（三冊）及畫藪會畫（三冊）、畫譜、既行于世、係藏之家、居東武日本橋南四丁目」畫乘要略に曰く。「初氏楠、字君赤（赫の誤か、中畧）長花卉翎毛、又善墨竹、爲世所推」紫石の書く所の墨竹圖碑北野に在り。源之熈のこれに題したる文中に曰く「君赫之畫、得之淸人宋嶽、々得之沈銓、々得之李用雲、其法尤可喜也、嗟乎世稱漢畫者、多不辨八格十門、下筆則曰个々也耳、鑒者或左其祖、則其尊乃在君赫矣、君赫姓宋、名紫石、江都人也、與余善、其徒副般明、勒之石、以建于北埜（銘畧、寶曆癸未七月、平安源之熈撰、副孟義建）」嚴島繪馬鑑に安永七年五月宋紫石六十三歳にて畫ける孔雀圖の額あり。安永九年五月廿日（忌辰錄に從ふ、江戸年代記二日とす）享年六十五（或は安永二年又三年、七十八歳と爲すは誤）にして歿す。淺草東本願寺中德本寺に葬り（墓所一覽、忌辰錄は宗恩寺とす）法名を諦量院釋誠意と云ふ。

紫石の子に宋紫山あり。古今諸家人物志に出づ。諱は白圭、字は君錫、茗溪と號す（古書備考紫山、白圭を二人と爲すは誤、今忌辰錄に從ふ）文化二丑年十一月十九日、七十三歳にて歿す。東本願寺中宗恩寺に葬り、法號を壽性院釋覺誠と云ふ（忌辰錄）畫乘要略に曰く「紫山亦傳家法」

紫山の子に紫岡あり。諱は琳（落款）、楠本雪溪と稱す。嘉永三戌年六月六日、七十歳にして歿す。宗恩寺に葬り、法號を誠性院釋覺玄と云ふ（忌辰錄）

第三百十一　宋紫石筆蜀葵圖

宋紫石はその師熊斐と同じく、善く南蘋の畫風を得たり。その勾花點葉の花鳥、裁搆往々熊斐より巧にして、巧麗沈氏の壘を摩す。本圖の如き、以てその技の精妙を賞すべし。

紫石の門人、左に列擧する所の如し。

滕景龍　古今諸家人物志に曰く「姓勝（誤）、名包擧、字宇內、號錦江、東都人」逸人畫史に曰く「藤田氏、（中畧）字瑞雲、錦江と號す。宇內と稱す。庄內の士（古人物志東都人とす）畫を宋紫石に學ぶ。著色花卉、翎毛、墨竹あり。曾て風牡丹及梅鵲圖（二宮熊次郎君藏）を見るに「瑞雲」又「五雲」の印あり。蓋し別號ならむ。

平定保　「字叔固、號紫陽、下總人」

澤君雅　名不詳「字君雅、號東宿、東都人」

淸春明　「字子華、號綾江、東都人」

田亢　「字君擧、號金華、東都人」

藤孝叔　「以字行、因州人」、
藤舜民　「字君棟、號芄蘭、東都人」、
橘則和　「字中倩、號香亭、東都人」、
遠山暝象　「號省齋、東都人、居東武潮看橋」、
藤漣崎　字「東都人、居東武室町」、

仲五百枝　「東都人、居東武室町」、
浦寛観　「號丁路、東都人、居東武伯樂街」、
源則英　「字子春、號玄冲、東都人、居東武日本橋」、
仲秀萬　「又號久滿、橘花齋、東都人、居東武橋街」、
荻彭壽　「號千嶽、梅圃菴、仙臺人、居東都」、(以上皆古今諸家人物志)

晁有輝　逸人書史に曰く「名は豐興、晩に柏亭と號す。本姓は朝岡、久兵衛と稱す。東都幕府の士なり。書を宋紫石に學ぶ。花鳥、墨竹あり」。文化八年七月四日歿す。糀町心法寺に葬らる(備考所引遺跡志)。

董九如　逸人書史に曰く「名は直道、字は仲魚(或作漁)、廣川居士と號す。又黄蘆園、鞏門(古書備考増補に鞏門は號に非ず、雉子橋門外に住せし故に言ふと云へり)等の數號あり。井戸甚助と稱す。東都幕府の士なり。書を宋紫石に學びて、後一家をなす。着色花卉翎毛、墨竹、其品最高し。續近世叢語に曰く。「廣川名弘梁、字九如、江都人、仕爲西城扈從番、襟度沖曠、外和内介、不以進取嬰意、恬退瀟灑、嗜在繪事、設色花鳥、得法於清人沈銓、晩年間用輕墨淡彩、山水亦老硬有致、雖多乞書者、而非名流韻士靳、不肯作、是以聲價亦隆然云、享和壬戌歿、年五十九」。遺跡志(備考所引)には「享和二年壬戌七月廿三日、下谷藁店法養寺」とあり。五山堂詩話に曰く。「董九如君名蹟風流、一時爲書名所掩、余始相見、時蒙推挹、無幾余西遊、君亦捐館舍、至今感其言、寛齋先生嘗贈君以四絶句云。嘗中山嶽寫天然、舐筆春園坐晩煙、一種清香茶鼎熟、梅花落處汲幽泉、高懷不逐世間塵、閑炷爐沈自寫眞、一葉扁舟一甕酒、蘆花洲裡一漁人。老來興味總空濛、寄在水煙山靄中、翠鳥紅花如錦筆、附他年少弄春風。一卷輞川圖始成、三春謝客亦幽情、傳家好做兒孫寶、不比他人遺滿籯。皆紀其實也、可作君小傳讀」。古書備考引く所の某書に曰く「井戸廣川嗜繪事、揩名其園曰黄蘆、鑿一沼、叢植蘆葦無數、又多儲書畫金石古器物、堆積左右、如窩然、因名其室曰遯窩、每閒居、輙入其中、以臨撫賞鑑爲娯、鳥啼花落、欣然意會、則又發諸縑素間、不復知其身之在仕途也」。同書董九如の子を董烈と爲す。董烈は井戸莆田なり。書乘要略に曰く「井戸莆田名董烈、字九如、江戸人、長花鳥、妍麗潤澤」。

董九如の門人に清水曲河及三好汝圭あり。曲河は書乘要略に「名純、字子章、江戸人、寫花鳥」と云ひ、古書備考に董九如門人とし、諸家人名錄を引いて「清水漣、名冕、字子章、文政二年五月十一日沒、年七十二」と記せり。三好汝圭は同書に亦董九如の門人とし、「始左嵩之ヲ學、後方西園門人ノ西陽芳口ノ弟トナル」と記し、董烈以下の三人の能く南蘋の法を守りて觀るべきを賞せり。同書別に擧ぐる所の如圭は蓋し同人ならむ。その下に記して曰く。「明書ノ體ヲ學ブ。所書山水草花ノ類、筆ヲ下スコト細密ニシテ麤鹵ナラズ。元祖藏六君ト親ク、予モ其宅ニテ山水ヲ觀ル。其比ハ若松町ニ住ミケル(小倉夜話)。當文政戊子ノ年、猶現存、歳七十餘也。往歳甲州猿橋ニ隱レ、年久シク住シ、其後江戸ヘ出。其妻ハ三十歳ニ餘レリ。或時如圭謂ク。我年老、其方イマダ若ク、猶里方ニ兩親アリ。予コヽニ所在ノ家財ヲ悉ク遺ス程ニ、離緣シテ兩親ノ意ニ任セ、外ヘ嫁スベシ。予獨身ニテ自在ニ行遊セント。思フ由ヲ懇ニ申聞セ、得心ノ上ニテ歸シ、其後ハ住居ヲ止メ、所々ニ寄宿シ、即今ハ大傳馬町三丁目野間屋ト云ル櫛ヲ商フ肆ニ寄寓ス(上山氏話)。如圭又云。余モ世間ノ書家ノ如ク、四方ニ交ヲ結ビ、善惡ニカヽハラズ、多ク書ヲ書テ與、名ヲ求メントナラバ、文晁ノ如クニモ至ルベシ。サレド書ト云モノハ、氣ニ向ヌ時書クマジキモノニテ、ス丶マヌ時ハ、イツマデモ書ザル也。又書ガクカラニハ、後世ニ殘リテモ、見苦カラヌ樣ニ、心ヲ留テ書クベキコ

ト也ト常ニ云テ、窮ストイヘドモミダリニ書カズ(同日聞之)」。

土方稻嶺　書乘要略に曰く「名廣邦(古書備考曰「又廣輔」)、因幡人、師宋紫石、相傳稻嶺因幡侯家老某氏臣也、言不用、因致仕入京、其名重於一時、後仕因幡侯、而爲畫員」。古書備考には「應擧門人」と記せり。

蠣崎波響　書乘要略に曰く「稱將監、奧州松前人、學宋紫石、以花鳥名于奧羽之間」。古書備考に曰く「源波響、名廣年、松前公族、尤工畫、詩則學于六如、殊有淵源、題畫、山抱清溪溪抱村、桑麻雞犬小桃源、滃雲界斷人間路、不許徵租來叩門、文化六年」。

岡岷山　書乘要略に曰く「安藝人、學宋紫石、設色精巧」。逸人畫史に曰く「岡氏、名は煥、字は子章、利源太と稱す。藝州の士なり」。古書備考に「淡墨山水、尤墨竹に工なり」とあり。嚴島繪馬鑑に、岷山の安永六年仲夏書ける所の松竹梅圖額あり。南蘋風なり。

熊斐の子繡涔に學びし者に福田範あり。こゝに附載す。續長崎畫人傳草稿に曰く「字君常、號錦江、又號竹園、通稱範二郎、初學畫於熊斐明、後好倣清人沈南蘋、能畫花卉翎毛、今見行于世」(嘉永四年)

爾餘南蘋派諸家

南蘋は啻に法を熊斐に傳へ、その末流の諸家をして、盛にこれを祖述せしめたりしのみならず。崎陽に在りて畫く所甚多く、歸清の後も頻に邦人の需に應じて製作を我が國に致しゝかば、師資の系統に非ずと雖も、その畫を觀てこれに倣ふ者亦少からず。熊斐の門より出でし建湊岱、宋紫石、松林山人、董九如、森蘭齋等が、その風を各地に鼓吹するに先だち、江戸に在りては黑川龜玉の早くこれに倣ふありき。尋いで大阪に錢必東、江戸に鏑木梅溪等出で、南蘋風の花鳥は、その斬新なる裁構と、妍麗なる賦彩とを以て、忽ち天下に行はれぬ。左にこれ等の諸家を列擧すべし。

黑川龜玉　書乘要略に曰く「名定、字子保、江戸人、法沈南蘋」。古書備考に武江披砂(南畝著)を引いて「商山處士龜玉翁碑(白山中町心光寺)の文を載せたり。曰く「寶曆六年歲在丙子六月辛酉(廿五日)、商山處士龜玉卒、不娶無子、其父周玉翁以告、魏走泣哭。且召滕益道、田英、一道、柏茂滕君及諸子、會哭其家、面識成來哭、予賻助以供葬事、乃相謀、徵銘於余、魏曰、嗚呼吾尙忍銘吾友也、況余不閑文辭、請與佗謀焉、周玉翁切求不置、終不得辭、乃序而銘之、君先出自源氏、八世祖彥十、稱小里氏、爲參之善德公之臣、其孤源八、後流落甲府、居黑川村、因改黑川氏、其子孫移事紀藩、至君大父源左衛門、去仕東都、父周玉翁、始居其商山云、君名安定、字子保、龜玉其號也、以號行世、館名松蘿、母稻垣氏、以享保壬子年冬十月廿又八日、生商山莊、即翁弟二子也、幼異常兒、屬有瑞祥、後其誕日、有異僧贈寶玉一顆者、其玉徑二寸、色如藍、光彩射人、謂是龜玉云、翁喜而藏焉、後以爲號、□年過高山神祠、視爲朝神射服虜圖、歸後記心畫之、自是後遊戲座臥、丹青是耽、無佗翫好、□歲學草書於狩野休眞、十二歲學畫鷹於岡本善悅、後盡舍一家之儆、華人之跡、直師造化、鳥獸草木、宛然逼眞、□歎畫道之廢衰、一有復古之志、故能潛深湛之思、竟□獨得之見、精謹審慮、衆莫能窺焉、嘗於吉祥寺之寮舍、一日畫千紙、人以爲神、自八九歲時名日起、王侯貴人、逢迎如雲、凡所謁見、一百餘侯、時人得一紙者、相謂爲珍、其畫東至蝦夷、西傳薩隅、事同贖柳書、蓋翁之家無餘業、家人十餘口、供給晏如、不乏其用者、龜玉之力也、屢語魏曰、閑居山林、眞學畫法、固吾願矣、然父母存、二妹在室、未能厭人間、猶汲々於名利間者也、然其平居、目不視金錢、口不言財利、書學關子甫、棊師安仙角、其餘衆技、雖有神識、不求甚解、逍遙適意、蓋謂文雅有隱趣者、皆有助畫事、是所寓其意也、而厭俗好雅之心、其天性矣、比歲疾病、口不言苦、強忍應諸侯之招、

在家亦不懈書事、偶家人問疾、起座强食、示不困、惟恐使父母之憂、故人以不爲疾、後及不起、皆知其由勉强書、乃終日寫書、曉膏以繼晷、已則傍母床側、與二妹談笑就寢、猶兒子之時、廿有五年一日也、其孝養槪如此、其交世人也、賢愚少長、一是皆以敬愛、故毎得一相見、無不心醉、其爲人者也、然內實明而有鑒識、幾皮裏陽春哉、及其病劇、請余於側曰、頃日定之病非常也、意無起色、然死生有命也、如功名无遂、微志中廢何也、惟有父母二妹、是不憂死之身、而所以憂其後也、然翁丈夫也、莫能所開悟哉、其惟母氏乎、豫願慮其悔絕之哀、乃不能安其死也、言畢呑聲再三、魏不覺爲之失聲、又曰、定之在人間、雖夭天壽、時名過望、恨未見赤羽夫子、定何因圖不朽乎、今所倚賴、惟在君耳、魏庸人、何以當之、欲暫寛其憂、慰之曰、凡天地間何物不滅、卓然不朽者名乎、而有顏子夭、有盜跖壽、不然乃有老死溝壑、墳土未乾、身名並滅者、於其得失如何哉、今子弱冠而以妙書著稱一世、欲自朽可得乎、家即有老少焉、又門生如田英、一道著者、足以託後事也、子勿爲念矣、且子之於赤羽、雖見許謁、子以臥病不果、命哉、然如其書、有見取夫子、々々已不比常流、屢稱難得之才、所謂未見而已知其心者也、夫凡事如此則足矣、安爲費慮哉、或損病也、君聞之意少解、沈唫而向東壁、熟視李用雲墨竹、嘆曰、噫加我數年、以學書、則亦如此、君又輾轉、盡評壁上諸書、曰、羅續山水、稍有佳趣、呂挺振、孫千峰之花鳥、倘存古風、衡齋南蘋氏者、獨出先賢之法、能以合眞、爲一家也、然纖細過度、賦彩鮮明、足驚俗、未足說上乘矣、凡雖諸名家、各其一長短、亦惟天實生身不盡、然鈞是吾師也、靡々談論、無異平生、後三日而逝、嗚呼命哉、天已生龜玉之才、亦何奪其齡之速哉、近識哀悼、處士傷情、俱泣其遺愛、同懷其餘風、龜玉平生嘗稱知己者、朝則壺山老侯、吐山滕君、野則益道、田英、一道、士魏等、共助周玉翁之志、樹碑表墓、庶幾才名傳于無窮、獨恨魏文辭固陋、不能盡其萬一、死生異路、有耻于地下矣、而君與魏愛過友于放手冥契珍逝發言英賞、敢叙述其狀、欲以志不朽、魏遂作銘曰、善償不岐、龜玉安之、千紙一掃、丹青生知、秀而不實、卓爾成基、于書于才、百世可師。滕士魏撰。」同書又遺跡志を引いて曰く『稱黒川觀五郎、東都人、書法因唐宋元明淸之諸名家、遂爲一家、門人群才衆多也、今盡不錄、寶曆丙子六年六月廿五日、病歿於商山莊、行年二十五。白山中町心光寺。』又續老庵日扎を引いて曰く『吾邦にて指頭書をなすもの、黒川龜玉及池大雅なり。又孚書といふ。』同書曰く『龜玉ハ東都ニテ唐書ヲ始テ書シ人ナリト云。夫ヨリ諸葛監、宋紫石ナド云唐書起レリト云。』龜玉居を皓月山樓と號せりと見え、同書載する所の書款(寶曆五年)に在り。同書增補に「龜玉之由來」(黒川左膳)を載せたり。これに依るに、龜玉六才にて名を萬五郎と云ひ、後觀五郎に改む。元文元年八月、筑前の老僧周玉を訪ひて、歸國旅費の合力を請ひ、謝恩の爲に龜之玉を與へ、神道家依田伊織これに因みて龜玉の號及名字を命せりと云ひ、且曰く『八才ノ時、初テ准后樣御前へ被爲召、御席書被仰付、其後度々被召出、御席書被仰付、拜領物等仕云々。』備考增補者附記して曰く『今按ニ、玉ハ一見シタレド、酢苔トカイヘル獸食動物內臟ノ結石塊ニテ、世ニ謂フ馬玉、牛玉ノ類ナリ。徑一寸許。小疵アリ。傳云。誤テ此疵瑕ヲ生ジ、安定爲メニ夭スト。』

第三百十二　黒川龜玉筆柳鷄圖

龜玉は實に關東に於ける南蘋派の木鐸とも謂ふべき人にて、年僅に廿五にして歿せりと雖も、その技は早く熊斐、紫石を凌がむとする槪ありて、斯派をして江戸に勃興せしむる力ありしなり。遺作多からず。こゝに揭ぐるはその一尤品とす。

龜玉の門人に田英、岡野龜石、脇坂一道等あり。田英は古今諸家人物志に「龜玉男、姓黒川、名田英、字子雲、號龜玉、一號芙蓉山人、左膳、東都、書法因先龜玉傳、今居本郷三町目魚店」とあり。古畫備考遺跡志を引いて曰く『二代目松田龜玉、名英、號淸風館、文化十一年正月廿五日歿、土物店高林寺。』「龜之玉由來」

には前の龜玉を呼びて兄龜玉と記せり。畫風初代の龜玉に似て、筆力の健寧ろ勝れるものあり（小圖第五十一は田英筆鷹鷲雙幅の一、絹本着色東京二宮熊次郎君藏）岡野龜石は通稱庄右衛門。上州高野に居る。脇坂一道通稱與喜之亟、淺草に住す。田英の門人に渡邊北海（彌五郎、居加州大聖寺）、關根毅邦（榮二郎、居東武本石町三丁目）安藤銕太郎（居東武巣鴨）龜玄（清藏、居武州粕ヶ邊）前川龜友（名昌勝、字里向、號龜友、龜玉家士、居武州本所、以上皆古今諸家人物志に出づ）等あり。田英に繼いで三代目と爲れるを右膳德邦とす。

小圖第五十一　田英筆蒼鷹圖

小圖第五十二　錢必東筆南瓜圖

錢必東　錢又泉に作る。畫乘要略に曰く「名貞、字恒軒、浪華人、法沈南蘋、能書」。古書備考に曰く「明和五年三都學士評林大坂之卷（中畧）必東ナシ。此已前ニ歿セシニヤ」同書載する所の必東の書款に「丙子（寶暦六年）夏四月、浪華錢貞、摹吳興沈銓筆意於如蘿亭」とあり。曾て觀る所の秋聲圖（二宮熊次郎君藏）に「辛未（寶暦元年）夏六月錢恒卿寫」と署して、如蘿亭の印を用ゐたり。詩をも能くせしにや、秋聲圖に小隷もて題して曰く「黃華繞砌成金谷、方夜鏦錚不忍聽、月到天心淵接彩、風來水面樹傳聲、半如陶令辭中趣、一類歐脩賦裏情、秋興堪憐間自步、隔籬叢下宿烏鳴」こゝに遺作の一（小圖第五十二、絹本着色、都筑男爵藏）を揭げて、書風を觀るに資す。

小倉東溪　畫乘要略に曰く「名不重、讃岐人、法沈南蘋、善設色」

鏑木梅溪　同書曰く「鏑木梅溪名世胤、字君肖、長崎人、徙居江戶、法南蘋、長花鳥、其養子雲潭、名祥、字三吉、師文晁能山水」逸人畫史に曰く「鏑木梅溪名は世融、彌十郎と稱す。瓊浦の人。江戶芝に寓す。着色花鳥最巧なり」古畫備考載する所の款印に依るに、名は世融、字は子和とも云ひきと見ゆ。享和三亥年正月二日歲五十四にして歿し、三田長運寺に葬らる（忌辰錄）古畫傳考に、費漢源が南湖に寄せて、梅溪に海鶴圖の揮毫を求むる書あり。文中曰く「今見梅溪先生畫片若干副、其丹青秀麗挺俗、花卉翎毛尤爲精妙、僕展玩不措、欲懇南湖先生、爲僕請梅溪先生、寫海鶴圖一幅、以共鑑賞、不揣冒昧、舛具粗絹一幅、敢求一揮、幸甚感甚、專此布候」又程赤城の梅溪に寄せたる詩あり。曰く「身學丹青擅衆奇、君家能事使人知、梅溪雪滿寒香動、畫出先春一朶枝（享和二年）文化十二年梅溪の子雲潭（文晁の後に出づ）父の遺墨を輯めて梓行し、題して殘雲片水と云ふ。

馬淵鏡川　逸人畫史に曰く「助九郎と稱す。一に南國郡司と號す。土州の人。藩士。其畫法沈氏を宗とす。著色の花卉あり。最よく墨畫の蘇鐵を寫す。墨竹あり。」

津田北海　同書曰く「名は應奎、字は奎文、尾藩の士なり。畫法沈氏より出づ。花卉、翎毛、山水に巧なり。通稱織部」その遺作の一に「壬午嘉平北海津應奎寫」

と欵せり。壬午は寶曆十二年ならむ。その印文を觀るに、字は乗文なり。畫風は南蘋派の輕疎なるものとす。

滕英瓊　逸人畫史に曰く。「大久保氏。甯寧と號し、彥左衛門と稱す。東都幕府の士。畫法沈氏を宗とす。着色花卉翎毛に長ず。」古書備考に「名忠恒」「玉甃ハ別號ナラン」など記して、寬政二三年の畫款を載せたり。

大西圭齋　竹田莊師友畫錄に曰く。「大西允字叔明、號圭齋、又號一簑烟客、中津藩畫員、居于荏土、巧花卉翎毛、仿明人鉤花點葉法、以淸人蔣南砂、用筆穎而雅淡、施色研而不俗、名聞于時、或云、初學沈南蘋矣、予嘗遊日田邑、觀其蹟、極佳、杜仁里曰、圭齋西遊、到我邑之初、客求畫者頗夥、圭齋不意、日以酣飮爲務、客嗔、良久逡逐而出之、圭齋伴出、潛到僻巷、賃一小屋、屏居不出、作畫數十紙、迺遍告前之求畫者曰、畫成、君蒮載酒來、隨意取去、客以爲騙人謀醉、益嗔無敢往矣、往者僅兩三人、而各恣意撰取、且與盡醉而還、其餘悉焚棄去、浩然遂行、聞特喜余畫、到處遇則請取、時出展閱、嘗作墨牡丹及淡彩杜鵑花、郵寄見示、余意謂、他日東行相見、淬勵請益、或有拙技所少進、惜哉一旦罹病(以下欠)」畫乘要略に曰く「江戶人、畫花鳥、有名譽。」古書備考增補には文晁門と爲せり。

漢源派

南蘋派の如くその末流多からずと雖も、亦叙せざるべからざるものあり。費漢源及諸葛南陽の一派とす。費漢源に學べる者に楊伯頌及打橋竹雲あり。楊雅、字は伯頌、君山と號し、通稱を利藤次（崎陽畫家略傳に依る、長崎畫人傳は利藤太とせり）と云ふ。唐通事を職とせり。畫を費氏に學びて人物、山水を善くせり。寬政九丁已年十二月十八日、享年七十にして歿す。兵福寺山上に葬り、法名を正音院伯頌衍阿居士と云ふ。門人林子章、城叔明あり。林子章通稱油屋彌吉。材木町に住し、天明中（長崎畫人傳、崎陽畫家略傳は文化十年より言ひて「二十年前死すと」記せり）歿す。城叔明は崎陽畫家略傳に「長崎宿老手附筆者、城榮藏。伯頌の門人、好みて書を讀み詩を作り、また龍笛を爲す、母に孝なり、美質の君子なり、今玆（文化年か）十六十二歲、現存、名は陶、字は君平」と記せり。打橋竹雲通稱小孝太。續長崎畫人傳草稿に曰く。「初學畫於城里風、後又學淸人費漢源、能畫花卉人物鳥獸。」竹雲の子竹里、門人道幸春堤あり。同書に曰く。「打橋竹里又號半雨、通稱小野次、竹雲冑子、受畫法於父、畫花卉人物山水。」「道幸春堤又號鳳山、通稱貫助、竹雲門人、畫花卉人物、又工行書。」曾て竹雲の遺作を觀るに、全く費氏の風なり。

諸葛派、諸葛監

諸葛晉の畫風を紹述せし者に諸葛監あり。畫乘要略に曰く。「諸葛監字子文、（石亭畫談作士文）號靜齋、江戶人、有畫名。」逸人畫史に曰く。「俗稱淸水文治郞。東都兩國米澤町の人。其畫風專ら淸人南陽晉を準則とす。著色花卉翎毛、墨竹、山水最よし。伊勢外宮文庫の襖、表は源應擧の墨竹、裏は諸葛氏の著色岩石に孔雀なり。余勢遊の時目擊せし所なり。」古今諸家人物志に曰く。「其先出於江州、因自稱湖南、善畫人物山水、花卉禽獸、少博覽名畫、悟古人用筆意、人物則李伯時、山水則荊關董巨、及宋元四家、花鳥則邊黃諸家、皆以前世名家所善、以爲己有、專爲一家、故無師承、居東武英町。」續諸家人物志に曰く。「三五ト稱ス。（中略）初ハ熊繡江ガ畫法ヲ學ブ。後ニ元明ノ諸家ニ倣ヒ、專ニ花鳥ヲ畫ク。（中略）探幽、雪舟等ガ風ヲ嫌フ者ハコノ人ノミナリ。（中略）百卉畫譜ヲ著ス。」石亭畫談に曰く。「通稱は又四郞。性剛捍、貴客に對こいへご屈するなく、人の言を容れず。故に又人に容られず。畫を好めご師授する所なし。只元明淸人の畫を臨寫して、自一家をなす。一筆私意を出さず。畫く時は必古圖を臨す。寬政二年七十二にして卒す。時に二子あり。遺書を光明寺雲室に託して、後事を依賴す。其略に曰。長子某已に藤城某に託せり。次子庄松は我が後素の道を繼しめんとす。

時に渡邊玄對書名高し。冀はくは上人庄松を率て玄對に紹介して塾生となし、上人亦これに意を注げと。雲室其書を讀み、悽然涙をたれて曰。諸葛氏强悍不羈、一世の間人を憑むなし。今衰老死に垂んとして、子を思て人に憑る。「折」節如」斯。遺託に任せて庄松を玄對の塾生となし、特に意を加ふ。然れども庄松懶惰にして業を遂げず。雲室復一歎をなすと云ふ。」古畫備考、寶曆八年頃の評判記にその名出でたることを記し、載する所の落款に石鏡山樵の別號あり。門人少からず。源鸞卿（字翩之、號朧山、東都人）平有鄰（字德甫、號蕉齋、同）源正昌（字子明、號止齋）仲武（字弱夫、號石動山人、加州人）田器（字必器、號金陵、勢州人）馬季章（字子顯、號南郊、東都人）平武（字子猛、號牛門、同）田義恭（字子敬、號龍山、同）邊匡廸（字公條、號鳳來、同）仲直衡（字孟軾、號好子、同（以上古今諸家人物志））劉安生（續諸家人物志に曰く、「名ハ元育、字ハ君毓、壽山ト號ス、江戸ノ人、諸葛監ノ門人、花鳥ヲヨクス、又行書ヲヨクス」、逸人畫史曰、「本姓は欒氏、名は安生、字は玄育、埜道人と號し、又壽山と號す、薩州侯の侍醫、芝三島街に寓居す、墨蘭墨竹に妙なり」、墓所一覽曰「名元育、字元毓、寛政二年三月九日、古川曹溪寺」武江年表曰「諸葛監門人」）等これなり。

明清風雜派

以上叙する所の如く、來遊の清人沈南蘋、費漢源、諸葛晋等の末流盛に行はるゝに當り、これに乘じて崛起する者亦少からず。これ等の徒は必しも法を來遊の清人若くはその末流の畫家に稟受せしに非ず。或はその所作を觀てこれに私淑し、或は元明の支那畫を研鑽してみづから一格を成せしなり。蓋し世久しく雪舟、狩野乃至土佐等の陳迹に厭きて、斬新の畫風を需要し歡迎する氣運に嚮ひ、南蘋派等の頻りに賞せらるゝに勵まされしに非ざることなからむや。前章叙する所、應擧、岸駒、狙仙の徒の如きも、即ち皆謂はゆる唐畫師にして、竝びにこの氣運に乘じて輩出せし者とす。その餘作家甚多し。さればこの種の諸家、花鳥は多く南蘋派の法を用ゐ、墨竹は李用雲の風に似て、謂はゆる文人派と同じからず。山水は多く費漢源等より來りて、浙派の體に類せり。こゝを以てその中或は尙南蘋派を以て稱せらるゝ者あり。又文化、文政の際に在りては、これ等の諸家を目するに、一に北宗を以てし、文晁も亦これに屬せらる。たゞ文晁に至りては謂はゆる南北合流の一格を創出せるを以て、後にこれを別叙す。

望玉蟾

望月玉蟾の傳は皆川淇園作る所（淇園文集）最も詳なり。左に先これを掲ぐ。

望月玄、字玉蟾、京師人、家世々業描金、玄幼嗜畫、屢墨其衣、父數責之、嘗怒繫之其宅後屋柱、玄因復持其傍舍浮炭、畫龍於屋壁上、蜿蜒如生、父偶見之、卒大歎賞、爲之釋其縛、自是不復禁、年六歲、令從土佐光成受其法、居十年、光成曰、此兒後必當以畫聞、不如使兼數家法訣、以自成一家也、時有山口雪溪、居京、其畫源出於僧雪舟、光成素與雪溪善、且以爲衆史皆不如也、乃携玄詣山口雪溪、爲請之教、以是故、遂亦師事雪溪、雪溪曰、子未可與傳我法、乃先敎以寫生、凡山川屋舍、花卉翎毛、不寫生則毋言至、人物即自作動其形、令就寫之、然後指之得失佳惡、未及期年、而玄寫生皆善逼其眞、於是雪溪曰、畫形太逼眞、必失其神彩、且近于梗偶耳、乃盡傳以其家法訣、於是玄已兼二氏之法、而其論益精、嘗畫蛇、方畫有蛇見其家、家本毋見蛇、心竊異之、後數月又畫蛇、將畫復見蛇、益奇之、因復畫以驗之、蛇見皆如前、於是自以爲神矣、乃往告之雪溪、雪溪笑曰、是精凝之所致也、精凝則畫不復進、玄慚乃更勵苦、名遂大振于世矣、玄爲人樂易尙義、不苟合、不趨時好、頗有古人之風、天資彊記、頗涉書籍、及晩用意專壹畫、盡其心而已、常喜揚人善、雖終日不倦也、其子弟學者有濫行者、皆責令改之、不則皆謝絕之、嘗有人、父子詣玄、乞作二十四孝子圖而曰、子頗能養矣、欲以增襃其行、玄怒曰、吾欲爲汝作二十四慈圖耳、不顧其身而獨責其子、非我所知也、因謝去、一瞽師名

重當時、嘗會玄于某家、醫師因請曰、聞翁之筆久矣、願爲作一雀、玄笑曰、師寧能視我雀邪、終不肯畫、和州有一士、亦能畫、素聞玄名、入京輒詣玄、因問曰、畫人物豈別有法乎、玄答曰無、但用意精則得之耳、他諸畫亦皆然、不止人物也、今畫恐勝於昔畫、明日畫恐勝於今畫、是乃法也、士人失望而去、時有善以指畫者、世多慕傚之、玄曰、指頭未必如筆頭也、玄性嗜酒、毎飲必醉、嘗病已家人爲戒飲、有一客、素相親、偶至視玄、應接語諠異於平日、促家人具酒、客欲辭、玄急止之曰、勿言也、吾將挾子以得家人之酒矣、竟與客相對、陶然而醉、家人不能禁、玄已以善畫名于當時、又精賞鑒、於是三都諸貴豪所藏古名畫、率皆幅輳其門、以求之品定、玄毎一過目、終身不忘、他日或與門人語及其畫、援筆略畫其樣、及比之其元本、不差一點畫、凡言漢畫、尚宋元以上、至明諸畫多陋之者、本邦畫其所尤推者、狩野元信、僧雪舟、人或短此二家、玄方戴眼鏡而作畫、擲筆去鏡辨之、聲色憤然、其專尚如此、嘗夜半呼其弟子、令具紙筆曰、偶欲作某像、想之形度、寢不爲安、畫畢乃寢、蓋晩年其畫多入神之作、而其用筆墨、變化無所不至、有人問曰、畫人物、筆宜何起、玄曰、處々皆可、輒把筆而畫一臂、旋畫上下、遂成人物、但其畫常不喜著彩、以爲畫固不在於丹青矣、數作水墨、或潑墨作山水、雲煙殊有自然之致、然時亦作青綠、精密如髮、而筆皆如鐵鍼、盖其得意者、往々自題語、亦多可諷云、延享間、天子聞其名召之、詔於內作風雨竹二圖、因命立其藁、於是公卿磨墨、內御舐筆展紙、立揮而成、枝幹如有聲、即以取進止、詔依其圖作之、仍亦留其藁於內、後有詔、作懸軸之畫、製毛寶白龜、老聃青牛二圖、以上之、詔褒賞焉、大府亦聞其名、數徵其畫、並世所希覯云、疾歿于家、年六十有四、有女生孫某、亦善畫、皆川子曰、余幼時常往嬉玄家、數獲其畫、余因述其傳、以觀其爲人、至其書、乃古所云、衆皆謹於象似、我則脫落其風俗者、亦見之玄云、

三玉小傳に依れば、玉蟾諱は重勝、一名玄、字は守靜、通稱を藤兵衛と云ふ。本姓は源なり。書畫一覽には初名與五郞とあり。その先を了悅と云ふ。了悅の子了供、了供の子重供、重供は即ち玉蟾の父なり。（古書備考所載「望月村產」系圖）望月玉泉曰く。祖先は信州望月村の領主にして、二代の祖始めて京都に移住すと。玉蟾元印籠の蒔繪を業とす。（續近世畸人傳）畫を土佐光成及山口雪溪に學び、又參ふるに狩野元信の風を以てし、（要略、小傳）後支那畫に倣ひ、終に一家を成す。（奇人傳、叢語）畫乘要略に曰く。「人物筆力老勁、骨氣峻嶒、賦色淸艷而奇逸、古意猶存、一時秀也。」近世叢語に曰く。「與池大雅相約、創爲漢畫、祖述唐伯虎、旁摭諸家精英、竟成一家、（中略）自作粉本、不拘於格套、大有風趣。」逸人畫史に曰く。「其畫風始め雲谷流を宗とす。後に池大雅、柳玉桂の輩と漢畫を工夫し、唐宋元明諸家の精華を摘取し、畫趣最高し。」續近世畸人傳にも「池大雅と共に漢畫をはじめんといひて、此老は唐伯虎を學び、又諸家の長ずる所をとりて、つひに一家をなす、はた漢學もありければ、圖を心にまかせたり、殊に人物を畫くに長ず」と曰へり。然れども池大雅は玉蟾より五十年の後生なれば、二人の共に支那畫を切瑳せしとは信ぜられず。玉蟾寶曆五年八月三日を以て歿す。享年八十三。寺町四條南大雲院（忌辰錄には二條善導寺と爲せり、今三玉小傳に從ふ）に葬り、法名を法譽玉蟾禪定門と云ふ。（畫人傳補遺には寶曆八年三月十一日歿、六十四歲、忌辰錄は六十三歲とす、今三玉小傳に從ふ）

玉蟾は畸人傳中の一人なれば、逸話の甚奇なるものあり。左に略これを輯錄す。

玉蟾五六歲ノ頃、父母字ヲ習ハシムレドモ、字ヲ習ハズシテ物形ヲ畫クヲ意トシ、他念ナシ。父母之ヲ責ム。光成之ヲ奇トス。一日諭シテ曰ク。汝ノ畫風剛勁ナリ。宜シク雪溪ニ學ブベシト。茲ニ於テ雪溪ニ從學ス。雪溪歿スルヤ、其嗣ナキヲ以テ、墓碑ヲ二條善導寺ニ立ツ。終身毎月墓參ヲナセリ。蓋師恩ノ厚キヲ思フ也。

玉蟾人トナリ、天資朴訥、少シモ名利ヲ貪ラズ。一布衣ニ甘ジ、常ニ粗衣ヲ着シ、更ニ耻ヅル色ナシ。其居宅矮陋ナルモ之ニ安ンジ、障子紙破ルヽモ、僅ニ

書料ヲ包ミシ餘紙ヲ用キルナド、勤儉ノ質ヲ見ルベシ。當時玉蟾ノ居宅ハ、上京區西洞院竹屋街ノ北也。一日人有リ、書ヲ依賴ス。且ツ乞テ曰ク。貴老ノ書、其落欵唯僅ニ望玉蟾ノ三字、他ノ書史官位等姓名ノ長キニ比シ、頗ル興ノ薄キヲ覺ユ。願ハ其落款ニ、年號等、何カ今少シ數文字ヲ書加ヘアリタシト。玉蟾咲テ諾ス。後其落欵ヲ見レバ即左ノ如シ。

大日本鍛冶宗匠三品伊賀守來金道上町望玉蟾

ト。客之ヲ見テ絕倒嘔然タリ。蓋三品氏ハ其宅玉蟾ノ南町ニ在レバ也。此事畸人傳ニモ載セ、一佳話トナリ、人口ニ噲炙セリ。又以テ其人タル物ニ拘ラザルヲ見ルベシ。玉蟾諸藝ニ堪能ナルハ、大字ヲ彼能書ノ高名ナル佐佐木志津磨氏ニ學ビ、筆力雄健ナルハ、世ノ嘆賞スル所ナリ。又漢籍ニ通ジ、詩歌ヲ作ル。嘗テ五兒遊戲圖ニ題シテ曰ク。貧富在何處、賢愚共不知、五兒淸白意、喜戲暖光時（三玉小傳）

大日本鍛冶宗匠云々と款せし書は、某人の土佐、狩野二家及玉蟾に囑せし三幅對の一にして、二家の款識皆長かりしなりと云ふ。

玉蟾性頗る淡泊。歲暮には一器に錢を容れ、添ふるに算盤と硯箱とを以てして、これを玄關に置き、債主のみづから取り去るに委ねけり。（望月玉泉談）

玉蟾が初めて宮中に召されましたことでも申上げませう。恰度それは櫻町院さまの御代でムいました。御承知でもムいませうが、玉蟾は畸人傳の端にも出て居まして、其時はひどい貧乏で、天窓には雨傘を被せて、書室の傍は鼠の糞ばかり、風姿はといへば、白木綿の温袍に、薄汚れた丸ぐけの帶をしめてゐるといふ有樣で、其處へ勸使所から御使が參りまして、此度其方に繪畫の御用を仰せつけらるゝから、明日麻上下を着用して出頭するようにとのことでムいました。處が玉蟾の申しまするには、忝けなき仰せの趣き、不肖の身にとりましては、眞に有難い仕合ではムいまするが、御覽の如き貧家の体裁、麻上下着用と仰せられましては、兎ても調のへることが出來ませねば、殘念ながら御斷を申し上ますと申しますと、御使が御歸りになりまして、玉蟾といふは眞にひどい貧乏書師で、あの樣な者に仰せられずとも、從來御用を承たまはる土佐か狩野に仰せられます方が宜しうムいませうと申上に成ますと、いやたつて玉蟾に書かせい、麻上下がなければ其方のを借して遣せいとのことで、再度の御使が參りました。そこで玉蟾が、さほどまで仰せられますことならば、眞に冥加至極でムりますと、麻上下を拜借しまして、翌日宮中へ伺候致しますと、直に御歌會御當座の御題なる雨中竹、雪中松の二つの圖を描けい、いづれ下繪は一應伺ふよふにとのことでムいましたが、玉蟾の申しまするには、一應引取りまして、改ためて下繪を伺ふことになりまするとまた麻上下を拜借致さねばなりませぬから、一層此席で直に下繪を伺ふように致したう存じますと申上ますと、夫は面白から、それでは直に伺ふようにとのことで、早速即席で二つの下繪を二通りづゝ描きまして伺いました處が、大きに叡感に叶ひまして、御夜食御酒頂戴仰つけられ、翌日いよ〳〵本書をさし上ますと、益々御思召に叶ひまして、夫から引續いて御繪を調進することになりました。（この下繪家に存ず、中畧）當時宮中には御床の間といふものはムいませんから、土佐家でも狩野家でも、掛物の御用といふはムいませなんだ。玉蟾の承たまはりましたのは、御歌會御當座の御題で、それをお懸けになつて、公卿の方々に歌を詠そうといふ御趣向で、また御出入の繪師でも、杉戸や御襖の御用などいふものは、常にあるものでムりません。只毎年々頭には蝙蝠扇と申して、五本の御扇子を繪師五名で描て調進致しますが、其地の色は蘇芳、紫、薄萌黃、黃、紅の五色で、年によると蘇芳などが白となることがムいます。また御月扇といふが、月二本づゝで、年に二十四本、地の色は白ですが、一本づゝはお取替の御ようといとでも申すのでムいませう。いづれも繪書は、砂子泥引に極彩色でムいます。（名家歷訪錄、望月玉泉談）

望月玉泉曰く。「玉蟾の傑作は御所に金屛風二三雙あり。智恩寺の水呑の虎も有名なり。後者は近年寺を逸し、大阪の骨董舗（山中）に在りしを購ひて、東本願寺に寄附せり」こ。玉蟾の畫印は今尙その家に存ず。

望月玉仙

玉蟾の子玉仙諱は重祐、（古畫備考所載の系圖に、玉蟾の子豐重一人を錄し、「初名藤兵衛、又古尙（異本高）、又千里川ト稱、靜庵ト號、玉庵モ、寬延二年歿七十二」こ記せり、重祐こは別人ならむ、明ならず）一の名は眞、號を誠齋こ云ふ。（三玉小傳）畫乘要略に曰く。「誠齋能家學。」三玉小傳に曰く。

畫ヲ父ニ學ビ、精勵シ、能ク其畫風ヲ得テ、玉蟾ノ後タルニ恥ヂズト。歲三十ニ至ルマデ、落款ニ玉蟾トス（玉泉曰、亦父の印を用ゐき、後これを改む）是玉蟾ノ畫ト後年混淆スルニ至ル。或人之ヲ責テ云。我邦農家商人等ノ家、古來ノ俗習ニテ、先代ノ名ヲ襲ヒ、數代同名連稱スルハ人モ恠シマズ。然レドモ畫名ニ至リテハ、古來其例ヲ見ズ。是恐ラクハ不可ナラントト。是ニ於テ更ニ玉仙ト改ム。玉仙ノ世ニ至ルマデ、出雲松江侯ヨリ每年俸米ヲ賜レリト。葢其先天正ノ亂ニ、雲州家ヲ援助セシ功ニ報ユルト。玉仙文學モ有リ。會テ父玉蟾ヲ追懷スル一文アリ。左ニ揭テ、其學才及ビ玉蟾ノ逸事見ルベシ。其文ニ曰ク。

我父玉蟾氏、嘗學書於志津磨氏、而學畫於土佐常山氏、又就雪溪山人以學、有年于玆、而有出藍之志、故祈于北野菅神廟、已滿百日、路次至書肆、而得圖繪宗彝、一覽悟畫之妙所、乃畫牛則入其眞焉、而覽我日本及唐宋元明諸名家之畫圖、而辨其眞贋如觀火也、於是海內諸賢齎繭紙、而請畫者、日數十家、悉應其需、梅則王元章、竹是梅道人等、擇飛禽走獸、山水人物、各諸名家之長而作焉、而不肖眞不幸、十二歲秋八月三日父歿矣、噫適誰以箕裘焉、而嘗遊父門之人、不忘舊交、且不卑眞薄劣、而儼然臨于敝廬也久矣、今也眞發追遠之志、以每月三日、揭父之小像於壁上、以催畫會、希諸賢及二三子、以書換蘋蘩、則眞榮莫大焉、

玉仙は寬政（三玉小傳安永に作れるは誤ならむ、今大雲院墓石に刻する所に從ふ）七年乙卯五月歿す。法號光譽玉仙信士。逸話の口碑に傳はれるもの、略左の如し。

玉仙も恬淡父に讓らず。大いに酒を嗜みき。一日所司代組の消防夫三人鳥目のさしを押し賣りに來りけるに、玉仙戲れに何とて錢を求むるこ問へば、酒の飮みたさにと答へぬ。玉仙さらば我亦恰もこれを欲す、共に飮むべしとて、秘藏の坏鉢を出し、これを典して酒こ豆腐こを買ひ來らしめ、團欒歡を盡せりとぞ。かゝる性行なれば、酒に溺れて多く畫家文人こも交はらず。父の歿しゝ頃は、その潤筆の金遺りありしかど、後には頗る貧しかりき。若くして妻を去り、後永く獨居し、その妹の松田五郎兵衛こ云ふに嫁して生める子を養ひて嗣こ爲しぬ。即ち玉川なり。（望月玉泉談）

玉仙の畫印も尙その家に存ぜり。その子玉川は岸派に屬するを以て、こゝに敍せず。

玉蟾の門人、大西醉月

玉蟾の門人に大西醉月、僧鼇山等あり。皆川淇園も亦畫法を玉蟾に學びき。大西醉月の小傳は畫乘要略に出づ。曰く。

平安人、學玉蟾、善山水人物、晚多撫元明古蹟、頗有風致、醉月一日具盛饌、邀其友、其友恠而問之、醉月曰、今日獲潤筆銀一枚、吾有此重糈、可以潤枯腸、可見當時潤筆之廉也、安永中人、

醉月の門人

古畫備考に明和五年三月版の人物志かを引いて「西醉月、字希曠、蛸藥師室町西ニ入町」こ記し、又「吳春最初の師也」こ曰へり。

醉月の門人に平曼容、淵白龜あり。共に竹田莊師友畫錄に出づ。左にこれを抄錄す。

平曼容、備中倉敷邑人、命其齋曰自得、就望醉月受業、畫略有師風、參以京派、往歲來寓眞齋先生之家、多貯名冊臨本、時予學畫、欲觀前人之遺跡甚急、而苦難得、於是就而借、撫得數十本、此予問法前人之初也、留半歲許乃去、

淵白龜字禎圖、號旭江、備中人、亦學畫醉月、善山水人物、參以沈南蘋法、作沒骨花卉、安永中來遊吾邑、時邑人專崇狩野氏、一二畫史、悉奉其教、至是始見所謂漢畫者、觀運筆謹細、賦色明麗、朝野靡然、索書者爭踵其門、眞齋蓬島二翁、就而受業、後十餘年、君山先生官遊于邑、携示文晁孟熙成寛諸家所造、畫道大闢、而旭江爲之嚆矢、當時予在襁褓、既長東上、旭江仍存、廼往訪問、談及往事、爲之撫然、因出示其海內名勝圖數冊曰、近日刻甫成、爾後無幾即世、

僧鰲山

僧鰲山は、畫乘要略玉蟾の條に「弟子鰲山、筆力遒勁」、古畫備考に「書畫一覽、出釋家部」、又「北窓瑣談に雪溪、鰲山、玉蟾の徒は、唐和の間を畫くものなり、其後宋紫石云々」とある外、未だ傳記の詳を得ず。

村上東洲

鰲山の門人に村上東洲あり。畫乘要略に曰く。「村上東洲名成章、字秀斐、平安人、學鰲山、稍變其格、長人物山水、一時發名。」文化の平安畫工視相撲には東の關脇に列せられ、同八年の京羽二重及同十年の平安人物志には、新町今出川上に住せし由見ゆ。文政五年の平安人物志にはその名見えざれば、蓋し既に歿せしならむ。

紀竹堂

東洲の門人に紀竹堂、八田古秀及望月玉川あり。紀竹堂名は寧、字清夫。畫乘要略には古秀と共に「各爲好手」と評せられ、文化の平安畫工視相撲には東前頭の第十位に列せられ、文化八年の京羽二重には、下立賣西洞院西に住せし由見ゆ。

柳里恭

柳澤里恭初名貞貴、字は公美、通稱を權之助、帶刀、九左衛門、圖書、下野、權太夫など云ひ、淇園、玉桂、竹溪等の號あり。姓は源、氏は曾禰。その先新羅三郎義光に出づ。義光より六世の裔に曾禰小太郎貞頼（甲斐國目代）と云ふ者あり。貞頼より十三世の裔保格（權太夫）柳澤吉保侯に仕へて、その偏諱と柳澤の氏とを賜はり、老臣と爲りて五千石の祿を給せらる。即ち里恭の父なり。里恭元祿十六年を以て江戸の藩邸に生る。（獨寢には甲斐に生るとあり）寶永七年父保格退老し、里恭の兄保誠その後を嗣ぎて祿三千石を賜はり、里恭は二千石を賜はりて馬廻組と爲る。享保元年江戸に歸り、同三年再たび甲斐に至り、歲晚江戸に歸り、同五年又甲斐に至る。（獨寢）この年父を喪ふ。（保格五男二女あり、長吉居士、保誠（母は慈照院）、女、男（天）、男（天）、自春禪尼、里恭（母は覺岸妙正禪尼）これなり）同八年吉里侯の封を甲斐より大和の郡山に移さるゝに及びてこれに從ふ。同十二年兄保誠の養子と爲りしが、翌年保誠が吉里侯の子勝熊を嗣と爲すに及び、別家して新知五百石を加へらる。同十四年保誠病みて歿し、（四十七歲）勝熊亦夭折せるを以て、再たび入りて家を嗣ぎ、侯の偏諱を賜はりて、名を里恭と改め、寄合衆筆頭と爲り、祿二千五百石を給せられ、寶曆三年大寄合と爲る。同八年病みて卒す。歲五十六。（以上柳澤淇園小傳に依る）生駒郡矢田（矢田村大字外川）の發志院に葬らる。法名竹窓院天外良節居士。墓誌に曰く。

居士姓源、氏曾禰、名貞貴、字公美、自號淇園主人、其先曾禰下野守昌世之曾孫曰常盛、常盛生保格、保格娶後藤氏、有一男一女、而不幸早卒、繼室今井氏生居士、保格仕于甲斐永慶侯、俸秩五千石、賜氏柳澤、及乾德侯移封郡山、保格擧族從焉、居士自幼穎敏、善書畫、及長博學强記、才名播四方、保格卒、於是乾德侯命其昆季、二分父祿、居士受二千石、且賜名里恭、寶曆戊寅八月晦罹于微恙、九月五日俄而卒、行年五十六、同七日葬于惠日山發志禪院境內、居士爲人卓犖不

覊、然而寛厚愛人、是以亡論識之不識、皆曰惜之失風流君子、余識居士者二十年于茲、故孝子呂鷹屬墓誌於余、余故不辭而爲之墓誌、銘曰、維生之初、至慶充閭、其人如玉、光射斗墟、文武經緯、侯門曳裾、我思風表、爲惜居諸、梁月影冷、淇竹秋疎、起塔惠日、諸闇破除、遊涅槃徑、出生死淤、休我報土、禪天靜居、

河內經山沙門雷音叟撰

里恭四男四女あり。安之丞(夭、母は春林院)、呂鷺(夭、母は南部一乘院宮臣北之坊駿河女八重)、女(豐原氏に嫁す、母同上)、女(夭、母は妾小畑氏)、女春榮、女春積、光敎(母は八重)、呂浦(分家、母は妾三代女)光敎家を嗣ぐ。光敎の子泰輔遺著文寶雜譜、靑樓夜話、獨寢、雲萍雜志、淇園先生一筆、鬢鏡(人物志に見ゆ)等あり。柳澤淇園小傳に曰く。

淇園英達夙成、和漢の學に通じ、兼て天文、易學、本草、佛典に渉り、僧徒に倶舍論を授けたりと。其他衆技に精通し、人の師たるに足るべき者十六藝(古老の說には十三藝)ありしといふ。十三歲にして唐學を學び(獨寢に出づ)、十五歲にして文寶雜譜の著あり(同上)。尋いで靑樓夜話を著し、二十一歲にして獨寢の作あり。藻思の煥發既に觀るべきものあり。引證の浩博亦驚くべし。雲萍雜志に至りては、晚年の作なるべし。筆意圓熟の境に入り、所謂絢爛の極平淡に達せるもの、以て普通文の名家に數ふべきなり。又詩賦、漢文を善くし、和歌、俳諧に通ず。其圓機活法に添註せるものゝ如き、今猶存ず。和漢學は初め谷口元淡(心水軒)を師とし、俳諧は水間沾德に就けるが如し。書は初め大通寺の南谷和尙に學び、後董其昌の風神を得たり。(中略、書道に關する事、獨寢の中に少からず)書は南宗を學び、靑年の作既に進境を見るべきものあり。彩色の法は祇園南海より傳へたりといふ。頗精妙の域に達せり。その着彩は鮮麗にして、水に洗ふも剝脫せずといはれき。大雅堂の如き、亦十六歲の時始めて淇園に逢ひ、爾後其敎を受けて、技術大に進歩せしといふ。

獨寢に顏料を論じ、唐畫の學ぶべきを說く。少壯既に着眼の異なる所ありしを知るべし。

過ぎにし頃、荻生惣右衞門(逸人書史には「一時の名賢と周旋往來し、業を物茂卿に詢ふ」とあり)と物語して、繪の事に及ぶに、色々畫書の事、畫彩色の事などを語りけるに、とかく狩野家にて用ゐる繪の具は少く、殊に彩色にちがひ有る事多し、いかゞの事ぞや、繪の官に入りて、繪具に心をとめぬはいと口をしといふに、中華にても誤りぬる繪の具多し。すべて日本にてはあまりつかはぬ者、紫花、珊瑚、石靑、雌黃抔なり云々。

繪は唐繪を學ぶべし。いかにといふに、日本にても名家といふほどの繪人、ことごとく中國を學びたる者なり。本朝畫史を見るべし。今古法眼元信も何を學びしにや。馬遠、夏珪、牧溪などを學びしといふ。其外巨勢金岡、小野篁、明兆などを始め、數なき名畫とよばるゝ人、すべて中國より學ぶにあり。いつの程にや、專一ならで、養朴、探幽など、はじめ草卒の墨婆を好みて、一體をあはく書出したれども、墨畫はまだなり。彩色に至りては埒もなきことゞもなり。其もとを知らねば、其筈の事とはいひながら、淺ましき事なり。長崎の畫師笹山喜內は、畫學ありて畫才なき生れなりと、荻生惣右衞門は過ぎしもいひしなり。今京都は世繼柳只(俗名太郞)といふもの、畫才すぐれてよし。世に用ゐられなば名あらん者。大阪にて橘有税宗兵衞といふ者、畫極めて美なる所多し。吉田秀雪といふ者、繪はすぐれてよし。彩色に妙あれども、今はいづくにゆきたらんか知らぬなり。狩野如水にあひて物語し、拙繪をこのみにかゝするに、氣が繪より勝ちてゐたるゆゑに、つたなくなりたるなり。洞林は繪はまだ初心なる所多し。又中右近といふもの、繪をかくといふはいまだ見ず。總じて世の井の內なる蛙多し。梁唐宋元明までの名ある畫をも見ることなきゆゑに、繪の力少し。すべて奈良源四郞が鷺の繪といへば、日本に二幅ともなきと覺えてゐるもの多し。徐熙が鷺の繪も七幅まで見しと、養朴がいひしよしにて、この鷺の繪にて、奈良の源四郞鷺よりもたとへていはゞ、二位も出來ものなりと極めし物なるをも見たり。千里の行も、爪さきのむけやうにてはじまる物なれば、何事

も〱目のつけやうこそ大事なるものなれ。よき所に目をつけて學ぶ人は、早く其よき事をうるなり。あしきかたに目をつくる人は、老に至るまで、そのよき事知らず。たとへば蝿といふ虫は、一丁か二丁より外、随分せいだしてあるき、それより外はどうもならぬ程のものなれど、馬の脊などに一つとまりぬれば、一日のうちに十里もゆくが如し。まづ繪も唐繪より學ぶべし。繪をかく人の常に見るべきは、芥子園畫傳なり。宣和畫譜、畫錄、畫品、畫繼、後畫錄、名畫錄、八種畫譜、畫藪、圖繪寶鑑、續圖繪寶鑑、畫史、丹青志、南村先生字儀秘訣の類なり。又日本にて此頃畫筌といふ書物出たり。やくにたゝぬものなり。繪はあさましき程なり。又浮世繪にて、英一蝶などよし。奥村政信、鳥居清信、羽川珍重、懐月堂などあれども、繪の名人といふは西川祐信より外なし。西川祐信は浮世繪の聖手なり。(獨寢)

其畫著色人物、優入妙品、畫杜甫浣華醉歸圖、玉山將頽、兩童扶持、眼光朦朧、脚歩踉蹌、巾幘衣袖、咸有醉態、観者靡不歎服。(長野豊山三名士傳)

篆刻の妙は印影の遺れるに徴すべし。(定武樓印纂、生駒寶山寺藏印、享保十三年生駒の印を刻せし事、略年譜に見ゆ)音樂は絲竹共に之を能くし、三絃、尺八の如き、手澤の者の存せるあり。(淇園先生一筆の中にも音樂の事を記せり)琴は獨寢に其整調の法を記せり。皷弓も亦其妙を得たりと傳ふ。

武術は弓馬刀槍を兼該す。傳説に曰く。淇園宮本武藏に逢ひ、淇園は武藏の善畫に驚き、武藏は淇園の武技に服したりと。二人は異時の人。固より假作の一話に過ぎずと雖、以て互に衆妙の特技に掩はれたる意を寓するを見るべし。

園藝の術に妙なりしは、藩侯の舊別墅なる本郷染井(今岩崎男の別墅)の園池は、其設計に係ると傳ふるによりて知るべし。其他製藥の方(淇園先生一筆などの中に往々これを記せり)は、親戚故舊の病を救ひたりといふ、製陶の術は、自製の茶盌等の遺れるものあり。趣味の多方面なる、驚くべからずや。

同書又里恭の性行及逸話を錄して曰く。

木村蒹葭堂は曰く。柳淇園之爲人、天資風流温雅、而猶且胸中之洒落、世以所知也、常以書畫所交遊、一時有名之士、無不往來者、都鄙藝苑之客、無不識淇園者、其平生隨聞所錄、積年重日、二十餘卷、多是勸懲之話説也、手澤之本、遂爲予藏弃(下略、雲萍雜誌序補)。

服部南郭は先進の名家なり。その淇園に與ふる書(答郡山柳大夫)以て其人物を髣髴すべく、亦以て如何に當時に推重せられたるかを知るべし。

執事巨室於大藩、夙位季孟之間、至今以濟世美、益崇國望、可謂貴盛矣、而委蛇之暇、敏而好學、不恥下問、旁且遊藝文雅之流、櫻生前已爲喬言之、未嘗不仰止其彬々君子之德、今又因此遠見俯及、乃始賜書、伏讀未畢簡、大文明楷、已以錫光草野、喬不佞、海濱老書生耳、不知何以蒙此遠貺、至於謬采過稱、猶將引進固陋、厠之君子列、卑辭懃々、以屬下交、此且執事貴而益恭、固自正考父之爲德焉、雖慮以下人、不厭成其美、唯喬也、無一致當其實、則未知所以答稱、徒以昔嘗先侯之世、得奉薄技於大藩、猥侍弄臣之末、竊惟當時先侯之恩、山高海深、乃不責喬以其不能、以爲文史之小、小人所習、片長可使、是以不啻免罪戾、苟獲承乏而備顧問、亦唯知臣莫若君、乃先侯憫愚之餘、嘗私命喬曰、予不女瑕疵也、後之人將求多於女、我千秋之後、女其行乎、不如俾女成名、他日或適四方、無謂我不知女、喬感泣刻骨、私心自誓、亡何先侯即世、即大藩亦多貸恩、尋乃賜玦、得全首領放歸草野、爾來幾二十年矣、而屏居陋巷、儋石屢空、即小人窮濫、恒志易變、然尚不自量、將恐中途而廢、微名不立、而傷先侯恩造之明、齧臂刺股、區々以守其愚、矻々今業、然後或有一二好奇、載酒問字者、久斯愛、愛斯阿其所好、稍々游揚虛名於四方、四方君子亦幸不棄置、至若有意於喬者、今且追惟先侯之知遇、然駑力有限、不能萬分國士報之、庶亦不變初志、斯而已矣、即執

事所以過聽而命之者、無乃以此乎、過此以往、奚敢當之、然執事所稱及先侯、喬亦一飯不忘之、輙復繇之、以陳微志、且今辱此交誼、巳蒙不棄、凡以先侯之賜也、則非無繇於執事、惟他日所敎、敢不敬承、伏惟執事長於多士、令聞令望、邦家所儀式、乃說學日殖、亦大藩之幸甚也、義府禮則、以定其位、永茲多福、不任大願、谷大雅櫻子榮、固巳傾想於不愧孟献子所友、大字之貺、昭揭草茅、此何翩々文雅有餘哉、新刻時詩評、謹貢左右、以効謝悃、豈敢酬之云乎哉、

畸人傳に曰く。

人と爲り曠達不拘。客を好みて才不才をいはず。寄食せしむるもの幾人といふ數をしらず。あるひはかりそめに來たるものをも、年を經て還さず。家祿多けれども、これがために乏しきに至る。初め某の年、侯使として登極の御賀の爲め都にのぼりしついで、大雅にまみえて相歡し、これより往來たえず。ある時大雅大和に行きしに、路費盡きたれば、假初に立ちよりて是を借るに、例の如くとゞめ、門を閉ぢて還さず。家臣又いふことあり。幸にとゞまりて、内を好まるゝの病を諫め給はれ、多慾のために身を亡し給はんを憂ふといふ。こゝに大雅謀て、其よしを說て曰。もし諫に從ひ給はゞ止らん、聞給はずば速に還らんと。あるじ首をふりて諫にも從はじ、還しもせじと、ます〳〵門を堅くして守らしむ。大雅終に裏の垣をこえて歸りしとなり。或時は驛路に出で、四國あるひは順禮の道者をも引て、禮をあつくして留むるに、鎗をたて、供人あまた具したれば、刀のためしものゝ料にあざむかるゝならんと心得て、大に懼れてにぐるもの多かりし。又博奕の罪によりて此境を放たるゝ者を、吏に私して邸に引入れていふ。生涯こゝに宿せば、猶禁獄も同じと。其者をも賤しめず。詞を厚くして其技をなさしめ、その術の入微をよろこぶ。又ある時には從者あまた引つれ、馬上にて野路を過るに、女乞丐の絃歌して錢を乞ふものにあひて、やがて其絃とりて自彈すさびて興に入り、金を與へて去る。絃またもとより妙手なりき。凡爲す所、人の不意に出づるは王子猷に似たりとやいはん。客を好むは鄭莊孔北海の風ありと。

其性行は頗放縱なるが如きも、是其半面を誇張したるものなるべし。而して渾厚の君子人たりしは、雲萍雜志の道德に關する記事によりて知るべし。又親戚藤谷氏に與へたる書あり。如何に注意の周到なりしかを見るを得ん。

一。七才のときより、我等かたにて貴方世話ゐたし、このたび三田へ出世の事めでたく存候。北坊どのへ約束たち候て、一入うれしく候。引はなれ候へば、申候事遠く候ゆへ、ぞんじ付候事、國字にて書進じ候。われ等坐右にをり候と被存て、御覽じ度候。

一。四書、五經、くはしく今よりよをすてず御覽じ度候。かたかな付の抄よりして、いかやうにも上達あるべく候。人の人たるをわきまへ可被成候。

一。武士はかたゐぢと申事をはり候、宜しからず。第一のきずにて候。公道にまいらぬことにて候。たとへ十が十よき事とぞんじても、いくたびも人のことばを味つゝ、あるひは常々に友だち付合に、雪を黑しと申人ありて、一度に白しと御申候と、再三黑しと申人には、口をとぢて、成ほどさやうの事もあるべし、世中は廣きことにて候と、人を冷笑せず、おとなしくうけ給ふべし。わざはひを免候第一なり。

一。武士の死をきわむる事、主人と父母とのみなり。たちがたきはづかしめを得たる時なり。されどこれには心の用捨あるべし。

一。心安友だちの所へ咄しに御こし候とても、いく度にても、主の留守には座敷へあがらざるよし。

一。酒のみ、かたゐぢ、人のうわさ、ばくちする人、友とする事あしく候。おもはぬ非命の死をすることあり。

一。御學問あがり候て、いか計よく御成候とも、人を下に見る事よろしからず候。手を書ても、文字しりても、さして何のうちあがりたる益はあら

ず候。一文字をしらずとも、父母と主人とを御大事可被成候。

一。人にわれより情をかけて物ほどこしたる事を、心にかけてわすれ度候。人より情あづかりたるをば、一日も一時も御わすれ被成まじく候。

一。武士は殺生すまじく候。それとも主君の仰、父母の仰、人のために成候殺生は尤にて候。なぐさみに御無用可被成候。とりけだ物、父母あり子ありて、かなしき事、人たる人は身に引うけて見給ひ候へかし。たゞ殺べきは、主人と父母にあだしたるものをゆるす事あるべからず。

一。四つに登城するときには、五つ時よし。五つに登城する時には六つ半よしと御心へ可被成候。人のする奉公をとりてする事、かたく愼み度候。人のためには成やうに成やうにと可被成候。家中のために成候が、かへつてとの樣の御ためと成候事をゝく候。かやうのこと常々申て候。思召いでられ度候。

一。女房もひさしくすぎ候ひぬれば、心やすだていたしたがり候。をつとより心やすだてを申べからず候。

一。ゐかほどゐかりはらたつとも、手打をする事あしく候。家來を手打にすること、申計なき非道にて候。大かたことばがへしなどをとがめ候ゆゑに候。常々心もちにて、さやうのすじにまいらず候。子孫につたへて御つゝしみ可被成候。

一。女の申ことを御きゝ被成候事、御つゝしみ可被成候。中のわるく成候も、みなこれより出候事にて候。常々われらが申たると、いたしかた御覽じ可被成候。女の口にて一人も損じ候家來覺へ不申候。

一。たゞ人はじひの過たるは、かねにあわすともよき方多し。人をかわひと思召候ことを、御すて不被成、御はげみ可被成候。かやうの事ども、くれ〴〵も申進候。そこもとの一生をかんがへ候に、たゞ人とあらそひ被成まじく候。人とことばあらそひ、たわむれにも被成まじく候。以上。

元文庚申九月　　　　　　柳澤下野

藤谷貞之亟殿

父保格河越にて感得せる釋尊の像は、淇園に傳へしを、姉自春禪尼請ひてこれを郡山九條の草庵に禮拜せしもの、吉野下市の興大寺に安置せられぬ。其緣起の草稿の淇園自雌黄を加へたるもの、今猶家に遺れり。其末文により、亦以て淇園の性行を知るべし。保格男女數多おはしつれど、皆早世して、たゞ今の權太夫里恭はじめ下野と申つるのみ、其家を繼ぎ、廣才博學にして、馳馬試劍の外、詩文書畫をもて世に名高く、父が志を受繼で、物を憐、惠ふかく、忠孝日新の思ひ厚くて今そかりしも、父保格の餘德にてもおはしつるにや云々。

淇園亦飮を解せずといふが如きは、人の意外とする所なるべし。伊勢の綠樹館の記する所によりて、併せて其意匠に富めるを知るべし。

丙子之夏六月、余遊華洛、誘一二酒客、避暑祇林波石樓、樓之主人擧盃屬余、且開小香盒、出一銀鉤、鉤青柚一片挿盃、柚片高懸、不全落于酒中、淸香芬郁、麗雅可愛、問諸主人、曰是郡山柳淇園先生所製、名曰盃鉤、洛陽浪花、文人雅客、愛賞娯玩、醉筵雅會、莫必不携、香盒之中、有先生書、曰余性不能飮酒、常恨燕會豈樂之時、我獨醒然、孔爲佳席之妨也、予頃製一器、寄波石樓主人、此器也、鉤物盃上、懿以助酒趣、春則可以鉤梅或鉤桃梨、夏則可以鉤菖蒲或鉤柚、秋則可以鉤菊或鉤蘭茱萸、冬則可以鉤臘梅或鉤水仙、與觸應時、莫物不鉤、花晨月夕、施之醉席、自覺一種仙趣、余友高陽唐常責我嘲我、以不識酒中之趣、余爲之

赧然泚顙、而終不得奈之何、余製此器、纔足以塞其責解其嘲矣、余讀之、益信先生温和之心、仰不偏之德、使良工多造之、以與友聖賢之人、　綠樹館識

長野豐山亦崎人傳中に石丈山、柳里恭、池大雅の三名士を撰み、淇園を評して曰く。

昔田文趙勝黃歇魏無忌之徒、好客自喜、博徒賣醬雞鳴狗盜、莫不引接焉、然其志在以權勢詐力相傾奪、安在其至性愛士哉、余觀公美之爲人、謙虛汎愛、與孔北海並馳、而分其才藝、便可了十餘輩矣、豈不益偉哉、世人動輙說、古今人不相及、若公美者、過古人遠矣(三名士傳)

乞丐の風流。野史に曰く。

嘗在書齋、作山水、窓下有丐人、蒲伏覗見、其蓬頭洗足、弊衣縷々、如當日未得一飯者、雖然衰顏不凡、雙眸炯々、里恭終畫局、擧頸始見其心醉之體、謂曰、汝見畫樂矣耶、答曰然、身如在青松白石間弄烟霞、若胸懷以可察、箕踞不起、里恭拍掌曰、汝何人矣耶、我亦察汝懷、其風流與吾輩不讓一籌、今以此畫投汝、乃卷而授之、丐人欣然曰、賤子展覽之於名山中、與邱壑可令鬪是奇也、抱畫而去、未幾日又來請曰、曩賜貴筆、每展觀、不覺畫松聞仙風之響、清流掬欲飲之、一邱一壑、莫不得意、拜謝無辭、頃間卜居於某山某處、願明午後賜枉駕、聊欲報寸志而去、里恭怪疑、明日至其地、登山十五六段、山上古松數百株、蓊鬱中有小徑、無一塵埃汚、又往半段許、有一小坡、峭壁垂松枝、以一條繩繫磁瓶、設炭火沸涌、傍貯清水於提桶、加以木杓、延薦設席、物皆雖麁、悉以新、茶具亦清灑、里恭意賞嗟其風味、就坐竢多時、其人不至、乃手自點茶傾數盌、席上有便面、取披之、題詩一首曰、這回空過二十年、肉重不能飛上天、抖擻衲頭還自笑、囊中也沒一文錢、安西某引郡山某氏話(この事名家書畫談にも出でたれど信じ難し。逸人畫史に「或時一乞士の畫を請ふ者あり、僕大に叱す、先生此事を聞て、即其乞士を喚ばしめ、其好む所を寫して與ふ」と言へるは、蓋し事實ならむか)

戸田旭山の訓戒。

淇園疾あり。戸田旭山の診察を受け、帶劍の美なるを見、強ひて熟視せんことを請ひしに、先己が帶佩をさし出すべきに、足下は禮を知らずとて辱めしを、淇園、先生の咎は大に我を益したりとて、直に謝せしかば、旭山色和ぎ、劍粗なりとて見せられしといふ。(蕉窓雜話による)

淇園の妻裁縫を善くす。雲萍雜志に曰く。

予はいとけなき頃より、詩歌の道を好み、たま〳〵作文などせしをりから、稿成りて父に見するに、一としてほめられたることなく、只無益のことなりとて、座右に投げ捨ておかれ、他の者のは見てほめたまへば、去りとてはいかゞとのみおもひすごしゝが、後に妻にむかへたる女の、物縫ふことの人にすぐれて、小袖など一日に一重ねづゝ縫ひて、餘事までもことかゝねば、物縫ふ職人の見ては驚くばかりに上手なりけり。予ある時ものを縫ふをひたぶるに愛で賞しけるをり、妻の云。三歲にして母に後れ、繼母に育てられ、いと嚴しき生質にて、五六歲より水仕のわざをつとめ、七歲より手習ひ、物よみ、裁ちぬひを敎へられ、實の子ならねば、敎訓足らじと、末に至りてそしられんはくちをしとて、羽根つくあそびだにえせで、只物ぬふことなどのみにいとまなかりつれば、折りからははげしき母よとおもひしかども、今となりては、物縫ふわざを人にほめられ侍るは、偏に繼母のなさけ薄からざる慈愛なりといへるを聞きて、予がいとけなきころの作文をほめられざるの、いとありがたきをおもひあはせぬ。

杉村甚四郎　磯城郡大福村の杉村氏は當時豪農の學者なり。淇園兄なる甚四郎に天文曆數のことを學び、弟なる甚次郎に易學を學び、最親密にして、年中の多くを此家に費しゝこともありきといふ。甚四郎長郡と號し、淇園及び奈良の淇月との俳諧もあり。甚四郎の長男庄助婚禮の時、淇園に帛

紗の下繪を請ひしに、心よく承諾して、余が妻は刺繡をもよくすればとて、立派に作りあげさせたるもの、今猶家にあり。其下繪も近き頃までありしに、多くの遺物と共に、火災の爲に失ひしとは惜むべし。淇園の杉村翁に與へたる書中に、原嘉次郎父梶原平兵衛といふもの、但州播州川筋に通船を通じ、西廻の航路を短縮せんとする企あるに對し、金主の一人たらんことを勸むる長文あり。懇々縷說して、頗眞情の吐露せるを見る。

(畧年譜に依るに、こは寶暦七年の事なり。大和人物志に曰く『經世の上に着眼したるは、杉村甚四郎に與へたる書に、運輸航海のことを論じたるにても知るべし。甚四郎は里恭が天文學の師にして、その家は頗る富めりしかば、梶原某が但州播州川筋に船を通じ、西廻の航路を短縮せんとする企あるを說いて、國家の爲に極めて有益の事業なれば奮つてこれが金主たらんことを勸告せるなり。』)

寺院の訪問。　菩提所發志院は固より、藥師寺、寶山寺、槇原等は、屢淇園の遊ぶ所なりき。藥師寺の行遍は畵を淇園に學びしことあり。寶物展覽の時用ゐたる其品目の札紙、今猶存す。生駒山にある印は、孝上人の爲に刻する所なり。

河攝の來往。　淇園壯年にして兄保誠と不和なりし頃は、常に河內喜里川の中西宗兵衛の家に遊びぬ。其後金錢の支出は、常に此家に仰ぎしよしなり。されば子孫長く歲時の音問を絕たざりき。(淇園名蹟に枚岡中西宗兵衛藏里恭筆睡童子圖、雪中小禽圖及行書雙幅あり)

大阪新町の吉田屋に遊びしも、亦兄と不和なりし頃なるべし。裲襠の裏、招燈にまでも毫を揮ひたりといふ。當時の女俠奴の小萬、亦畵を淇園に學びしといふ。

河內二ッ家の儒醫北山橘菴は淇園の門人なり。其姪七僧浪華に講業す。亦親交あり。其家に淇園の遺品頗多かりき。

鞍岡蘇山。　肥後の人にして書を善くす。曾て東京に來り、一逆旅に投せしに、旅費盡きしかば、字を書きて與へぬるを、主人淇園に示しゝに、淇園大に感じてこれを招き、終に官を與へたりといふ。

秋篠與平。　淇園生駒山を越えし日、秋篠を過ぎしに、卒都婆を作れる眇者あり。これ風流人のなれの果なる與平にして、茶をすゝめ、たゝらの木の芽に味噌をくるみ炮りたるを出しゝを、淇園感じて物語し、强ひて筆跡を請ひしこと、雲萍雜志に記せり。野史の記せる乞丐は、この事の轉化せるにはあらじか。

同僚を戒む。　曾て同僚石井氏腹痛の爲缺勤したるに、さばかりの事に勤を缺く程ならば、寧死せよと言ひ送りし書面あり。

多聞天像。　淇園五十三歲の時、愛子昌鷲十九歲にして歿す。淇園これを悲み、其顏貌を摸して多聞天の像を刻せしめ、背に印を納めたるものありしが、今所在を知らず。

狐の話　淇園は箸尾の小北稻荷を信仰せり。社家の傳說によれば、淇園を稻荷の化身といひ、四十八藝を以て生れしむべしとの神託ありしといへり。(下畧、享保二十一年四月里恭が小北稻荷神社に御供米壹石二斗を寄進せし文書あり)

里恭が多藝と客を好みしことゝは、顯著の事實なりきと見え、近世叢語にも左の如く記せり。

性豁達豪放、不拘小節、爲人多才藝、文武兼資、善詩工書畫、其得名者十有六技、甚好客、亡論貴賤才不才、雖閭閻無賴子、厚禮引接、以爲食客、日試其藝術、以此爲樂、居常寄寓者、數十百人、邑入雖多、爲之貧矣、而岸然不顧也、(この事人物志にも見ゆ)

里恭が遊歴の跡の雲萍雜志にて知らるゝは、有馬に浴し、生駒を越え、洛陽にあそべるころ、比叡の山ごえに辛崎の松を見、東海道濱松に宿り、江戸にありしころ武甲山にまうでゝ日本武尊の舊地を拜し、浪華の長柄に遊び、伊勢より伊賀へ越えしこと等なり。その文學上の製作は、前に記せる遺著の外、柳澤淇園小傳に、里恭の圓福室記、(延享元年五月)樋山氏傳序、(寛延庚午八月)六藝餘波序、(寛延二年八月)定武楼印彙序、心水軒谷口鄭圃先生墓銘、(寛保二壬戌秋九月、門人柳里恭謹撰)詩歌數篇及俗謠二曲を載せたり。雲萍雜志等の文と共に、竝びに以て里恭の才思を見るに足る。されどこゝにはたゞ雲萍雜志中の畫談を掲げて、以てその文藻の一斑を賞すべし。

ある人予に畫を學ばんことを乞ひて、さて云ふやう、僕畫を學ばんとおもひおこしゝよしは、他の物を畫くことをもとめず、たゞ富士と達摩とのみを畫きたしといへり。それも上手とならんことをも求めず、富士はいかにも富士と見え、達摩はいかにも達摩と見ゆるやうにかきたしといへり。この詞尋常にきこゆれども、いとおもしろし。すべての藝何によらず、このところをよくわきまへぬる時は、過不及あるべからず。

ある人予がもとに來りて、繪に魂をいるゝと申すことは、いかやうなることをして畫き侍れば、魂は入り候ことぞと問ふ。予こたへて云。すべて繪にはかぎらず、何ごとにても實心をこめてだに致さば、たましひの入らずといふ物あるべからず。他のことはいざしらず。繪の魂の入りたるとおもふは、諸國にて種々名畫も多かる中に、我見し泉州左海に一國寺と云ふ精舍あり。この寺は千の利休もしばらく居られし時物好きを盡して、庭園座しき五間ほどもあり。一間には檜の樹一本をゑがけり。一間には臥したる鶴二十五羽ばかりをゑがきてあり。いづれも彩色ありて、古法眼元信の筆といひ傳へたり。そのかみこの繪をかける繪師、この寺に寓居すること三年ばかりの中に、何ひとつ畫きたるとなく、碁をこのみて、只それのみ日毎の樂みとして、あるはこゝかしこ遊びあるくに、はやく三とせを經たり。一たびだに筆をとりしこともなきは、いかにも心得ざる者かなとおもひて、あるとき住持の申されけるは、その許畫をもて一家をなせりといひながら、筆を取りたることもなく、圍碁にのみ年月を過ぐさるゝはいかに、我衣食の費をいとふにはあらねど、何處へなりともあそび給へ、愚老も所用ありて京へのぼり、ことによりては一年も在京せんもはかりがたしといふに、彼畫師きゝて、それこそいと名殘をしきことに候へ、さあらば年來の恩謝に、何か少しの畫をのこしまゐらすべしとて、心がまへのみにて、又四五日ほどふるに、住持は何をゑがくと見たくて待てども、絶えて筆をとらず。ある夜小坊主の住持が居間に夜ふけて來り、ひそかに申すやう、かしこに行き給ひて、そと覗きて畫師のありさまを見給へとさゝやきけるに、やがて小坊主にいざなはれて、畫師が居間をうかゞふに、明り障子の腰板に身をよせて、さまざまの姿をかへつゝ、寢起するありさまを見るより、小坊主を引きよせ、こよかし、のぞくべからず、はやく臥せよとて、その身も寢間に入りたり。あくれば畫師まだきに起きいで、一間なる障子にゑがくを見れば、みな臥たる鶴なり。畫勢不凡にして、丹青の妙いふべからず。さあるに、又の夜はいかにとうかゞふに、前のごとく夜もすがら寢ずして、あけなばかくや畫かん、とやせんかくやあらましなど、獨りつぶやきつゝして臥しぬれば、住持もしらぬ顏にて過しゝが、十日あまりにして、その鶴およそ廿四五羽をゑがけり。またも夜ふけて覗き見るに、このたびは肘をはり足をのべ、手を口にあてつゝ、鶴のふしたるさまを見て、臥しけるに、夜あけてかの畫師がもとに住持來りて、けふゑがき給へる鶴の姿はかやうにやそめぬらんと、よべ覗き見たる姿のさまして見せければ、打ちおどろき、禪師にはわがゑがゝんとおもひかまへし心を、はやくも悟り給ふはいかに知り給へ

るにかと問ふに、いやとよ、昨夜そのもとのやうすをそとうかゞひて知りたりといへば、畫師それよりして二枚はゑがゝずして、杉戸の畫に檜木一樹をゑがきて、いで立ちぬるとぞ。この檜木をゑがきし後、東國へ下向の折から、東海道箱根の山中にて、檜の木の枝の心にかなひたるがありければ、東國へは下らずして、ふたゝび泉州一國寺へ立ち越えしかば、住持見て大におどろき、東國へ行き給ふと聞きしに、又もや來られしはいかなることにかにいふに、さきに畫がきし檜の木の枝、ひと枝足らぬところあり、箱根にてその意を得たれば、わざ〳〵立ちもどりたりとて、一枝をかきそへ、いとまごひしていで去りぬとぞ。畫に魂を入るゝといへるは、かゝるたぐひとおもひぬといへば、ある人も感じて歸りぬ。

又同書錄する所の左の一則の如きは、最も里恭の才を察すべきものにして、能く審美學上の謂はゆる、能相、所相（主觀、客觀）を說破せるものなり。

風情はこなたよりむかへる物か。將むかふより見するか。さらばむかふにありて、我方になしとおもへば、われにありてまたむかふになし。

ながめやる雪の山路の朝ぼらけ、何とゐをぬる一家のぬし。

里恭の尺牘往々今に存ずるを見るに、頗る意匠を費しゝもの多し。或は墨と青、綠、朱等の顏料とを用ゐて交行に書し、或は大小の文字の行と列とを參差夾雜せしめ、或は間ゝ畫圖を加へ、而も行筆丁重を極めたり。亦以てその好事を察すべしとす。明治四十年十一月、有志の者胥議りて淇園會を立て、里恭の百五十年祭を營み、その遺作の書畫を集めてこれ展觀し、その尤を拔きて淇園名蹟及淇園印譜各一冊を印行せり。その畫印家に存するもの七、攝津平野の多治見氏に藏せらるゝもの二あり。（印譜載する所の爾餘の印は摸刻に係る）畫乘要略に曰く。「摸法元明古蹟、余嘗觀其人物、筆情纖勁、設色鮮明、又觀水墨花鳥、氣味極淸、有雅韻、宜乎、名重一時、士人恐服也」。逸人畫史に曰く。「最山水、墨竹に長ぜり。其書畫の風姿は文衡山に髣髴たり」。古畫備考に曰く。「善丹靑、妙得設色法、畫人物花鳥、一爲設色、水煩潤之不去也」。これ等諸書の評賞中、畫乘要略の言最も當れるを認む。

第三百十三　柳里恭筆蓬萊群仙圖

第三百十四　同筆牡丹孔雀圖

柳里恭の畫は固より謂はゆる文人畫に非ず。設色華麗、用筆細謹を以て特色とす。その師承を詳にせずと雖も、蓋し長崎派の風に倣へるものなり。故を以て、人物を畫きては逸然等に類し、山水、花鳥を作りては秀石、若芝、慶山等に似たり。こゝを以て細巧餘りありて雅韻足らず。士夫の畫にふさはざること、猶逸然の畫の禪餘の技に似ざるが如し。今その尤品二點を揭げてその技風を示す。

柳里恭の門人には著れたる者なし。雲萍雜志に「予が畫を敎へたる曉山といふ者、遊歷せる折から、信濃に妻をもとめ、善光寺の邊に世を帶し、煙草を商ふことを家業とせし云々」とありて、大食の逸話を記せるに過ぎず。

邊湊水（諸書湊水に作るは誤、今款印に從ふ）は古今諸家人物志に曰く。「渡邊甚藏、姓邊、名從、字周本、號湊水、又號槃礴主人、東都麻布人（寓善福寺前）以畫爲業、于時明和四年丁亥秋病歿、壽四十八」。續諸家人物志に曰く。「明ノ文衡山ヲ摹シテ、淡墨山水ヲヨクス。殊ニ大幅ニ妙ナリ。（中略）槃礴畫談ヲ著ス」。古畫備考遺跡志

を引いて曰く。「號二鋤雲軒一、明和四年八月三日歿、廣尾光林寺」。忌辰錄には「號二隨庵一」とあり。逸人畫史に曰く。「玄對瑛の父なり。初め瓊浦にありて畫を某氏に學ぶ。其法沈氏を宗とす。著色花鳥、墨梅墨竹に巧みなり」。遺作を觀るに畫風吳浙の間位に在りて、遒勁の筆力頗る賞するに足る。こゝに揭ぐる觀瀑圖（小圖第五十三、紙本淺絳、二宮熊次郎君藏）以て觀るべし。

溱水の子玄對、玄對の子赤水あり。畫乘要略に曰く。「渡邊玄對名瑛、字延輝、號二林麓草堂一、江戶人、長二山水一、名馳二一時一、其子赤水、名昂、字伯顒、能二家學一」。古畫備考「內田玄對、初渡邊又藏」と記し、且曰く。「改內田、字廷輝、號二松堂一、稱二又藏一、溱水男、又號二玄對一、（又玄岱）居二東都麻布古川町一、（古今諸家人物志畧同）文政五年四月四日歿ス。年七十四」。續諸家人物志に曰く。「尤モ人物ニ長ジ、大幅ニ妙ナリ。（中畧）林麓娛觀、邊氏畫譜ヲ著セリ」。忌辰錄には「歲七十七。廣尾光林寺に葬る」とあり。又松臺の號を錄せり。繪畫叢誌に曰く。

小圖第五十三　邊溱水筆觀瀑圖

玄對翁世に出でゝより、禮宴の繪畫に招聘せらるゝこと頗多く、土佐、狩野の世家を壓倒し、名聲一時に轟けり。芝森本の居宅の會日には、諸侯の留守居多く來り會す。其肩輿門前に充滿す。之を延れば九十歩に及ぶべしと言へり。諸侯の遇待此くの如くなれば、自矜伐して人民に應接すること甚稀なり。荒木寛一氏少き時、片桐桐陰に畫を學びしが、方今の大家たる玄對翁に面會し、其書を熟覽せんと欲し、恰師の桐陰翁は玄對翁と深き交りなれば、師に紹介書を乞ひ、之を携へて森本なる渡邊の家に至りたれども、更に面會を許さず。塾頭をして近作の畫一二幅を觀せしめし而已なりと。又畫を作るに、纖塵の硯池又は彩具に混入するを嫌惡し、綿布は塵埃を惹易きを以て、其身は勿論、側に侍して墨を磨する少婢に至るまで、一身悉絹布を被らせ、麻布を禁斷す。而して輕羅幮を垂れて纖塵を防ぎ、其中に在りて畫を作る。其奢侈豪放の類概此くの如し。其少婢は後に産婆となり、近き頃まで存命せりとなん。抑德川氏狩野、土佐二氏をして畫師とせしより、諸侯皆これに倣ひ、其藩の畫工をして、德川氏の畫師の門人となさしめしより、諸侯の供給する所、狩野、土佐のみにて、漢畫を以て鳴る者あれども、民間にのみ行はれて、諸侯の壁上に懸けらるゝの榮譽を得るは稀なりしに、漢畫一仲の時來たり、玄對朝に出で、文晁夕に出でゝ、筆鋒を揮ひて狩野、土佐の堅陣を打ち破り、諸侯の需用となりしより、漢畫獨盛りに行はるゝの氣運となりしは、實に玄對及び文晁二翁の腕力に由る所にして、又錦衣玉食奢侈豪放を極めたるも、二翁の上に出づる者なしと聞く。

文政の頃、田安公子の御內に、岡田顯忠とて、歌よく讀みて、殿の御覺えよき人ありけり。或時書畫帖を作りて、知る人なれば先づ渡邊玄對がり持ち行きて、是へかいて給へと言ひければ、玄對は例の如く傲然として、箇樣の小さき物などへかゝんはいと煩はしき事なりとて、かゝざりければ、書畫帖のことなれば、唯名ばかりにてもかゝせ玉へと言ふ。名ばかりとあらば書いて參らせんとて、玄對邊瑛と書いて、いざとて與へぬ。岡田ぬしも腹にすゑかねけん。名ばかりと申せばとて、いと容易き物書いて給へと言ふことにてこそ侍れ。いかに天が下に二人となき御身なりとも、名ばかりにては

いかゞはせんとて、返しやりければ、玄對はにが〳〵しげに、名の傍に梅の枝ふた枝ばかり書きけるとぞ。玄對か世に高ぶり藝に誇り、人に驕れるは、前後に復比ひ無きことゝ言ひあへり。

古畫備考に曰く、「增上寺淨月大僧正に若冠より仕たる由。嫡子ハ渡邊忠藏。隣家に住す。二男玄輝父と同居。三男は一旦出家せし由。惡僧にて還俗し、色々親に苦勞を懸、勘當を致し、又近頃免し候由。夫故玄岱散財ありて、當時は不如意の由にて、寫山樓へ其由を稻本屋山を以て申越、畫二十枚を合力に書くれ候樣申參候由（己卯六月關）」こは晩年の事か。忠藏は即ち赤水なり。天保四年十月廿九日五十八歲にて歿し、光林寺に葬らる。備考の系圖に依れば、忠藏の兄に田穀あり。陶丘と號し、文化五年三月七日歿す。又光林寺に葬らる。（遺跡志）

第三百十五　渡邊玄對筆秋景山水圖

玄對の畫はその父漆水の風を傳へて、跨竈の譽あるものなり。山水の趣致頗る藍瑛に似たり。本圖の如き、以てその技風の槪を賞するに足る。

玄對の門人

玄對の門人に淵世龍、大野程鵬及片桐桐隱等あり。竹田莊師友畫錄に曰く、「眞齋先生名世龍、字玉鱗、眞齋其號、又號穉園、晚自稱雪山叟、宇吉翁第三子、幼好畫、憂邑乏師友、有遠遊志、翁不許、爲納婦、遺而弗顧、出亡數次、會淵旭江適至、於是日夜從事、碎礪不寘、業成、官給祿補畫員、再命詣荏土、遊邊玄對之門、畫益精熟矣、性樂易不與物迕、少閑則座睡、時與客對碁、客專心睽視、一石不苟下、顧先生乃且下且睡、勝敗兩忘、局終附之一笑而已、又有社友拉飮其家、其婦出而進酒、先生戲謔百出、閧然罄歡、方歸、既而詳此、蓋先生之前婦也、後有告者、始省焉、其恬淡如此」。世龍の子世麒は岡田米山人の門下なるを以て、後に出す。大野程鵬は通稱由兵衛、岨陵又雪涯舍と號す。江戶の人、谷中感應寺境內に住せり。（書畫會粹に出づ）片桐桐隱は片桐帶刀入道宗幽の次子、宗古の弟なり。（續諸家人物志に曰く、「名は隱」）字は所翁、蘭石軒、（又蘭石山人）日々庵、泊然叟等の號あり。初め狩野榮川院に學び、後玄對に就く。盛子昭等元明諸家の蹟に參し、みづから一家を爲す。山水、花鳥に長じ、殊に淡彩の人物を以て賞せらる。曾て旗下の士某の養子と爲りしが、みづからその嗣たり難きことを悟り、養父に請ひて離別せしかど、その家より終身二百俵の祿を贈り、兄宗古よりも釆地を與へられ、生涯畫を樂むことを得きと云ふ。業をその門に受くる者甚多し。（今畧之）その子入江淸兵衛幕府の御小納戶役たり。文政七年（諸書異同あり、今廣益諸家人名錄に從ふ）七月廿六日、六十一歲にて歿す。（古畫備考）廣尾天現寺に葬る。（忌辰錄）

吳浚明

吳浚明（畫乘要略後明に作る、今款識に從ふ）本氏は佐野、五十嵐氏を冒し、後みづから吳氏を稱す。字は方篤、（又みづから方德と署せり、印文方篤）又穆翁と號す。越後新潟の人なり。法を諸家に取り、終に支那畫を宗として、みづから新に一家を爲せり。畫乘要略に曰く、

初學狩野良信、後學梁楷及張平山而變其格、家貯梁楷八仙人圖及李公麟臥軸、張平山人物、狩野雅樂助朱梅及古蹟數十幅、俊明築一樓、爲學畫之處、不下樓凡四十年、長人物、工設色、又善書、著名於一時、

近世叢語に曰く、

穆翁（中畧）本氏佐野、世服賈業、其祖時、嘗以幼孤殆絶、有五十嵐某者、弃己家、就而鞠之、以成佐野氏、穆翁德之、身冒五十嵐以報之、穆翁敏達好學、壯年入京、開道山崎氏、後又與宇士新等遊、以善詩稱、又嗜畫、來江都、學狩野氏、不甚當意、因出入諸家、平日崇奉菅神、嘗夢一衣冠人賜金泥書十字、覺自占曰、天生地成、十地成數也、吾業其成矣、終斥狩野、排土佐、南北二宗外、別成門戸、名振一時、其三子皆學畫、嘗戒曰、畫雖小道、可因以輔世敎也、爾輩執筆、必於賢哲偉迹、謹勿作誕謾淫褻事以敗人也、穆翁事親能盡其歡、父母既歿、日必拜在日座處、未嘗惰容其傍、雖極忙迫、未嘗誤履其所、與人言適及父母、輒潸然感泣、有時獨座垂涕、問之則曰、有念二人、平生輕財重義、輟己周人急、聞有孝子、必迎致而敬愛之、詳問其親所嗜物而饋之、寶曆中州大饑、傾家貲以賑濟、囊篋既竭、鬻傳寶書畫古器以繼之、其病不能與者、遣內人、夜令荷飯粥、至家而食之、脫衣衣之、初遊學而歸、禁足極嚴、家遭火災、亦寢食于庫內、不敢出門、以待營築畢、是時聞鄉有司無意於荒政、乃始一出門抵府、爲百姓請、有司愧謝、大發廩、天明元年疾篤、醫三浦東里來候曰、先生名播四方、壽超八旬、有子有孫、墳墓有託、人生如此、可以無恨、穆翁曰、然、予未嘗觸法憲、以全事親、樂可樂而忘其貧、皆親之賜也、言終而不復開口、間一日而歿、年八十二、

繪畫叢誌に吳淩明の傳あり。これに依るに、その吳を以て氏とせしは、芝山大納言の勸めに依りて、止むことを得ざりしものにて、七十歲の頃に至り、五十嵐氏に復せり。又三夕頻りに富岳を夢みしを以て、孤峰とも號す。畫は天才にて、四歲の頃より嬉戲これを作りき。安永六年勅を奉じて數幅の畫を禁裡に奉り、和歌を賜ひて賞せらる。性至孝未だ弱冠ならずして能く家事を幹せり。江戸に在りし時母の病めるを聞き、歸り視るに正に危篤なりしかば、左指の血を以て普門品七夜七通を書し、以て平癒を觀音に禱る。元來佛法を喜ばずと雖も、父母の心に迎合せるなり。父の歿後その遺命に從ひ、僧位を請ひて法眼に敍せらる。故に畫款に法眼嵐方德、法眼淩明などあり。その歿したるは天明元年八月十日とす。古畫備考に「畫師ニ非、以儒成人、畫ノ謝物ハ悉ク散不蓄」と記せり。淩明伊藤氏を娶りて三子あり。皆畫を能くす。長を佐野子謹（近世叢語「顧行」）と云ふ。その畫父に似たり。又書を能くす。（備考に「子寧ハ後西福寺富ノ元〆チ致ス」とあるは、俊明の孫と云ふ）仲を元誠と云ふ。獨り五十嵐氏を稱せり。片原と號す。人物に長ず。京都に遊びて一時世に稱せらる。梅泉曰く、「余聞之北汀先生、元誠以爲吾技勝父、淩明嘗製野馬粉本、元誠密以朱改其粉本、數月後淩明偶見之、驚曰、何爲如此、悉去其朱、元誠大慙」。天明四年十一月三十九歲にして歿す。叔を佐野元敬と云ふ。詩書畫共に美なり。元誠の子主膳、靜所又竹沙と號す。徙りて江戸に居る。人物、山水を善くす。畫乘要略に曰く、「嘗臨明王元章墨梅、有風致」。書畫會粹に見えたる佐野儀藏（淺草雷門脇、名此寶、字希賢）も亦吳淩明の孫なり。

吳淩明に學べる者に廣島維明あり。畫乘要略に曰く。「字士興、號鶴皐、越後人、學俊明、其子如雲亦能畫、如雲子稱鼎助、學畫於父、頗敏慧、後爲鑄工、龍文堂贅婿、以鑄諸器爲業」。

馬孟熙

馬孟熙字は文奎、北山氏、寒巖と號す。通稱權之助。（逸人畫史、忌辰錄は「名馬、稱大太郎」と記せり）幕府の御先手與力なり。（忌辰錄）父馬道良、晋陽と號し、亦畫を善くせり。（古畫備考遺跡志を引いて、「享和元年十一月十六日歿、四谷長善寺」と記せり。又曰く、「好作僞畫、立原氏話」）孟熙畫を父に學び、後元明諸大家に參し、みづから一家を成し、山水、人物に長ぜり。（逸人畫史）或は曰く。來舶の清人に學ぶ。（忌辰錄）旁ら蘭字に委し（古畫備考）。麻布に住し、（同上）寛政十三年正月十八日歿す。（忌辰錄）壽卌五。（古畫備考）淺草山谷法禪寺（或曰今戸法源寺、今忌辰錄に依る）に葬る。文晁曾てこれ

に學べり。その遺作を觀るに用筆剛勁、潑墨淋漓、頗る浙派の妙味あり。遺作流傳少からず。門人に唐橋君山の女あり。竹田莊師友畫錄に出づ。（曰く「唐、繡鸞、君山先生女也、（中略）畫學馬文奎」）

馬文晋

馬文晋はその傳明ならず。古畫備考に名は良、江戶の人とあり。その畫印には「馬良私印」、「文晋」とあり。或は馬道良と同人か。遺作を觀るに正に浙派にして、年代は寬政以前なるべしと憶はる。尙後考を期す。

鈴木芙蓉

鈴木芙蓉名は雍、字は文熙、芙蓉道人又老蓮と號す。通稱を新兵衞と云ふ。信濃の人なり。畫は初め法を龜玉に受く。後明淸の諸家を摹して一家を成す。中年阿波侯蜂須賀氏に仕へてその畫員たり。時に西河岸より吳服町に移る。（畫乘要略、續諸家人物志、墓所一覽）世或は文晁に學ぶと爲すは誤なり。古畫備考に曰く「後年温古堂石橋彌兵衞ヲ招宴セシ時、南畝芙蓉、雲峯等ト來リシガ、芙蓉醉テ文晁ノ噂ヲイタシ、予ガ門人ナル由ヲ語リ、世人專ラ其畫ヲ賞シテ、予ガ畫ヲ不知事ヲ言リ」畫乘要略に曰く「長山水人物、名馳一時。」五山堂詩話に曰く「木芙蓉、谷文晁、俱以畫名今代。」文化十三年五月廿七日、六十八歲にして歿す。八軒寺町大仙寺に葬る。（續諸家人物志、墓所一覽）著す所、名山奇觀、富嶽百圖、老蓮詩集あり。その詩數首を左に錄す。

山風江月壬戌秋、壺觴與客醉扁舟、黃州赤壁高千仭、不及坡公賦此遊（題赤壁圖、五山堂詩話）

秘景一傾爭得慳、龍宮是處隔塵寰、居然下瞰群仙戲、無數浮來鼇背山（登富山矚目、同上）

松醪新熟芋塊肥、笑語家々沸竹扉、村犬慣知秋社散、殷勤尾得醉人歸（社日、同上）

又更に芙蓉の畫に關する左の一詩話を附載せむ。

阿波仁大夫、名胤、號蓮花、風流温籍、善與人交、嘗命木芙蓉作百老圖、栗山先生爲題五古云、寫翁九十七、謂爲百老會、木叟進致辭、少三非無謂、蓮花邀先生、雍也傍一醉、三湊恰成百、何嘗少一位、栗翁聞未半、怫然言面厲、蓮花大國老、栗山天下士、兀那老書師、胃瀆能無畏、木叟掩口笑、先生意何隘、下可陪乞兒、上可陪上帝、風流蘇東坡、出言有餘味、且此圖中人、先生能識未、中位我老彭、立圖自此始、二老周大老、柱下爲之次、三老四眞人、加以商山四、洛陽耆英會、唐宋會有再、其佗諸年德、森然照百代、雍也引二君、參來入其隊、雖然云賤役、陪坐何足恠、雄辯驚四坐、抵掌齊稱快、栗翁被辯倒、呆然漫題字、直把一席閒話、做一篇好詩了、（五山堂詩話）

芙蓉の子小蓮、名は恭、字は遠耻。（五山堂詩話）通稱文藏。曾て皆川淇園に學ぶ。（忌辰錄）五山堂詩話に曰く「以父別號老蓮、故自號小蓮、俊邁不群、自幼耽文墨、癸亥（享和三年）夏甫二十五、病痲疹而亡、惜哉、小蓮殘香集二卷、稍足不朽。」（詩署）芙蓉の義子鳴門、名は積、字は一善、雪下園と號す。（人名辭書、同書又曰く、「別ニ小蓮、眞淑齋ノ號アリ」）通稱源兵衞、後姓名を井川貢と改む。（同書）畫乘要略に曰く「阿波人、善山水人物、不墜家聲。」古畫備考に曰く「モト阿波ノ町家ノ子歟。京師ノ畫家ニ就テ畫ヲ學ビ居ケルヲ、阿波ノ留守居（名失念）上方へ參テ歸ル時、ミヤゲニ連レ來リ、芙蓉ノ內弟子トシテ、茅場町ノ宅ニ居シガ、國居處ノ者ユエ、阿州屋敷ノムキ宜キユエ、養子トナシ、家ヲ繼シタリ」文政二年十二月歿す。（人名辭書）

芙蓉の門人

芙蓉の門人にして稍著れたる者を大岡雲峰とす。名は成寬、字は公栗。通稱次兵衞、江戶の人。山水、花鳥を能くす。四谷大番町に居る。（廣益諸家人名錄に「會日

三ノ日」とあり）四谷南蘋と稱せらる。江戸文人壽命附（嘉永元年平亭銀雞著）に「極上々吉壽千載」として、「南蘋を丸のみにしたいきほひは、雲の上まで其名きこゆる」と評せり。嘉永元年八十四歲にして歿す。門人瀧和亭、鈴木香峰（遊歴して駿河吉原に至り、旅宿扇屋の養子と爲り、明治十八年頃まで世に在り、その地方に重ぜられき）等あり。

金子金陵

金子金陵名は允圭、字は君璋、日南亭と號す。江戸の人なり。文化十四年二月九日歿し、伊皿子長應寺に葬らる。（墓所一覽、名畫傳等）世或は谷文晁の門人と爲せど、恐らくは非ならむ。渡邊華山先生等甞てこれに學べり。その遺作を觀るに、畫風南蘋派に屬すと雖も、その趣致漸く變じて、稍後の文人派に近づきたり。

文人派

以上歷敍する所の諸家は、皆謂ゆる唐畫師にして、固より明清畫風に屬すと雖も、その山水は南宗に非ず。水墨の竹石と雖も、近體の文人畫に非ず。その花鳥はた南田の正脈常州派の純然たる沒骨體に非ざりき。そのこれあるは即ち祇南海を以て嚆矢とす。由來支那の謂はゆる

南宗の山水と沒骨の花鳥と

南宗は、山水の一科に限れりと雖も、我が國に在りてはこれに附するに沒骨の花鳥を以てして、南宗又は文人畫の名に統べたり。これその傳來、隆興の系統及年代を同うするに由る。仍りて今この近古の慣例に從ひて、こゝに兩者を合敍すべし。そもそも足利時代に於ける古南畫を外にして、南宗の山水の始めて我が國に傳はれるは、これを來遊の淸人に求むるは、實に伊孚九に在り。後江稼圃ありて更にその傳を備はらしむ。而して沒骨の花鳥は、主としてこれを張秋谷に歸せざるべからず。水墨の窠石、四君子の類は即ちこれが附隷たり。然れども我が南宗の興起は、必しも伊孚九の來遊に待たず。輸入支那畫の影響と、文學の趨勢とよりして、おのづから當に行はるべき運命を兆せしな

明清繪畫の輸入

りそも元祿前後以降明清繪畫挂幅卷册の輸入盛なりしとは、爾來長崎奉行の下に畫目利の職を置きたるに徵するも明なり。その南宗畫の多きに居りしとは、現存の遺品にても知らる。外刺激の既にかくの如くなるに加ふるに、內文學の趨勢漸く思潮を變化して、以てこれを

文學の趨勢

歡迎せしむ。寶曆、明和以來、文人派の勃興の水到り渠成るが如き、固より偶然に非ざるなり。當時漢學は既に大いに隆興し、復彝倫政道を說くに局せずして、詩文漸く盛なり。錦里先生の門下、白石、南海（並に後に出づ）等の詞宗を輩出し、蘐園の一派頻りに古文辭を唱ふ。既にして皆川淇園（後に出づ）等亦これに應じて摸古の詩風を破り、朝川善庵（寬政三―嘉永二年）等これを折衷し、梁川星巖（寬政元―安政五年）に至りて造詣益〻深く、古今に亘りて衆美を集むと稱せらる。賴山陽（安永九―天保三年）菊池五山（安永八―嘉永二年）篠崎小竹（安永九―嘉永三年）廣瀨淡窓（天明二―安政二年）等より、近くは藤井竹外（文化四―慶應三年）大沼枕山（文政元―明治廿四年）平野五岳（文化八―明治廿六年）等に至るまで、斯文の隆盛實に前古に見ざる所とす。かくの如き詩人、文士はおのづから詩話、畫論の閒文字を弄びて、漸く明清翰墨の趣味を解し、董其昌、文衡山等の風を慕ひて、謂はゆる文人の墨戲題賛を詩酒の間に事とするを喜ぶ。これ等の徒の丹靑に携はるに至るや、皆當時舶載せられたる畫譜畫論等の概ね北宗を貶し南宗を尙べるものに依れり。その初めより南宗の畫に心醉すること、固より宜なり。況や南宗

の旨たる、元文人の餘技を以て標榜とし、題賛の詩章、書篆の雅事、彼等の趣味に投合することゝ、猶乳水の如き質あるをや。されば畫乘要略に曰く『元祿年間、徂徠先生得淸人李漁芥子園畫譜大奇之、進納之官庫、而後十竹齋、佩文齋書畫譜相尋而至、於是人或得見王黃倪吳以下淸人風格、百川南海首倡之、蕪村大雅相繼而興、世人始知有南北宗、至竹石杏堂介石雲泉、及南湖竹洞春琴海僊輩出、南宗一派大行於世、然於其拓開之功、則宜推百川南海矣。』そも祇南海は木門二妙の俊才と稱せられし絕代の大詩人なり。我が近古に於ける文人畫の洪基の、殆どこの人に依りて開かれしも、亦以て斯派の畫の詩に於ける關係を察するに足ると謂ふべし。

祇園南海の傳は、安中城主板倉勝明の撰せるもの最も精し。左にこれを錄す。

先生諱瑜、字伯玉、一名貢、字履昌、初名正卿、一字賦、又一字汝珉、號南海、蓬萊、鐵冠道人、箕踞散人、題其所居曰湘雲、其西方一亭名觀雷、

逸人書史に曰く『俗稱は與一』。書乘要畧に曰く『通稱與市郎』。書款に「阮瑜」と署せるものあり。祇園南海先生畧傳(繪畫叢誌)に曰く『生于延寶三年丙辰。』其系出于源姓、中世以祇園爲氏、紀伊人、仕于紀侯、家本業醫、先生天資雋逸、文藻不凡、兼工書畫、幼隨父在江都、年十四、初謁順菴木下翁、時元祿己巳八月二十二日也、順菴諭以學在精勤、先生退以勤名齋、且作記以爲紳、一日先生與白石、南山、霞沼、篁洲諸子、同會雨芳洲之寓居、共賦邊馬有歸心詩、先生即席賦七言律體一篇、一座皆愕然、白石大奇之曰、此詩雄渾悲壯、足以卜後來可任斯文也、明年會飲某宅、或人曰、鳶飛魚躍活潑々、令坐客爲對、先生時在席末、應聲曰、光風霽日常惺々、衆驚其穎敏、皆自以爲不及、年十七、會春分日、自試其藝、午時至子初、賦得五言律詩一百篇、大爲時所稱、或以爲疑焉、是歲秋分、置酒宴會、午漏初下、進請諸客、各命諸題、對坐談笑、信筆既賦六十餘篇、天昏燭至、揖客而笑曰、今日諸君所命、間有與前作篇題同者、鄙心竊恐語意相似、故苦澁至此、詩腸且枯矣、亟呼酒沃之、夜未半、竟成百篇(七絕)、才思若湧、俊語疊出、通計前後所作凡二百篇、無一句雷同者、衆皆嗟賞、順菴亦驚異以爲神、於是先生之名聞于天下、人稱爲今之賈生矣、一日麗澤書院(順菴書堂之名)之會、探韵得用字、賦擣衣詩、誰家少婦驚秋夢、玉杵夜寒擣練用、夜々鳳城月色高、朝々燕山雪花重、芳洲在座賞嘆曰、用字韵險、今用得妙、但恐本於杜詩彈箏用之句、似有痕跡、此詩既成、衆評以爲、四句中說題僅一句、其餘三句、不與擣衣相關、可惜也、先生謂、其所不顯言擣衣、即是得題意者、先生一生說詩、主影寫、創於此詩云、偶然有詩曰、千里依劍去、十年抱玉歸、若逢知己問、山東一布衣、詩成後不知何所言、而自以爲、慷慨之氣、可以頡頏盛唐、後八年、坐事黜遷山東、僚友葛山生、置酒餞別、酒酣請詩留別、先生臨紙、偶憶此詩、遂書以別、主人異其太早、先生曰舊作耳、主人撫掌曰、是殆爲今日設矣、相顧以爲詩讖、

畧傳に曰く『同(元祿)八年乙亥、擧爲文學、時年二十、同十一年戊寅、坐事謫海上數年、時年二十三。

先生在山東之日、東都相傳、南海物故、室滄浪聞之赴白石、白石驚嘆、數日後知其妄傳、大喜馳書謂、東坡在黃、亦有此事、范蜀公聞而驚云々、其哭白石詩、尺書會報我歸泉、道路之言誰誤傳、犬馬豈思仍保齒、龍蜿不斜已占年、人間苦樂未能謝、地下文章今幾篇、他日青城山下遇、看君早已騎羊仙、蓋言之也、正德辛卯召還、會見朝鮮聘使于江都、增秩復儒職、先生與松浦禎卿(霞沼)同齡、禎卿有詩才、衆稱木門二妙、後來先生聲價益重、與白石蛻巖(梁田)相伯仲、遂呼曰三大家、享保丙申、賀白石六十詩曰、白石先生天上仙、身騎麒麟下九天、三十六帝留不得、天風吹衣颯翩々、夕憩扶桑倚東壁、夜煉白石餐紫烟、往々咄出天上語、人間聽者耳茫然、硯池傾瀉天河水、織女雲錦鋪作紙、紙上須臾萬言成、華嶽突兀海濤起、鬼愁神嚬造化拙、戲奪霞胎鑿雲髓、清如秋娥泣湘竹、奇如韓信破鉅鹿、我

昔驂彼双白螭、攀登仰掣紫雲霓、夜扣帝閽閒無人、公一相見手扶持、文章於公誠餘事、願爲蒼生肉瘡痍、金門朝鳴珠勒馬、封事夜奏治安策、韓之使者執玉帛、血面爭禮頑如石、公歷西階摳衣外、軒々如霞擧屋額、腰帶紫陽太守印、眼如紫霓髯如戟、按劍叱咤殿柱震、使者膽竦喪其魂、擊劍歌成血吹霧、

原註曰、「辛卯歲韓使朝饗之日、客謂公曰、嘗聞、貴國多長劍之技者、今可得幸一觀、公曰、觀之不可遽辨、我今爲客說其涯畧、席上作擊劍歌一篇以示、篇中有血吹霧字、

機鋒觸處皆辟易、禮成樂奏賓主歡、王家寶曲與日赫、目弄蘭生似兒孫、魯連毛遂皆僕役、千古功業與文章、何人如公兩相將、但恐心事爲國苦、秋來鏡裏幾莖霜、萬戶之封天空客、爲霜爲雨久瞻望、一別東南參商隔、楚山四見靑楓黃、關河有雁音信少、江海無路夢魂長、何時綈袍一相報、桑下之粲不可忘、此篇達于東都、白石書答曰、今年生日開宴、雨伯陽、室師禮諸公咸集、贈篇成堆、木蘭潭序尤典寳、土元成五十韻出於衆作、師禮至覽此篇、拆掌歎曰、南海此篇、非特今日之歷卷、至文章於公誠餘事、願爲蒼生肉瘡痍、朋友切瑳之意、藹然可掬、恐太白未可至也、予今日於肉之一字、何如擔得云々、當此時物茂卿之徒出、而海內宗明詩、摸擬飣餖、靡然成風、先生晚年、心深厭之、嘗戲作文、名曰詩盜判、其畧云、有客遊冥府、拿一人至、靑袗烏帽、似一秀才、王問何因、亟對曰、某縣學生某、平生好剽竊他人詩句、修文郞卜商等發其事、送臺法究、王怒曰、窮措大眞鈍賊、何處鼎鑊堪烹汝、乃操觚作判云、全章負去、夜半有刀、斷句剽竊、日攘一雞、潛踏曹劉之垣、擅鑿李杜之壘、驢上吟客、即是梁上君子、社中騷人、不異月中仙娥、綠楊遂成綠林、紅桃變作紅巾、其言雖涉諧謔、其誚時病甚切、年七十五而沒、時寳曆元年也、

畧傳に曰く「寳替元年辛未九月八日沒、時七十有六、葬吹上日蓮宗廣德山妙法寺、法號秋岳遊林南海」、

著有南海文集、詩學逢原、詩訣、明詩俚評、子尙濂字師援亦善詩、頗有父之風云、

論曰、先生之初作、詞采富麗、婉然如芙蓉出水、晚年漸刷鉛華、而神氣融和、比之初作、若出二手、夫詩者志之所之也、在心爲志、發言爲詩、自其幼時、以勤書紳、精學之功、與年偕進、所謂賈生之名不虛也、觀其所贈白石、則先生之志可知矣、而賈生之方獨著見於詩、不亦惜乎、

南海は實に木門の二妙の一にして、斯文の鬼才と賞せられし大詩人なり。繪畫は素よりその餘技に過ぎず。然りと雖も、池大雅、柳里恭等を啓發して、明淸畫派の勃興を致さしめし績は、繪畫史上に特筆せざるべからざるなり。されば畫乘要略に曰く「又善丹靑、柳里恭池大雅、並就問畫法、舊儲淸蕭尺木畫譜、倣其格也、喜作墨竹」。先哲叢談に曰く。「南海又善丹靑、舊儲宋沈無名畫譜、是時池貸成志畫、南海謂曰、子學畫、當學士大夫畫、乃貽無名畫譜、貸成喜摸之、愛慕之餘、自改其名稱無名、貸成歿之後、此譜轉落木世肅蒹葭堂云」。逸人畫史に曰く。「其呫嗶の暇繪事を好み、著色の花卉、翎毛、山水、人物を善くし、最山水に長じ、又墨竹に長ぜり。其畫法唐宋元明の諸大家により、其山水の意匠唐六如に髣髴たり。必題辭畫題あるもの多し」。古畫備考寬政の人物志を引いて曰く。「旁ラ書ヲ工ミニシ、喜デ竹ヲ寫ス。描ケバ必ズ題ス」。遺著湘雲瓚語（古畫備考所載）中畫談數則あり。左にこれを抄錄す。

程敏政題陸廉伯庶子所藏墨梅詩曰、宋人寫梅上染地、染出疎花得花意、寒技點綴縱復橫、宛在江村立烟際、元人寫梅鐵作圈、千玉萬玉相聯擧、天機淺深各有態、三昧定屬何人傳云々、按墨梅有二種、一用墨暈、一用墨圈、墨暈花光道人創製、墨圈楊補之創之、今所謂染地染出花者、亦是一種譜、所謂淡墨籠花、花自嬌者是也、予雖未見古人之跡、試爲之、墨暈籠花、染出花形、嬋妍之態、亦勝於花光、嬌娟之情、已超於逃禪、惟骨力少減耳、因之曰染地法、以併墨暈墨圈、爲墨梅

三法、

按ずるに、墨暈と染地とは蓋し同法なり。南海これを二とす。怪むべし。

(上畧)可見古人詩、不拘區々文字之末、畫亦然、吳道子畫、仲由截木劍、閻令公畫、昭君著幃帽、王維雪中芭蕉、趣已到、不拘形迹、然併是名人興到筆隨、未必指以爲病、若夫後世未學、鹵莽滅裂、便信筆不知忌、是亦東施之效顰、不可不誡也、

畫竹竿法、有自下起筆、次第向上畫去者、曰竹之生、原從下發、故筆亦依其勢、此說實隨造化之理、然竹竿左撇一竿、須從下畫去、但夫直竿及右撇者、若從下畫之、甚覺無勢、不如從上一節畫下、更得骨力、管姬之法既如此、譬之人物、其行立上首下足、造物之常理也、然其生產則首向下、足在上、今我筆端造化、生出幾竿龍孫、豈先從足始倒產哉、

世有蘭亭序圖、其製甚俗、且板刻無趣、余將暇日新製一圖、而未果、姑記其槩、以備後日、舊圖卷首、畫一大水亭、規摸宏麗、一人倚案弄筆、蓋右軍也、三童子侍其左右、按右軍背厭市中、居於山陰、想其堂宇、必是粗率、縱令內史第宅、舊壯麗、既非文雅之畫景、況復可以汚東床坦腹之雅量哉、今換以一草亭淸素者、臨水、四周茂林脩竹圍之、舊圖畫二洞於上頭、洞中石案各二個、置酒盞碟瓶、傍置二大甕、數童子荷葉上置盞盛酒、以浮流水、此製可也、但置盞悉皆用荷葉、甚板、今換之以廣樣木樣數種、梧蕉梯葵等、舊圖會者四十二人、各坐一席、鱗次兩涯、亦具筆硯、各一楮一卷、或弄筆曳楮、呻吟默坐、有苦吟之態、獨潁川庾蘊、童子扶起、有酩酊之趣、參軍揚幞起席、隔水似欲語者、按永和勝會、皆一時文雅之士、主人亦稱淸眞、豈有招客以詩苦之者哉、今觀其所成詩、亦非奇崛難澁大篇鉅作之類、實平々小詩、一時寄興之作耳、坐客何必曳白舐墨、甘取辱於三觥乎、想當時天和地勝、主客觀娛、玩景遣情、豈必督責酒令詩興哉、但其一觴一詠、信客所欲爲耳、興已熟、歡呼交起、酒客談士、各自恣其所好、終不成一詩、主人戲議罰觥、亦一時雅事耳、若夫圖畫、則嗚呼苦楚、有何暢和幽情乎、有何娛視聽乎、今所改換作、四十有二人、或三五逍遙緩步、凭肩携手、以弄花看竹、或六七歡呼譃談、揮麈搖扇、展足抱膝、機鋒森々、笑語之狀、或臨水引觴、或凭樹觀望、或籍芳草而坐、臨淸流而釣、有勸酒者、有困而辭者、有傍觀者、有酩酊扶起者、有飲畢而放盞者、有詩成而書者、有朗詠遣興、詩與酒態、不一而足、若此則庶乎不辱千古之雅會耳、舊圖長流一帶、悉見首尾、雖中間有四五竿竹、卷尾二大柳低于橋上、未見高致、舊圖橋有欄、亦俗、今以流水、縈紆曲折、有時遶竹間、有時流樹裏、半露半隱、岸有高低、流有遲速、或作恠石、置於中流、或作平灘、而舞淪漪、其觴亦有逐流而下者、有觸石而止者、有過急流而沒者、有前後相逐而相觸、廻旋不能流者、其竹樹或密或疎、或小或大、橋亦用平板、不施欄楯、水流還入柳樹間、不見其所止、舊圖卷首畫疊泉、以入溪流、有致、十一人詩兩篇成、十五人詩一篇成、十六人詩不成、各飲酒三觥、郡功曹魏滂、此像可畫望嶽狀、王彬之、此像可畫釣魚狀、行參軍王豐之、此像可畫濯足狀、會者姓名及詩別記、

見るべし南海が能く明淸翰墨の趣味を解し、始めてこれを我が國に皷吹せしことを。

第三百十六　祇南海筆秋景山水圖

祇南海の子祇園尙濂字は師援、餐霞、鐵船、百懶の號あり。通稱孫三郎。父に嗣いで紀州侯に仕ふ。亦墨梅竹を善くせり。寛政三年五月歿す。歲七十九。逸人畫史、古畫備考、忌辰錄

南海のこの圖を觀るに、筆意跌宕、用墨蒼潤、始めて我が國に先蹤なき文人畫を試みたるに似ず。詩人の餘技としては頗る巧熟を認む。布局の妙に至りては、池大雅却りてこれに及ばず。詩道に於ける天才は、情景の觀象に於いて、有聲無聲の別なきものか。

彭百川

彭城百川名は眞淵、蓬洲、又八仙堂と號す。畫乘要略通稱源左衛門。忌辰錄尾張の人逸人畫史には「伊勢の人」、古畫備考には「勢州人、或云加州人」とあり、坦記にも伊勢人とす、今姑く畫乘要略に從ふにして京都に住せり。畫乘要略に曰く「力摸元明古蹟、本邦宗元人畫格者、以百川爲先鞭、卓堂先生曰、當百川時、海內之學者、惟知宗探幽、而百川獨摸元明古蹟、粗知其格、如其技、雖未到佳境、而大雅蕪村諸輩、相繼而競興者、百川力也。」逸人畫史に曰く「畫をもて業とす。著色の花卉、翎毛、山水、人物あり。傍俳諧に長じ、畫贊あり。性磊落なり。」古畫備考に人物志を引いて曰く「一家ノ畫法ヲ以テ鳴ル。且書畫ノ鑒定ヲナスニ、其論甚精覈ナリ。及ビ俳諧ノゴトキ瑣事トイヘドモ、皆其妙ヲ盡セリ。著述元明畫人考アリ」。元明畫人考は後高芙蓉、蒹葭堂、石希聰これを增訂して二冊とし、元明清書畫人名錄と題して安永六年印行せり寶曆三年八月廿五日歿す。歲五十六。忌辰錄

第三百十七　彭百川筆松下觀月圖

彭百川の畫傳世甚多からず。本圖の如きはその尤品の一なり。渴筆渲染の雅味、後の竹田の爲に先蹤を開けるかの感なくばあらず。

南宗の勃興

祇南海、彭百川の二家は、實に南宗畫先鞭の第一著手なりと雖も、南海の畫は全く詩人の餘技に過ぎず。百川はその家數尙小なり。未だ以て天下に呼號するに足らざりき。その大いに興れるは大雅、蕪村の二家に歸せざるべからず。されば雲烟略傳に曰く「百川南海倡首之功、雖可稱、猶陳勝之於漢、二牧之於蜀。」左に先二家を敍すべし。

池大雅

池野大雅初めの名は勤、字は公敏、後名を無名、畸人傳曰「阿利奈と唱ふ」字を貸成と改む。通稱初め嘉右衛門、後又次郞又秋平と云ふ。大雅又大雅堂又九霞山樵略して霞樵とも云ひきと號す。別に堯濟、葭庵、竹居、玉海、三岳、又三岳道者待賈堂芥煥の名を繼ぐと云ふ（蒹葭堂雜錄）等の號あり。野史、雲烟略傳、逸人畫史、畸人傳、畫乘要略等享保八年癸卯五月八日生る。蒹葭堂雜錄その父母を詳にせず。蓋し貴人の胤ならむと云ふ。西陣の人菱屋嘉左衛門野史、蒹葭堂雜錄等皆嘉右衛門に作る、翁草及大雅堂定亮の說に依れば嘉左衛門なりと云ふ者、一子を菩薩池地藏尊に祈り、同年七月これを池邊に拾ひ、仍りて子養す。定亮曰「嘉左衛門無子、祈菩薩池地藏堂求子、期七日、七日朝、池邊有棄兒、拾而視之、白綸子之襁褓、非民間之衣裳、嘉左衛門則抱歸、而成己之子、時秋初、故姓爲池野、稱秋平、其實不知誰子也」、又曰「嘉左衛門の拾ふたのは、享保八年の癸卯七月ですが、五月八日生といふのは、棄兒の守袋か何かに書てあつたのです」（江湖快心錄）幼にして聰敏、神童と稱せらる。三歲にして字を知り、五歲にして書を善くす。黃檗山に至り、千呆禪師に謁し、牓窠字を楷書す。その字頗る怪異なり。千呆深くこれを奇とし、これ麒麟兒なり、後當に名を海內に揚ぐべしと曰ひ、贈るに偈を以てす。寺中の衆僧亦詩を賦してこれに贈る。野史及安積艮齋池無名傳六歲享保十三年より十二歲同十九年に至るまで、三條寺町養拙門人清光院畸人傳曰「法林寺中淸光院」、雲烟略傳曰「淸光院淵淸」に就いて書を習ひ、又古門前の茅庵に就いて讀書を學ぶ。又八歲享保十五年の時又書を薩摩の人山名主計潛龍亦養拙流に習ふ。十二歲の頃、更に讀書を內藤靜舟綾小路藪屋町通に學ぶこと一年。十三歲にして淸光院一井三條栴檀王院寺內、養拙門人、三上次郞右衛門の門人に從いて書を習ふ。この時師名の一字を取りて、字を子井と云ふ。「池野子井」の印文あり、蒹葭堂雜錄後古法帖に據りて晉唐に泝り、最も王獻之を慕ひ、終にみづから結體飄逸なる一家の書風を成せり。畫は初め土佐光芳に學びしが、野史、雲烟略傳十五歲元文二年の時より、友人望月照溪野史等玉蟾とするは疑はし、今蒹葭堂雜錄に據るの慫慂に從ひ、八種畫譜を藍本として、南宗の支那畫を學び、野史、畸人傳等、玉蟾と相謂ひて、玉蟾は唐伯虎、大雅は梅道人を學び、又倪雲林に倣ふと云へり、今亦蒹葭堂雜錄に據る又

書を爲溪に習ふ。（蒹葭堂雜錄）大雅の畫の筆ありて墨なきに近く、而も用墨に濃淡の變化乏しきは、印本の畫譜先入主と爲りしが爲ならむ。この年一店舗を二條樋之口（定亮曰、「今の島居本樓の邊」）に開きて書畫扇を賣るを業とす。時に姓名を池耕、又池亮、字を子職、號を爲龍と云ひ、袖龜堂と稱し、家庭は僅に母子二人なりき、（蒹葭堂雜錄）既にして淸人伊孚九の風に私淑し、（畫乘要略、雲烟略傳、逸人畫史）十六歲の時（元文三年）始めて柳里恭を訪ひて（蒹葭堂雜錄、柳里恭畧年譜）著色の法を學び、又その秘蹟を摸す。（野史、畫乘要略、雲烟畧傳）十九歲（寬保元年）印人高芙蓉と交を結ぶ。二十歲の時、居を聖護院に移し、姓名を池勤、字を公敏と云ひ、九霞又大雅堂と號し、菱屋嘉右衛門と稱す。（蒹葭堂雜錄）玉瀾を娶りしはこの頃ならむ。（定亮談）廿六歲（寬延元年）蒹葭堂始めて來訪す。翌年初めて富岳に登り、（富岡鐵齋曰、「六月始めて獨行登岳す、（中畧）其絕頂の眞景五尺四方の紙に細密に寫し、里程又詳なり、此圖頂上にて寫し、淺間神社に訂正せり、後に嚕々堂傳藏し、今は尾州某藏と爲れり」（南宗畫志））又東都及松島等に遊ぶ。又翌年（廿八歲、寬延三年）名を無名と改む。（蒹葭堂雜錄）この年冬始めて祇南海を訪ふ。（蒹葭堂雜錄これを寶曆二年と爲せれど、今南海詩集に據る）南海詩を贈り、且引を附して曰く。

余曾聞九霞之名、想見其人、今年自洛來、訪予於紀水北渚、一接之、既識雲外鶴標、非俗塵中之人、既而覽其所畫指墨者、倍歎其奇畫、蓋不用筆刷、指端染墨、淋漓縱橫、隨意掃去、花草翎毛、人物竹樹、一揮即成、彷彿眞趣、大有雅致、抑亦一世之絕技也、昔者狂僧筆塚中山之族爲之泣矣、今也散人以指代毫兎、其必抃舞矣、散人好游、芒鞋蓑笠、跡已遍名山、此去將問三山、予想其胷中烟霞、與江山相謀者、其奇豈可計哉、遂賦一絕、餞其行云、筆頭未若指頭禪、妙悟靈通黃鶴仙、若使昔時司馬在、花庵屛障借雲烟、庚午季冬阮瑜書于湘雲居（南海詩集）

この年越中立山に登りて加賀に遊び、二十九歲（寶曆元年）白山に登り、翌年熊野に詣で、卅一歲（寶曆三年）畫法を祇南海に問ふ。（蒹葭堂雜錄）畫乘要略に曰く。

相傳、貸成病其畫不進、質之祇南海、南海舊儲淸蕭尺木畫譜、因謂貸成曰、子學畫、當學文人學士畫、乃取畫譜與貸成、貸成大喜、出入不釋手、遂得其風趣、於是其技大進、（畫譜後落蒹葭堂手云、）書亦彷彿蕭氏、

梅泉又曰、先哲叢談云、祇南海舊儲宋沈無名畫譜、及見大雅貽與之、大雅大喜、出入與俱、遂得其風趣、余按佩文齋書畫譜、宋無沈無名者、因大訝、偶問之小田海僊、海僊語余曰、甞於蒹葭堂、親觀大雅所學蕭尺木太平三山圖、有蕭氏自跋、大雅書體亦頗相似、所謂南海所貽者、豈謂是乎、余得此說釋然、人謂海僊精于畫學、信然、

著名なる祇園社頭の扁額蘭亭圖は、卅二歲（寶曆四年）の夏、祇園新坊に於て畫ける所なり。卅八歲（寶曆十年）六月廿七日、再たび白山立山、戶隱山、淺間山等に登り、又荒舟山及富岳八級に登る。（蒹葭堂雜錄）この行高芙蓉及韓大年と共なりき。（この時の道中記「三岳紀行」あり、その一部分書畫談に出づ）富士に登れるは七月なり。翌年六月十八日又復富岳に登り、秋葉鳳來寺、伊吹山等に至り、七月六日洛に歸る。（蒹葭堂雜錄）安永五年（丙午）四月十三日、病を以て葛原草堂に歿す。初めより起たざることを知りて藥を用ゐず。（畸人傳）享年五十四。舟岡淨光寺に葬る。（蒹葭堂雜錄門人の四方に配りし切紙あり）僧六如撰する所の碑文あり。左にこれを揭ぐ。

故東山畫隱大雅池君墓

池貸成沒矣、既表墓焉、而未有銘也、以爲請余、余觀貸成、爲人蕭散、不以寵辱驚心、善與物和、而不苟合紆志、外踈放而內實修、與人交、謙遜而不阿、簡於禮法、當往不往、當答不答、而顧諸義、未嘗有所失、惠而弗望、廉而弗劌、其於取予得失、恬淡如也、平生行事、多出於人之所不意、於是有畸人之目焉、貸成生平安、幼而穎異、學文學書、無不能、而獨長於繪事、圖山水最妙、好遊名岳、尤趫健、高峻幽奧、無不戾極、即取以爲毫端趣、數登富岳、而每異其路、因作富士圖一百、各變狀態、皆

其所經覽古今書工所未及也、安永四年丙申四月十三日、病卒于葛原草堂、距生享保癸卯五月四日、得年五十有四、葬于舟岡之南淨光寺先塋之側、貸成名無名、始名勤、遠近皆以大雅堂稱之、妻玉瀾、姓德山、閑靖不飾、能配夫之行、亦能書有名、無子家絕、悲夫、世皆知大雅之書而不知其行、知其行而不知其心、故爲叙其略、如其世系則存焉、不待論也、銘曰、若人胡不壽、若人胡無嗣、庶安子哉、淨光之地、

安永六年丁酉六月　　淡海竺常撰、韓天壽書

又六如上人が大雅の畫像に題したる詩及小引あり。左の如し。

丈人以書畫著名海內、余嚮以室邇屢相往來、畧知其人、蓋葆眞耦俗、隱于小技者也、頃者有人齎其遺像求題一辭、余欽高風、不揣蕪陋、輒爲賦長句、字々實錄、不敢文飾、丈人有知、應摶掌於無何有之鄕矣、鶉衣蓬髮意怡然、言語近禪形似仙、避世仍懷濟世志、賣山不蓄買山錢、襪材滿屋纔容膝、川字成腔時弄絃、至竟深心誰可會、空令姓字藝中傳、

安積艮齋の池無名傳に曰く。

大雅襟度蕭散、土木形骸、毀譽得喪、都付度外、有嵇叔夜院仲容之風矣、(中畧)名利之習、薰灼宇宙、雖儒生猶鮮能脫其累、而大雅以一書師、風流超軼、不淄於世之塵滓、豈其中有進於技者歟、

長野豐山の三名士傳に曰く。

性恬澹寡欲、外類疎放、內謹敕、頴異絕倫、

以てその人と爲りを察すべし。その平生陋巷に處して、翰墨の樂みに餘念なかりしありさまは、これに親炙せし兼葭堂の追憶記に徵するに足る。左にこれを揭ぐ。

追憶すれば最早五十年近くの昔に相成り、大雅堂先生も地下に歿せられたるが、おのれの始めて先生に見えたるは、十三歲の春の事にて、權大夫丈人と、その葛原の草堂に於てしたり。何に就ても、おのれいまだ幼かりし時のことなれば、よく其時の狀景を知ることは出來ざりしかど、今に憶出せば、明かに眼の前に浮び出でゝ見ゆるは、其草堂のいかにも貧しかりし事と、大雅堂先生の汚き風をして居られたる事なり。草堂はかの眞葛原の南の一端にありて、入口六疊、書齋四疊半の只纔か二室のみの小さき構にて、疊は足の引かゝる程、ところ〴〵破れ、障子の窓は雨風に破れたるまゝ、つくろひもせねば、その穢醜しき事譬ふるに言葉もなし。おのれは里恭先生より、大雅堂の書のすぐれたる事を聞き、且他よりも折々其人の品行の奇なることを聞きたれば、さして怪しとも思はざりしかど、もし知らぬ人など、俄かにこゝに伴はれたらんには、いかなる物穢き人かと驚かるゝなるべし。大雅堂先生はおのれ等の訪ひたるをいたく喜びて、おのれの故鄕のことなど、何かと尋ねられたるが、顏はどちらかといへば大きく、額に小さき黑子ありて、眼より耳にかけて、言ふに言はれぬ大樣なる處あり。聲は高き方にはあらねど、何所となく亮々しき調子ありて、興に乘つて物語る時には自づと高き聲を出せり。其頃の年は大凡二十五六歲ばかりにてやありつらむ。活氣話の上にあらはれて、よく語り、よく罵り、放談四隣を驚かせり。書齋には、白紙唐紙の類を始めとして、礬沙引きたる美濃紙、絹地の一片など、膝を容るゝ所なきまで散り亂れ、一方にはかきかけたる山水の書幅

あるかと思へば、一方には花鳥の彩色を施さんとしたるものあり。その外書に關したる帖、篆刻に關したる書など、順序次第もなく、あたりに散亂れ、おのれ等の座るべき所も無き程の有様なりし。先生は近作なりとて、横物の山水圖一幅を示されたるが、里恭丈人はこれを見て、非常に感心せられ、近頃の出來とこそ覺ゆれと賞めたゝへ給ひき。その横物といへるは、幼き時なれば、よくは覺え居らねど、右の方に峯巒を作り、左の方に遠水を見せ、楊柳を其間に點綴したるやうに覺えたり。其外頼まれたるものなりとて、花鳥の半彩色を施したるものをも示されたり。里恭先生は、其彩色の上に少しく意に落ちぬ所ありなど、いろ／＼と申されたり。されど大雅堂はそれに少しく服せぬ様なる有様なりし。玉蘭女史とは二年程前に婚したる由なるが、折しも戸外にいでゝ不在なりしものゝ、やがて歸り來て、いと丁寧におのれ等に挨拶したり。年の頃二十二三歳にて、顔は丸顔のさして美しといふ程にも有らねど、人並勝れたる面色、どことなく氣高き處ありて、さすがは百合の娘と思はるゝばかりなりし。後年玉蘭女史と其名天下に高く聞え、大雅堂と共に人に稱せらるゝ様になりたるは、珍らしき事と謂ふべし。それにつけても、權大人の眼識の勝れたるは驚くべき事にて、此陋巷に住ひたる若き畫工夫婦を、今に天下の畫壇を左右するものなりと見られて、天下に名高き身を以て、下りて友の交を爲したるは、格別のことなり。それより後、おのれも大雅堂に交ること深く、先生の浪華に遊ばるゝ時は、必ずおのれの家に宿し、おのれの京都に上る時は、必ず先生の家を訪ふを常とする樣になりしが、先生が一度富士の畫を描き、一度南海先生に謁して、畫法を授かりてより、先生の名聲隆々として天下に揚り、天下復先生の畫と先生の名とを知らざるものはなきに至りぬ。されど先生は猶利慾の途に迷はずして、着々として畫法に熱中し、遂に其陋巷の一室に逝去せられしは、唐土の顔回にも増して、ゆかしきことゝ謂つべし。

大雅は子なくして家絶ゆ。されど一女あり。大阪の書賈某に嫁す。その嫁衣裳は紙子なりきと云ふ。（雲烟略傳曰、「其衣今尚存某氏」云） 大雅著す所春巒折甲あり。

大雅堂畫譜は、歿後門人月峰等の輯刊する所にして、皆川淇園の跋文あり。併せて大雅堂の縁起を知るに足るが故に左にこれを掲ぐ。

書摹刻池無名寄與雲煙畫卷後

池無名畫樹照石貌山皴及點綴人物宮室舟車各式總若干、其首自題寄與雲煙四字、一卷、蓋本應人需作之者、無名門人僧辰亮字月峰、手摸上木其眞蹟、余亦觀之、其筆氣遒逸、風趣清拔、乃亦其平素不多睹之傑作也、始無名已老無子、而四方乞其書畫者甚多、然有時獨自鬻與、爲其所欲爲者、無慮數百、而以遺予之其妻玉蘭、其意蓋欲己歿後鬻之、以給其緩急之需也、及玉蘭歿、其所蓄書畫尚盈溢篋笥、門人乃相共謀鬻之、用其所獲之金、營大雅堂于雙林寺側、庶以得存其師蹤於後世焉、及堂就、令無名舊門人青木生居之、無幾青木歿、而月峰因遷自雙林長喜庵、而來居大雅堂、今摹刻此卷者、乃亦欲傳其版以爲堂之常藏也、月峰以予嘗與無名善來請、因爲題、享和三年癸亥望後一日、皆川愿書

大雅の名は明和五年（三月）の平安人物志に出で、「池無名、知恩院袋町、池野秋平」同年（十一月版）の三都學者評林には、書家の部に、「卷軸上上吉、大雅堂」「ワルロ」畫家じやないか、「頭取」いへ／＼書家でござります、どうしたことやら、畫名が高ふござつて、人がよく受取ます、御仕合々々」とあり。近世名家書畫談に曰く。

大雅死後、門人等老師の篋中より多くの遺墨を搜り出せしに、京攝或は隣國の人これを傳へきゝて、遽に乞求むるもの、各報るに多金を以てし、其金集りて七百兩にみてり。時に門人相謂て云。此金をもて老師の不朽を謀るべしとて、栗山先生へ其意を述べ、碑文を乞ふ。先生云。それはいと安き事な

り。老書師を一大不朽にすること、我に一策あり。これに從はんやといふ。さらばいかにと問へば、先生云。老書師の生涯を吾筆もて殘さんことは望むところなり。されども吾筆もて老書師を汙さんより、其七百金をもて、一座の大石を求め、佛像にもあらぬ人の樣なるもの削成し、其胷間にたいがどうと深く刻り、この外は行狀生卒をもしるさず。これを大津粟田口の道より望む山の半に安シ置ば、往來の旅人此處に到りて、はや大雅堂佛まで來るぞやなどいはんに、後世に至りては、益大雅堂佛の稱呼傳るべし。これは老書師も無何有の鄕に於て一笑して、此擧を領すべしといふ。時に門人等この不凡の盛事を解せず。せちに碑文を乞ふ。先生云。瑣々たる文字にて一片石に識すこと、其費は數十金に過ず。さらば其殘金を京師貧民に分ち贈らば、これ又老書師の意にも愜ひ、碑文に載て美事なるべしといはれしに、それも又門人不肯して、遂に先生筆とられず。門人等蕉中禪師に乞ひ、碑文は成しと云。

北窓瑣談後篇に曰く。

大雅堂の書蘭亭、歸去來、西園雅集、皆小楷賛辭あり。此三幅を今年七十五金にて求給ひし諸侯ありしと。近世の書畫にて、かゝる高料は聞も及ばず。大雅堂の書畫の秀し故にや。又當今都鄙とも書畫流行故にや。彼書幅もとより紙表具なりしとぞ。

以てその盛名を考ふるに足る。

大雅の逸話甚多し。左に略これを輯錄す。

漢畫の山水を畫はじめたるころ、扇面に圖して、自携へ、近江、美濃、尾張の國々に售んとす。人多怪で買者なし。於是むなしく京へ歸らんとて、瀨田の橋をわたる時、其扇を出し、こと〴〵く湖水に投じて曰。是をもて龍王を祭ると。後いくほどなく、書畫の名海內に擅なり。（川崎千虎著茶六隨筆には、枇杷島の橋にてなりと爲せり）

或時難波に出たつに、筆携ふることを忘る。妻玉瀾見つけて、もちてはしる。建仁寺の前にて追つきて授るに、道人おしいたゞき、いづこの人ぞ、よく拾ひ給りしとて別去る。妻もまた言なくて歸れり。

近江高島侯のもとにて障子を畫く。京に歸りて後、其報を賜ふに、使云、禮服をつけて謝を申さるべしと。道人諾して、やがて高島まで袴を着ながら行たり。

江戶に下たる時、某侯の邸にしる人有てやどりす。六月十八日になりて、けふは古鄕祇園の社の御輿洗の神事也、いでそれを學んとて、とみに紙もて偶人を作り、火ともし、はやしものして、邸の內をめぐらんとするとき、其侯の世子みたまはん、先もて參れとの使有けれど、囃物に紛らはし、聞ぬさまにて、かしこゝに行めぐりし時、などもて參らぬとむづかりて、使たび〳〵に及びしに、今參らんといふ時、其偶人を燒うしなひ、こはあやまちし侍り、されどこれは祇園の御神に奉る志なれば、又人に見せ奉らんことを、神のほつし給はぬなるべしといひしかば、にくみて速に邸をいだされたり。げにさもこそとてわらひつ。

ある豪富者畫を托せしに、月日を經て果さず。使至るごとに近日とのみいふ。一日童僕例のごとく來るに、尙畫ざれば、門を出るより、獨罵りて、這死書師、人を勞することいくたびぞ、自負歟、惰歟、人をあなどるかといへるを聞て、走て引とゞめ、君がいふ所甚理なり、吾過〳〵とて、直に筆を染て與へた

り。

一書林の僕、主人の金を用て遊興し、放逐にあひ、他國へ行んとする時、道人のもとへ來りて別を告ぐ。道人甚憐み、我主人に佗んといひて、持る所の書畫調度を賣て、その金をつくのひ、歸參せしめたり。

石刻の十三經を得んとて、年比心にかけしかば、たくはふる所の錢百貫に及べりしに、書賈なほ售ず。嘆息して其錢を祇園の社に奉納す。時に御社修造のことあればなり。其時のさま、わらむしろの大なる袋に巴を書き、神輿の紋なり、拾貫文づゝ拾にして、門人とともに禮服を著し、青竹の捧もてさし荷へり。社司其名を揭んとせしを、固く辭す。されど誰となくてはあるべからずとて、玉瀾としるせりき。

大雅江戸より奥州にあそびしかへるさ、いづこにてか、禪刹に入て午飯を乞に、住僧は他に行てあらざりしかども、こゝろよくもてなして、飯茶を進めたり。されば大雅卒に一偈をさゝめて去ぬ。住僧歸りて、その偈を看て、甚賞し、これが和を作り、跡を追て京のかたに趣しに、道路の間あはず。つひに京まで來りて、こゝかしこ尋れども、彼偈に池無名と書るまゝにとひたれば、其名をしる人なし。もとめわびて空しく歸らんとせしに、せめて東山の寺社拜みたまへと、人の勸るにつきて、まづ祇園の社に詣たるに、繪馬殿に揭し蘭亭ノ圖に、池無名と記したるを見つけて、やがて坊に入てとひて、はじめて其所をしり、到りてたいめんに及びしが、今は本意とげたり、京に用なしとて、其日旅立けりとかや。(以上近世畸人傳)

喪母將葬、親負棺而行、門人止之、不可曰、母老病、不肯見人、膳飲非予所供、則不肯飲食、夫送死大事也、豈可委之人乎

門戸無施鎖鑰、書畫敗紙狼藉室中、居恒敷青氈、僅坐其間、一夜盜人奪物去、大雅偶睡覺、呼盜返曰、當攫去者、猶有數品、唯青氈敗紙、我家所珍者、不可取去、其餘則從君所欲而已

遊大和國、夜過一寺、求寄止、僧不許、因入竹林、趺坐待旦、終夜有簌々而響者、曉起視之、小蛇數條糾結於簑笠上(假名世說にも出づ)

大雅工手畫、嘗爲人作之、伊藤介亭在坐、賞嗟久之曰、窮鄉僻邑乏筆之居處、亦復可寶也、大雅聞之大慙、終身不爲此技(以上近世叢語及同續篇)

月明なる夜、近江の守山を過るとて、宇野姓が家を深更に敲く。主人是を聞て、時四更に及で、烈しく門を敲くは唯ならずと、自ら起て立出見れば、大雅なり。いかにや深更の夜行を問。大雅對て、近江のそこ〳〵へまかりて、月夜の面白さにうかれて夜行せり、餘り清明なれば、我獨りながめんも無下なり、足下を訪ひて、夜と倶に月を賞せんが爲なりとて、主客内に入て酒を酌み、興じ明せしと。(翁草)

或る時、富士山の圖を十二幅畫て、晴、雨、霧、雲、或は雪、月なんど、それ〴〵の風情を顯しぬ。世こぞりて其筆のめでたき事を譽のゝしり、是を乞へども、ふたゝびゑがゝず。此人の生れつき慾少くて、人の許よりおほくの寶をもて畫をもとむるにも、己が心にかなはぬ時は筆をとらず。又まづしき人の爲には、常に書畫をかきあたへて、其人のたすけとなしぬ。明和の比、山城國宇治郡黃檗山萬福寺といふ寺に、もろこしより渡り來たる大鵬和尙といふ人、大雅を呼て、方丈の障子に、唐土西湖の風景を畫しむ。筆をとりてその荒增をかたどる時、和尙傍に守り居けるが、上の方に峯ひとつ畫き出せるを見て、打驚き、あれ怪し、あれは飛來峰と見ゆれ、我彼土に生れて、折ふしは其わたりに遊びしだに、かほどに所たがへず寫し得べしとは覺えず、まして此國の人のいかにしてかくはゑがきしやと、深くめでける。(落栗物語)

有兩生、從貨成游、甲嘗借五金于乙、過期、乙徵索之、甲曰、業已賠之、爭執不止、質之貨成、貨成叱而逐之、自鬻所藏書數部、得十金、往兩生家、各與五金、兩生慚怍

苦辭、貸成佛然拂衣去、（村瀨栲亭池貸成山水畫譜題辭）

西土一士人徇役于江都、途過京師、訪貸成、貸成迓之、一日復一日、遂至富士山下而歸、其行也始不謀之婦、婦亦恬然不以爲意、（同上）

池翁自鐫一印云、前身相馬九方皐、誤作方九皐、毎幅常用、遂不改刻、其人胸襟洒落、不爲物所介、亦可見也、又所作之字、不在畫下、而價頗低、蓋畫猶入俗眼、字竟不入也、昔人云、畫視書、徹不及者、品稍下耳、其言或然、（山中人饒舌）

梅泉曰、世皆稱大雅放浪率意、余所不信也、嘗有一門生爲贋畫者、大雅大怒逐之、門生介嘯風亭某謝罪、大雅曰、貧天耳、不知耻非人也、遂不赦、嘯風亭亦從學大雅者、（畫乘要略）

高野山清淨心院回祿し、堂宇盡く烏有となる。大雅この事を知り、直に高野山に到り、清淨心院の玄關にかゝり、某は京師の畫工池野秋平と申者にて候、此度御座敷向の唐紙張付等、奉納のために寫してまゐらせんといひければ、取次の者しか〳〵の事を院主に申す。院主固より畫工渴望の事なれば、早速喚入れ、近付になり、畫の次第を盡く頼み、池大雅も大に歡び、然らば明日より直ちに取りかゝるべしとて、畫きけるが、其人物恰好、首大に足細して、大に異體なれば、院主大にあきれ、忙然たり。又唐紙一枚に、松樹一株に茅屋を寫し、其屋の牕の中頃に人物ありて、山水に對せる圖を作りけるが、是も人物の首牖一ぱいに見えければ、院主ます〳〵あきれ、斷りをいはんと思量する折から、浪華の買人來り合せ、しか〳〵の事を聞て、竊かに窺ひ見るに、まぎれもなき池大雅なれば、院主に告て曰く。今世有名なる池大雅の畫、金錢幾許を出すとも、容易に得難きことなりと。院主もはじめておどろき喜びて、盡くふすま張付を畫かせたり。今野山の寶物となる。（逸人畫史）

晩年托佛事、謝世事、有一僧、持戒勤經、貸成暴其隱操、夫妻往見之、隨喜念佛、貸成已歿、月峰等沽其遺物、營叢祠乎東山双林寺中、號大雅堂、案其平生所奉大悲像云、（雲烟畧傳）

有客夜宿無名家、備甲絹寢衣、雖積垢膩、輕暖適身、以爲無名清貧尙有此具、半夜將上厠、誤入無名之房、纏氈而寢、其傍玉瀾亦在故紙中眠、（繪畫叢誌畫人逸話）

大雅至浪華、大和屋某迎之、請其暖簾、大雅執筆、先作大和二字、忽投筆、起而出、主人以爲上厠焉、久之不見、使人跡之、不知所之、歷數日而至、主人怪而問之、答曰、初下筆時、大和字在心、忽意芳山櫻花正盛、佳期不可失也、故去遊於彼爾、幸然不違期、以達其願矣、今當果前約也、於是復執筆、追書屋字而去、此談恐好事者所假托、然非大雅、無以當是也、

中村秋香見示池大雅所寫中山道諸勝畫帖、其友人足立某藏本也、毎勝濃紙半截、東起熊谷隄、西盡磨鍼嶺、前後二十餘張、並眞景也、就中、寫白雲金洞金雞三山甚詳、或自正面、或自背面、或自左右面、遠望近接、莫不盡焉、蓋是筆本爲寫三山起、而一路所觸目、隨手收拾而已、其爲圖也、傅色極淡、山皴水紋、樹石廨舍、田園村落、道途橋梁、纖細周密、曲盡其形勢、世人謂、大雅豪宕有餘、而愼詳不足、殊不知此翁小刀大劍並揮也、（中畧）此本畫中間標榜山水村落等名、以其爲粉本也、最尾有木村蒹葭跋、

清儋叟著孔雀樓記、極稱池大雅之爲人、中載、大雅語我曰、僕少時習騎、其師曰、君非士、學騎無益也、然雲游千里、時或息勞款段、不知墮之術、必有傷之患矣、僕然是、所謂輕裝重裝兩乘參乘、各色驛馬墜墮之法、盡學之、因屢免難焉、（この事假名世說にも出づ）

僧叟又云、大雅早年居銅駝巷樋口、業書扇及刻印、其債簿篆注之、某歳客遊、至臘不歸、其母與親人謀、作債單、閲簿則漢文篆字、不能下讀、因乞龜屋某(太助)僅辨其半、及歸讓之、輙俯伏謝之、自茲遂改篆爲楷、予嘗觀其所用重闌本、闌中錄中等扇三柄、某先生携歸、估直既濟、或未濟云々字、宜乎母觀不能解、(又假名世說にも出づ)

大雅出市、聞嵐山櫻花方盛、遂往觀之、歸路饑甚、而腰無餞囊、偶見路傍賣餡者、乃陳姓名來由、乞而啗之、已抽墨斗、寫小景一紙、申謝而去、賣餡者反家、語之人、明日來乞者、相踵于戶、乃賣以獲利、於是自詣大雅、復索之、大雅曰、一之爲甚、豈可再(以上香亭雅談)

大雅といふは、鈍に禮を正うして、一向磊落でないので、そして其行ふことが、一として奇ならざるはなしです。園内や其近邊で茶摘をする時に、いつも社衽を着て、禮服でやる。それで他の人が、何故に社衽をつけて茶摘をなさるかと尋ねると、大雅が、いや、茶は茶湯といふて、神佛にも供へる物であるから、夫で謹で禮服で茶摘をするといふたそうです。それで大雅が冷泉爲村卿の門に入たのは、私(定亮)の高祖父になる双林寺の謙阿彌といふが、大雅と懇意で、其謙阿彌が紹介で、爲村卿の門に入たので、それからは、公卿の中でも五六人知交が出來た處が、其後は、大雅が市街へ出る毎に、必らず藁草履を穿てゐる。何故に此頃は草履ばかりお穿きになるかと、他の人が聞くと、大雅は、や、此頃は御堂上方に御懇意が出來たで、若し途中でお目にかゝつた時も、普通の履物では失禮にあたる、されぱとて、跣足になることも出來ぬから、夫で草履を穿て出ると答へた。また冷泉家の記錄にも、大雅といふは至つて禮の正しい人やと書てあるそうです。

夫でまた可笑しいのは、玉瀾を妻に貰ふて、大層喜でゐたそうなが、幾日經ても、一向交りをしないから、玉瀾が其心を計りかねて、媒人にそう云と、媒人が夫ではどもならんと、早速大雅の處へいつて、時に承たまはれば、貴君は一向夫婦の交はりをなさらんそうやが、夫ではしるしがないといふもので、全體貴君はどういふお考へであるかと云ふと、大雅は低頭平身して、いや、之はどうも恐れ入た、全く心得違ひで、實は自分は只なかようして、共に一生を送ればよいと思ふてゐたが、そういふことなれば、謹んで行ひまするど謝罪つたそうです。

また大雅と柳里恭と知己になつたのは、こういふことからで。南都の富商某といふが、石燈籠を春日神社へ獻納するにつき、獻燈の二字を彫刻しようと思ひ、成るべく能書の人に賴もうと、段々擇んだ上、郡山の柳里恭に賴んだ處が、里恭も承諾して、いろ〳〵古法帖を撿べ、半年かゝつて、漸やく出來たから、直に石に彫て、神社の畔に建た。處が柳里恭は、此二字を自分が半年もかゝつて苦しんで書たのであるが、廣い天下に之を能く識る者があるかどうかと、日々一人の小役人に命じて、監視をさしておいた。すると一日大雅が春日神社に詣でゝ、此二字を觀、あゝよく書てあると、痛く賞嘆してゐたが、少時して、然し惜いことには、之は集字で、上の字と下の字と合てゐん、あゝ惜いことだと云ふて立去た。そこで監視の役人が、里恭の家へいつて、此事を告ると、里恭は大に喜んで、夫では直と其旅人を探せと、五六人の小役人に命じて、奈良中の旅宿を一々調べさせ、漸やく大雅なることが判知つて、面會したが、之が柳里恭と大雅と交つた初めであるのです。

一日大雅が柳里恭を郡山に訪ふた處が、里恭がよう來てくれたと、いろ〳〵欵待して、畫を作らした。而して大雅の歸る時に、潤筆として金百兩を贈つた處が、大雅は辭はりもしないで、其まゝに貰ひ、歸途に藤森の祠に參詣して、其百兩を賽錢函の中へ投こんで立去てしもうた。そこで其日か翌日になつて、神官が撿ためた處が、賽錢函の中に金百兩あるといふ、前代未聞の珍事に、大に魂を潰し、此まゝにしておいて、後日御咎めがあつては大變

だと、早速官に訴へたので、官ではいろ〳〵探索した處が、漸やく投こんだといふ大雅が知れた。そこで役人が呼出して、何故其様な大金を賽錢函へ入たかと聞糺すと、大雅は平氣で、何故といふこともないが、只獻たばかりでといふたには、役人も大きに魂を潰したそうです。

それで私(定亮)の祖父月峰は、人を何とも思はず睥睨する性質で、山陽などでも、何だ山陽がなど〻冷罵してゐたが、大雅だけには恐れ入て、謹んで何事でも聞く。これは私の祖父ばかりでない。皆そうやそうで、難波の蒹葭堂などは、大雅を神さんのやうに思ふておつたそうです。夫といふが、大雅の技藝ばかりでない。其人品が非常に高かつたからであらうと思ひます。

大雅堂の庭裏に(中畧)一大碑あり。正面に和光同塵の四大篆字を彫り、左方に左の文を刻す。(以上江湖快心錄)

大雅池生之於書、自成一家、蓋其人才贍思逸、才贍則騁輕俊於運腕之間、思逸則寓高暢於揮毫之端、世之能書者、率不能書、此所以與華畫相逕庭、而生則兼之矣、亦出於其氣象自然已、生嘗多寫般若心經、遊生之門者、沐浴風流、生歿而不能忘、乃相謀、取其心經及遺墨之紙、藏諸白山菊溪之側、立石焉、勒以和光同塵四篆、亦生所嘗書云、余既悅生才思、又嘉門人之志有翁、爲叙其故、使彫于旁

安永丁酉之秋　蕉中道人識(大典禪師)

眞葛原に住せし頃、玉瀾を伴ひて駿河の原に至り、白隱禪師に參禪せしことありき。又嘗て夫妻相携へて、豊前中津の自性寺に至り、滯留旬日許。書畫一紙を作らず。悠遊して歸る。後自性寺の住持上洛し、本山妙心寺に至り、始めて大雅の有名なる畫人なることを聞き、唐紙一本を購ひて揮毫を求む。大雅盡くこれを書き與ふ。大小數百紙あり。故を以て自性寺多く大雅の書を藏し、嘗て中津侯よりその散逸を禁せしことありき。(大雅堂定亮談、今も自性寺の二室の障子、盡く大雅の書畫を貼せり)

大雅翁奥州へ行けるとき、路にて馬をとりてのり行きけるが、酒店の前にて馬士一杯のみ來るうち、翁は馬上に待たれよとて、酒店に入りけるが、やがて出てみれば、翁も馬も見えず。馬士驚て所々尋れども見えざれば、せんかたなく家にかへり、みれば厩にて馬の嘶聲あり。行て見れば、翁馬に跨りて厩に居たり。如何して此處へ來りたまふと云へば、我は馬の行に任せたれば、遂此處へ來れりと答ふ。日暮なれば行くこともあたはず。見ぐるしけれども、我家へ一夜とめ申たしと云へば、翁の曰く。我なんにも謝すべきものなし、我書を好めり、一枚かきて謝せんと云しが、紙なし。此障子へ何ぞかきてたまはるべしと云へば、さらばとて障子へ書がきたり。後に旅行の客甚書を賞美せしかば、紙をはがして今に秘藏してありとぞ。(逢原記聞所載、繪書叢誌)

大雅堂年尙ほ弱冠にして三絃を嗜む。因て居を瞽師安永撿校の隣に卜し、一日其家に抵り、謂て曰く。余三絃を嗜む。故に君と咫尺す。今相見るを得たり。幸に一曲を奏せよと。撿校其志に感じ、輙ち絃を奏す。會ま其皮敝れて調を成さず。大雅意に滿たず。更に他の絃を彈せんことを請ふ。撿校喜ばず。曰く。吾子の業とする所の者は何ぞや。曰く。繪事を好む。撿校曰く。子の技は想ふに未だ妙處に達せず。大雅憤然として以爲らく。彼れ已に雙瞽たり。何ぞ能く繪事を解せんや。而して言此に至ると。乃ち問ふて曰く。何を以て吾技の拙なるを知るや。撿校莞爾として哂て曰く。請ふ靜に聽取せよ。凡そ絃を彈ずる者、撥を執るは右手に在り。而して精神は左手に在るに非れば、未だ其妙を得ると能はず。繪事又何ぞ之に異ならん。其筆右手に在りと雖、精神左手に在らざれば能はざるなり。今子我が三絃の皮敝れたるを見て、吾が精神の在る所を知らず。是れ何ぞ音律を曉る者と謂ふべけんや。子の繪事

に於ける、恐らくは獨り力を右手に用ゐて、神を左に留めざるべしと。大雅之を聞て、慚愧發憤、益々書法を究め、遂に天下に獨歩す。後ち常に人に謂て曰く。吾れの此技を成せるは、實に撿校の訓戒に因れり。撿校は實に我師なりと云ひし。以上本朝粹人傳に見えたり。

奥州(今磐城國)刈田郡山中に、七箇宿といへる所あり。其一村を湯ノ原とす。大雅遊歴の次で、此村に一宿し、偶ゝ白張の屏風あるを見て、小兒の手習硯箱を借り、畫を寫せしに、異樣なるを以て、皆拙畫師と思へり。後にその大雅なることを知り、大に尊び、今猶これを珍藏するよし。

大雅高芙蓉、韓大年と同く名山を尋ね、信州岩田村に至りし時、旅店に白張の紙障あるを見、興に乘じて、老翁琵琶を彈ずるの圖を作れり。意ふに自己の像を寫せしならん。上に一首の和歌を題して曰。あらなくもながき日影に青柳の、いともてあそぶ心のどけさ。

大雅一日比叡山に遊びし時、座主に禮するに、頭を下げずして、小僧等に拜せり。此事を役僧の尋ければ、大雅の曰く。座主樣は年老なれば、最早あれ迄の人なり。頭を下げざれども、我に於て恥る所なし、唯小僧衆は後世恐る可きの人。若し輕蔑して後に頭を下げるに至らば大雅の恥なりと。

大雅東海道を江戸に下る時、富士山を見て大に心に賞し、其夜原宿の旅店に宿せしに、山影尚腦裡に往來して、寢ること能はず。幸ひ枕頭に白屏風ありければ、全戸寢るを窺ひ、墨斗を出して一面に富士山を畫けり。而して衆人に覺られんことを恐れ、翌早朝飯を喫せずして去れり。旅店の主人之を見て大に怒れり。大雅江戸に到り、諸侯の邸宅を訪ひ、事の次第を物語りしに、某殿にはわざ〲其屏風を尋ね見られしに、筆力餘ありて、實に希代の尤物なりとて、讓り與へんことを乞はれけり。主人はじめて大雅なることを知り、詫入て讓らざりしと。此屏風今に原宿の寶物となり居る由。

大雅極めて貧しけれども、畫の謝金を持來るに、手にて受取りしこともなし。入口に水甕を置て、其中へ入れ給へと云へり。又米薪の價を乞ふもの來れば、其水甕の中より持て行かれよと云。其人水を探て無き由告ぐるときは、又來て次に探られよといへり。

大雅若狹國を遊歴せしに、路銀盡きて一文を餘さず。又泊める家もなければ、路傍の茶店に憩ひ、畫を好む家はあらざるやと問ひしに、我村吏は屏風一雙を新調して、京都より柳里恭の遊歴を待ち居ると物語れり。大雅直に其家に到り、自ら柳里恭と僞り、三十兩にて其屏風に彩色畫を描く。村吏十五兩を渡し、餘は御禮の爲上京持參すべしと。大雅乃ち十五兩を得て歸京せり。後村吏上京して里恭を尋ねしに、人全く異れり。而して里恭は我なり、我は若狹に到りしことなしといへば、益ゝ不審にたへず。尚悉しくものがたりしに、そは大雅堂にはあらずやとて、大雅を呼び尋ねたれば、全く路銀に盡き、里恭の名を僞りたりと云へり。里恭驚き行て其畫を見、大に賞め恐れしにより、村吏は却て好畫を得たりとて悅びしといふ。

大雅妻玉瀾と天の橋立を觀て、若狹國へ向ふ時、馬夫馬を勸む。依て夫婦合乘にて、舞鶴港竹屋町壺屋某の宅前に來り、馬より下る時、馬夫賃錢を乞へば、壹錢の貯へもなし。馬夫大に怒り、強て之を求むるに、夫婦如何とも爲んすべなく、殆ど困却せし折、壺屋の主人之を見て、いと氣の毒に思ひ、且大雅夫婦なることを聞て、其賃銀を拂ひ、己が家に滯在せしめしといふ。此時近在千年村の津田惣右衛門と云へる者、同家にありて、夫婦に畫を乞ひければ、大雅は岩に蘭、玉瀾は岩に菊を畫きて與へしが、此畫幅今に津田家に存在せりとぞ。(以上繪畫叢誌、これ等は稍信じ難きに似たり)

池大雅の磊落は人の知る處。京都御旅町の烟草屋の招牌に、雲中より鬼腕を出したるものを畫く。是池大雅の筆也。烟草に鬼左三(きさみ)の謎なりと。亦大和大路に赤萬能膏てふ膏藥賣家に、風藥呑んでなをらぬ風藥。是も大雅の筆也。嘗て此の賣藥店の主人は、池大雅の門に遊で、畫を學たるとぞ。風藥良劑を工風したるが故に、其の看板を池翁に乞しかば、翁大醉中筆を採て、のんでなをらぬ云ゝと書したり。主人不審はれず。翁に問。呑で治せぬ風藥と

は不詳ならずや。殊に招牌なり。書改て賜へと切に乞ければ、翁は酔眼朦朧たるを開き、此人の事理にうとさよ、他の風藥を呑で治せざる時、此風藥を呑めば治すといふ事也と、饒舌して打臥たりと。今も此の招牌を掲ぐ。筆勢凡ならず。京都に遊ぶ人はかならず見るへし(久保田米仙書家逸事)

因みに言ふ、蒹葭堂雜錄に、大雅堂が高芙蓉に聞いて、急須の形を印施せしこと見えたり。又同書に大雅の用ゐたる印褥の銘(悟心禪師の句「剛則難親、柔則易惰、剛柔得中、庶幾無過」あり。同書又大雅の印譜あり。その中の遊印に「已行千里路、未讀萬卷書」「茂林清松」「半癡半黠先生」「遵生」等の句あり。印は今現に鳩居堂の有に歸せるもの九顆(中二顆玉瀾の印)あり。

大雅の俳句及尺牘あり。左にこれを錄す。

としとはれかた一方の手を明の春(蒹葭堂雜錄所載、大雅五十歳の句)。

いくつぢやととはれてかたるあけのはる(野史所載、同上)。

くずさらすみづまではなのしづくかな(續俳諧奇人傳所載、大雅吉野山に遊ぶ句)。

先日者態々御出向被下、重疊千萬の至りに候。彩色之事に就而之御說、一々御尤。所得利益不尠候。愚妻も宜敷との事に候。近日只困り候事一つ有之。そは余の儀にも無之。雨漏甚敷、それが爲めに、一昨日の大雨の節者、書齋悉く濡れ透りたる始末に有之候。然し乍ら、雨止み候得者、靑天白日、鳥雀の囀聲、眞に一箇の別天地に候。一月ばかり前より、三絃を少し手に致し始め候。繪畫の方も段々面白き境に進み行きたる樣被覺候。匆々頓首。

五月十五日　　池　勤

權大夫樣

昨日慈典和尙許罷越、色々禪の話承候。禪の奧儀者一喝に有之候趣、貴殿と御話し致しゝ通りに有之候。此頃庭前の草木皆色付初め、遙かに東山の紅葉と相映候趣、一幅に仕立たくと覺え候。玉蘭も大分彩色三昧に進み候事、偏に貴殿の薰陶と喜び居申候。家道は相變らず苦境に候得共、苦の一轉化は樂地と申、顏回の陋巷のためしも有之候得者、勉めて樂地を求め居候。玉蘭も今者漸く苦境に馴れ候ふて、少しも心にかくる樣の事は無之、この間にて、和歌を詠み始め申、小生紹介、冷泉家に弟子入爲致候樣にと考居候。いづれ近き中に今一度大和地方漫遊可致覺悟に候間、其節緩々可得貴意候。恐惶謹言。

十月念九　　貸　成

權大夫樣(京都美術所載)

貴墨忝拜見仕候。先以秋暑之節、御平安被遊御座、恭賀之至申祝候。僕無恙、御伺不申上、失禮、奉背本意候。然ニ書幅及書障之事、尊命之趣、委細承知仕候。近々落筆可奉入一粲候。仍之黃金二百疋御惠投被下、御芳情不淺、忝拜受仕候。偸奉期拜謁之時候。折節多事、草々如斯御座候。頓首。

八月六日　　池　野　秋　平

海福方丈御侍者中樣(妙心寺斯經和尙、植松與右衛門藏)

第三百十八　池大雅筆白雲紅樹圖

第三百十九　同筆峽中棧道圖

第三百二十　同筆秋江釣舟、松下論古圖雙幅

山中人饒舌に曰く「大雅池翁書畫俱高、不入時眼、至沒後、聲名隆起、無知不知、推爲當時第一手矣、夫山藏美玉草木澤焉、水蓄明珠砂石光焉、有實者不可掩也如此、豈唯書畫哉」。又曰く「大雅逸筆、春星戰筆、二老各有所稽古、大雅正而不譎、春星譎而不正、然均是一代作覇之好畝手」。良齋の池無名傳に曰く「書法則出入于梅道人倪雲林之間、專以氣韻爲主、山水尤精絕、世人爭購之、雖零絹尺楮、莫不重之」。又曰く「先後所作、富士山圖凡一百幀、橫側正偏、備極其妙、爲天下絕筆、蓋大雅爲人、纖毫塵垢、不以溷其懷、而濟之以江山之助、故奇致坌涌、雲烟遶腕、氣超於五采之外、而韵發於六法之中、有不可以勉强到者、至若富士山圖、則特妙倬詭、石破天驚、實曠古所未有也」。長野豐山の三名士傳に曰く「學梅道人倪雲林、無幾心悟手熟、筆簡墨淡、韵高意遠、雲烟渲染、經營無痕、曠如無天、密如無地、春山妖冶如笑、秋山慘悽如悲、識者莫不駭服」。又曰く「嘗在京師、屢遊東山、過貸成之故宅、老松修竹、嵐霞澄鮮、烟雨滅沒之際、想見其解衣槃礴之狀、未嘗不冥然神契也、夫畫小技也、然非必與道謀者、未有能詣其妙、觀貸成之畫、其縱橫揮灑、機無滯礙、一邱一壑、自胸襟流出、要宜求之筆墨徑蹊之外、莊周曰、道也進乎技矣、豈不信然邪」。畫乘要略に曰く「平生好遊海內名區、奇峯恠巖、高峻平遠、風雨晦明、靡弗畢藏襟懷、發諸筆端」。又曰く「北汀先生曰(中略)大雅胸襟磊落、能脫塵俗、故其所畫山水、皆逸品高格、非人能所及也」、栢木如亭の「觀九霞山樵畫山水歌」に曰く「六法舊傳自西方、近學宋元遠學唐、屏障對軸皆故事、偃佛鬼刹多吳裝、就中神妙誰尤顯、明兆雪舟古法眼、人間猶有縑素存、丹青精妙何待辨、荊關董巨世落寞、賞鑑好事重鈎勒、不知筆墨在渲淡、山水却於南宋略、九霞山樵筆端銳、痛斥院體欲救弊、卓然獨立鴨水上、高奉倪黃成絕藝、海內學者多依之、北宗衣鉢漸欲衰、淺絳水墨竟增價、畫史誰復買臙脂、煙客廉州彼有類、天生巨士不虛費、須把九霞當二王、從此東方尙士氣」。[illegible]園詩集(尾張國田挺子著)の「題霞樵富士圖」詩に曰く「富士高標東海濱、四時有雪映青旻、吐納雲煙狀非一、宛如菩薩應現身、世間畫者知多少、依樣寫來却失眞、平安逸士池大雅、胷次元無一點塵、盤礴乘機忽揮洒、豈同尋常漫效顰、此圖最稱得意筆、流傳偶歸好事人、日夕卷舒充欣賞、初發芙蓉自鮮新、我今寓目題長句、空慚不能鬪嶙峋」。見るべし。大雅の畫の世に激賞せられたることを。然れども今にして熟〻これを思ふに、こは蓋し世眼の久しく狩野、土佐等の陳腐に厭きたる反動にして、南蘋派等の形似と絢爛とはその傳尙新なりと雖も、正に當時に滂湃せる學界の趨勢、文人の思潮に投合するものに非ず、而も南海等の餘技は、僅にこれ幽谷の跫音にして、その聲未だ大ならず、以て一世を傾倒するに足らざりしに、大雅に至りては、夙に神童の稱、畸人の目もて、世の好尙を一身に集め、文壇の大家祇南海、柳里恭等に推稱せられ、而も全幅の力を南宗の疎逸に披瀝し、以て奇異の作を出しゝかば、飢えたる者豈食を擇ばむや、その畫徒らに奇にして滋味の掬すべきなきに拘らず、彼の尙南貶北の畫論に心醉し、印行の支那畫譜に憧憬せりし文雅の社會は、響の聲に應ずるが如く、口を同うしてこれを嘆賞し、終にこれをして南宗開祖の盛名を贏得せしめ、吠虛耳食以て今に及べるなり。その畫の眞の藝術上に於ける價値は、決してその名の盛なるに協へりと謂ふべからず。然れども革命は激に過ぐるを常とす。尋常溫籍の調を以てしては、恐らくは南宗の旗幟を在來の諸派鷹揚虎視の間に樹立すること能はざりしならむ。蓋し眞の高雅

と怪僻とは、その俗眼に入らざるに於いて相同じ。大雅の畫を觀るもの、早く既にその人格の高雅に打たれ、怪僻を誤り認めて眞の高雅と爲し、以て己の眼識の俗流に異なるを誇り、却りてみづからその非俗流の由來非常識なることを知らざるなり。柴野栗山は大雅の書畫を評して曰く「大雅畫奇絶、人皆知之、其作字、常好怪僻、殆不可端睨也、就中草聖尤妙、飄逸縦横、毫不失規矩、其造詣之處、恐一代無與偶焉。」田能村竹田は曰く「所作之字、不在畫下、而價頗低、盖畫猶入俗眼、字竟不入也。」賴山陽は大雅の墨竹に題して曰く「大雅山人墨竹、題臨溪影更長五字、有霞樵之款、西谷携來索鑒曰、觀者皆以爲非眞也、余曰眞也、山人書畫可謂醜怪矣、而不能爲其姸與正、試以此一觀。」皆これ大雅の怪僻をして眞の高雅の名を博せしめたる自稱具眼者の言に非ざるはなし。これ等の激賞の既に世の公評と爲るや、人或は大雅の畫の奇怪を認むる者ありと雖も、竊に俗眼不解の徒と目せられむことを恐れて敢て言はず。却りてこれを解したる爲して以て讃辭に雷同す。宜なる哉、大雅の品第今に至るも尙高きこと依然たるや。吾人をして忌憚なく言はしめば、大雅の畫はその用筆南宗の柔雅に非ず。僅に山石の輪廓を描いて皴擦渲染の妙味なく、宛も印行の畫譜に似て、殆ど墨なきに近し。裁構に至りても、樹石雜然として布局上疎密配合の美を缺き、遠近分れず、濃淡宜しきを失へる者のみ多し。されば畫乘要畧に曰く「近人或謂(中畧)大雅亦非正派」雲烟畧傳に曰く「大雅畫、高格巨眼、自然悟入、終至超越羅漢科、然其筆不用破墨、專用潑墨、(破墨潑墨の用語妥當を缺けり、こゝに謂はゆる破墨とは南畫の常法たる皴擦の渴染を言ふか)潑墨宋以來北宗得意、而破墨南宗妙構也、池翁竟在南派、而用墨却多出北派、而其作大抵以率意成、不拘法局、所謂無法非也、有法更非也者歟、雖然當時非此巨膽、則虎視上國、不能開創此業(中畧)雖不入南宗正格、興到則不擇筆墨、一氣呵成、是所以爲大雅也」この言稍大雅の病處を指せりと謂ふべし。その一代畫風の變化については、山中人饒舌に錄せられたる月峰の言畧宜しきを得たり。曰く「池翁畫數變、然大抵有三種、其一布置穩雅、步趨古人、署曰三岳道者、爲四十歲前後筆也、其一逸筆飛墨、如名士事了始歸林下、葛巾野服、行散自由、至蘭竹窠石、款題直用書筆、字與花葉相聯綴、署曰霞樵、俱爲晚年筆也」こゝに掲ぐる所白雲紅樹圖は、その巧整を以て賞すべく、峽中棧道以下の三圖は、老勁の用筆、雅味頗る掬すべく、以て大雅の面目を盡すに足れり。殊に松下論古圖に至りては、例の布局繁雜、遠近不分の通弊を脫し、裁構簡疎にして甚佳なり。誠に遺作の逸品とす。

玉瀾

大雅の妻玉瀾亦畫を能くせり。玉瀾名は町。有名なる祇園の賣茶女百合の女なり。百合曾て德山某の婦と爲り、町を生む。某その宗家の嗣絶えたるを以て迎へられて國に歸るに臨み、百合を携へ行かむとす。百合その某の身に害あらむことを憂へ、辭して別れ、獨居して町を撫育す。町長じて才情あり。百合常にこれを誡めて曰く。汝の父は士人なり、みづから身を惜みて輕ずること勿かれと。一佳婿を得てこれに配せむと欲すれども、久しくして意に適する者なし。大雅の貧にして書畫を沽るを見て、人これを侮れども、百合は獨りこれを奇とし、終に町を以てこれに妻す。他年德山某の子來りて町を訪ひしかど、町は亡母の遺誡通問を禁ぜりとてこれを謝しき。（賴山陽百合傳、近世叢語）近世畸人傳に曰く。

夫に學で畫を善す。柳里恭の號の玉の一字をもらひて、玉瀾と號す。夫とともに冷泉殿へまねかれて參り、歌を學ぶ。始てまゐりし時、所がらといひ、名のいつくしきに、いかなる婦人ぞと、御内の女房達、今や〳〵と、待ゐたるに、思ひの外、糊こはき綿衣に、魚籠を引提たるさま、大原女のわらうづはかぬごとくなれば、大きにおどろきけり。是亦寵辱を心とせざる夫の行に配するなるべし。道人はかゝる高名の畸人也。かれよりまねび給へる也。富たるにもあらねば、夫婦ながら假初の禮義を表しても有べきを、世人にまさりて、季節の謝物をとゝのへまゐれり。歌はかの氣象に應ずるやうに添削す

とのたまへりとぞ。また殿より興じてあかき蔽膝（まへだれ）を婦に給りしかば、春は母が名殘の茶店に出たることもありしとなり。夫は三絃の興（きよう）といふものをさびたるこゑして彈うたへば、妻はまた古びたるうたをつくし箏にかけて彈。その箏の興（きよう）もまたよくせりとなん。世づかぬ家のうちのさまなりき。夫亡して數年の後身まかりぬ。

逸人畫史に曰く「畫を郡山の柳里恭に學ぶ。小景の山水に巧なり。玉瀾の玉字は、柳先生の玉奎の一字を賜ふなりと」。畫乘要略に曰く「受筆法於其夫、善山水、遠韻雅雋、蘭竹梅菊頗佳品、余以謂、爲近世女手之多風骨者、稱閨閤之傑而可也、北汀先生曰、夫呈媚爭妍以取人憐、婦女之情也、唯如玉瀾則不然、花晨月夕、擅其騷思、峯巒烟靄探其幽趣、遊心於筆墨之間、自以爲娯、亦非尋常閨秀之所及也」。明和五年の平安人物志にその名を出し、「祇園下河原」と記せり。天明四年甲辰九月廿八日歿し、黒谷西雲院に葬らる、（墓あり）法名を寶譽玉瀾法尼と云ふ。（盆経本）遺作四君子等多くして大作少し。大雅晩年の畫風に似たり。

大雅の門人
夙夜

大雅の門人に餘夙夜、僧月峰、福原五岳、蓬平、證覺等あり。餘夙夜は逸人畫史に曰く「餘夙夜、青木氏、名は俊明（印文浚明）字は夙夜、春塘と號す。畫を池大雅に學び、よく其法を得たり。山水および人物をよくす。又八岳道人と號す」。畫乘要略に「學大雅、能山水、意趣秀逸、而規模偏小、師風拂地」と評せるは當らず。山中人饒舌に曰く「餘夙夜號春塘、局大雅堂、（略註）杜門不出、傭書自糊、草樹不除、階庭不掃、殆十餘年、翳然與世間隔、人罕見其面也、山水倣文待詔、細筆擦皴、暈以墨氣、秀潤明淨、又設色菓蔬、濃厚絢麗、深得古法、自道雖一水一石、非經五日若十日、則不能成、縑素堆案、非意適興到時、又不敢作、古人責山生活、我不能也、故流傳甚少、余嘗論曰、大雅沒後、撫翁逸筆、藏拙取捷、其徒洵繁、獨夙夜以工密見長、傳正脈於應擧呉春鷹揚虎視之際、偉哉」。これ眞に夙夜を知れるものなり。

第三百二十一　餘夙夜筆水墨山水圖

夙夜の畫を以て大雅の畫に比するに、怪醜の缺點は去りて、巧熟の長所は加はり、布局整然として圖構毎に佳なり。竹田のこれを激賞するも亦宜なりと謂ふべし。その皴擦の用筆較〻勁硬にして、豐潤の趣に乏しきは、即ち夙夜一家の別調なり。大雅の如き文人の儈技にはあらで、眞の畫人の作としてこれを賞するに足れり。本圖以てその一好例と爲すに足る。

餘夙夜に次いで大雅堂に居りし僧月峯も亦大雅の門人なり。月峰は双林寺の謙阿彌の嗣なり。竹田莊師友畫錄に（亮定談）曰く「釋辰亮號月峰、双林寺有菴、曰西阿彌、上人住焉、弱冠池大雅翁仍在、居亦接近、晨夕往來、學畫受其指授、漸長、與就草廬、皆淇園、蕉中六如其他諸老親善、諸老亦喜其年少才慧行敏、能會人意、亦復相愛、看花聽鳥、聯杖同遊矣、故記其嘉言偉行爲多、作畫恪守池翁遺法、古朴簡疎、不阿時好、又善鑑池翁眞蹟、近日池翁眞蹟海内流行、贋造僞作、紛々錯出、至其眞蹟千無一二、故來求審定者、毎日門外接武、上人一々辨證、細論涇渭矣、予寓双林寺日久、故屢寓目焉、予初東上入京、先與上人相議、爾後殆向三紀、猶嗣徽音無絶矣云」。又山中人饒舌に月峰の善鑒を記して曰く。「世稱鑒賞精覈者、引證古今、鑒

々辨證、而往々有披砂失金之議矣、東山月峯上人善鑒池翁、常語余曰、翁眞蹟甚佳者、僞造甚拙者、一覧輒知、不俟人言、特至遇眞跡稍劣、與贋造甚工、涇渭混矣、以僞爲眞猶可、以眞爲僞大不可、蓋翁跡日損月減、而無復有增、可不愛惜乎、鑒者最宜着眼留意、不可放過、可謂篤論哉」。畫乘要略に曰く。「東山長喜庵主、師大雅、山水秀逸膏潤、至晩其技大進」。世に二代目大雅と云ふ。天保十年十一月寂す。（人名辭書）月峯の子に義亮弟に清亮あり。同書に「並工山水花卉」と言へり。清亮月峯に嗣いで大雅堂に居る。今の定亮は即ちその子なり。

福原五岳

福原五岳名は元素、字は子絢、（畫乘要略は玄素とし、逸人畫史は「名は絢、字は素元」と云へり、山中人饒舌元素に作る、古畫備考には元素の下に太初と記せり）備後尾道（春水師友志）の人にして大坂に住せり。（畫乘要略、逸人畫史は平安の人とす）逸人畫史に曰く。「畫を池大雅に學び、其蘊奥を得たり。生涯師風を守りて他風に移らず」。畫乘要略に曰く。「學大雅山水、用墨濃濕、縱横淋漓、兼長人物、筆力沈確蒼老、百川以來無出其右者、驚名于一時亦宜矣」。山中人饒舌に曰く。「至大雅池翁、則踵其躅者、五岳福元素最著」。春水師友志（古畫備考所引）に曰く「性嗜酒、有客必留酌賦詩、詩多六言、皆有風致、非尋常丹青者流、與池大雅相師友、名亦在伯仲之間」。嚴島繪馬鑑に文化十二年（乙亥）十一月五岳の畫ける關羽圖の額あり。難波丸綱目には、唐畫師の中に五岳の名を列せり。

五岳の門人

五岳の門人に杏堂、春嶽、熊嶽（山中人饒舌）黑田綾山、林閬苑等あり。

濱田杏堂　畫乘要畧に曰く「濱田憲號杏堂、住大坂、業醫、少小好畫、問法當時名家、寫山水、閑散蕭疎、綽有氣韻、梅泉曰、北汀先生嘗携所藏明人墨菊、示杏堂、杏堂大奇之、自臨其菊、補勾勒竹、以貽先生、氣韻高古、殆逼明人之筆、眞爲雅玩」。

鼎春嶽　畫乘要畧に曰く「鼎春嶽名元、字世寶、大坂人、住天滿、初師福原五岳、後出入諸家、余觀其壽星圖、筆情纖勁、又有書名」。山中人饒舌に曰く「大阪府人春嶽、專心撫古、搜訪收藏家秘冊眞本、閉戸榻寫、精竭髓枯、而不知倦、卒以瘵死、余一識其面、信篤古士也、自道學黃鶴山樵、及觀其藝、結構品格、與濱杏堂長竹石相似、猶是攝派」。師友畫錄亦これを錄して曰く「鼎新字世寶、號春岳、阪府天滿街人、學畫福元素、宅後構書室、暇則屛居作畫、今案竹石介石杏堂雲泉四家、同學黃大癡、擦皴施采、畫格大抵相似、稍有少異耳、春岳亦其一也、予一日往訪之、談及近日賞鑑家收藏書畫、春岳辨其流傳、明其眞僞、娓々可聽、亦篤斯藝者也」。

春嶽の門人少からず。左に亦これを列記す。

黃山　畫乘要略に曰く「天滿酒肆主人、善人物」。師友畫錄に曰く「失記姓名、阪府堂島人、從春岳學畫、其家業酒、黃山每早擔桶出賣、日午方還、而後沐浴焚香作畫、以爲常也、讚人良山人、於生玉祠側、修書畫會、此日席間相識矣」。

高寸田　山中人饒舌に曰く「名爲澄、別號雨香、阪府人也、長者也、從春嶽學畫、以痴翁爲歸、又藏異書、予嘗借袁大史詩話、朝夕翻擷、不忍去手、欲還未能、又托購明人設色折枝花卷、賚之直未償也、而寸田不少慍、厚遇如故、予畧解詩畫、而有今日、寸田之惠實居多矣」。師友畫錄に曰く「阪府道頓渠人也、好讀書、又喜作畫、信春岳最篤矣、蓋其人溫厚君子也、與余交厚、常語余曰、購得絕妙山水、稱海內無雙者一幅、則平生願足矣」。

岡熊嶽　畫乘要畧に曰く「大坂人、初師福原五岳、後稍更其格、有名聲」。師友畫錄に曰く「嘗訪其居、維時仲冬、風日凄然、方排戸入、忽聞幽香霏拂襲人裙、詳之、

則有冬日蘭數盆、紅蓼翠葉、嬋妍相映、熊岳曰、吾愛此花、培植殆三十年、死者十八九、近歲調停、稍得其法、花葉繁茂如此、請賦詩賀焉」。

黑田綾山　同書に曰く。「名良、字忠良、讃岐高松人、師福原五岳、又學林閬苑、壯年歷遊諸國、終住備中玉島」。玉島の高雲寺にその碑あり。刻文左の如し。併せて綾山の門人岡本綾江等の略傳を知るに足る。

綾山黑田翁之碑

翁以善畫鳴於寬政文化間、以文化甲戌之夏病沒、享年六十、墓在玉島竹浦、翁黑田氏、諱良、字亮輔、讃岐高松人、其號綾山、取於鄉之松山也、天質穎敏、幼能讀書、特好繪事、慕池大雅之風、遊於京坂之間、數年師五岳、友閬苑、旣喜明人錢貢、學之、遂成一家、後游歷山陽、愛玉島山水、而卜居焉、環堵蕭然、僅蔽風日、好奇石、多聚之、常置一壺酒、醉則作詩歌、諷咏自娛、時揮書曰、吾字或勝於畫矣、性好施、如不自知其貧、妻子亦習而安之、其人品灑落、迥出塵表、邑主龜山矦、欲召而祿之、辭而不往、矦特賜月俸而寵之、山陽名儒、若拙齋春水茶山葦里諸公、翁皆與之交、而門人以畫成名、若豐彥皥々雲鵬墨山中岳綾江、頃者綾江恨翁之可稱不獨畫、而湮滅無傳、與其所素善高雲寺住僧仰攝謀、欲立石寺中以表之、因友人中原國華、屬文於予、綾江名直、岡本氏、備中黑崎人、今年七十矣、聞其家貧、賣畫自給、多年貯其餘、苦心經營、爲此追遠之擧、予嘉其不忘師恩也、不辭以不文、按狀略記翁事、系以銘曰、江山助筆、胸懷無塵、畫力有盡、其人長傳、

嘉永元年戊申秋七月　　　浪華篠崎弼撰幷書

林閬苑　畫乘要畧に曰く。「名新、字日新、通稱秋藏、大坂人、師五岳、岡本莊村曰、閬苑性敏慧、慕明人之畫法、和泉堺津（注畧）豪族某氏者、家多貯明人畫幅、閬苑請而屢摹之、遂得其風趣、故其寫美人、筆法纖勁、賦色鮮明、略似仇英、如水墨人物、則專尙剛勁、似張平山、惜哉歲未滿四十歿」。書畫一覽には「號章齡」とあり。

蓬平

蓬平の小傳は逸人畫史に見えたり。曰く。「名は正夷。畫を池大雅に學び、諸國に遊び、上毛沼田に寓す。山水最よし。人物これに次く」。その遺作を觀るに、用筆の剛硬夙夜に過ぎて、稍浙派臭味を帶びたるものあり。

證覺

證覺の小傳は畫乘要略に見ゆ。曰く。「阿波海部興願寺主僧也、少年遊於京、從大雅、學畫及書法、性遲鈍、至歲七十、苦學不厭、故頗存筆法」。遺作流傳極めて稀なり。

韓天壽

大雅の交友に書家韓天壽、印人高芙蓉あり。亦共に畫を能くせり。韓天壽は明和五年の平安人物志書家部に出で、字は大年、號醉晋、通稱中川長四郎、了頓辻子に住せし由見え、古畫備考に「寬政七年歿」と記せり。逸人畫史に曰く。「木孔恭と同じく畫を嗜む。さして稱すべきにもあらず。小景の山水を作る。偶四君子などあり。伊孚九を摸擬す。最風致あり」。

高芙蓉

高芙蓉は印聖と稱せられ、我が國の篆刻これより見るべしと云ふ。姓は源、氏は大島、名は彪、（又孟彪）字は孺皮、通稱逸記、氷壑、菡萏居、富岷山房、夾中逸民等の別號あり。甲斐高梨の人にして平安に住し、後江戶に移る。畫乘要略に曰く。「以鐵筆爲業、寫山水、北汀先生曰、芙蓉好學博涉群書、又考秦漢篆法、鐵筆精巧、馳名於海內、栗山柴侍講鑒稱以爲印聖云」。天明四年四月廿四日、歲六十三にて歿す。小石川無量院に葬る。（忌辰錄）芙蓉の妻蘿井亦畫を能くす。畫乘要略に曰く。「寫花鳥、頗有清人風旨、伉儷風致可想見矣」。逸人畫史に曰く。「又來禽と號す。畫を善くす。山水および花卉翎毛に巧なり。知る人稀なり」。

木孔恭も亦大雅を師友と爲せり。その傳記は蒹葭堂雜錄載する所の小傳及その自叙に係る巽齋遺筆註を省くに見るべし。左にこれを掲ぐ。

蒹葭堂名は孔恭、字は世肅、又巽齋、遜齋とも書、木村氏、小字太吉郞、家名を坪井家と號す。其初堀江に居住し、酒造を業とす。一時庭中に井を穿に、不圖蘆根を得たり。是則ち浪速の蘆なり。是よりして蒹葭堂と號すとぞ。中頃船場呉服町に移住す。世肅幼きより物産に心をよせ、珍奇の藥物を初め、古器、地圖、金石の碑文、古人の書畫、經史、詩文、諸の書籍を集、萬端あらずと言ことなし。原來博學にして書を好みて能す。しかれども榮耀放蕩の所爲にあらず。實に無双の奇人といふべし。

巽齋遺筆

余幼年ヨリ生質軟弱ニアリ。保育ヲ專トス。家君余ヲ憐デ、草木花樹ヲ植ルヿヲ許ス。親族ニ藥舖ノモノアリテ、物産ノ學アルヿヲ話シ、稻若水、松岡玄達アルヿヲ聞ケリ。十二三歳ノ頃、京師ニ松岡門人津島恒之進物産ニ委ヿヲ知リ、コノ頃家君ノ京遊ニ從、始テ津島先生ニ謁シ、草木ノ事ヲ問フヿ一會。翌年余十五歳、家君ノ喪ニアイ、十六歳ノ春、余家母ニ從テ京ニ入、再津島氏ニ從學シ、門人ト成ルヿヲ得タリ。之ヨリ慶書ヲ通ジ、物産ノ說ヲ聞キ、津島氏モ毎歳浪華ニ下リ、本草ノ會アリ。數出會ス。寶暦四年甲戌津島氏客中ニ卒ス。同社戸田齋、江戸田村元雄、平安直海元周ナド書ヲ通ジ、考索ヲ事トス。近キコロ、平安蘭山ニ從テ、益名物ノヿヲ究ム。齋藤彥哲モ親ク交ルヿ得タリ。

余五六歳ノ頃ヨリ頗ル書事ヲ解。我鄕ノ大岡春卜狩野流ノ書ニ名アリ。因テ從テ學ブ。春卜嘗テ芥子園畫本ニ倣ヒ、明人ノ畫ヲ摸寫シ、明朝紫硯ト云彩色ノ繪本ヲ上木ス。余コレヲ見テ、始テ唐畫ノ望アリ。頃家君ノ友人ノ家、和州郡山柳澤權大夫毎々客居ス。因テ友人ニ托シ、柳澤ノ畫ヲ學ブ。然ドモ郡山ニ從學スルヿヱズ。粉本ヲ學ベリ。十二歳ノ頃、長崎ノ僧鶴亭ト云人アリ。浪華ニ客居ス。長崎神代甚左工門ノ門人ナリ。始テ畿內ニ南蘋流ノ弘タルハ、此人ニ始レリ。余從テ花鳥ヲ學ビ、京ニ入リ、池野秋平ニ從テ山水ヲ學ブ。コノ頃交友甚多シ。

余十一歳ノ比、親族兒玉氏片山忠藏ノ門人タルヲ以テ、余ヲ引テ名字ヲ乞。片山余ガ名命ジ、名鵠、字千里トス。其後片山氏京ニ住ス。余十八九歳ノ頃、片山氏再浪華ニ下リ、立賣堀ニ住ス。余從テ句讀ヲ受ク。四書、六經、史漢、文選等ヲ讀ヿヲヱタリ。此後數々京ニ遊ビ、片山氏同門梅莊禪師相國寺ニ謁シ、岡太仲、谷左沖、伊藤惣次、淸田文興、江村傳藏、良野平助、篠三彌、林周助、芥川湯軒、龍彥次郞、山脇、香川、後藤ノ先輩ニ交ルヿヲ得タリ。

余嗜好ノヿ專ラ奇書ニアリ。名物多識ノ學、其他書畫碑帖ノヿ、余微力トイヘトモ、數年來百費ヲ省キ、收ル所、書籍ニ不足ナシ。過分ト云ベシ。其收藏ノモノ、本邦唐山金石碑本、本邦古人書畫、近代儒家文人詩文、唐山人眞蹟書畫、本邦諸國地圖、唐山蠻方地圖、草木金石珠玉蟲魚介鳥獸、古錢、古器物、唐山器具、奇ヲ愛スルニ非ズ、專ラ考索ノ用トス、蠻方異産、右ノ類アリトイヘトモ、ミナ考索ノ用トス。他ノ艶飾ノ比ニ非ズ。

余平生茶ヲ好ム。酒ヲ用イズ。烹茶ハ京師賣茶翁親友タリ。故ニ其烹法ヲ用ユ。老翁ガ茶具余ガ家ニアリ。末茶モ好デ喫ス。彼茶禮ノ暇ナシ。

余幼年ヨリ絶テ知ザルヿ、古樂管絃、猿樂俗謠、碁棋諸勝負、妓館聲色ノ遊、總其趣ヲヱズ。况少年ヨリ好事多端暇ナキ故ナリ。勝ヲ好マザルハ、余願養ノ意ナレバナリ。

余弱冠ヨリ壯歳ノ比マデ詩文ヲ精究ス。應酬ノ多ニ因テ贈答ニ勞倦シ、况才拙ニテ敏捷ナルヿアタハズ。大ニ我胸懷ニ快ナラズ。交誼ニ親疎アリ、陣アルヲ覺フ。幸不才ニ托シ、限テ作爲セズ。偶興ノ到ニアヘバ、佳句ヲ得バ快樂ノヿトス。

寳暦六年丙子、余廿一歳、森氏ヲ娶ル。生質微弱ニシテ、余ガ多病ヲ給スルニ堪ヘズ。況十年ヲ歴トイヘ𪜈一子ヲ産セズ。故ニ家母甚コレヲ愁、明和二年乙酉、家人ニ命ジ、一妾山中氏ノ女ヲ娶、給仕セシム。妻森氏ト和好ニテ妬忌ノヿナシ。山中氏モ侍婢トナリ、敢テ當夕ノヿニ非ズ、三年ヲ歴テ、妻森氏明和五年戊子冬一女ヲ産ス。（幼名ヤス、安永三年甲午六歳癘夭。）又明和八年辛卯一女子ヲ産ス。（幼名スヱ、無恙生長ス。）妾山中氏ヨリ妻ノ微質ヲ助ケ、二女ヲ憐愛ス。故ニ妻妾反更和好ニメ嫌悪ノヿナシ。家事ヲ勤儉シ、小女ヲ養育シ、數十年ノ閑居ニテ、余ト小女、妻妾ノ外、一小婢ヲ仕フ。家内五名ノ外ナシ。故ニ來賓多シトイヘ𪜈、禮節饗應ヲナスヿカタシ。

世上名本分士農工商アリトイヘ𪜈、余微質多病ニシテコレニ堪ヘズ。故ニ父母ノ遺業ニテ頗文字ヲ知ル。實ニ昇平ノ一樂ナルベシ。然ド𪜈、世上遊惰放蕩ノ徒文字ニ托シ、一種ノ無賴漢多シ。余ガ愧ル所ナリ。因テ閑居ストイヘ𪜈、名物の學ヲ精研シ、不朽ノ微志アルノミ。

余家君ノ餘資ニ因テ、每歳受用スル所三十金ニ過ズ。其他親友ノ相憐ヲ得ガ爲ニ、少文雅ニ耽ルヿヲ得タリ。百事儉省ニアラズンバ、豈今日ノ業ヲ成ンヤ。世人余ガ實ヲ知ラズ。豪家ノ徒ニ比ス。余ガ本意ニアラズ。

孔恭が好事とその交遊の廣かりしことゝは、右の遺筆にも明なり。明和五年の三都學士の評林の頭取連の一人たり。文晁（寛政三年）蜀山人等も曾ては蒹葭堂を訪ひしこともあり。長島侯增山河內守（靜山公）の知をも辱うし、靜山公の自記にも、「多識博覽、舊年より其名を聞く、一歳旅次に遇て同氣相求め、互に好古の癖を以て、是より厚く接遇せしなり、又は蒹葭堂を訪ひて、其所貯の物を見る、（中略）彼堂を訪はざる時は、旅次に孔恭自ら數物を携來て予に示す、因て古碑の打搨、古書眞蹟等、彼に依て得しもの多し」など見えたり。孔恭の曾て密釀の事に坐するや、靜山公その領內に擇びて地面を見立つべき恩命あり。仍りて勢州川尻村の閑地を得、家を建てゝ暫くこゝに居りき。吳服町に移りしはその後の事と見ゆ。爾來文房具等を鬻ぎて表面の活業とせり。享和二年（壬戌）正月廿五日享年六十七にしてこゝに歿す。姪吉兵衛（後通名吉左衛門と改む）家を嗣ぐ。同年三月七日西町奉行の與力安藤丈之助幕府の命を奉じて遺物を調べ、六月十三日江戸に送り、（當時の目錄に物產八百廿一點、唐本二百三十七册（簞笥一掉）あり）又勘定奉行柳生主膳正の沙汰に依り、十一月朔日更に爾餘の藏品を江戸に送りぬ。（この目錄に唐本千八百十八册、醫書物產寫本廿七册、唐寫本百八十二册、和板本十一册、地圖八十九册、風土記九十七册、外國地理志類四十七册、唐本醫書廿六册、物產百廿二點、大明省圖一箱、明嘉靖帝卷一箱、琉球夫子廟碑一幅、法帖五十册（長持五掉）あり）この中の幾分は御學問所に留められ、文化元年五月十九日、吉左衛門に金子五百兩を賜はりき。（文政八年九月廿五回忌とて、二代目蒹葭堂諸國の文人に詩歌を求めしことあり（古書備考）、明治卅四年百年忌の追薦に遺品の展覽ありしこと、大坂朝日新聞に見えたり、その列品中趙陶齋の蒹葭堂記、安永八年六月朔日以後歿する前までの自筆日記（松雲堂藏）、蜀山人の訪問せし時の自記（大槻如電翁藏）、蒹葭堂筆歳寒二雅圖（磯野氏藏）、玄德訪司馬徽山莊圖（奈良橋本氏藏）等ありき）孔恭が當時文雅場裡の一大重鎭として、翰墨の隆興に與りて力ありけむことは、田能村竹田の記せる所に見るべし。左にこれを掲ぐ。

木世肅名孔恭、所處之堂、名曰蒹葭、博物好古、善賞鑒、精草木鳥獸之學、收藏法書名畫、金石彝鼎、及夷蠻所出、異品奇物、充積棟宇、家故饒裕、爲其殆傾到、尤好奬譽、推挽後進、不惜齒牙、凡有才藝可觀者、必傾心結納其人、交滿四方、當時人士靡然爭趨、蒹葭堂之名、布海內也（山中人饒舌）

風流好事、推爲一代泰斗、所貯書畫金石、凡百奇玩之富、甲于海內、三都以下四方有名之士、無不通交、有一技藝苟成名者、雖僻邑遐陬、亦引挽推奬焉、池大雅謝春星二老、最相親友、常出名卷祕册、品評鑒賞、耳染目濡、加之天資高逸、偶然作小品山水花卉、手韵秀絕、風趣遒上、雖與大家不爭上乘、自然超邁、不可企及也、（竹田莊師友畫錄）

第三百二十二　木孔恭筆松下高士圖

孔恭が書を大岡春卜、柳里恭、池大雅等に學びしことは、前出の遺筆に見えたり。然れども其の作風敢て三家の何れにも同じからずして、別に一種の格を成せり。蓋し其の賞鑒の眼識おのづから然らしめしならむ。書乘要略に曰く「寫山永、脫灑簡略、墨梅水仙、亦並得稱人望。山中人饒舌に曰く「善山水蘭竹窠石小幅、閒雅清穩、撫法近世、其意蓋在自娛、不必抗衡古人、俱爭上乘、而一片酣古之氣、藹然自見矣、若天假年斯人、使予從遊門下、以得指授、憲也不才、猶或髣髴古人之萬一矣、噫」竹田のこれを慕ふこと厚きを見るべし。其の遺作を觀るに、好事家の餘技に似ず。用筆頗る雋巧、山水の如きは皴擦整密にして渲染を善くし、大いに明書の體を得たり。こゝに掲ぐる一圖、以て其の面目を窺ふに足る。

孔恭の門人

蒹葭堂に畫を學びし者に米廸、竹坡の二人あり。竹田莊師友畫錄に取りて、左に其の小傳を載す。

米廸本姓八木、修爲米、號巽所、阿波人、早歲從蒹葭老人而學、泛交於當時諸士、週旋者數年矣、善書、最長八分、畫倣清人、作淡彩花卉、清淡有致、善鑒古法書金石、文房筆研諸玩、近日阪府耆舊相尋淪歿、今日瞿鑠仍存、能記往事者、獨斯人、而竹坡次焉、其前適曰氷仙、森竹窓妹也、善畫白描美人、竹坡亦從蒹葭翁受業、讚州人、早有才名、飲酒能罵、善畫山水花卉、並有別趣、與時流不同、晩年技益精進矣、頃閱其紙本山水、高六尺橫二尺、不多用渲染、簡淨明潔、自有高致、詩佛老人題其上、字亦流易宛轉、

平安四竹

池大雅等と相前後して、平安の四竹と稱する文士の專ら墨竹を善くする者あり。亦これ南宗隆興の氣運を添へたる一勢力にして、蓋し大鵬李用雲等の影響に出でしなり。即ち宮鎬圃、李蹊、淺井圖南、御園中渠の四家とす。鎬圃姓は宮崎、名は奇字は子常、通稱常之進、尾張海西郡鳥地村の人なり。近世畸人傳に曰く。

生來温厚謙遜にして、しかも聰慧强記、十歲既に詩を善す。父是にいへらく。勉よや、吾業を繼ずば我子にあらじと。十三歲の時母氏背に灸す。鎬圃頻に涕泣す。母氏熱に堪ずやとゝふ。答ていふ。しからず。吾聞身體髮膚敢て傷ひやぶらざるを孝のはじめとすと。然るに灸せざればかなはぬ病身なるを歎侍るのみと。生につかへ、死を喪せる孝心、始終かくのごとし。年十八、父母ともに京師に來り、其父東涯先生に學をうくるが故に、亦次で是に事ふ。東涯沒て蘭嵎に從ふ。學成て其名籍甚。來學ぶもの多し。又書は趙子昂を學び、深ク軌範を得、また畫を能す。畫竹はことに風韻一家をなせりければ、世人平安四竹の一とす(註畧)かゝれば其書畫を請者、月に日に絕ず。母氏かくのごときを見て、いさめていふ。おそらくは人汝をもて畫工とせんと。鎬圃これに感じて又畫ず。其後故鄕の甥の家に投宿せし時、甥氏紙筆を出して請こと頻にして曰。母堂にはよきにまうさん。吾にして君の畫を藏ㇱずはあるべからずと。一夜責れども終に筆をとらず。一たびとゞめし言を食ず。他人への義を省みて、甥氏に私せざるなるべし。書も亦次でとゞむ。かゝれば世ます〳〵其書畫を珍重す。京師に住ること數十年といへども、俗習に染ず。世情に疎ことは、一日東山に往てかへさ、雨にあひ、二條加茂川の東なる賤妓の居處を過、詹下をあゆみてこれを避るに、妓ども入給へ〳〵と頻に呼ぶ。先生歸りて人に語らく。仁といふものは實に人の固有也。吾雨にあへるを見て、彼輩頻に呼ぶ。傘をかさんとなるべしといへりしかば、人笑ひて、仁といふものと異名す。謙遜の跡は、其相識悟心和尙の詩集の序を書れしにも、其辭氣弟子の列につくもののごとくなれば、和尙辭すれども不肯。是まさに予がしる所なり。凡近世の諸儒誇大自負風をなすに表裏し、其名の

奇をこのまず。字の常をつとむ。是即奇なりといふべし。されば郷黨に交ること愚なるがごとく、友人と會しても、必座を下りて、懼るに似たり。終るとき五十八。東山永觀堂の墓地に葬る。門人私謚し、行恭といふ。所著備考錄、經說、詩文集數卷、皆いまだ稿を脫せずして簀を易ふ。をしむべし。

銙圃の歿したるは安永三年（甲午）十一月十日（忠長錄）なり。正二位大納言源信通碑文を作りて嗣子に與ふ。（近世叢語）明和五年の平安人物志にその名出で、出水室町東に住せし由見えたり。畫乘要略に曰く、

北汀先生曰、相傳、有客至銙圃門、問曰、是寫竹之儒宮崎氏之居耶、銙圃母聞之、以爲辱、深戒銙圃、令不復寫竹矣、卓堂先生曰、銙圃聞人呼寫竹儒士、深以爲耻、終身不復寫竹、何局量之不宏哉、昔文湖州蘇東坡之流、並寫竹、風流照映一代、文人遊戲、何辱之有、銙圃見解之未至、可惜矣、

李蹊は山科氏、名は元寘、字は潤甫、醫を業とし、宗安（忠長錄、書畫一覽は宗菴、古畫備考は琮安に作る）と稱す。亦墨竹に名あり。（畫乘要略）延享四卯年八月八日、四十六歲にて歿し、眞如堂に葬らる。（忠長錄）淺井圖南名は直、（忠長錄は正直とす、印文藤直）字は維寅、通稱賴母、醫を業とす。亦墨竹に工なり。（畫乘要略、書畫一覽、一覽には京師醫學教授とあり、名人忠長錄には「東軒男、始藤五郎、號敬齋、尾州侯儒臣、天明二寅年八月五日歿す、歲七十七、名古屋法華寺町常德寺に葬る」とあり、同人か）御園中渠名は序（つね）尹、（古畫備考、畫乘要略は常平に作る、誤か）字は廷瞻、通稱主計助。亦墨竹を工にせり（畫乘要略）古畫備考逸人畫史（異本か）を引いて、「針師に補せらる、詩歌にも秀で、傍ら墨竹をよく寫し云々」と記せり。畫乘要略に曰く、「梅泉曰、銙圃圖南等、博覽能文、好作墨竹、共則明人、瀟々灑々、風神有餘、時人雅賞、稱平安四竹」

高陽山人

池大雅と年代を同うし、江戶に在りて早く南宗を唱へたるを高陽山人とす。山人は土佐の人、本姓香宗我部、仲山氏。（續諸家人物志及逸人畫史中山に作る）諱は象先、字は子和、（續諸家人物志は字を廷沖とす、畫譚鷄肋の序末にも「乙未之春、高陽山人仲庭沖」とあり）通稱初め松之助、（繪畫叢誌）後清右衛門。高陽はその號なり。二十六七歲の頃、名を修錫、字を子修、號を鎌川、三十歲の頃名を清、字を汝玄、號を江竹又香山、四十歲の頃、名を適、字を士達と云ひ、中山氏を修して仲の一字とし、醉墨と號しき。象先の名、廷沖の字及高陽山人の號は、四十二歲の頃より用ゐ、五十三歲に及びて、名を廷沖、字を子和と改め、松石齋、玩世道人など號せりと云ふ。（この項繪畫叢誌に依る）性英敏、幼より書畫を好み、書は關鳳岡に、畫は彭華川に學べり。父理右衛門勝文は高知の西堺町に住みて商を業とし、兄忠七元守は神道を好み、又靜流の薙刀及小鼓を能くせり。唐物、書籍を鬻ぐを業とす。理右衛門曾て堺町に新路を開かむとせしかど許されず。忠七に至りてこれを果せり。山人少き時富永惟安に就いて儒學を修め、兼ねて詩賦に長ぜしかば、新路の成れるに當り、七律を賦して父が報國の心厚かりしことを敍せり。寶曆中江戶に出で、暫く鳳岡の家に寓し、幾もなくして家を搆へ、（逸人畫史には「江戶田所街に寓す」とあり）門に標するに高陽山人の號を以てし、終にこれを以て行はる。井上金峨、澤田東江等と交り、山人の畫に東江の書もて金峨の文を題せるをば、當時世に三絕と稱せられきと云ふ。某人曾て深川の親和をして山人の畫に題せしめむとせしに、こは我が得意の畫なり、他人の讃は好ましからずとて、みづからこれに題し、後自讃を常とせり。山人の名漸く高く、畫を乞ふ者多かりしかば、時として門人をして代筆せしむることもありきと云ふ。曾て玉洲と共に京都に上り、途三井寺に過りし時、梯を借りて鐘銘を見、一人これを讀み、一人これを記すに、聲絕えず筆滯らず。寺僧いたくこれを感じ、請じ入れてこれを饗せしかば、共に書畫を作りて謝せしとぞ。寶曆十一年四月、三口の俸を賜はりて某侯に召され、帶刀を許さる。（逸人畫史には「土州の人なり、本藩の史臣たり、世人畫

家を以て目す」とあり安永五年夏熱海に浴し、富士山に登る。同九年二月心疾に罹り、姪利右衛門に伴はれて郷に歸り、三月十二日歳六十四にして歿す。逸人畫史には「晩年狂氣して本國に歸る、浪花より土州へわたる船中にて死」とあり土佐郡蔛野山に葬らる。墓碑には「嗚呼源山人墓」と題し、銘は金峨の撰にて東江これを書せり。山人娶らず子なし。姪利右衛門家を嗣ぐ。著す所高陽山人詩稿、觀鶩百譚批考及畫譚雞肋門人岩處和抄錄あり。以上百家說林の小傳に依る逸人畫史に曰く、「人物に妙なり。山水花鳥之に次ぐ」。續諸家人物志に「專ラ沈南蘋ノ風ヲ摹シテ一家ヲナス」とあれど、その遺作を見るに、大抵水墨にして、毫も南蘋の風あらず。勁銳の用筆さまで賞するに足らざるなり。然れども關東南畫の開祖として記せざるべからざる一作家とす。

寶暦明和の盛況

三大家の比較

寶暦、明和前後は、實に我が近古に於ける畫界刷新の革命期なりき。來遊の畫家及舶載の明清繪畫の刺戟と影響とは、この頃に至りて始めて醇熟し、大雅、蕪村、應擧の三大家を輩出して、龍驤虎嘯の壯觀を現じぬ。然れども大雅の作は文人の墨戲に過ぎず。應擧の畫は寫生に局して格調低し。若夫手腕の超凡、技巧の自在、眞に藝苑の巨擘と目すべく、而も趣味深く品致高くして、行家の習氣を脫卸せる者は、獨り蕪村を推さざるべからず。竹田が「大雅逸筆、春星戰筆、二老各有所稽古」、又「大雅正而不譎、春星譎而不正、然均是一代作覇之好敵手」山中人饒舌と言ひ、更に「近日以大雅春星二翁連稱、亦屬不類」同上と論じ、二家を對稱しながら、而も頗る蕪村を貶せるは、固より文人癖のみ論ずるに足らざるなり。

謝蕪村

蕪村初名長庚又宰鳥、碑文には「稱宰鳥、一名長庚」とあり、古畫備考增補宰鳥を一號とす後名を寅、字を春星と云ふ。碑文、畫乘要略攝津國東成郡毛鳥村に生る。俳歌人名錄その地蕪菁の產に名あるを以て蕪村と號し、碑文曰、「以其生之地屬天王寺村、村名于蕪菁、乃又號蕪村」又郡名を取りて東成とも號せり。夜半亭、落日庵、三果堂、紫孤庵、碑文孤に作り、諸書多く狐に作る、狐か碧雲洞、白雪堂、四明、以上碑文雅仙堂等の別號多くは俳號に用ゐきあり。幼にして母の生家に養はれ、丹後國與謝郡に在り。仍りて與謝を以て氏とす。碑文、畫乘要略曰、「初遊丹後、居與謝、愛其山水、因以爲氏」、逸人畫史に「丹後與謝の人なり」とあるはこれの誤長ずるに及びて江戶に赴き、俳諧を早野巴人に學びて、その入室の弟子たり。既にして奧羽諸州を歷遊し、後京都に住して、俳諧の宗匠たり。夜半亭の號は、師巴人の歿寬保二年六月二日後これを襲へるなり。碑文その奧羽の歷遊は何れの頃なりけむ。逸人畫史に左の一話あり、

或人の話に、下毛日光山下鉢石齋藤氏の家に、源平盛衰記狂書の卷軸二卷あり。是は天明中(信じ難し)行脚のみぎり、暫くこの家に逗留せしが、其家の主人盛衰記をよむ。蕪村其傍に横臥して、其よむ所を寫す。終に數十紙におよべりと。此翁沒後、其妻黠性なる者にて、此事を知り、下毛日光に下り、齋藤氏に乞ひ求めて京都に歸り、大によき價を得たりとぞ。

因みに言ふ。松島觀瀾亭にも蕪村の俳書の卷軸あり。

京都にては四條烏丸東に住せりと見ゆ。明和五年平安人物志天明三癸卯年十二月二十五日病みて歿す。享年六十八。碑文及俳家人名錄に依る、增補逸人畫史(名畫傳所引)及書畫便覽等天明六年六十七歲とす一乘寺村金福寺芭蕉菴の側に葬る。一女あり。適く所を詳にせず。俳諧の門人寺村百池碑を建てむとして果さず。明治十五年蕪村の百年忌、百池の五十年忌に當り、百池の孫百僊貲を捐てゝ、碑を建て、草場船山廉に託してこれに銘せしむ。銘に曰く、「俳門遁世、蕉翁遺流、畫苑傳芳、池家匹儔、片石托魂、山深境幽。」蕪村の遺筆に「書畫戲之記」名家書畫談にその影寫出づあり。左の如し。

我に妻子眷屬無。書畫をもて妻子眷屬とす。

我に朋友無し。畫をもて朋友とす。

我に金錢無し。書畫をもて金錢とす。

我に衣服無し。書畫をもて衣服とす。

我に家、くら、田地、山林、川等無し。書畫をもて家、くら、田地、山川、林とす。

吾遊所へゆかず。書畫交易はゐかいをもて遊所とす。

吾に無師。古今の名書畫をもて爲師と。

吾地獄極樂をしらず。書畫をもて地ごく、ごくらくとす。

予天下の法を守りて儡神の像畫を安置すといへども、あへて祈らず。我心體をもて神佛とす。

花七日物喰はずとも書畫の會。

長き日を書畫に迷ひて十二月。

鳳凰都於　東山雅仙堂

蕪村の常に村瀨栲亭に愛許賞讃せられしことは、山中人饒舌に見えたり。逸話は多からず。僅にその一二を得て左に掲ぐ。

甞搆書室、雖妻子不許妄入也、當時雖有摸擬之譏、然搆思結圖、唯恐神思之散亂、一室之中、即入三昧、其爲一代之作者、良有以也哉(書乘要略)

某寺開龕、展觀古蹟數十幅、蕪村日往觀焉、僧悅曰、子隨喜至於此耶、蕪村笑曰、吾豈佞佛哉、唯慕衡山山水而來耳(同書、梅泉)

讃之丸龜有一寺、曰妙法寺、明和之比、寺僧眞觀者、淸高且好韻、適蕪村漫遊之途次、來宿於金陵、眞觀訪之、一見如舊識、則相携歸、日夜對酌、興至蕪村即舐毫、經日之後、寺中之襖壁盡畫焉、世所謂蕪村寺是也(繪畫叢誌、讃岐嶺山、寒山拾得圖、蘇鐵圖及山水等現存)

蕪村は實に俳壇の大作家なり。近來益々世に重ぜらる。然れども本書は今これを論ぜず。その畫は初め彭百川に學べりと云へども、(古畫備考)畫風は全く百川に同じからず。蓋し元明の古蹟に參してみづからその格を創出せるなり。

第三百二十三　謝蕪村筆秋山烟靄圖

第三百二十四　同筆溪山高隱圖

第三百二十五　同筆秋溪漁舟圖

第三百二十六　同筆新綠杜鵑圖

第三百二十七　同筆松徑歸樵圖

第三百二十八　同筆花鳥圖

書乘要略に曰く「深慕元明名家、山水雅韻沖潤、神氣自足、愈看愈有味、余每觀其山水、心神恍惚、若置身於其間、宜哉、海內學者多宗之。」又曰く「北汀先生曰、蕪村畫山水、多設題製圖、如賦詩、而後下筆、故有無限意味(中畧)近人或謂、蕪村皴法疎漫、(中畧)夫大雅蕪村馳騁古人域、遂爲一代作家、豈可輕議乎。」山中人饒舌

に曰く「掌觀春星秋山行旅圖、用筆傅彩、全然明人、至其屋宇橋梁、布置點景、取諸邊邑僻境所有之寔景、故景新法古、用意最深、高名下無虛士、洵不誣也」北窓瑣談に曰く「蕪村が俳諧、才氣秀拔、其作皆人意の外に出づ。學びていたらるべきの事にあらず。其人天然の才なり。畫亦妙品。其中能出來たる山水などは、近世前後に並ぶ人なし。存生の間、さのみ畫名の高からざりしは、俳諧に掩はれたると、眞の眼目ある人の世になきとによるべし」これ等前人の評賞皆過褒に非ず。おほよそ斯派の名匠を數ふるに、文晁は北派を交へて覇氣を脫せず。梅逸は縱橫稍匠氣あり。畫品の高雅、蕪村と衡を爭ふに足る者、獨り後に渡邊華山先生あるのみ。こゝに掲ぐる所の諸圖、未だ以てこの絕代の大家の面目を盡すに足らず。觀者須く文人畫三大家集及南畫十大家集を參看すべし。

蕪村の畫に謂はゆる俳畫あり。蓋し蕪村を以て俳畫の祖とす。逸人畫史に「又狂畫多し」と言へるは即ちこれなり。されば山中人饒舌にも「元祿間、芭蕉嵐雪其角數輩、以俳諧歌鳴、春星撰三十餘人、自圖其像、用減筆法、近日畫史所寫人物、面孔鬚眉、以至衣摺綯紋、用筆行墨、簡便巧黠、別開一体、與古不同、蓋春星作之俑」云と言へり。この種の畫一種の趣味ありといへども、深く賞するに足らず。竹田の評語當れりと謂ふべし。

蕪村の門人

蕪村の門より出でゝ最も著れたるは吳春あるのみ。その餘紀梅亭、奉時道人、豐谷等あり。梅亭姓は紀、名は時敏。山中人饒舌に曰く「師謝春星者、又記二人、一則月溪、一則楳亭、楳亭差守師法、(中略)僦居大津、東游日、一造其門、時年望八、神明不衰、篝燈下研拂無倦、而筆益蒼老」師友畫錄に曰く「梅亭初爲若城家僕、因學畫、頗敏慧、藍田乃令就蕪村受業」逸人畫史には「大津の人なり」と記し、更に曰く「花卉翎毛に巧なり。又狂畫あり。愛すべし。其圖抱腹すべきもの多し。晩年十六羅漢を寫し、石山寺に奉納すとて工夫しける。果さずして死す。惜むべし。其粉本伊勢山田箕輪氏にあり。余遊勢の日目擊せしが、筆力勁健、古人に耻ざる所あり」奉時道人は逸人畫史に「浪華の人、松本氏、畫を謝蕪村に學び、よく其山水の法を得たり、又戲に烟管を以て墨を洒ぎ、蟾蜍を寫す」とある外、諸書に見えず。豐谷の事は僅に畫人逸話(繪畫叢志所載)に見えたり。左にこれを抄出す。

蕪村門人、有豐谷者、壯年遊于信北、日暮失途、求一農家、乞宿、主人曰、粗食菜羹、無可供客者、以淩飢爲足則應命、豐谷大喜、解履而入、眠於一小室、夜半聞隔障悲哭之聲、豐谷怪之、側耳聽之、有父子歎離別之言、豐谷啓障而入、具問其由、主曰、比年不熟、不能償租、將賣一女以補欠、日巳逼矣、明日將別、故歎耳、豐谷憐之、問其金員、不甚多、乃謂主曰、余畫工也、子若勸一二富家說之、必有請求者、幸得謝金、盡惠之、何賣一女爲哉、余唯勞一臂而已、請速謀之、主人大喜、奔走四隣募之、頗得多金、則與主人、令償年租、女有姿色、感恩日夜侍豐谷、豐谷亦不忍棄、遂乞而爲夫妻云、

寬政、文化、文政頃の諸家

南宗の畫運は、寶曆明和の交に於ける大雅、蕪村に由りて開かれ、文政、天保の際に至りて、隆盛を極む。その漸進の過程を爲せる者、梅厓淇園、雲泉、米山人、玉堂及三石の徒あり。左にこれを列敍せむ。

十時梅厓

十時梅厓の傳記は梅厓先生傳(浪華笛村芳橘撰述、明治廿三年二月)最も精し、左にこれを錄す。

十時賜字子羽、姓源、初名業、字季長、通稱半藏、梅厓其號、別碩亭又淸夢軒、(人名辭書「有碩亭又夢軒」に作るは誤ならん)浪華人、始受學伊藤東所翁、以經義被稱、後入趙

陶齋門、學書法、平日能書、旁嗜墨戲、嘗其在京師、與皆川淇園、池大雅等友善、深解書意、適長島藤侯、（伊勢增山家）副鎭於大阪城也、未及下車、輙聘徵趙陶齋、々々乃薦梅厓、侯既下車、輙聘梅厓、諮之以道藝之事、在鎭間蓋數々焉、後踰年、侯又副鎭於大阪城、天明四年甲辰秋、侯就國、梅厓從之長島、建學校、曰文禮書院、侯待遇殊摯、然梅厓性嗜酒、磊落奇偉、世目以狂、終不與世合、且連不得志於有司、寛政二年庚戌春、乞數月暇、遊長崎、與淸人文酒優游、問六法于費晴湖、又問筆法于陳養山、養山曰、古來書家、把筆懸針、必須懸腕、今先生用筆、得懸針法、欣服々々、遂留數旬、詩酒相歡、有贈答詩文、裒然成卷、嘗費晴湖書中曰、僕亦同癖、飽烟醉花、游歷自苦、足跡及三十三國、皈途過浪華、訪舊知、遍游近畿名勝、時泉南有食氏、爲其地之陶朱、主人靑圃、好學耽書畫、頗富收藏、得梅厓大喜、日夜相親如水魚、留月餘、故愆皈期、蓋意在假罪脫世務焉、後皈藩、有司果責以犯法、閉門蟄居、偶藩有募金之事、請於食氏、々曰、貴藩有十時半藏者、即得借其人、則獻金惟命、於是群議一決、赦其罪遣之、而進秩物頭格、以優賞之、梅厓遂爲食氏上客、專以筆墨爲命、臨撫其藏幅書畫法帖、技大進、然時無具眼、來乞者鮮矣、又善篆刻、自用牽爲手刻、中有兩世老儒印、居數年、復皈于藩、後終致仕、皈隱于浪華、與細谷半齋、木村兼葭、米山人、僧少林、濱田杏堂諸老、詩酒書畫、日相往來焉、曾在長島也、爲文禮書院學長、文化元年甲子正月廿三日歿、歲五十六、葬于浪華城南八丁目寺町正念寺、法號和敬院謙翁梅厓居士、男禎齋號梅谷、業醫、

笛村桑者曰、故老云、梅厓學書于大谷永庵、而究其蘊奧、故書其体、則後署靑蓮院宮門屬、其或然、余亦見一本、晚年其書佚宕中有法度、畫又從書法中來、不拘繩墨、而至臨撫者、則殊用意、觀之亦可以知其爲人歟、曩余讀書錄中別論之、今略之、

長田古香曰、先生始受學伊藤東所翁、余藏賀其七十壽詩書一幅、可以徵也、趙翁只學其筆法而已、又曰、先生始學書于大谷永菴、而究其蘊奧、余曾見其所書號往來者刻本數種、然則隨趙翁者、最在壯年矣、

河野春帆曰、梅厓一生風骨、莫不詩酒書畫、能所以超脫塵世而爲多少奇偉之也、又曰、記酒脫之人用酒脫之筆、讀之亦生酒脫之氣、

梅厓先生傳には附錄梅厓先生詩文を添へ、傳芳平氏所藏畊圖古淡可觀作歌以贈（寛政癸丑夏）及菅沼府君之碑（享和三歲次癸亥夏六月七日）を收めたり。以てその文藻を觀るに足れり。畫乘要略に曰く「以儒爲業、傍作山水、有風致、極其洒落。」古畫備考は梅厓の歿日を廿五日とし、又人名辭書及石亭畫談等と共に、享年を七十三歲と爲せるは非ならむ。石亭畫談に左の逸話一則あり。

十時梅崖名は賜、字は子羽、平安の一書生也。性靈慧、頗多技に涉る。一歲江戶に下る。一文士の誘引に從ひ、雪齋增山侯の第に到ル。酒中艷曲をなし、且歌ひ且舞ふ。所謂手妻經業の技に至まで、皆能之を爲す。坐客其妙に驚かざるなし。侯意に是牽頭也と。よりて纏頭を投じ之に與ふ。梅崖笑て之を置て未だ收めず。時に客中或は醺酣に乘じ、書畫を弄して合作をなす。梅崖亦之に預る。寫書題詩、其妙また席中の巨魁となす。侯益驚歎す。是より梅崖侯家に往來し、遂に聘せられて其家の儒官となる。後辭して浪花に住し、こゝに終る。

皆川淇園

皆川淇園はその先藤原秀鄕十世の裔小山政光の孫宗員に出づ。宗員（彌四郎）左衛門尉に任ぜられ、下野都賀郡皆川庄を領し、因りて皆川を氏とす。（寛喜頃）その族裔氏秀又皆川城に居り、五十餘鄕を領し、（文明頃）皆川氏中興の祖と稱せらる。（その裔永く皆川村に住す）庶族常陸（那珂郡野口村）に住せる者あり。その後裔長太夫某と云ふ者、寛永元年東福門院の入內に從ひて京都に移る。その子十左衛門某新上西后に事ふ。十左衛門の子久右衛門、久右衛門の子成慶（字春洞、號白洲、外戚某に養はれ、備前に人と成り、十八歲にして京都に歸り、家を興す、家業は骨董買なりと云へど明ならず、學を好み、書を能くし、詩賦文章を作る）相嗣ぐ。成慶は即ち淇園の父なり。（成慶鹽谷川氏を娶り、子女九人あり、長女阿波の儒者合田溫に嫁す、長子は即淇園、次女は院の承仕濱岡光堅に）

嫁す、次子成章字は仲達、富士谷氏を嗣ぐ、國學の大家として著名なり、三女夭、四女八木某に嫁す、五女大舍人駿河守齋藤政信に嫁す、三子成均字は叔則、剛中と號す、四子堯泰寺尾氏を嗣ぐ、成慶安永八年八月四日歿す、歳八十、京極阿彌陀寺に葬り、私謚して擴元と云ふ 淇園の傳はその墓表頗る詳密なるを以て、左にその全文を掲げ、加ふるに衍註を以てす。

明經先生墓表

先生諱愿、字伯恭、皆川氏、號淇園、又號節齋、

又有斐齋の號あり(印存す)通稱文藏。

生而穎異、四五歲能識字、其父試書杜甫秋興八首授之、不日成誦、自是而課讀書、一過便能記、弟成章亦夙慧、其父常鄙世儒記聞之學、有明經弘道之志、而自顧季老莫復能焉、命二子學期必成、經史百家之書、凡可資聞見長學識者、無不隨需給之、當時耆宿可以得啓發之益者、無不令交通往來、

淇園、成章共に幼學は大井蟻亭(名守靜字篤所、一號雪齋、攝津人)に就けり。淇園十一歲、成章七歲にして能詩の譽あり。蟻亭が一社神童と稱する由を記して贈れる七絕の一句に、稚年如汝古來稀とあり。父春洞も亦蟻亭を師とせしなり。淇園幼時又三宅元獻(名徵、號牧羊)及伊藤錦里(名縉、字君夏、通稱莊治郎)に學びき。(『皆川淇園』)

成章每有所聞、輒作疑問、人莫之能辨、乃博涉古今之載籍、至于罕遘者、必極搜索、無所不窺、年甫十五、與成章覲韓客于城南、席上唱和、語出驚人、名馳海外、先生甞以文示一老儒、其人爲竄改數字、就叩其義、則曰如此覺較優耳、不辨其故、先生私謂、不知字義、文固不可作、亦不能解經之不明、職是之由、自是專潛意字書、而字書訓詁、往々假借、不得其眞、乃類集古人用字之例、深思其理、疑竇稍通、又取諸象形、求諸聲音、乃始得口之所不能言者、於是悟名物之義本於聲象、曰、名生於聲、聲生於物、物生於天地陰陽四時之有常者、統乎道德、貫乎性情、發乎聲氣、著乎民言、故易說卦傳曰、神也者妙萬物而爲言者也、凡聖人之道、辨名爲要、名明則物察、物察則文義正當矣、易繫辭傳曰、夫易何爲者也、開物成務、又曰、開而當名、辨物正言、於是作朱墨籌、假之分彼我立內外、玩索數年、考易傳所言、法天地列九疇、而八卦生焉、八卦成列、而四象生焉、統九疇之八卦、而以繫之於四象、而六爻生焉、擬議諸六爻、而以定其象六十四卦成矣、先生既知聲音本於易、以定音記象式之法、以是開名物之義、即雖精微之極、亦可以得通曉焉、於是前所疑者、皆渙然氷釋矣、字義既通、文理始斷、以之讀古人之書、如揭白日而並行、成章已出嗣富士谷氏、亦推服終不可及、別治國史歌學自作一家、先生於是授開物之法、徵諸六經語孟左國等書、旁引會通、以審釋孝悌忠信仁義道德諸名物、作名疇六篇、又推字義而斷文理、逐章句而釋篇次、原述作之本旨、作易詩書儀禮戴記春秋語孟學庸繹解、凡數百萬言、率皆行於世、

淇園年譜に依るに、その始めて儒業の門を開けるは、寶曆九年廿六歲の時なり。同十三年龜山藩幕命を以て韓使を枚方に接遇す。淇園文事を以てその員に備はる。著書中經書を解釋せるもの卅八部、子類を解釋せるもの七部、聲音の學に關するもの四部、文字に關するもの十二部、詩文に關するもの及自作の詩文集廿二部、醫書二部、雜著十四部あり、この中未刊の書少からず。山中人饒舌に曰く『學成一家、著書等身。』書乘要畧に曰く『近代鴻儒。』

而其於易、用力最極矣、

著書中易に關するもの二十部あり。門弟簿の外、特に授易記業帖あり。その首に題せし所左の如し。

夫易開物の道は、太古伏羲氏の製作より著れて、周文王之れを演べ、周易六十四卦を作り給へり。右の開物の道を用て、道德性命の理を明にせる書なる故に、易は誠に六經の蘊奥なり。漢より巳降は、其の道も文も湮晦して、其の書は存したれ共、亡せたるに齊し、愿幸に天の寵靈に藉り、誠求竭精、年を積みたる驗ありて、其の道始めて古に臻るに近きを得て、繹解の書を著はしたり。其の義の精微なる所は、面命に非ざれば盡しがたし。されば右の學を傳ふるに、其の受業の末流の人の、其の心或は未だ至公ならず、私智私便を間へて、末習を傳へて、至道の昏蔽を爲し、天に背かん事を懼るゝ故に、別に五條の禁戒を左に設く。

一。愿著す所の易經繹解、象義の二釋、數所の文に徵して後に定め置きたれば、妄に改易せん事を思ふべからず。萬一誤有之を糺さんとならば、弘道館へ差出し、精確の上にて改可申事。

一。繹解梓行の上にても、眞實會通不申間は、猥に他人へ傳ふ可からざる事。

一。弘道館中此の授業の記、每卦每篇、朱點を以て其の象釋の傳畢を記し、靑點を以て其の義釋を記し、其を證とすべし。無其記の人は、一切妄と謂に屬し、猥に他人に傳ふ可らざる事。

一。說卦傳の文、別段に可受親授事。

一。愿傳ふる所の易の占筮の法は、猥に用て人の爲に卜筮す可らず。卜筮せんとならば、必ず左傳、國語の占の如く、文を爻象に擬議して辭となすべし。是とても館中より允許なき間は、堅く爲す可らざる事。

右の五條禁戒を設候故は、周易の文、人倫を以て天地、日月、鬼神の情に通じ候程の道相籠候事故、少々相違候ても、至道を亂り申候に相當り候故、設之置候也。

文化四年丁卯四月

願題

或思義而未得、則終宵不睡、晨起對机俟明、方食亦旁讀之、不覺食過度、必問侍人節量、門生來受敎、或與客語、未嘗移座、人退則復讀如初、是以奴婢掃其室、每無及其座、一日伺其不在、除皐比視之、重席坳窊、色爲黯黑、因撤重席、牀巳腐矣、其勤勉至于如是、文化乙丑、買宅西鄰、與門人咨、將搆學堂、以弘大斯道、聞者懽應、各捐財助工、經年告竣、命曰弘道館、春秋祀先聖、講習禮儀、

西村天囚著「皆川淇園」(大阪朝日新聞所載)に曰く「晩年に弘道館を建立せし工面、なか〳〵に面白し。其の事は、淇園が與清君錦(儋叟)書に詳なり。曰く。當今の時、黌庠閭塾以て其の觀を塞ぎ、絃般誦以て其の聽を充すに非ざれば、以て斯の澆俗を勸救するに足らずと。淇園の志は、外觀の廣大なるものを以て、世の耳目を驚かさんとするにありしが、其の資本としては、自ら百兩を出して基本とし、其の他の義捐協助を待んとするに在り。今の世の寄附募集を爲し、捐助の法を甲乙丙丁戊の吾等に分ち、募同志疏を配付し、二百人許りは巳に集りたれば、越前地方の募集は、足下を煩はしたしと云へり。其の學科及び校長に就きては曰く。世間の學塾は、其の人巳に歿すれば、子孫振はずして、往々頽廢するを見る。故に經史、文翰、國學の四科を設け、每月試驗を行ひ、三年卒業試驗を行ひ、優等者を選びて敎授を掌らしめば、絃誦の風永久に絶えざるべし。只今主宰の任は錦里先生及び足下の如きに非ざれば不可なるを以て、願くは讓らるゝ勿れと。是れ今の所謂公立學校の組織にして、淇園の家塾といふにはあらざるなり。學校

の敷地としては曰く。官に請うて曠地三千六百歩を得んと欲す。五六年後には寄附金も集るべく、其の上にて建築せん考へなりと。僖叟は天明五年に歿したれば、此の書は是歳以前なるべく、淇園が學館設立の希望や、一朝一夕に非ざりけり」。

學館設立について土地の下附を請ひし淇園の書二通あり。左にこれを掲ぐ。

於京都學文所取立申度趣意書

私儀以儒業門人共敎授罷在候に付、先達奉願帶刀之儀、御免被成下候。寄宿諸生幷家內手狹御座候に付、上立賣通室町東入町に小家借請差遣置候處、門人共其外所々より日々相集候諸生共御座候。且亦私儀從幼少修業仕候に付、見及來候處、爲勤學京都へ罷登候諸生之內、志は專に御座候得共、貧窮にて學業成就難仕、無是非中途に及廢學候者も多御座候。此段甚嘆敷奉存候。兼々思慮仕候處、何卒於京都學文所造立仕、貧窮にて志學候輩を助候樣仕度奉存候。乍恐有德院樣御時代、於江戶表菅原彥兵衛、於大阪表中井忠藏、學文所造立之義奉願候處、地面被下置候旨、奉承知罷在候。京都は殊更從諸國も學文修業の爲罷登候諸生多御座候に付、今度於京都學文所造立仕、永世退轉無之樣仕度奉存候。依之何卒京都の內何方にて成共、地面拜領仕度奉願候。造立の儀は、同志等門人共申合建設仕度、尤書籍も多貯置候間、右之所へ集候諸生は、書物不及相調、勤學爲仕、且又寄宿賄料等も、少分にて相濟候樣定置、萬事規矩を相立、貧者たり共、志次第にて學文成就候樣仕度奉存候。末々右學文所を預り、敎授可仕人體は、學文すぐれ候者相擇、附屬之儀御屆申上候て讓渡、何分永久退轉無之基に地面拜領仕、學文所造立仕度志願御座候。尤右に付、地面之外一切奉願候儀無御座候。以上。

亥十月(享和三年ならむ)　　儒者　皆川文藏」

學文所之儀、大阪表中井忠藏へ地面被下置候儀、御聞合被仰付候趣承知仕、難有奉存候。何卒此上、江戶表菅野彥兵衛方へ地面被下置候例、御聞合被仰付候樣奉願候。江戶之例は地面にて被下置候。大阪之例は代銀にて被下置候。代銀にて拜領仕候事は、拜領之者の子孫而已に相限り、私塾同前之趣に相成候事故、究竟は其の益も無御座、荒廢仕候基と奉存候。今度願之趣意は、畢竟京師永々之爲造立仕置、誰に不限、學文優長之者に讓渡し、兎角永々學者之勤厲に相成候樣仕置候に付、地面にて拜領被仰付、永々仍官邊御取扱に相成候樣仕置度奉存候に付、何卒江戶の例被聞合相成候て、以彼例御裁決有之候樣仕度奉願候。以上。

十一月　　皆川文藏

「皆川淇園」に曰く「初め淇園は弘道館設立に先ち、居宅の西家に假設して學生を養ひ、以て本塾の成立を待ちしが、其後官地を給せざりけん、弘道館維持費の寄附を平戶侯に請ひし書中には、新に西隣の空地を買ひ、諸門人の捐助を募りて、一講堂を作れりとあり。(中略)堂は南面し、南北三丈半、東西二丈(中略)堂頗る巨大なれば、修葺の費、永保の備、匹夫繊力の能く支ふる所に非ず。因て伏して請ふ。有司に命じて、每歲斯の堂の備費を助けられんことをと請へり。平戶、宮津、膳所の三侯に請ひし者、皆同文なりしが、三侯は初め建築の費をも捐助し、此に至りて皆維持費の寄附をも承諾せられたりとぞ。淇園はよき弟子を持つたものなり」(三侯の名共に受業門人帖に見ゆ)

「爲建弘道館祭地文」は今も皆川家に存せり。即ち左の如し。

夫道在天爲陰與陽、在地爲柔與剛、在人爲仁與義、名雖不同、才雖有異、物實一揆矣、自漢儒已降、名同而物易、道醨以世衰、家私其道、人立其德、其言道義、率

似争訟、彼其言道若是、蒙昧蔽塞、民其安頼、蓋亦由聖人開物之道湮、而天人之斷其通故也、愿承天寵學易、泝古伏羲氏開物、及文王六十四卦、率得徴合矣、而竊不自揆、有志于揭弘矣、以是故唱誘諸人、聚資鳩材、將作堂命曰弘道、工作今已垂半就、因將以始鑿地致築、以固柱礎、伏祈后土之神、鑒愿玆至誠、基福祚于斯、勿致百災、永垂佑護于玆堂、謹献清酌庶羞、敢以昭告、文化三年丙寅夏五月十二日、皆川愿稽穎九拜

堂成りて鄕射禮をも行ひきと見え、淇園劄記の中に左の記載あり。

丁卯仲夏上丁、弘道館にて鄕射禮を習はしけるに、庭の梅の盛なるを見て、

ますらをが矢を取る庭の梓弓、春をや梅の花にきそへる。

丁卯(文化四年)四月病不食、尙且旦夕講學、率弟子如平生、至五月十六日終于寢、親戚故舊、門人子弟、皆如喪父母、都下識與不識、莫不歔欷惋惜、葬之日、遠近來會者、無慮數千人、葬于京極阿彌陀寺先塋之側、私諡曰明經先生、

「皆川淇園」に曰く『朝廷に明經博士といふがあるを憚りて、後に弘道先生と諡せり』。

先生爲人、温厚沈毅、寛於容物、敏於行事、事父母至孝、靡不承歡、其父晩年有風疾、好遊覽、輙難出入、先生侍養撫摩、母曰吾病不足憂、唯恐汝業有妨、願汝勤學、勿以我爲念、先生亦不復强、

石亭書談に曰く『淇園父に事へて孝あり。父足病ありて轎にのる不能。因て官に請て車を作り、僕をして之を引かしめ、躬自看護して、名山勝地に遊行せしむと云』。淇園の父春洞は、安永八年八月四日歳八十にして歿せり。(淇園年譜)

又友于兄弟、厚于姉妹、最與成章善、季弟成均、亦以多才知名、然亦屢窮、先生每賑之、以全友愛、二弟皆先亡、先生視諸姪猶子、成均亡後、養其女爲子、擇配嫁之、

書乘要畧に曰く『梅泉曰、余嘗観淇園書雙鶴圖於銷金屏風、爲其女粧奩』今神田香巖氏所藏の松竹梅に鶴の金屏風即ちこれなりと云ふ。

其遇弟子、威而不嚴、愛而不狎、務誘其善、而戒其不善、自縉紳先生、學士大夫、至閭閻芻牧之子、遇之無異、一室之內、不迎不送、非其義則雖權要弗屈、非其禮則雖重幣請之弗往、王公大人、待以師禮、朝貴邦君、執弟子禮者多矣、登門籍者、凡三千餘人、其他自遠方托人通書、以請誨者、不可勝紀、

受業門人帖の首めに淇園の記せし門規あり。左にこれを掲ぐ。

一。諸門人學業致勤習候儀、專ら躬行を愼み、浮薄に不流樣可相心得事。

一。常に戒多言暴躁、可尙恭遜事。

一。受業未熟之輩、對異學之徒、不可爲誇詡、但同志研竅之儀者可爲格別事。

一。註解は聖人の本意にあらず。依之經書釋義刊行之儀、かたく禁之。但自備遺忘之類は可爲格別事。

一。於經術取扱候上、輕卒に我意をたてず、從師說可申。但後々於經文發明有之候者、校合之上、可從其善事。

一。總て著述刊行之儀、學塾へ差出し、一覽之上、從指揮可申事。

一。同盟之士、互に和氣を以て相待、爭諍有之まじき事。

以上七條。

先生既以道自任、來者不拒、往者不追、苟有善辭令至者、必待之以忠信、書牘往來、必手自報、燕居閒話、雖野翁村嫗、莫不與語、談諧之際、必有所寓、與人君言必依仁、與人臣言必依義、與人父言必依慈、與人子言必依孝、片言隻語、益人匪少、而人多不自覺耳、又常能恤患難、偕娛樂、不事粧飾、不立名節、毀譽之至、若蚊虻之過泰山、人譽之不能益其高、人毀之不能損其大、蓋其所養者有素也、性嗜酒、愛絲竹、而未嘗淫湎、

山中人饒舌に曰く「淇園家居敎授不仕性豪奢、講讀聲與絲肉相紛起、時挾聲妓、縱飲鴨水之上。」先哲叢談續に曰く「人有乞詩文書畫者、則不擇其人、隨貨賂應之、時論或以是少之。」明和五年の平安人物志經學家の部に淇園を錄し「卷軸上上吉、皆川文藏中立賣室町西ニ入町、ヒイキ)經學では都で外にないぞや、(頭取)左樣にござります、見識も面白く、著述も追々出ますげな、誠に末頼もしき先生々々」と評せり。

善書最喜右軍、日必書數紙、畫則適意一掃、晚年書畫大進、遠近慕之、詣門徵請者不絕、率寄意遐邈、不肯以毀譽輕重爲趣舍、至于詩賦文章、必心得手隨、所欲言者、下筆粲然成章、不復用力、是以著述極富矣、先生實以享保甲寅(十九年)十二月八日生、以文化丁卯五月十六日終、享年七十有四、娶松平氏、繼娶小關氏、一男四女、男名允承業、

淇園年譜に曰く「京都正親町坊(中立賣室町西)に生る」。松平氏は龜山藩老臣松平凞房の女(安永二年十月十九日歿)小關氏は同藩士小關清右衛門の女(寛政元年七月十四日歿)なり。「鴻儒皆川淇園」允字は君猷、通稱猷藏、灌園と號す。家學を繼ぎて龜山侯の臣たり。その庶子直字は子温、通稱禮藏、穆齋と號す。子なくして歿せり。こゝを以て淇園の養ふ所の女(弟成鈞の女)能登介河原實辰に嫁して生む所の子善(字は子繼、通稱誠藏、四園と號す)後を嗣ぐ。善の子惇(丹波南桑田郡長、従六位勳五等)現在せり。

乃與親戚門人、謀所以贊揚其德、遂樹碑勒實、以狀來乞銘、以余於先生有師弟義也、嘗每東覲往來、次浪華、必邀先生、宣昭義問、終日不輟、先生則諄々誨之、厭而飫之、使自得之、其所說雖若迂回、其實直指正路、無不與道合者矣、吾濟小人、生今之世、幸使知其所踐履、與古之前言往行、竹帛所載者猶晝一、日夜庶幾不能罷者、實是先生之賜也、靜夜思之、感激良深、乃作銘表其墓曰、

巍々叡嶽、天鍾其精、維降穎異、卓矣先生、命世作訓、絪縕含英、早歲發憤、汲々營々、靡言不誦、圖籍充盈、忘寢與飡、學期必成、稽聖定則、用類其情、究原極委、用挹其清、理義奧賾、既彰且明、道通千古、德順百行、匪爵之貴、匪祿之榮、如彼高山、望之崢嶸、毀而不損、無與人爭、乃育群材、啓聾發盲、亹々勸誘、無匪忠誠、維此頑石、成瑤及瓊、終寛克裕、以友弟兄、哲人已萎、不渝者名、末學誰仰、憂心怦々、不昭懿度、以刊珉貞、垂業不朽、孫子作禎、

文化五年戊辰八月　　門人前平戸城主壹岐守源清拜撰

「鴻儒皆川淇園」に曰く「諸侯中最も淇園を尊信せしは、平戸侯松浦靜山公(即ち墓表の撰者)にして、宮津侯、膳所侯等亦之を尊重せり。我龜山藩主松平信岑公は、寶曆十一年辛巳十二月淇園を聘し、待つに賓師の禮を以てし、又藩政の得失を諮詢せり(龜岡藩學制沿革記)淇園又詩を能くす。天明四甲辰の歲、柴野栗山、赤松滄洲等と共に三白社を設け、盛に詩友を會す。淇園當時詞林藝壇の友甚多し。淸田儋叟を首とし、柴野栗山、赤松滄洲等の如き、最も親しむ」。

淇園の逸話の口碑に傳はれるもの少からず。左に略これを錄す「鴻儒皆川淇園」

淇園常に四脚の机を座の周邊に圍み、一机に倦めば即ち他机に移り、以て興を助けたりと云ふ。謂はゆる淇園の四方机これなり。その机尙家に存ず。
淇園歡びて客と飮む。興到れば則ち絲竹を催すこと少からず。然れども客去れば盃を收めて机に向ひ、酒を吐いて書を讀むこと常の如し。或は夜深家に歸ることあるも、曾て日課を廢せしことなしと云ふ。
淇園は平生剪りたる爪を囊に入れ置けり。今尙家に存ず。
幕府曾て淇園を聘して儒臣に列せむとし、吏をして淇園の學派を問はしむ。蓋しその朱子派ならざるを恐るゝなり。淇園容易に答へず。終に孔子派なりと答へしとぞ。或は曰ふ。淇園が靑樓に流連し、黑羽二重に緋縮緬の裏つきたる羽織を着て、鴨河に人形を流し、瓦器を投じ、往々豪遊を演せしはその意幕府の聘を避けむが爲に在りき。故を以て或は島原の角屋に醉客を裝ひしも、常に書を携へ、人定まりて後は讀を廢せざりきと云ふ。
淇園が儒家、文人の交游極めて廣かりしことは言ふを須ゐず。(今畧之)亦能く大雅、蕪村、應擧、吳春、蘆雪等の書家及印人高芙蓉と親しかりき。曾て大雅を追懷して「二十年前人已逝、憶來只有歲時旋」と曰ひ、又大雅堂書譜に跋せり。明和七年淇園蕪村と書畫の會を催しゝことは、俳席兩百鑑に見ゆと云ふ。應擧及蘆雪の交はりは、既に各ゝその條に記せり。殊に應擧とは殆ど兄弟の如くその家を訪へば應擧の在らざる時と雖も酒食の欵待を受けしこと等淇園の劄記に見ゆと云ふ。高芙蓉をば淇園等稱して印聖と呼び、その名をして爲に天下に重からしめき。

淇園の肖像、(應擧筆)印及爾餘の遺物は、皆其家に存ぜり。明治卅九年淇園の百年忌に當り、有志の士淇園會を組織し、四十一年五月十三日その祭典を行ひ、遺墨等の展觀を催せり。後又「鴻儒皆川淇園」と題したる一書を編して印行(同年十二月)せり。(本傳はこれに依れり)淇園は實に一代の鴻儒なり。その畫に至りて、淇園に在りて實に一餘技たるに過ぎず。然れどもその作亦見るべきものあり。山中人饒舌に曰く。「近儒以六法著稱者、細如來、皆淇園二翁爲尤、淇園(中畧)畫山水蘭竹、縱横恣逸、饒書卷氣、固不求合格、世以其人爲貴也」。畫乘要略に曰く。「善山水、又作雜畫、初學玉蟾、其父善賞鑒、遇元明名蹟、輙令伯恭膽摹、因得其格、後與應擧月溪岸翁諸名輩相善、結搆竟不墜時蹊也」。又曰く。「曾觀畫紙馬(ゑま)作梶原景季挿梅花酣戰圖、設色精巧、今尙掲在上御靈祠、其畫山水、未見有風致然而可觀者、蓋人品使之然乎」。(梅泉)

皆川剛中

淇園の弟成鈞剛中又春鷗と號す。初名憲中、字は叔則、亦畫を善くせり。兼ねて詩歌に長ずと雖も、意に滿たざれば稿を留めず。畫は最も山水、人物に長じ、淇園も或は支那畫と疑ふと言へり。生產を事とせずして遊歷を好み、曾て長崎に遊びて淸人張秋穀等と交り、晚年大津に客居して詩畫を售る。居ること一年許にして病に罹り、歸りて淇園の家に寓し、寬政八年五月廿八日歲五十にして歿す。(西村天囚著「皆川淇園」に依る)

釧雲泉

南宗著名の畫家にして廣く諸國を歷遊し、以てこれを各地に弘めたる者を求めば、先指を釧雲泉に屈せざるべからず。その斯派の玩賞を地方に盛ならしめし功は決して少からざるなり。その傳記は龜田鵬齋撰する所の碑文及雲烟畧傳の錄する所最精しきが故に左にこれを載す。

雲泉山人墓銘　山人諱就、字仲孚、姓釧氏、雲泉其號也、西肥島原之產、其先世爲武弁士、山人幼從父、游于崎𡷡、就華人而受學、是以頗通華音、長善繢事、山水

殊絶妙、深究元人之趣、風韻雅致、出於塵表、其父沒之後、獨擔雲裝、涉歷于山陽南海之諸州、又游于京攝之間者多年矣、後來于東都而僑居焉、山人立性孤峻、俗士不可得而親疎、山人亦非一時有名之士、則不通交也、某歳挈妻而適北越、僦居于新斥、國人聞其名、來請其畫、雖偏陬陋壤、愚嫗村氓、覓之若巨寶焉、山人嗜酒、又好茶、以有潔癖、割烹濯漑、必手親爲之、遊歷所到、筆墨顏料外、必齎酒器茶具而行、其作畫之間、及意盡則投筆而立、或自温酒而成醉、或自煎茶而試品、不必待其畫之成、或營度經歳、不肯下筆、或終日坐磯而垂綸、或終夜圍棊而忘寢、若作畫若飲酒之時、座有俗客、則睨視而不接言、若其言辭有不愜已意、則投筆抛盃而直去、其不欲矯情徇俗者如此、是以雖厚糈索畫、或不能獲之、俗人因目山人爲頑傲、而疾之者亦有焉、其畫之品格高奇、蕭灑脫俗、一時無等倫者、蓋在乎此歟、余游于北越者凡三年、其間相會相別者數矣、每會大喜、每別大悲、余東歸日、遠出送余、及其分手、泣涕號哭、令傍人歔欷也、其喜悲感慨、出於眞率者皆如此、其年秋、山人適于出雲崎、遂病而客死、實文化八年辛未冬十一月十六日也、享年五十三、乃葬于出雲崎淨法寺之山、山人在于越、擧一男子、名曰越兒、其明年正月訃至、何料別後頓歸于道山、而永隔幽明也、顧視往事則胡蝶爲夢、黃粱斷炊、三十年如一日、嗚呼痛哉、東都故舊知山人者、皆追惜之、非獨賞其畫之高尙而已、深愛其人之崛奇也、庭瀨藩大夫海君玉、浪華醫士濱田希庵二人、於山人情交最密、故生前嘗託死後事云、其門人備後檀謙藏、越後行田仲肅、欲立石以表其墓、乃請銘于海君玉、君玉以余素諳山人事、轉命銘于余、銘曰、性崛奇兮氣瀟灑、情出眞兮言無假、繢畫事兮是以雅、

文化十一年秋九月　　友人　東都　龜田興撰幷書

釧就字孚、號岱就、又有雲泉、六石、磊磊居士等之號、稱文平、（中略、略碑文に同じ）夙奉南宗、山水殊妙、深究雲林之筆意、又私淑董北苑、王麓臺、風韻淡雅、出於塵表、父歿、孤劔涉歷山陽南海諸州、其在讃岐也、與長町竹石討論畫法、爲莫逆友、又遊京攝間多年、後來江都、與龜田穉龍、大窪天民等親善、晚挈家適北越、途經白川、宿一士人家、士人厚遇、留數日、雲泉日出釣不作畫、士人曰、所以留君者、欲請畫耳、垂釣何爲、雲泉明日拂衣而去、僦居于新瀉、當此之時技益進焉、來乞畫者日多一日、雲泉之名、遂大著乎北越、故世以爲越人（中略、潔癖の事）嘗寓中山道本庄驛、驛距利根江十町許、然每朝到利根江盥漱、畢汲茶水歸、以爲例、一日不懈（中略、兩箕の事後出書乘要略に同じく、性癖の事以下、略碑文に同じ）

賴山陽論書詩曰、温岳山前一釣師、時抛竿箐弄陰糜、書毫輕妙君休怪、應得蜻蜓立釣絲、

如亭題畫詩曰、有此畫來無此法、望知亡友老雲泉、所憐世上無眞眼、了使生前不直錢、

詩佛題雲泉畫山水詩曰、行李同爲度嶺人、看來多少碧嶙峋、即今畫得經過處、唯怪欠吾求向眞（自註、雲泉與余同遊信、）

田能村竹田自畫題語曰、舟到雲仙山下、聞畫師雲仙生于此、問之里人、無有知者、感七古一篇、詩曰、吹笛咏詩黃太癡、董北苑後眞畫師、維我東方受衣鉢、雲僊子外更爲誰、阿婆灣在兩肥際、曉買瓜皮來皷枻、便自雲仙山下過、冬霽却淨於秋霽、山鍾秀氣碧孱顏、大石小石坡陀間、疎林幽窓夕陽澹、分見一軸見虞山、憶子此裏獨崛起、煙雲蓊欝洽骨髓、赤脚提毫天下行、不把王侯置眼裡、萍蹤流轉酒樽前、西海濱生北海死、如今十里蚤烟寒、幾叢蟹舍擁村市、居民說山有雲仙、不知邑有雲仙子、（この詩、竹田筆雲仙岳圖卷に題せり、詩序の文少異あり）

臥遊瑣談曰、壬寅春、京都鐵筆家木村生、來寓我關戸驛、余往訪之、酒間見壁上有此畫、驚嘆曰、彼邦人、彼邦人、就諦視其名歟、即肥前人岱就所畫、又大驚、本邦自古畫手非少、而南派臻妙厓々、大雅堂三兩人耳、今又有若人、驟見疑彼邦人所作、不爲無眼矣、生云、三原鈴木清太夫所貽、清太夫風流善和歌、吾至友也、詩有之、匪女爲美、美人之貽、況人與貽兩美乎、生珍藏可知也、

繼浦漁者曰、臥遊瑣談載、當時雲泉與鈴木芙蓉、嘗同遊于越後、人爭索芙蓉畫、而雲泉殊寥々、在今日則雲泉名轟於海內、無說芙蓉者(下畧、以上雲烟畧傳)

雲泉又西肥處士の號を用ゐしこと、その印文にて知らる。その逸話の上出雲烟略傳所載の外、尙左の一則あり。

常好漫遊、有兩笈、一收畫具、一藏漁具、一日作畫、二日爲漁、以自娛(畫乘要略)

平素好酒、動輙數日沈湎、不敢關家事、而走筆則出於意表、嘗刻一印、文曰烟波大都督、中年游歷四方、來于江戶、一夜乘醉遊吉原、數日連飮、而囊中無一錢、樓主急請求、雲泉則索紙、畫山水二幅、副簡使人到谷文晁處、文晁觀畫披簡曰、都督來矣、盍先訪我、急命駕、抵廓中、相與酌、携手而歸(繪畫叢誌所載畫人逸話に出づ)

第三百二十九　釧雲泉筆秋山探句圖

畫乘要略は雲泉の畫を評して、僅に「寫山水有氣韻」と言へるに過ぎず。蓋し眞に雲泉の畫を知らざるなり。その風格全く自家の獨創に係り、蕭疎にして品格頗高し。好みて小米法を用ゐ、近濃遠淡の趣を善くし、雲烟縹渺の致極めて佳なり。こゝに出す所の圖は、雲泉作中の逸品にして、平生の畫と頗る風趣を異にし、披麻帶解索の皴法、老雅の筆墨、大いに賞すべしとす。

雲泉の門人

雲泉の門人には碑文に見えたる檀謙藏(備後人)行田仲肅(越後人)の外、倉石米山(雲烟畧傳は雲泉の弟子としてその名を記せり)あり。畫乘要略に曰く、「通稱甚助、越後高田人、受雲泉法、善山水、其子乾山、長山水、淸秀雅韻、又長蘭竹、擅聲於北越。」又雲泉の歿後その碑(越後中頸城郡松岡村禪長院)を建てたる川上思孝(旭城山人)及禪長院の松室上人も雲泉に就いて畫を學びし人なり。(繪畫叢誌、思孝の曾孫川上善兵衞雲泉の碑文を同誌に寄せつ)その餘畫風の雲泉に似たりと稱せらるゝ者に濱地庸山あり。畫乘要略に曰く、「名任重、伊勢人、法元人、峰巒林壑、淸疎瀟蕩、與釧雲泉同格。」

廣瀨臺山

廣瀨臺山は美作の人なり。幼にして才氣あり。藩主松平氏その器を愛し、大坂に留學せしむ。詩文、書畫、和歌、管絃、篆刻等を善くせり。その江戶藩邸の留主居役たりし時、諸侯の留守居、奢侈を交際に極め、弊毒甚しきを慨し、白川侯に上書してこれを矯めむとし、頗る用ゐらる。玄對、文晁、雲室等と交はりて、重きを藝苑に爲しき。致仕の時歲五十。米澤、松本の諸侯これを聘すれども應ぜず、房總、常奧二野の諸國を漫遊し、後津山に歸り、城西宇新屋敷に閑居して世を終ふ。(以上繪畫叢誌、美作關養次郞の報告に依る)五山堂詩話に曰く、

體中三絕、謂畫絕書絕詩絕也、而詩亦不在三者之下、苦熱云、嫩龍無賴奈驕陽、盤礴窓間汗似漿、垂柳不搖日當午、淸風誰復傲義皇、題畫云、風格荆關豈得倫、閑來信意寫嶙峋、不知身在畫窓下、筆底靑山我主人、

左に碑文を掲げて、以て更に臺山の傳を詳にす。

臺山廣瀨翁墓碣銘

翁姓源、諱淸風、字穆甫、臺山其號、俗稱廣瀨雲大夫、津山藩士也、考義平、諱宅路、妣隅田氏、翁幼而事父孝謹、餘力讀書弗輟、及壯爲京邸監、廣取師友、道藝並進、召爲近習、拉家徒江都邸、以其多能、日被親近、而將順匡救亦有力焉、加秩五十石、爲邸留守、又遷目代、無幾稱病致仕、卜居于麻布長阪、獨與妻栢植氏居、氏亦

幽貞高雅、不厭寒素、夫妻鼓琴、唱和相樂、平素嗜飮、然微醺而止、如撫勝景、或數月不歸、居則畫山水、畫法一遵乎古、下筆不苟、而新秀可掬、人以爲奇玩、又善吟善書、淨腹有韻、詩亦峭麗可愛、蓋其爲人溫厚高潔、有自然之致、故其發於藝事、皆有類乎此也歟、余遊江都、多見風流之士、如翁罕匹、其所著雅俗涇渭辨行于世、王侯貴人聞名召見、不屑往也、文化辛未(八年)歸津山、結廬于城外新田村、亦猶其在麻布也、癸酉(文化十年)十月十三日以病卒、戚友胥議、葬于小田中邨之邱、享年六十三、無子、有二女、皆殤、養他姓子爲嗣者再、皆先歿、終以三宅侯臣鷹見定允子謙藹爲後、侄上原彝作狀、徵銘于余、迺銘曰、在職其力、非貪祿也、退而其樂、非肆欲也、深衣幅巾、溫而其潔、潔則可愧、彼之乾沒、溫則可沮、彼之猖獗、嗟乎是翁、世不徒出、玆石之文、永照嵬嵬、　山陽賴惟柔撰

臺山の逸話、左の一則を得たり。

或時同藩士古市某の囑に應じて、孟母斷機の圖を作る。臺山謂へらく。世此圖を爲すもの、多くは孟母憤恚して機を斷ち、孟軻又其傍に涕泣するものゝ如し。是道理に背くの甚しきものにして、改めざるべからず。如何となれば、母其子を訓諭する、固より慈愛の心に出で、其機を切斷するに至つては、唯其喩へを之に取るのみ。何ぞ怒氣を帶ぶるを要せんや。孟軻も他日天下に賢たるの俊秀なり。慈母の敎訓に依りて、悔悟奮發の色を顯はすとも、徒らに涕泣する如き事あらんや。繪事縱令想像に出づと雖も、概ね方章に據らざるべからず。是南畫の本旨なりと。玆に於て母子が眞意の像を製作し、次で斷機を描くに至て、實地を試みんが爲、其室某をして、殊更に絲を機上に掛け、其幾分を織製し、刀を以て之を切斷せしむ。然れども未だ其要領を得ず。斯くの如くすること三四回、漸く其の眞を寫すを得たり。既にして圖全く成り、絹本に揮灑して、囑者古市氏に與ふ。氏の家久しく之を藏したりしが、近年に至て、舊藩主松平確堂公に獻じ、今尙同邸に珍玩せらると云ふ。

村瀨栲亭

村瀨栲亭

名は熈、(叢語之熈に作る)字は君績、京都の人なり。通稱を嘉右衞門(忌辰錄)と云ふ。續近世叢語に曰く。

幼頴特善詩、才思敏贍、是時江村北海之子乘、年可十二三、聰慧超倫、一時稱才頴者、皆避其頭角、獨栲亭年紀相如、相得厚善、嘗作五言排律三十韻、押以三江、唱和至數四、人以駭異焉、栲亭及長、從武梅龍、受管子、處物精密、有幹蠱才、應秋田侯、赴其治所、侯待以賓師、而諮詢國政、栲亭乃稍爲更張、紀綱頗熈、家老及衆士、皆敬服焉、晚乞骸骨、歸老於京、文政初年歿、年七十餘(元寅年二月廿三日、七十二歲、忌辰錄)栲亭博學洽聞、以詩文稱、又善書畫、讀書有暇、則臨撫古法、矻々不倦、尤崇尙東坡、若欲作書、則於前一日、勅斷家事、愼起居、節飮食、整頓室內、料理筆硯、使其女若子婦磨墨、常語人曰、磨墨非纖々女手則不可、翌日早起、待旦而書、終日不少停手、向晚方畢、餘興偶到、則作蘭或竹而止、得者珍焉、所著藝苑日抄、世稱其博雅、又有栲亭文集、

古畫備考に曰く。「江戸ニ移リ、秋田藩ニ聘セラレ、大窪天民等ト相徵逐ス。著ス所詩語碎金アリ」。山中人饒舌に曰く。「書法關紐、透入畫中者、唯栲亭先生所作之竹爲然、余藏喜晴一枝、用筆圓熟、墨瀋蒼潤、分枝布葉、如昆吾刀鐫玉、自題云、詞人每稱、雲似絮、雨似絲、雲豈絮乎哉、雨豈絲乎哉、可見物之相似者、皆非其眞也、余畫此竹、以爲蘆則非蘆、以爲柳則非柳、果以不似爲眞、則我乃得其眞矣、試問窓前竹、々不能答、倘使竹道、汝畫怎麽似我、々將以此答之、其言超々、可謂畫竹三昧矣、倪迂云、他人視以爲麻爲蘆、僕亦不能强辨爲竹、先生蓋似祖其意。」續近世叢語に曰く。「田能村竹田曰、村瀨栲亭畫蘭竹、分枝布葉、自書法出、位置穩妥、風趣遒逸、蓋宮筠圃後、罕觀此筆矣」。

米山人

米山人

米山人の小傳は畫乘要略及師友畫錄等に出づ。左にこれを抄出せむ。

米山人、氏岡田、通稱彥兵衛、大阪人、善山水、有風致、(畫乘要略)

米先生、名國、字士彥、阪府人、初鬻米爲活、身親蹈碓、而好讀書、且蹈且讀、意將儒以振于一世也、自稱米山人、既長事藤堂侯、移住其邸、居處有窓、與淀河相面、名曰正帆、取之唐句風正一帆懸也、有吟友到、則窓下分坐、闘韵賦詩、或出書畫、拍案品評矣、其畫似拙而古、似疎而厚、渾朴深潤、學黃子久、自作一家、詩則簡淡眞率、有雲林子遺意、予早歲叨荷知愛、屢侍窓下、面受指敎、常觀余畫欣然曰、予衣鉢以來可附者、唯吾子爾、迨予西歸、作山水一幅見贈、係以絕句云、天涯離別若飛蓬、再會難期白首翁、蹈破華陽菊世界、却看故國舊紅楓、于今時々披對、謹仰高範云(師友畫錄)

性和易、與物不迕、書畫俱不甚工、然卒然天趣、從肺肝出、與玉堂老人友善、風趣亦相肖、好賦五言詩、亦淡逸(山中人饒舌)

第三百三十　岡田米山人筆松谿養鶴圖

米山人の畫の如きは、即ち眞に文人の墨戲なり。固より畫家の作として鑒賞すべきに非ず。謂はゆる書卷の氣繙楮の外に溢るゝもの。文人畫を弄ばむには、宜しく這般の興趣を解せざるべからざるなり。

文政元寅年八月九日歿す。歲七十五。(忌辰錄)

岡田半江

米山人の子に半江あり。畫名父に過ぐ。年代稍降ると雖も、便宜こゝに附載す。

宇左衛門號半江、亦善山水、與田能村竹田、爲詩畫友、(畫乘要畧)

岡田肅字子羽、號半江、又有寒山、獨松樓等號、稱宇左衛門、桐津藩士人也、(中畧)爲人孝順、幼從父學畫、少崇南宗、善山水、又有名書及詩文、年四十三致仕、住大阪、與小竹竹田等、親善來往、靄崖嘗客攝日、稱其技、以爲海內不易得友、靄崖於山水負重名、如顧若周、故許可絕少、而推重至此、則半江所造詣、可以觀矣、弘化二年乙己(一云天保十四癸卯)四月十日歿、年五十、子名實、字寸龍、號九茄、亦善畫、

小竹散人哭半江詩曰、仕官中年罷、丹靑晚歲專、風流能肖父、解脫恰如仙、家已兒孫保、名方遠近傳、訃音吾淚落、竹馬五十年、

繡浦漁者曰、閱小竹齋詩抄、有半江貶移京邸賦贈作、內有三十年來服孝順句、古人云、求忠臣於孝子、余謂厚人道、則厚畫道也、亦可以定其畫品也、(雲烟畧傳)

田肅號半江、米先生令嗣也、早歲致仕、買地阪府之北隱居焉、前臨郊墟、後背市門、門徑蕭瑟、林池幽雅、令尊所傳、書冊盈閣、書畫溢架、半江踞坐笑傲、自稱南面王之樂、亦不能過也、筱小竹題贈云、林亭市遠人稀、野徑花殘竹肥、報雨池蛙閣々、惜春園蝶飛々、舉林深淺隨量、微慢寒暄適衣、醉客詩情忽動、借君畫筆聊揮、予與半江、契合既舊、每抵阪府、過訪留宿、矧如今挂冠解綬、男婚女嫁亦畢、不日當卜居南隣、呼酒過墻、同醉淀江之上也、其畫山水花卉、俱具家法、自有逸致、今春閱其近藝、覺上進一等、非舊面目矣(師友畫錄)

半江の歿年月は、上記雲烟略傳の二說の外、忌辰錄は弘化三午年二月八日とし、享年も同書は六十五歲と記せり。尙後考を期す。

第三百三十一　岡田半江筆雪景山水圖

第三百三十二　同筆梅林村莊圖

第三百三十三　同筆騷風急雨圖

第三百三十四　同筆浦上草堂圖

半江の書は誠に文人の墨戲のみ。眞の書家の製作としてこれを見るには宜しからず。然れども米山人に比すれば、較〻その巧を加へたり。殊に浦上草堂圖の如きは、稀觀の傑作にして、介石、海屋等と衡を爭ふに足れり。

米山人の門人

米山人の門人は、師友畫錄に淵世麒の見えたるのみ。その記する所左の如し。

世麟字玉麟、號天香、眞齋先生(玄對門人の條に出づ)之子也、資性縱逸豪侈、畫筆迭宕、隨手塗抹、無所依仿、喜作大畫、初與予同遊大阪府、受教於米山人之門、西歸後、謂東走荏土、見谷文晁、亡而到赤馬關、狎遊于狹斜間、諸妓觀者皆悅慕、留滯數歲、又東上抵藝州、到處自道竹田門下、蓋記予不敢忘也、居數月而病、無幾棄世、恰歿前數日、命用紅綠緞子、作一大褥、彩粲奪目、遂斃其上矣、藝人哀有其志而業之無成、相謀厚葬、立碑詳記其事云、

栢木如亭

栢木如亭名は昶、字は永日、又晩晴吟社と號す。俗稱門作。江戸の人。小普請方御大工棟梁（忌辰錄）なり。詩を以て詩佛と名を齊うす。又山水を作れり。（畫乘要畧、古畫備考）その畫臺嶺と同じく頗る雲泉に似て、好みて小米法を用ゐる。五山堂詩話に曰く。「如亭近日學畫、極爲超脫、有詩云、行路讀書吾輩事、風裁何必減前賢、老來學畫君休笑、若較金翁少十年、蓋以清金壽門五十餘、始從事於畫也」。同書又左の詩話數則を載せたり。

其題畫詩極多、今錄三絕、云、岩頭草閣幽人宅、一局殘棋坐晚晴、窓外斜陽無限好、復招隣叟決輸贏、山上陰雲向晚開、寒霖漸作暖風回、皂羅忽破青盤現、托出黃綿襖子來、無限往途信一鞭、馬蹄塵裡過年々、誰家醉後身無事、山雨溪風閉戶眠、清麗綿芊、雜之唐解元諸作中、恐未易辨也、

如亭入京、歲晚題僑居壁二律云、僑居遠向帝城留、邈矣山河隔十州、一縷炊烟新買婢、三間敗屋舊隨裘、暫同灯影相言笑、更與瓶梅作獻酬、不歎蕭然歲云暮、待春醉遍有花樓、人々見說春遊好、濟勝無憂我必先、掃地焚香權且坐、拚屛就枕復何眠、思馳梅谷吳綾裡、神往桃山蜀錦邊、曆尾看々餘半紙、一双辨屐送殘年、其尤可憐者、旅寓絕句云、自笑身似箏上雁、往來只是信人移、恰似勾欄典身人之語、

如亭東西放浪、突不暇黔、但寓備之日較久、竊貯擣練之婢、足菴送如亭詩云、遊蹤不住夯忽々、雁正歸時君又東、莫學閒雲遠飛去、帳中有鶴怨春風(中畧)亦可以想像如亭情態矣

香亭雅談に曰く。「栢如亭中年好畫、興至則揮筆、清絕不俗、然竟不若詩之好也、金烏洲無聲詩話論之當矣、要之、如亭學有餘而筆不至也、其所作芥子圖畫傳譯本、益初學多」。文政二卯年七月八日歿す。歲五十七。（忌辰錄）

浦上玉堂

浦上玉堂は備前國岡山新田藩の士人なり。姓は紀氏。雲烟畧傳に曰く。「雅解音律、最善彈琴、又涉詩及繪事、讓家兵右、飄然携琴與二子、客于江都、後漫游四方以歿云」。竹田莊師友畫錄に曰く。「奇士也、予一日閑坐、有一片紙突然到、廼書曰、子能來聽我琴否、又書曰玉堂老人、字殊古怪絕俗、詳此則紀春琴之尊甫也、白髮童顏、服鶴氅衣、擔琴昂然往來、望之知其不常人也、後同寓坂府持明院、最相親善、每朝早起拂室、焚香鼓琴、卯飲三爵、常言、若天子有勅、考正音律、我與有焉、必致其力、畫山水、蒼古莽密」。山中人饒舌に曰く。「古人書畫、有借飲興而作者、紀玉堂亦然、蓋醉中有天趣、而異

於人爲也、紀酣飲始適、落墨娓々不休、稍醒則輟、一幅或經十餘醉甫成、至其合作、使人神往、掬之不竭、但極醉時、放筆頽然、屋宇樹石、模糊不可辨別也。」その人と爲り想ひ見つべし。文政三辰年九月四日、歳七十六（雲烟畧傳）にして京都に歿し、（古畫備考人物志を引く）本能寺に葬らる。（忌辰錄）畫乘要略に曰く。「能作山水、自出新意。」山中人饒舌に曰く。「余評紀畫有三可、樹身小而四面多枝、一可也、點景人物極小、望之猶知文人逸士、二可也、烘染皴擦、深透紙背、三可也、又有三稱、人稱屋、々稱樹、々稱山、或曰、作畫當然也、何唯紀而已哉、答曰然、而今史不爲、如何也。」これ等前人の諸評、以て略玉堂の畫品を解すべしとす。

浦上春琴は玉堂の子なり。姓名を紀選と稱す。字は伯擧、（雲烟畧傳）又十千、（畫乘要畧及師友畫錄）通稱喜一郎、（雲烟畧傳、古畫備考は人物志を引いて紀一郎に作る）春琴はその號、又睡庵とも號せり。（雲烟畧傳及師友畫錄）その傳記、諸書錄する所、左の如し。

備前人、來居平安、工詩、長花卉、雅飭幽艷、氣味古逸、又善山水、疎秀瀟灑、名著一時、（畫乘要略）

尊甫爲玉堂老人、老人一代高士、十千承之以敏才、早歳歷遊三都、遂汗漫四方、海内名山大川、無不遊觀、名人逸士、無不通交、奇冊秘卷、亦搜訪殆盡矣、其書之妙、而詩之巧、畫之精所自來亦深矣、鑒別書畫金石諸古玩、固精確、其所購求、與山陽雲華二公相犄物、數出其右、雖善賈有眼者、咸心折矣、嘗撰平日最愛玩者二十餘品、書成一冊、命曰淸祕錄、予相識最久、每造訪必信宿、啜粥煮茶、吟詩讀書、或提茶具、出游桂鴨二水之上、予性極冷、十千不敢遠避、亦以冷遇、終日蕭然對座、所適而還、蓋其處世、隨境能轉、於冷淡場則冷淡、富貴場則富貴、戲謔間作、盡人之歡、而不敢諂諛、又不敢詆刺、予曰、人之於才、多好發揚、十千能涵養抑惡濟美、抑亦可謂用才之極也、（師友畫錄）

多收貯諸名蹟、明陸應陽詩卷、最所珍藏云、其畫私淑董北苑黄子久、（中畧）傍工詩文、書名著當時、於是本藩欲祿之、堅拒辭之、常好講莊子、爲人才氣銳敏、每飲酒演平語、彈琵琶、滑稽善戲、往々解人頤、與賴山陽交最深、伯擧最重友誼、其友柤如亭客死京師、無人葬之者、伯擧自鬻筆硯書帙、經理之、弘化三年五月二日歿、年六十八（本能寺に葬られしこと忌辰錄に見ゆ）所著有論畫詩前後編、詩文若干卷（中畧）

春琴浪華港口觀打魚詩曰、剛爲銀膾煎爲羹、歡笑維舟呼酒餅、平生喜畫漁家樂、一幅新圖爲此行、

小竹紀春琴來寓持明院賦寄詩曰、南州秋暑尚蟲々、手熱甑蒸斗室中、數局揣棋難覓日、半窓疎竹豈生風、近聞盤礴描僧壁、方想淋漓奪鬼工、餘興爲吾能一揮、江山谿處着漁翁（雲烟畧傳）

春琴の論畫詩は或は畫法を論じ、或は畫の變遷を談じて、その自在を極む。以て春琴の蘊蓄を察すべし。重春塘曰く。（名家歷訪錄）

春琴は備前岡山の陪臣で、家には養子をして、自分は出てしまうた人であるが、それやなか〱やり手でした。それで畫を描くに、他人と違ふてゐるのは、いつもこう筆尖に指尖を持添へて、まるで蒔繪をするようにして描く。決して筆軸の上を持ては描かぬ。いや描かぬのやない。描んのや。それやからごぎつて暢びたものはないが、其かはり筆に力があつて、蘭の葉尖でも、皴のさきでも、決して一分の弛緩（ゆるみ）がない。これを後から贋作する者が知らぬから、實によく肖似（にせ）てあつても、筆の弛緩みで、私等にはよく知れます。

第三百三十五　浦上春琴筆琵琶行圖

第三百三十六　同筆秋景山水圖

書乘要略に曰く「北汀先生曰、春琴少時歷覽海內名區、接巨公名人、又多貯古名蹟、用意頗苦、故筆墨精熟、於花卉禽蟲、殊有自得之趣」雲烟略傳に曰く「作山水、穠郁豐潤、兼長花卉翎毛」臥游瑣談に曰く「春琴居士精於山水、幾與林竹洞頡頏、而花卉更超、嘗見數幅、精采生動如應舉、去其甜、工緻姸麗如椿逸、去其鄙、可謂具美」又曰く「嘗聞、織婦年過四十者、其所織必少潤澤、先是屢觀春琴畫、皆其晚年作、但是少壯所寫、巧拙姑置、較他畫、殊滋潤、不知、畫家亦如織婦否」これ等前人の評賞中、臥游瑣談の評最も吾人の心を得たり。げに春琴の畫は山水花鳥に論なく、その筆意彩調、共に善く梅逸、竹洞の二家に似たり。蓋し二家の風化を受けしなり。

春琴の門人

春琴の弟に秋琴あり。義子に春圃あり。秋琴名は遜、音律を以て會津侯に仕ふ。（雲烟略傳）畫よりも更に詩を能くせり。（古畫備考）春琴の門人には左の數人あり。

僧霞山　書乘要略に曰く「土佐人、喜吟詩、善寫山水」

稻垣克　同書に曰く「字子復、越中人、能山水」

熊坂摘山　雲烟略傳は適山に作れり。師友畫錄に曰く「熊坂昌號摘山、仙臺人、學畫春琹居士、善山水花卉、辛卯歲（天保二年）來遊吾豐、歷寓海濱諸邑、留一年餘、資性溫和、好酒能醉、醉則嗚々能歌、每人狎褻相愛共飲、客秋與宮素山、顧予於竹田莊、觀其扇頭美人、頗饒風趣、題詩亦佳、書仿坡翁、小楷最長、聞近日東歸」

梅澹　師友畫錄に曰く「號煙村、備前人、學畫紀春琹、簡遠淸逸、得紀筆意、挾技歷游四方、性好酒、得金便就各處所有之妓院買醉、留飮累日、至橐空金罄而止、復作畫賣之、僅得金即醉如故、貯一泥硏、最秘愛、然窮則質於友人處、稍得金則典、一質一典、略無虛月、嘗遊吾邑、太夫喜其虛心無迕、每宴招飮、聞久寓三備間、畫特上進、又聞其母老而病、梅澹左右侍養、無少懈、止飮不敢復醉矣」雲烟略傳は春琴の門人を列記して「烟村最爲能手」云と言へり。

龜田鵬齋

龜田鵬齋名は長興（書乘要略名を興とす）字は穉龍、善身堂と號す。通稱文左衛門。江戶の人なり。下谷根岸に住す。（古畫備考、書乘要略）續近世叢語に曰く「幼好學、從井上金峨學、姓豪邁負氣、蔑視世儒、與山本北山原狂齋相懽、博學洽聞、別建一家言、名振一時、晚年絕志仕進、放浪詩酒、文政九年（三月九日）歿、年七十三」。（今戶稱福寺に葬らる（忌辰錄））畫乘要略に曰く「其學業世所知、爲人豪邁宏逸嗜酒、醉中往々作水墨畫、有逸氣、不拘畫家繩墨也」。古畫備考に曰く「胸中山一册、先生ノ畫譜也。大儒ノ戲墨、實ニ神出鬼沒、變幻ノ奇ヲ極。」「天保紀元十二月ノ自跋アリ」（と曰るへは何かの誤ならむ）同書亦「墨江老漁」の款識を載す。

雲室

釋了軌、字は公範、又鴻漸と云ひ、雲室と號し、光明寺と稱す。畫を能くせり。文政十年三月九日寂す。歲七十九。（五山堂詩話及廣益諸家人名錄）我石畫談（曾我我石著）にその傳記あり。要を摘みて左に錄す。

道人名は鴻漸、字は元儀、信州飯山の人にして、寶曆三年三月、同所の眞宗光蓮寺に生る。初めの名は惠愰、幼より學を好み、畫を嗜み、年十七江戶に出で、宇子迪に學び、又林家の門に遊ぶ。後比叡山に上り、阿闍梨修行を爲す。是の修行は、朝起叡山の諸堂を巡拜し、京師に至り、街衢を巡り、其日に山に還る

を業とす。道人之を行ふこと、一日も怠ることなし。其業を終へ、阿闍梨となる。是より風流閑適、詩書を弄び、雲水の身となり、諸州に遊びて名山勝水を探り、寛政四年江戸に至り、芝西久保光明寺を繼ぎ、住持となる。道人文學に長ずと雖も、皆書名に掩はれ、人の之を知るもの少し。其書は人物、山水、花鳥を兼ね能くし、專ら胸中の奇を寫すを主とし、自ら一機軸を出す。其道釋を寫すに大抵水墨を用ひ、稀に淡彩を施すのみ。蒹葭堂嘗て道人の書を評して曰く。東方の書、雲室の如く氣品高尙なるものを見ず。關左の丹青家は一も雲室の右に出づるものなしと。其名流の爲に重せらるゝこと斯の如し。一風流士あり。道人の書を請ふ。數日にして一絹に畫て之を與ふ。其人厚く謝儀を贈る。道人曰く。予は畫を沽り口を糊するものにあらず。唯文墨を弄びて天性を樂ましむるにあり。何ぞ謝儀を意はんやと。竟に受けず。平生交る所は皆知名の大家なり。最も小倉藩主小笠原豐季、鯖江藩主間部詮勝二侯の爲に尊敬せらる。天明八年武州上尾に遊び、鄕人山崎碩茂と謀り、鄕黌を建て、子弟を敎育す。鄕人學に進むもの多し。即ち其德を念ひ、道人の爲に生祠を建て、碑石に銘して歲時に之を祭る。銘に曰く。

禮邦鄕子、向學無貳、上人之篤、永錫其類、

文政年中病を以て沒す。道人著す所、朱晦菴絕句の詩意を寫せし畫譜及人物畫譜あり。刻して世に行はる。其自像に題する賛に曰く。

不欣樂邦、不厭三惡、無想無願、永脫貪着、

嗣子證存、梅痴と號し、又畫を能くし、殊に梅花に妙なり。

五山堂詩話に左の數則話あり。

僧鴻漸自以雲室爲號、蓋取精廬不住之意也、今却住持西窪光明寺、先輩松窓兎道有雲室記、太室寛齋有雲室詩、又徵余詩、余竟不欲爲狗尾之續、雲室平生談儒家濂洛之言、又性嗜畫、每一援毫、寢食總廢、詩則一出率意、絕句云、對景詩漫酬、遇勝圖可作、一圖還一吟、悠然意獨樂、僅々廿字、胸襟畢露、

雲室昔日唱小不朽社、當時訂盟者、桐君蘭石、栢如亭、平梅溪、源臺山、邊赤水、高西巷、田好古等八九人、輪流爲主、盛作詩書之會、後如亭去都、梅溪下世、此會中絕、二三年來雲室繼而新之、新參者西圭齋、野西湖、藤琢齋、服古顚、藤三林、

雲室每讀人詩云、亦作此無根抵之詩耶、此言極有味、

三石、長町竹石

長町竹石と野呂介石とを稱して二石と云ひ、（山中人饒舌に出づ）又僧愛石を加へて三石と稱す。（雲烟畧傳竹石の條に曰く、當時與介石愛石、有三石之稱）竹石道人、長町氏。長字に代ふるに脩を以てし、又長に弓を加へて張と爲し、共に氏として用ゐき。名は徽、字は琴翁。（畫乘要畧、雲烟畧傳及逸人畫史）琴軒と號す。（逸人畫史）讃岐の人なり。（諸書）雪齋增山侯曾てその名を聞き、竹石圖を作りてこれに贈る。仍りて竹石を號と爲す。（雲烟畧傳、享和三年江戸に遊べる時の事の如く記せり、恐らくは非）諸書錄する所左の如し。

初學沈南蘋法、後大變其格、作山水竹石、雅蕭淡遠、釧雲泉嘗遊於讃、相與討論畫法、結爲莫逆友、云、今存其典型者、東原、雲屋、春塘諸人、並能山水竹石、北汀先生曰、竹石嘗遊於浪華、與木村孔恭交、觀其所藏古名蹟大喜、竟與社友倶謀、廣購求古書畫、當時好古書畫未甚、而獨竹石之徒競購求、故至於今、古書畫之多、以讃爲最矣、（畫乘要略）

讃人竹石、紀人介石、名最著世、目爲二石、然其所作不同、竹石以駘宕蒼潤爲主、介石以疎逸曠淡爲宗、余於二石、各有所取、（山中人饒舌）

賦性磊落、嗜書玩世、初學建孟喬及南蘋沈氏、後大變其格(中畧)享和三年癸亥來江都、畫名大起、與詩佛親善(中畧)

竹石淺桂詩曰、秋淺桂花猶未香、碧梧葉落夜初長、滿庭風露吟懷爽、占得閑窓一味涼(中畧)

滕滕谷哭竹石詩曰、同社結交三十年、溘然何計向黃泉、知音隔世人琴失、遺墨留神姓字傳、酒癖知君多作祟、詩痴愧我尙成顚、恍然一夢身如覺、又被昨遊來現前(雲烟畧傳)

竹石以癸亥出都、畫名大起、明年歸鄉、未幾沒矣、其在都日、最受知于詩佛、詩佛贈七古云、竹石道人酒中仙、醉後揮毫妙到神、人々相見唯驚愕、知者纔見兩三人、世人所見以形似、道人所貴在神理、世間無復九方皐、誰識靑驄與綠耳、千里來遊關東州、憐君與世風馬牛、磊々落々性所賦、風流之師俗人讐、莫愁海內無知音、我唯知君々知我、二人相知已有餘、相得人間醉因果、醉鄉有地萬頃寬、亦無禮法亦無官、盡日陶々有何碍、不比世間行路難、世間豈無能書士、誰居相忘醉鄉裡、醉鄉之裡可相忘、瀟灑誰如竹石子(五山堂詩話)

山水および墨竹に長せり。(逸人書史)

南溪

竹石の同門に南溪あり。こゝに附載す。山中人饒舌に曰く「師建孟喬者、余記二人、一則竹石、一則南溪、同一祖而各有變通、南溪京人、墨枯氣薄、少遜竹石也」。

野呂介石

三石の中にて野呂介石最著れたり。されば縑浦漁者雲烟畧傳著者曰く。「世稱介石竹石愛石爲三石、而以余觀之、介石第一、竹石次之、愛石則全然模倣大雅、恐屬優孟衣冠、竹田稱二石、不及愛石、可謂具眼」。介石名隆年、字は松齡。後姓名を第五隆と稱す。雲烟畧傳註曰、「晋書何準傳、準高尚兄充爲驃騎將軍、勸其仕、準曰、第五之名何減驃騎、準兄弟中第五也、按介翁蓋亦五子、而其志高尚、偶讀準傳、有所感、以爲姓歟」、師友書錄曰、「其行五、故又稱第五隆」、碑文曰「父諱方紹、君其第五子也、常慕第五倫之爲人、且以其五子、故稱第五隆」、介石はその號なり、又十友、矮棵、四碧道人等の別號あり。紀州和歌山の人。以上碑文、雲烟畧傳、師友書錄、書乘要畧に依るその傳評の諸書に見えたるを左に集錄す。

少小耽書、問法池大雅、又學淸人伊孚九之法、後遊和之談峯、觀黃一峯天池赤壁圖、大喜摸一本、常倣其筆意、遂更其格、初借洛西双丘僧舍居之、欲隱書終其身、俄有徵、仕本藩、晚遊熊野、歷覽峰巒谿谷、極力寫之、爾後多製疊嶂複巒峭拔高遠圖、筆力淸潤、位置渾正、蘭竹亦皆臻佳品、北汀先生曰、介石每有問書法者、往々寫王維畫訣以與之、又詳論山脈水源點法皴法、用意極深、晚年神力不衰、腕力益勁、亦工書、名重藝林(畫乘要略)

爲人淵默耿介、頗抱憂民之志、能書及畫、年四十七、始出就吏職、雖居塵務、不忘隱逸操、時有唱者、不苟應、特託興於書畫風流、是以寫山水、實有高致、名施於海內、衆所知也、君無子、養長兄諱隆基之子隆忠爲繼、今玆文政十一年戊子三月十四日沒、春秋八十二(碑文、山本有所撰、墓は和歌山吹上增上山護念寺に在り)

早歲寓京西双丘下之僧舍、意將賣畫歿世於此、既而本府徵用服官、然有暇則手染丹黃、點拂不止、初作畫、一日課以十紙、如此者凡三年、不少懈、夙愛黃大癡法、憂不得其眞蹟、晨夕夢寐、偶於和州淡峰、觀黃之天池石壁圖、跳躍狂喜、稽留數旬、臨摹甫畢而歸、於是畫理洞然、有所會悟、從前所手摹古人畫本、一切斥去、不復敢用、若欲作畫、則屛絕人事、澄心靜坐、隨意從筆、徐々寫下、或一日數紙、或十日一紙、任興之所到、或作或輟、聽之自然矣、嘗遊熊野、作九里八丁卷、此其平生最得意之業也、今藏其家、予昔者南遊、每日過從、優遊終日、其文房之雅、園林之趣、器玩之致、飮膳之潔、使人頓忘身之爲客也、而窓前有竹一叢、婆娑蕭瑟、翁

指之曰、從朝鮮所移、此吾平日寫竹之粉本也、又有茶寮、植梅一株、極古、臃腫盤屈、而樹不甚高、攀援而登、則可從根而達其巓也、所謂矮梅居即是、當時予獲翁書數十紙、爾後朋友探篋取去、今僅藏北苑秋景一幅、近日都下秘重其跡、貴比南金、殆與大雅翁相埒矣、(師友書錄)

少師桑山玉洲、入京學大雅堂、又清人伊孚九、(中畧)本藩徵爲書局、公覽其所畫那智山圖大稱之、題四碧字賜焉、自是號四碧道人、(中畧)子介于、名隆忠、有書名、姪名訓、字翼卿、號松廬又槃溪、以詩顯焉、有松廬詩集、弟子蔡徵、有竹、僧少林等、共有名于時、

賴山陽題介石絕筆曰、介石翁爲其戚坂上生、作歲寒三友圖、獨楳有題款、未及松竹、倩余補塡、曰、翁在時、以予爲海內不易得之知己、有以證之、嗚呼、余時雖作畫、非能點染、何敢謂知翁筆、翁筆有他人不能擬處、雖無題著、可望而知名、題數句返之、其詩曰、石翁描石還描竹、竹石相偎太有情、記得留吾竹深處、烹茶石上聽秋聲、両株松樹翠沉々、老稈交柯翠色深、不問龍鱗成與否、忘年曾契歲寒心、又題畫山曰、石翁皴染貌孱顏、品在倪迂范緩間、南海由來多秀絕、不知粉本是何山、(中畧)

詩佛題介石老人所寫王右丞畫訣後曰、學畫猶學仙、煉丹不如煉神、與有丹砂萬斛、要無一點俗塵、介翁所畫畫訣、畫第一神丹三十六種、煉之存於其人、

臥遊瑣談曰、禿樹蕭疎、茆亭幽寂、妙得迂翁三昧、讃人張熙善山水、號竹石道人、世呼爲二石、然張有此韻致、而無此蒼勁、將無同、至其并稱愛石、所謂藺相如、司馬相如、而實不相如者也、

瀫芳閣書畫記續篇曰、余尹京兆日、得第五隆所摸、黃公望天池石壁圖絹本、其外套隆自識曰、太痴道人姓黃、名公望、字子久、別號一峯老人、元朝名畫四大家之一也、元明以來、準繩其畫者、不可枚擧、而得筆法者、亦以爲寡、或摸形、或掬奇者、猶以燕石比和璧之類、曷足信哉、明清繪事專盛猶是、況於我邦畫學者、不見黃之畫品者乎、余也夙志欽慕黃畫、普以搜索、而未得見之、居常以爲憾焉、適有和州談山之支院千手院所藏天池石壁圖、曩時平安高孟彪、與圓山應擧、相俱到於千手院、懇求臘摹、以爲海內無比之珍、祕玩自誇、余屢乞孟彪、而僅獲一見焉、卷舒數回、其書位置得宜、筆力深厚、庸工非所得作、然皴法稍覺有俗韵焉、得親觀其原本、遺憾不輟、偶有交友浮屠泰舜之在豐山、感余篤志、百方周旋、而紹介山副某者、就談山長老切索、卒得所貸、今茲三月、詣根來寺序次、自携以到余齋、余也欣然展觀、則孺皮之所謂、洵海內無比之珍也、峯巒草樹、一丘一壑、悉盡造化之眞態、殆如步於天池石壁絕勝佳境中、千狀萬態各異其趣、神韻高尚不可言、嗚呼始識黃之妙手、後人之不能追企、而始以爲稍有俗韻、摸者之粗、以石擬玉之類也、乃再拜燒香、敬摸謹寫、若其筆勢深妙、非吾輩之所企及也、子久爲此圖時、年七十有三、余齡亦既六十又四、縱令假十春秋、習學不止、亦不能十之得一也、裝成櫝藏以秘玩、令後之學黃之徒觀此摸本、知余苦心、文化辛未秋七月第五隆識、(取意節文、)如其摹筆、實綦精透、隆之山水畢用此法也、(雲烟畧傳)

訪介石翁、酒間賦贈、繩牀扶病笑欣然、吏隱高齋松竹邊、徵仲娛情非麴蘗、大癡得壽是雲烟、筆端自有金剛力、墨痕原非神秀禪、吾亦忘年同臭味、晴窓論畫轉留連、(山陽詩鈔)

村瀨秋水弱齡紀州に至て介石を訪。門外に立て其內を窺に、一の巨屋を設け、數人此中にありて刀槍を試み、拳法を挑む。偏に講武場の如し。秋水以爲、是甚文人者流の家に似ず。もし或は介石の家に非ざるやと疑へり。然共之を糺すに果して其家也。驚て曰。介石武備ある亦如此かと。(石亭畫談)

第三百三十七　野呂介石筆那智懸泉、南山黃柑圖雙幅

第三百三十八　同筆溪流梅竹圖

三石中の第一人として、その技最優れ、而も文人趣味の最滋きもの、固より第五隆を推す。南紀の邊陬に在りて、能く名を海内に轟せるも亦宜なりと謂ふべし。こゝに出す所の三圖、皆その遺作の尤品たり。懸泉、黄柑の對幅は筆致豐潤、墨氣淋漓、溪流圖の渴筆烘染と較ぶるに、頗る變化を示せり。規模の雄壯、最懸泉圖を推すべし。

介石の師弟

介石の初めの師桑山玉洲もこゝに附記し、併せて介石の門人を列擧す。

桑嗣粲　粲又燦に作る(款識)山中人饒舌に曰く『紀人桑嗣粲、號玉洲、以善蘭聞、余友杜仁里、嘗藏長卷、花莖秀潤、布葉婉妍、覺幽香霏拂、襲人裙裾、野呂介石、受業其門矣、嘗聞木兼葭大賞許焉、或然、後觀金魚圖及山水、俱不及蘭』書乘要略に曰く『明光浦有桑嗣粲者、山水墨蘭、皆有筆力、蓋於介石爲先輩』古書備考に曰く『紀の國和歌浦の人、(中略)名嗣燦、字明夫、號鶴跡園』又曰く『其書山水(中略)磊落にて大雅風あり』嘗て繪事鄙言を著せり。

蔡徵　師友書錄に曰く『號白雲、介石老人高足弟子也、予於老人處數相會、時以裱裝爲業、近聞其書爲國公賞識、拔爲書員、給祿五百石』

有竹

僧少林　書乘要略に曰く『其(介石)弟子、紀之蔡徵、有竹及攝之僧少林、皆上其堂』

僧愛石
天保前後以降の盛況

三石の一人なる僧愛石は紀州の人なり。諱を眞瑞と云ふ。大雅風の山水を畫けり。然れども竹石、介石には及ばず。(雲烟畧傳、古書備考、人名辭書は享和頃の人と爲せり)天保の前後は實に南宗最盛の極に達したる時なり。その勢延いて以て明治の代に至る。關の左右名家崛起し、龍象獅虎群傑雄を爭ふ。その中間ゝ純文人派を以て目し難き者なきに非ず。たとへば杏所、竹洞、梅逸等の勁硬なる筆致、稍浙派の餘習を帶び、椿山等の花鳥は常州派に出で、秋暉は圭齋より傳へて尙南蘋の遺風を脫せざるが如しと雖も、皆これ同一氣運の下に發展したるものなるが故に、今敢て細かにこれを差別せず。(春琴、半江等、敍述の便宜に從ひて、旣に出せる者少からず)竝にこゝに雜出し、たゞその異趣の最も顯著なる文晁以下の南北合流を分ちて、後にこれを別敍すべし。

賴山陽

賴山陽名は襄、字は子成通稱久太郎、又德太郎、(人物志)三十六峰外史の別號あり。安藝の人。春水の子なり。日本外史、日本政記等の著を以て名を天下に轟かせり。本書その傳記を詳述するに遑あらず。左に一二書の錄する所を掲げて、以てこれに代ふ。

卜居於三樹坡、言仰望叡嶽、俯臨鴨水、此地爲京師山水勝槩第一、於是晨夕對坐、悼往感來、詠史之作、斐然稽出、一時傳誦、蓋子成氣魄之大、記識之强、才藻之革、文章之瞻、罕有其比、性最喜古名蹟、苦心購求、收藏支架、至如書卷、寥々數部、平日借之朋友處讀之、譯畢即返、然終身記而無忘矣、其畫固未工、而嗜好之深、染濡之久、加之讀書萬卷、風趣逸上、自有足觀、得者寶重、以比圭璧、嘗爲含公作耶馬溪圖卷、卷一成後、溪之名藉々著聞、四方裹糧遊者、往々不絕、或有大國諸侯、不能踰疆而觀、特差畫師圖其狀、披閱歎羨焉、其所作題跋最妙、使其彙集作一書、聞客歲書成、將附棗梨、寄書徵予題語、既而棄世、(竹田莊師友書錄)

幼有逸才、以疾廢、寓居京師、詩文英遒有奇氣、尤長史學、性謇特、高自標樹、不肯折節下交、(中略)又善書嗜畫、(中略)天保壬辰(三年)夏秋之交、患喀血、遂不起、(九月

廿三日歿、葬東山長樂寺)年五十二、著有山陽外史、通議、政記、初山陽病也、群醫以爲難起、因作喀血歌、以遣病中之無聊、其詩曰、吾有一腔血、其色正赤其性熱、不能灑之明主前、赤光燦向廟堂徹、又不能濺之國家難、留痕大地碧弗滅、鬱積徒成磊塊凝、欲吐不吐熱愈熱、一旦喀出學李賀、難收糝地紅玉屑、(中畧)又作己像贊曰、身偃仰一室、而心關百世之失得、不恤己齏醢、而憂人家國、文章滿腹、不濟乎飢、扛尺直尋、則所不爲、噫是何物迂拙男兒乎、雖然烏知無念此迂拙者之時哉、又曰、此膝不屈於諸侯、聊答故君之德、此眼竭之於群籍、不虛先人之囑、此脚侍母與、二躋芳山、三掉太湖、四上下瀼灣、而未曾踵朱頓之門、此口不能餂殘盃冷炙、而此手欲援黔黎之餓寒也、又有南朝正統議一篇、定爲絕筆也、其友篠崎小竹曰、所謂笑謔罵詈、皆成文章韻語、山陽在焉、(續近世叢語)

山陽詩鈔中自畫に題せる詩多しと雖も、今繁を避けて採錄せず。

山陽之在京師也、負才自恣、放浪麴蘗、時人多短之、獨上人(雲華)美其才、目爲本朝東坡、山陽亦崇上人德、悟言無度、山陽編外史、謂本願寺爲一向賊、上人曰、顯如法主未嘗忤朝廷、何賊之有、山陽曰、是爲織田氏傳中語、苟抗氏者、概以爲賊而已、未必問朝旨如何、若作法主傳、則目信長爲賊亦可矣、法海師名重一時、山陽介上人請見之、師方隱几念經、山陽入、以所著楠公傳示之、師出見之曰、頃聞藝儒久太郎者在京飲酒、三年不省其親、而作忠臣楠子傳、足下豈是耶、凡忠臣必出于孝子門、今以不孝人之筆傳忠臣楠子而有知、必不屑焉、老衲亦不屑見不孝人也、言畢復坐、念經如初、山陽汗背而出曰、眞一宗學頭也、上人曰、君素講陽明學、知行合一、無乃非今時乎、山陽曰、海公如夏日之日、上人則冬日之日也、遂以翌朝發行、省親於藝云、

山陽嘗西遊九州、取歸程于日田、過耶馬溪、奇其山水、時上人在古城、山陽往訪之、未陳寒溫、擲杖大嗟曰、耶馬溪、耶馬溪、上人曰、我豐山水、奚止此一溪、若更見羅漢、則子魂飛魄褫而已、乃相共游觀焉、巉嵓百出、絕壁四圍、穿洞爲龕、內安五百羅漢、古來稱爲奇觀、山陽不懌、惆然良久曰、此是醜山、傷余眼孔、上人何誤予之甚、宜再游耶馬、以醫眼病耳、上人曰、雲根石丈、森列于君面前、何相罵之甚、山陽曰、上人未會看山之訣耶、凡山水必要有樹木、有人家、有流水、此三欠一、則山貧而不潤、水窮而不活、殘山剩水耳、安免爲窮僻矣、今此羅漢固出人工、劚壁劖洞、山剝水死、雖有奇形、無復足觀者、比諸耶馬、奚啻霄壤、嗚呼、耶馬溪兩面山水、凡一百里、千巖競秀、叢樹欝蔽、水可以泛漁艇、山可以充采樵、而十有三村、負山沿水、田園籬落、道路橋梁、點綴其間、漁樵行旅、來往絡繹、仰望峯巒、則巉嵓攢天、俯瞰溪潭、則紺碧駛地、崖乳吐丹、金氣現霓、巖蘭挂而水芳、翠苔稠而石肥、佛閣神祠、起伏于叢松之杪、野店驛舍、隱見于深青之間、加之山皴之妙、爲披麻、爲截堆、爲斧劈、爲雲頭、多々益變、不可端睨、蓋造物者之活畫也、上人有悟、於是復同游耶馬溪、信宿而還、先此、土人稱茲地、爲山國谷、山陽改爲耶馬溪、以耶馬與山邦音相通也、遂自圖其寔景、作文記之、賦詩題之、以贈上人、詩云、一瞥孱顏未免情、今游眉目始分明、賞心不負平生屐、耶馬溪頭兩度行、峰容面々趁看殊、耶馬溪山天下無、安得彩毫如董巨、生綃一丈作横圖、由此耶馬溪名布海內、

當時文雅未盛、如山陽竹田、亦賴上人以得博譽、故二子視之極厚、(中畧)初山陽出在大坂、未爲人所識、一日游于新街妓樓、流連不去、街法每三日必完了其纏頭、而山陽未知之、囊亦已空、樓主某責之、山陽醉方甚、遽命妓展紙、立作書十數紙以與之、某怒曰、白紙猶可、既已作字、字亦狂奔、豈抵半文錢耶、何物醉漢、傲然擁姬、瞞著吾人、宜急縛以告官、山陽乃作折柬、使併以贈上人、時上人在難波別院說法、四衆圍繞、某馳而往、以實白上人、上人即出金卅錠以購之、衆皆愕然、問醉漢爲誰、上人曰、天下第一豪傑山陽先生也、某急馳還、叩頭陳謝、山陽曰、淸楚完了不亦多哉、由此山陽名始籍甚、乞書者日磨至云、(豐繪詩史、雲華傳)

木米の傳は竹田莊師友畫錄に出でたるもの最も精し。曰く。

木米老人、名八十八、號木屋、因自稱木米、京人、居于鴨東大和橋北、予初訪其居、甚狹窄、架鴨水上、流水潺湲、響于屋下、手汲其水、煎茶、且曰、此茶福井榕亭所造、便贈一絶、末二句曰、家園水即鴨河水、煎出榕亭老子茶、老人喜之、常念此曰、非尋常兒之所能作也、於是相得太親、爾後毎入京、必時往來、話雜諧謔、且笑且說、忽實勿虛、不可思議、予謂、大雅春星諸老、殆六十年、當時人物典型、猶存而可觀者、唯翁一人耳、賴山陽睨視一世、不敢折節下交、獨與老人善、便言、我天下之書無不讀、天下之事無不記、而翁能讀吾未讀之書、又記吾未記之事、雲華舍公、亦能傲物、而於翁乃太傾倒、口其名不少措焉、翁素多藝、特以善陶著、泥土搏埴諸法、方圓稜角各式、其色青紅粉紫、其畫山水人物、莫不一々精妙、最長撫古、仿宋明諸窯、與眞無二、故骨董家啗以千金、猶不可得、至青磁、翁始開其法、今攝州三田窯、亦偸翁法所作、或言、昔者有穎川氏者、居建仁寺、善陶、翁從斯人受教、平日置窯於粟田山下、身服綺紈、手搏泥土、望之風標昂然、阮屐嵇鍛不是過也、旁設茶寮、暇日煎點自娛、蓋其技可謂前無古人、後無來者、其畫亦出于古窯所描、故焦墨乾擦、不用渲染、奇致異想、自具別趣、予今歲(天保四年)三月入京、四月二十九日、面別下江、五月十六日、舍公寄書云、翁以昨十五日下世矣、予常稱畫中知己者二人、翁與賴山陽是也、山陽客歲死、迺謂失右臂、今可謂左右臂俱失也、翁所居有一倉、多貯各色諸土、嘗指之語予曰、倉中所貯、自唐山諸窯而下、夷蠻所出之土、無不悉有、我死之日、更無他願、盡合此土、和以鴨水、投屍於內、搏作一團丸、用粟田窯燒三晝夜、而後塡之京北山中、以俟千歲後有知己之開者、是我之願也、今得其訃、偶憶遺言、雖事涉虛誕、足使來者想見其人也、故錄于此、

本朝畫家人名辭書に曰く、「木米、靑木八十八ト稱ス。尾張ノ人ナリ。年十五ニシテ四方ニ出遊シ、儒者雅客ト交リ、淸人朱笠亭ノ陶說ヲ讀ミ、始テ陶業ニ志シ、九々鱗ト號ス。享和年中京師ニ至リ、陶工奧田頴川ニ就テ陶業ヲ修メ、又師授ナクシテ畫技ヲ善クシ、其筆法磊落ニシテ氣韻多ク、常ニ自ラ陶器ニ畫ケリ。天保四年五月歿ス。年六十七。洛東鳥邊山ニ葬ル。」文政元年の平安人物志に「木佐平、號聾米、新門前繩手東、木舍左平」と記されたる者あり。木米の畫に聾米と署せるあるを考ふるに、或は佐平即ち木米か。木米曾て號を山陽に求む。山陽直ちに百六と命ず。木米解せずしてこれを某(今その名及この話の出所を忘る)に問ふ。某曰く。さすが山陽は才子なり。木は十八、米は八十八、合せて百六に非ずやと。

第三百三十九　木米筆竹莊閒適圖

木米の畫は固より雅人の戲墨にして、竹田の謂はゆる焦墨乾擦の蕪雜なるもの、猶こゝに出せる山水圖の如きを多しとすと雖も、間〻濃淡の墨色を使ひて、雅味頗る掬すべきもの、竹莊閒適圖の如きもの亦少からず。蓋し謂はゆる一片酣古の氣、學ばずして、この逸上の趣致に詣れるなり。

第三百四十　同筆溪橋歸樵圖

田能村竹田

田能村竹田名は孝憲、(印文及款識常に憲一字を用ゐき)字は君彝、幼名磯吉、後通稱行藏、竹田はその號なり。豐後國直入郡竹田村に居る。故に號す。居る所の莊を竹田莊、廬を補拙廬と云ひ、花竹幽窓主人、九重仙史、(竹田先生畧年譜、豐繪詩史は重を疊に作る)隨緣居士、(以上年譜、又隨緣沙彌)藍水狂容、紅豆詞人、(詩史、豆又荳)九峰無戒衲子、田舍兒、小白石翁、西鄙人、(印文)藍溪釣徒、雪月書堂等の別號あり。遠祖田能村吉左衛門備前に在りて池田侯に事へ、祿千石を食みしが、其子休庵岡に移り、醫を業とし、召されて藩の侍醫と爲る。休庵の四世の孫碩菴名は思永は、即ち竹田の父なり。藩主中川修理太夫の御匙醫たり。兄名は君明、通稱周輔、

〔詩史作周介〕藩學由學館司業と爲り、早く歿す。竹田仍りて家を嗣ぐ。性學を好み、醫となることを喜ばず。謂へらく。人を醫するは國を醫するに如かず。終に儒を以て進み、由學館の司業と爲る。後致仕して江湖に放浪し、詩詞を以て關西に鳴る。又畫を能くせり。（年譜、詩史、畫乘要略、「竹田と華山」）左に年譜體を以てその傳記を敍す。

安永六丁酉年　六月十日生誕（年譜）

天明八戊申年、十二歲　この年より寛政四年十六歲に至る迄、藩校由學館出席、目安高に付、藩主の賞を受くること四回（「竹田と華山」）

幼好學嗜詩、才思秀拔、稍長學醫、非其志也（近世叢語）

專攻經術、旁好詩歌繪事、資質多病、然刻苦勉勵、不少屈撓（詩史）

邊蓬島、淵世淵に畫法を學びしも弱冠以前の事ならむ。山中人饒舌に曰く「余少受六法於斯翁（蓬島）與淵子欆園」。師友畫錄に曰く「予弱齡從眞齋蓬島二先生開途、故揭二傳於卷首」。

寛政八丙辰年、二十歲　「至熊本、游李紫溟村井琴山之門」（詩史）

雲烟畧傳及續近世叢語は、熊本の遊學を以て、豐後國誌成れる後の事と爲せり。

同十戊午年、二十二歲　正月由學館出勤被命（「竹田と華山」）

同十一己未年、二十三歲　廢醫業、官命爲由學館司業、賜俸米數人口（「竹田と華山」に三口とあり）入唐橋世濟門（年譜）

藩主聘唐橋君山於江都、司藩黌學政、先生乃阪、執贄其門（詩史）

同十二年庚申年、二十四歲　官命修豐後國誌、粗按、此年夏初游長崎（年譜）

行藏と改名す。（「竹田と華山」）

この年長崎にて費晴湖に畫を學びきとは、直入翁の談（京都美術協會雜誌、竹田傳）に聞けど信じ難し。

享和元辛酉年、二十五歲　夏東遊、入古屋十次郎門、問六法谷文晁（年譜）

在江府家中子弟の學業引立を命せらる。（「竹田と華山」）

在江都、僅一年餘、而歸鄉（雲烟畧傳）

從君山赴江都、途次大坂、訪木孔恭、孔恭（中畧）見先生品藻其畫曰、本朝南畫、必從斯人起、先生在江都（中畧）就谷文晁（中畧）復從君山阪藩（詩史）

豐繪詩史に、この時竹田華山を訪ひ、その紹介もて文晁に就けりと言へるは、信ずべからず。華山は享和元年僅に九歲なり。

余未冠、托君山先生、投贄門下、後東游日、登其所謂寫山樓者、觀先生倚床盤薄之狀數次（師友畫錄、文晁傳）

余甫冠、東游江戶、途經阪府、欲訪木世肅、偶有人、拉余將登天王寺浮屠（中畧）余不肯、遂見世肅、明年西歸、再到、則世肅已歿、浮屠亦焚滅矣（饒舌）

享和辛酉夏、予一上其堂、其翌壬戌棄世（師友畫錄、木世肅傳）

同二壬戌年、二十六歳　四月十六日西下、爲豐後國志編修、巡視國內諸藩及山川地理、林家へ入門命せらる。(「竹田と華山」)

同三癸亥年、二十七歳　嗣家、爲組外馬廻、受家祿、由學館司業如故、(年譜)

豐繪詩史は、竹田の由學館司業と爲れるを、豐後國志成れる後とす。

文化元甲子年、二十八歳　豐後國誌(箋釋豐後風土記一卷)成、(年譜)

遍搜國中山脈水理、城墟邑阪、莫不精討究索、及誌成、先生製地圖、詳晣如指掌、藩主善之、褒賜有差、(詩史)

唐橋世濟撰豐後地理志、未脫稿而死、藩主使竹田及伊藤寬叔、卒其業、(中畧)書成、(中畧)賜竹田寬叔時服以賞其勞焉、(續近世叢語)

賞として紋服一着を賜ふ。其外受賞六回。(「竹田と華山」)

同二乙丑年、二十九歳　遊兩筑及長崎、經坂府入京、寓西京阿彌陀寺、(年譜)

予在崎鎭殆一歲許、寓斯樓(熊秋渠)之日爲多、(師友書錄、熊男傳)

乙丑歲予入京、時禁中構書院新成、詔徵能手圖其壁、有司按籍、進者二百餘名、余聞之、私喜曰、籍中必有一二俊傑、精究六法、誘導後輩、張皇斯道者、留滯三年、周徧搜問、卒無所遇、悵然回掉而歸、(饒舌)」

江大楣に就いて詩餘を學べるもこの年ならむ。詩史に曰く。「謂、本朝建櫜以還、文運日隆、詞人書史蔚然崛起、(中畧)但塡詞一途、寥乎若晨星然、可謂藝壇之闕典矣、(中畧)聞蘇人江大楣芸閣在長崎、往而訪之、質以塡詞法、大楣曰、日本詩書非不佳也、然風土有殊、語格不同、故西人稱爲倭習、今觀君詩若畫、句々流暢、筆々沉著、宛然與中國同趣、不圖海東有若人、貴邦鐵翁逸雲等、方就家兄大來學書、亦未免爲日本書也、蓋感殊則同空天隔、契合則異境對顏者非耶、君從離騷中得力、是所以獨能脫習氣、又曰、貴邦塡詞、當以君爲鼻祖、君其勉旃、先生深喜得知己海外、叩關無虛日、未幾詞學大進、有所妙合默契、遂著塡詞圖譜、以唱斯技、由是志於詩餘者、有所依據」云。たゞ同書これを致仕後の事らしく叙したり。

予少喜塡詞、遊崎日、得江芸閣、使其按拍是非、實鷗夢(水知止)之力也、(師友書錄、水知止傳)

同三丙寅年、三十歳　在京、入村瀨栲亭門、塡詞圖譜刻成、(年譜)

我邦希作詩餘者、竹田以爲藝苑闕陷、夙刻意學之、竟撰塡詞圖譜、刊布於世、小竹稱其自作詩餘曰、詩餘中之猶龍、(續叢語)

游京師、就村瀨栲亭學、栲亭視之極厚矣、居二年反乎岡、(同書)

留學有年所矣、與梅辻春樵、中島棕隱、僧月峰輩最相親善、(竹田居士傳)

同四丁卯年、三十一歳　娶安東氏、臼杵藩士某女、游大阪、寓生玉持明院、(年譜)

これより先、藩醫松本氏の女を娶りしかど、不幸にして病歿す、松本氏頗る文才あり。その父亦詩文に長じ、書を能くせり。(大雅風)初め竹田を誘掖せるはこの人なりと云ふ。(直入翁談)

同五戊辰年、三十二歳　生女、(年譜)

同七庚午年、三十四歲　竹田莊詩話脫稿、(年譜)

同八辛未年、三十五歲　閏二月四日起程入京、遊紀訪介石居、(年譜)

予昔者南遊、每日過從、優遊終日、(中畧)當時予獲翁畫數十紙、(師友畫祿、隆年傳)

「寫於南紀之寓處」の款ある竹園美人圖(柴田源七君藏)はこの時の作ならむ。

同十癸酉年、三十七歲　三月致仕、爲由學館詩文總裁司業如故、夏在大坂、寓持明院、官賜別俸數口、(年譜)

先生居常、慷慨憂國、數上疏痛論諫藩政、藩主不納、先生乃作漁父圖、題詩曰、深宮今夜非熊夢、落否釣竿三尺前、官遂不曉、先生好讀離騷、一日擲卷而歎曰、屈子慨世之極、葬身魚腹、嗚呼人生有涯、予寧爲騷人、委命於風流海而已、於是浩然勇退、始放浪江湖、(詩史)

竹田多病、不勝世務、懇請致仕、藩主許之、更賜養老俸以優焉、時年三十八。(八は誤、七なり)竹田自是不復講經史、優游養性、風流自命、以書畫爲娯、(續叢語)

居士稟賦薄弱、尫羸善病、而性素恬澹、不與物相迕、又於世事有深所感慨、乃自謂、經濟之學、淵源深奧、苟自非大有力人、則不能究其根底、而濟救世之美也、年方三十七致仕、而屛棄一切塵機、以風月茶香養生、不復修經術、遊神于方外、寄跡于江湖、欲以詩歌書畫而終浮世也、(竹田居士傳、師友畫錄末)

大阪府城南大仙寺藏三幅、(瑞圖畫)、森竹窓言其奇、阪府墨竹第一矣、癸酉夏、賂史閣主(僧大麟)同余往觀、果妙品、(饒舌)

この年山中人饒舌成る、緒言の末に曰く「癸酉冬閏十一月、竹田生」。

同十一甲戌年、三十八歲　邂逅賴山陽於鞆津、夏在攝、再寓生玉持明院、(年譜)

この年作る所桐陰吹笛圖(東京川崎金三郎君藏)あり。

同十三丙子年、四十歲　彥藩醫岡崎仲達、陪岡侯、來寓岡、屢訪竹田莊、秋游府內、伊東李坪、大城雲樵從遊、官賜別俸數口、百活矣稿成、(年譜)

この年夏竹田書屋に作れる歲寒三盟圖(灘嘉納治兵衛君藏)あり。

文政元戊寅年、四十二歲　冬賴山陽來訪、(年譜)

この年作る所花月帖(京都竹影堂藏)あり。初頁に白衣觀音を書き、署して曰く「文化戊寅春盡日、寫於竹田莊之海棠小窠。」以下七頁櫻花數輪を書き、和歌九首を題し、末に記して曰く「いづこにてもよるべを定め賜ひなん日は、かならずかへし賜へかし。おのれが筆のつたなきのみかは。御身のためにもよろしからじ。たゞそれまでしばしがほどの御なぐさみに、參らする迄也。かしこ。のり。」蓋し愛妾を去るに臨み、與へしものならむ。(竹村著名蹟志摘要)

同二己卯年、四十三歲　秋藩老侯の駕に陪して江府に赴く。(「竹田と華山」)

この年陪駕日記一卷成る。(同書)

同三庚辰年、四十四歲　春又駕に陪して歸藩す。(同書)

この年端午日杜秋艇の爲に作れる靑綠山水(柴田源七君藏)あり。

同四辛巳年、四十五歲　秋携稆游犬飼、(年譜)

同五壬午年、四十六歳　加賜別俸數口、高橋草坪來學、春游杵築、閏正月廿四日起程、三月十五日歸家、伊東來太郎從游、黃築紀行、陶寫小話稿成、(年譜)

同六癸未年、四十七歳　春携貂游備之尾道、經大坂入京、夏寓東山雙林寺前、冬移寓小川街、高草坪及豐水從游、(年譜)
大雅堂、(中畧)余亦嘗寓一歲許、(饒舌)
この年六月五日作る所の松林山水圖(神戸小寺成藏君藏)「癸未六月寫於東山之寓所」の款ある碧澗小樹圖(紀伊濱口吉右衛門君藏)あり。

同七甲申年、四十八歳　春携貂自京歸、松本九三來學、帆足杏雨亦來學、隨緣沙彌語錄稿成、(年譜)
この年作る所香雪齋圖題記の末に曰く「山内希逸、東奥會津人、齋頭植棋、自號香雪、今歳甲申九月、枉道訪予於竹田村莊、索書齋圖及詩、余一病自夏徂秋、筆硯廢蕪、意欲固辭」云々。この圖今山内昌君藏せり。

同八乙酉年、四十九歳　春自日田經秋月宰府福岡、六月至馬關、寓廣江氏、廣江敬藏來學、敬造後寓江戶、冒西島氏、曰秋航、(年譜)
「仿諸家山水册」題記の末に曰く「乙酉春寓比多郡者數旬、平原杜兄朝夕往來討論六法、故作此册贈示。」(自書題語)又この年初夏作る所花禽圖(堺宅德兵衛君藏)あり。又八月森秋艇の爲に作れる絹本山水卷、今日田森藤市氏傳へ藏せり。

同九丙戌年、五十歳　夏入京、秋游尾道及馬關、遂到長崎、野口謙之輔從遊、十二月廿三日歸家、(年譜)
丙戌秋抵尾道、寓龜橋二氏、與竹下夢研諸子、開茶香之筵、爲風月之歡、(詩史)
丙戌冬到崎、(師友書錄、劉梅泉傳)
この年仲秋前三日、尾道にて夢研の爲に作れる春秋山水屏風一雙(灘嘉納治兵衛君藏)あり。

同十丁亥年、五十一歳　春初經熊本、再至長崎、矢上行助從遊、十一月自長崎經肥入薩、(年譜)
丁亥春遊崎陽、轉遊鹿兒島、回抵熊本、爲矢快雨、作求磨嶺雪樹圖、(中畧)十二月皈家(詩史)。雪樹圖題記に曰く「今茲丁亥十月、余自崎歸、兄送至熊府、遂同入薩、憫余之老且病、左右周旋備至、(中畧)十二月抵熊府、寓於蕉雪齋、得小間暇、因寫(下畧)」。
客冬十月從崎陽還、抵島原邑、(雲仙山卷跋)
この年六月十七日島錢淵の爲に作れる夏山雨後圖(東京川崎金三郎君藏)あり。

同十一戊子年、五十二歳　春初自薩歸、矢上行助來寓竹田莊、四月東上、秋游肥、暫遊日記成、冬在家、今才調集(二十卷)脫稿、(年譜)
この年作る所、雲仙岳圖卷跋に曰く「今夏屏處竹田村養病、偶閱孫無逸山水卷、遂仿其筆意作之、(中畧)橋兄元吉家藏谷文晁山水長卷、蓋谷壯年作、筆法墨法傅彩三者善美兼盡、我輩非所企及、但論筆墨內無一點匠氣、則覺斯卷差優一等也、橋兄固善鑒、爲一商焉。」又曰く「此卷末後、除山陽賴兄外、不容他人之着一語也、十六日竹田生再識、時卷成後五日。」書上題語の末に「文政戊子晚夏」とあり。翌年已丑十一月山陽これが跋を書せり。

同十二已丑年、五十三歳　四月十日起程、東上、寓攝、游有馬、高橋草坪從遊、八九月間入京、(年譜)
船窓小戲册の題記に曰く「已丑四月二十三日發佐賀關、渡育王洋、」「二十四日泊青嶼遭雨」「二十九日次于馬磯洋值雨」「四月二十六日到三濱過棋津寺。」(自書題語)

この年作れる冬日閑居圖題末に「文政巳丑秋月、寫于大阪府寓次」とあり（自書題語）又初冬作る所稲川所見圖（大阪秋里竹次郎君藏）あり。初冬山陽、小竹等と箕面に遊び、別れて伊丹に至り、小西氏に寓し、終に小西氏等と有馬に遊ぶ。有馬書帖の作あり（直入翁談）自書題語に見えたる「赴伊丹途中作」即ちこれなり。跋の末に「巳丑十一月」とあり。

天保元庚寅年、五十四歳　春自京歸（詩史は去年十一月歸家と爲せり）高草坪來寓竹田莊、居亦瑣々錄稿成、五月鐵翁逸雲來訪、十二月入京、三宅瘦仙、高草坪從遊、寓小石氏用拙居（年譜、詩史は「夏抵京師、寓於小石氏」と記せり）

この年閏三月作る所の梅溪艤舟圖（京都山田茂八君藏）あり。又京よりの歸途舟中に成れる船窓小戲冊あり。その「四月晦舟過播洋値風」の圖に識して曰く「庚寅五月余居竹田莊、追寫此圖、臨池際不覺毛竪股戰、冷汗一握」又初秋念二日作る所柳樓對鏡圖（大坂住友吉左衛門君藏）あり。

同二辛卯年、五十五歳　在京迎歲用拙居、春西下、三宮小虎（直入翁の事なり）從學、今才調集及泡茶新書三種刻成（年譜）

山陽賴兄嘗送予下高瀨、舟中太一袖此書冊出示、賴兄展閱數次、喜曰、爲子解愛父筆墨、藝園佳事、我當爲汝跋、實辛卯三月事也、距今僅三歲、竹田生憲識、（船窓小戲冊跋、自書題語）

この年仲春作る所嵩山登覽圖（後出）あり。詩史に曰く「辛卯三月爲松醉古、作復又一樂帖」尋いで作る所の山水十景冊に跋して曰く「頃爲醉古賢友、寫一冊、命曰亦復一樂、賴山陽一見爲可、取而弗還、自跋其後云、奪人之有、以爲己之有、亦復一樂、於是醉古艴然不懌、因再作之爲償（中畧）辛卯孟春念七、識于城南寓次、竹田生」この冊今大坂藤田傳三郎君藏せり。

夏月歸國、途次別府、作暗香疎影圖（詩史）題末に曰く「辛卯仲冬爲香影亭主人」（自書題語）暗香疎影圖は今戸次の帆足後作君の家に傳へ藏せり。題記に辛卯初冬寫とあり。

同三壬辰年、五十六歳　夏末游戸次邑、秋經中津、游馬關、聞賴山陽訃於馬關、冬官命而歸、作歸馬放牛圖、々成、復游馬關（年譜）

凍石、小白石翁（印）、鈕蓮葉、款曰「賴襄爲君彝兄」今茲壬辰元日、賴子成爲予手刻、托雲華含公轉贈子成名高一世、每人寶重其手翰、雖一筆半紙、亦復貴重、拱璧不啻也、況其筆之鐵、而希之石乎、至勉余疎慵以白石翁、則逡巡愧赧弗止也、天保三年四月十八日、識於竹田莊之補拙廬、憲（竹田印譜）

壬辰五月、遊戸次、寓于帆氏、與雲華邂逅、意甚相適、作曲溪複嶺二圖、一贈雲華、一留與李蹊（中畧、この書今帆足後作氏傳へ藏せり）八月皈家、九月抵乙津、寓於碩田莊、十一月抵古城、寓於雲華居院、遂至馬關、寓於廣氏、與殿峯秋水等唱酬相善、留十有二旬（詩史）雲華に贈れる複嶺疊嶂圖題記に「壬辰六月二十五日」（自書題語）とあり。

藩主中川公、囑作華陽皈馬、桃林放牛二圖、乃每朝往郊、跋涉山谷、親見在牧之狀、或薄暮出戸、夜深而還、々即案圖而製之、累日所作、稿本凡十數幅、每稿殊觀、比々皆逼眞、擇其一、以呈公、餘皆贈于親戚故人、余亦嘗覩其皈馬圖數幅、其一則春山鬖鬖、暖波環流、前有坡塘、獨馬方馳未馳、顧盻成態、（中畧）其一則兩馬騈臥、枕塘蔭樹、鬣影搖風、（中畧）其一則落々數十頭、或訛或嚙、若仰而嘶風、俯而吻水、子母相呼、牝牡相戲、其狀不一、（詩史）

年譜、詩史共に歸馬放牛圖の作をこの年に繫けたれど、自書題語の桃林放牛圖題記には「文政十二年歲次居維赤奮若、月爲如、蓂生十五葉奉命敬作併題、臣田能村憲」とあり。

飯馬、放牛の書は後中川氏より親族遠藤氏に贈れりと云ふ。その稿書の一、宇都宮遯山と云ふ者これを藏すと聞く。（「竹田と華山」）

先人有除夕詞唐多令一闋、附記于此、今歲暮春初、我猶在舊廬、得山陽外史音書、封贈自刀黄玉印、以小白石翁呼、風雪歲將除、旅窓燈影孤、東游心沒了、京師奈何、水明山紫處、菀茶丹酒誰倶、山陽賴翁、以天保三年壬辰九月棄世矣、此冬、先人發岡、將東遊、途上得翁訃音、因有此詞云、粗識（竹田印譜）。この詩餘はこの年除日作る所の白描觀音圖に題せしなり。自書題語に出でたり。除日には馬關に在りきと見ゆ。當時作る所仙洞讀書圖題記に曰く「天保三年除日、竹田生寫、併題小令一闋、時寓於赤馬關之呑海樓」（自書題語）

この年作る所竹溪間居圖題記に曰く「此幅今茲四月所作、携之遊犬江驛、展觀累日、因題五言八句、時壬辰六月初九日也、竹田生書於瓢舍之北軒」又秋山橫披題記に曰く「壬辰六月抵犬江驛、阻雨於瓢舍（後藤氏、茶屋）留滯旬餘、爲主人作之（下畧）」この橫披は即ち犬江眞景青綠山水圖にして、今大分後藤喜太郎氏藏せり。又この年の所作憩寂圖（雲華取去、大坂住友吉左衛門君藏）端午後一日竹田莊に作る所梅花双鶴圖（東京中村清藏君藏）あり。

同四癸巳年、五十七歲　春初發馬關、夏首入京、迓粗子大阪、秋七月聞粗罹病而西下、師友書錄稿成、冬復東上、迎歲三叉（年譜）

煎茶圖題記に曰く「時癸巳清明後一日、寓於下關南部之呑海樓」（自書題語）又秋江小景題記に曰く「癸巳三月廿四日寫於用拙居、時入京第五日也」（同上）

又松巒古寺圖に曰く「癸巳孟夏廿九日、書於用拙居東軒」（同上）

癸巳三月發馬關、入京阪、當此時、山陽木米相踵而死、木米陶工也、博識精鑒、最賞先生之畫、先生愛其爲人、遇以知己、於是悼二老之亡、悽惋情切、賦詩曰、山陽氣磅礴、陶米不相下、表立一世上、庸俗誰親炙、顧獨於吾畫、錯愛倒噉蔗、山陽爲題字、筆架珊瑚架、陶米賛極口、聲容倶温籍、哀哉天不弔、餘生不少假、陸績降巫陽、昨秋又今夏、吾如失兩臂、魂飛離其舍、爾後一幅成、輒欲扯而破（全詩自書題語に出づ、下畧）青綠山水に題せり、跋に曰く「時天保癸巳七月、余在浪華府岡邸之寓舍、自此後悒々不樂、七月皈家（中畧）十二月抵乙津」（詩史）

予今歲三月入京、四月二十九日、面別（木米と）下江、五月十六日舍公寄書云、翁（木米）以昨十五日下世矣、予常稱畫中知己者二人、翁與山陽是也、山陽客歲死、廼謂失右臂、今可謂左右臂倶失也（師友書錄、木米傳）

寒溪著書圖題記に曰く「今茲癸巳余西歸、住家山者殆十一旬、著師友書錄二卷、收平日所相師友者、得一百五名、秋景山水題記に曰く「一隱兄聞余將東上、特差人來索畫、時發軔在近、早々命筆作此、以附其人、癸巳冬至前五日」（自書題語）漁父圖に曰く「時梅谷送余、同宿于郡山村之西爽館、癸巳十一月廿八日也」（同上）

この年上元日作る所騎驢觀梅圖（大阪藤田傳三郎君藏）春晩作る所柳陰雛鳧圖（川崎金三郎君藏）あり。

同五甲午年、五十八歲　春至大坂、三宮小虎從遊、夏西下、秋復東上、小石中藏來游、山中人饒舌刻成、冬在家（年譜）

甲午二月遊尾道、旣而皈國（詩史）

この年孟春作る所石門斜日圖（戸次帆足後作君藏）清和月に作る所湖館月夜圖（欵曰「甲午清和月於玉浦寓寺作」灘嘉納治兵衛君藏）孟秋作る所松溪聽泉圖（大坂生島嘉藏君藏）八月二十日夢研の爲に作れる松下琴書圖（男爵岩崎彌之助君藏）及秋月作る所乾坤一艸亭圖（神戸西松喬君藏）等あり。

同六乙未年、五十九歲　春東上、五月至大坂、六月臥病吹田村井內氏（號經雨）八月廿九日病歿大坂中島邸、葬于口繩坂淨春寺（年譜）

乙未春東游、將赴江都、途次大坂、時方盛夏、避暑於吹田村、留數日、得疾、乃移居於大坂本藩邸內、小竹聞之、往訪其病、先生在褥、呻吟方苦、曰、甚矣僕之妄也、耽溺筆墨、眠食失度、遂至于此、小竹退而歎曰、嗚呼翁之藝事、比諸元明諸名家、爲不多遜焉(この事、自畫題語の小竹の序文に見ゆ)而平素謙遜、自稱老畫師、翁豈畫師乎、其由藝進德、至死不變如此、時男絽在國、聞疾病、兼行抵坂、先生見之而喜、語久而瞑、實天保七年八月十六日也、行年五十有九、法諡曰竹田居士(詩史)

小竹篠崎翁爲書曰、竹田先生墓、鐫以傳永世云、居士臨歿前數日、有詩曰、一昨不死又昨日、昨日不死又今日、今日不死又明日、如此不死日又日、登々不死、蹈盡今年之三百六十日、又明年之三百六十日、又同人扶病護柴荊、雨氣帶秋吟骨醒、西望鄉山兒未到、一燈映我瘦顏青(竹田居士略傳)

蒼莽大河橫地流、弛肩河上且遲留、遠郊草色初經雨、前圃荳花先著秋、客枕多年常慣病、吟燈秋夜自忘愁、幸逢身健神蘇日、好御長風賦遠游、乙未之秋、臥病吹田村、値暑甚、終日鬱悶、起臥不安、而昨偶會微雨蕭然而至、庭樹清爽、枕席間頗生涼、稍覺意快、因占此詩、併作此圖、奉寄城中諸友、小竹篠君、松蔭藤兄、藻亭吳兄、時水穀廢者殆二旬、竹田生、今朝偶得京便、因轉贈小石國手、以博一粲、閏七月十一日、憲(自畫題語)

この年仲夏碩田農舍に作れる松籟石泉圖(大阪岸本吉右衛門君藏)あり。

竹田の男絽(字躬耕、通稱太一)醫を業とし、家を嗣ぎ祿を受く。(續叢語)義子名は痴、字は顧絕、(通稱傳太)小虎又直入山樵と號し、大阪に居り、後京都に住し、畫を以て明治の世に知らる。竹田の著書は既に上に見えたり。歿後安政六年、竹田の二十五年忌に當りて印譜成り、又その後天保十年、門人帆足杏雨題語を集錄して自畫題語四冊を出す。畫に題したる小品文の妙は、恐らくは竹田を以て古今獨步と評すべからむ。その交友中、最も賴山陽と相稱許せしさま、その自記の文に見えたり。曰く。

予資性迂濶、僻愛繪事、苦辛從事殆五十歲、這裡所得之消息、知者唯山陽一人、故平生稱爲畫中知己第一、書畫題跋山陽特得宋元人遺意、分宗派、稽古今、辨是非、核眞贋、其所論各有斤兩、一々相當、無過譽、無妄許、與從前儒士隨口品評、任筆頌揚者、大不同也、故余謂、山陽儒而解六法者、

余寓山陽家數日、山陽一日早起、掃除書室、挿花焚香、掛吳春坡山水幅、自汲鴨水、貯之古甆甕、洗古端研、磨程氏墨、陳佳筆紙、竝平日愛藏所不妄用、其硯屏筆架、諸具悉稱焉、一々親辨、不敢煩使童婢、使其觸手矣、既畢招余曰、今朝供養結搆如此、請爲吾畫、余即作自描蘭竹、沒骨牡丹及草筆水仙梅花三頁、今頁中所收是也、昔者危大僕袁清容諸家之待雲林大痴、亦恐不能過於此、殊覺慚愧、姑錄記辱知之渥矣、時史無學、其論畫取諸臆、而與目謀、是其所好、而僻其所是、不得公論也、子成特自讀書中論出、所鑒別各有根據、得其肯綮、非廣舌長嘴、泛論漫然之比也、山陽讀書餘暇、動涉繪事、運筆行墨、不必合格、然從書法中來、風致負然、出脫時蹊、舉世爭以爲珍矣、蓋平生高尙之氣、溢出楮墨間、故爾、山陽數稱余畫、一日携示仙洞燒丹圖、紙高丈餘、用青綠法、時山陽寓篠小竹家、就褥而臥、及畫方陳、擡頭瞪目、霍然而起、把余肘曰、華人、華人、眞個華人、余每畫成、輙憶得山陽與評賞焉、嘗作一長卷、題其上曰、除山陽外、不容他人著一語(雲仙山卷を謂ふ)門外漢聞之、必謂比而黨矣、山陽嗜好書畫、多方購求、輕貲不嗇、甚於書冊、蓋腹笥富贍有餘、故捨彼取此、若夫桓玄王涯輩溺愛殉命、禍及於國、豈同日而談哉、雖然、蘇公晚年視書畫、不及糞土、此亦我輩不可不知而戒愼焉也、山陽資性執意甚確、己之所欲、人不與亦必取焉、己之所不欲、人與亦不敢取焉、如此冊、當時方出示之、已有欲取之意、動于眉間、故予不敢嗇、一時輙贈、然不唯不敢嗇、亦欣此冊得其所也、世目子成、倨傲無禮、不然也、子成待物極厚、但每人所爲未

精到、而不足饜飫其心耳、今玆辛卯、林谷山人來居京師、山人素善刻、近日益進、子成觀其近藝、愕然曰、不圖山人技到于斯矣、遂起而拜、出白玉印材乞刻、遇善即服蓋如此也、如斯冊亦然、子成送余下江、到阪府、留數日、將還、薄暮上舟、一時遑遽、失冊之所在、子成失措變色、左右探索、既而方獲、喜曰、不虛斯一行也、子成臨別即道、謝此以其自刻印一、予預謂、刻成日、其語必奇、其字必雅、其刀必韻、(天保三年贈る所の小白石翁の印即これなり)余之拳々乎山陽者、以其言語文字、書到前人之所未書到也、山陽之拳々乎予者、以其點染位置、寫到前人之所未寫到也、其所業彼此大小不類、然到前人之所未到則均、此際神契爾我相知、不可對不知者言也、辛卯中元日書於竹田莊之補拙廬、時盆中茉莉結蕚九、是日放其三、蓋我邑多寒、貯此花者甚希、(亦復一樂帖跋)

逸話の諸書に見えたるもの略左の如し。

竹田少讀白樂天詩、愀然感悟、乃作讀長慶集七古一篇、以述懷、李紫溟一讀、悽然至泣下、(詩畧)

數游京大坂、而不好泛交、特與頼山陽、篠崎小竹、小石檉園、雲華上人等、締交厚善、素多才藝、能詩文、又善書畫、旁及聞香喫茶之技、莫不窮綜焉、

竹田於詩文書畫、雖爲一時名輩許可、而其所得意者、以畫爲第一、名輩亦以爲然、頼山陽雲華上人皆嗜畫、性高簡傲物、而於竹田畫、則嘉歎不舍、

初竹田遊大阪時、有米山人者、名國、字士華、善書畫、特喜竹田畫曰、我衣鉢後來可附者、唯吾子耳、其夙被名士知如此、(續近世叢語)

遊于京攝之間、與頼山陽、篠小竹、小石秋岩、釋大含、紀春琴諸友、詩酒合歡、或聯杖於鴨崖之雪、或掉舟於澱江之月、汗漫馳騁、卸行李於長之馬關、而與廣殿峯、其子秋水諸君、品評古今、或時弄筆硯於備之尾道、而與橋竹下、龜夢研諸子、賦詩分韵、動輙留歡數日或兼旬、娛遊放情、無所羈蹈、又無所拘束、適境隨緣、而到處皆樂矣、頼山陽目爲隨緣居士、居士亦自隨所其稱、而曰隨緣也、

居士亦嗜酒、然不多飲、飲則睡、醒則復飲、如其詩若和歌、多成半醒半醉之間也、和歌最喜西行法師山家集、深愛其平淡眞率之旨、運以新意、更開別途、聞香則夙學志野氏流、推究五味六口之辨、對花坐月、於悲喜苦樂之場、獨炷燭聞、深悟其妙理、茶則初入千家者流門、遂究其奧蘊、後又捃摭於唐山諸名流所著、茶經茶疏之諸說、煎點泡沸、多所發揮、從而著泡茶新說數篇、居士嘗又愛草木花卉、或瓶焉或盆焉、屋後闢園數畝、多植奇花異草、扦揷灌培、略諳其法矣、每有暇則逍遙、散步其間、(竹田居士傳)

嘗作畫山水十數幅、欲售以爲東遊之資、託諸府內友人某、每幅値金半圓、某百方求賣、終不得售、遂自出資、收其一二、餘皆還之先生、先生笑曰、盤纏已足矣、他不要售也、

小石氏主人名龍、字元瑞、號秋巖、其廬曰用拙居、素與先生善、先生每入京、必寓其廬、晝間渲染、或與人應接、宵則與二三故人、詩酒歡娛、醉後與秋巖對床就睡、秋巖夢寐間、忽聞呻吟聲於耳畔、驚而候之、則先生仍未熟睡、方且口占晝間所書之題語也、每夜率以爲常、(この事、自書題語の小石元瑞の序に見ゆ)其一事不苟如此、

嘗在大坂、與大鹽後素交善、後素學宗陽明(中畧)囑先生製陽明肖像、及畫成(中畧)後素大喜、掲圖于壁上、每晨焚香再拜曰、使平八畏敬至此者、其惟君彝乎、吳道子再出、恐不至此也、

先生書法、初從東坡入、數變益剛、遂成一家、其緊勁如束者、爲三十前後之書、遒勁如削者、爲四十已後之書、瘦勁如筋者、最晚年之法也、一日作字、山陽在傍、臥

而觀之、遽然驚起改容曰、運腕之法、當宜如是、我不若也、後山陽毎見其作字、必改容觀之曰、所作之字、不在書下、書猶入俗眼、字竟不入也、小竹亦曰、先生之書、人或擬得其皮相、至書則决不能髣髴也、又善古篆、常言、不學篆書、則不得作叔明之書法、時弄鐵筆、亦有高致、常諭門人曰、本邦人性輕疾、西土人性遲緩、氣禀固既不同、故學者精察熟慮焉、靜以養心、健以運腕、筆力深穩、墨氣沉厚、以游斯藝也（詩史）

竹田ガ畫ヲソノ子弟ニ授クルノ法ヲ見ルニ、己レガ筆蹟ヲ習ハシムルハ、纔ニ蘭竹等ノ三四圖ニ過ギズ。而シテソノ最モ勉メシムル所ハ、實ニ古名畫ノ臨摸ニ在リ。余モソノ手本ヲ貰ヒシハ、單ニ蘭ノ畫二枚ノミナリシ。又時ニ詩ヲ示シ、余ニ謂フテ曰ク、此ノ如キ詩ヲ賦シタリ、汝下圖ヲ作レト。圖成リテ之ヲ出セバ、則チ圖中ニ就キ、一々指點シテ曰ク。此處詩ノ意ニ適ハズ、此ノ如クスベシト、諄々敎ヘテ已マズ。然レドモソノ己レノ意ニ適スル迄ハ幾度ニテモ題ヲ畫カシムルコアリ。（中畧）毎夜門人等ヲ一室ニ集メ、七言絶句二三首ヅヽヲ講ジ、又特ニ余ヲ召シテ腰ヲ撫セシメ、聯珠詩格中ノ詩ヲ吟ジ、且ソノ意ヲ話サルヽヲ例トセリ。（直入翁談）

府内に八人衆と云ふ富家あり。竹田往々その家に至りて、書を售り、以て旅費を辨ず。二分竹田又かけこみ竹田とて、その書今も遺れり。（中尾儀三郎氏藏茶摘圖、松林山水圖等）又その頃別府に萓屋と云ふ富家あり。主人を荒金吳石と云ふ。竹田曾てその大壁紙を有するを聞き、これに書かしめよと云ひしに、こは名家の來遊を待つなり、若し足下に書かしむるほどならば、津田秋皐（別府の書人）にこそ囑すべけれとて許さず。後竹田再たび馬關より書を寄せてこれを請ひしかば、吳石漸くその一部を割きて揮毫せしめき。その書成りし時、これを楣上に揭げ、秋皐を招ぎて示せるに、風の爲に文鎭落ちて書を破りぬ。この書今戸次の帆足氏に藏せられ、文鎭の爲に破れし痕遺れり。吳石酬ゆるに金千疋をもてせしかば、竹田はその多きに驚き、これを男耜に送り、旅費として上京し、小石元瑞に寄りて游學せよと命せしとぞ。竹田又曾て文晁より得し金泥あり。これを用ゐて金碧山水を作らむと心がけしが、やう〳〵にして竹田村の一富人に請ひ、絹を得て四季山水を作りぬ。その夏景山水今尙大分渡邊氏に藏せらる。

竹田が讀書を勉めし比、さる寺より書を借りて、歸途に讀み了り、未だ家に至らざるに、再たび返りてこれを還せしことあり。

その名聲の籍甚せし時、竹田村に三戸屋某と呼ぶ者あり。竹田の僞書を作るを以て業とす。これを三戸屋竹田と稱す。

ある人竹田の書を索む。久しくして得ず。漸く成れりとて見れば、僅に數個の椎蕈を畫けるのみ。その人喜ばずしてつぶやきければ、我が苦心を見よとて、椎蕈の水に浸せるを大なる籠に入れて示せしに、その人始めて歎服せり。又竹田村の黑川文哲の話に、その祖母の人に語りしは、一年前栽の木蓮花盛りなる頃、竹田偶ゝその下を過ぎ、佇立凝視、久しくして去らず。その狀恰も痴狂の如くなりきとぞ。

竹田性恬淡。權貴と雖も交はるに吾汝を以てす。曾て鹿兒島に遊び、執政鮫島雲嘯と交はる。藩士中その對等の無禮を怒り、これを兵せむとする者あり。一日宴席に在り。大琉球月欄前出、高勾麗潮席上來、自古英雄爭用武、到今兒女笑含杯の詩を作りて衆に示す。感情爲に和ぎたりと云ふ。（「竹田と華山」摘要）

竹田曾て崎陽に遊び、舟颶風に逢ふ。當時の狀を叙したる詩あり。曰く「赤霞射處雲如墨、殘日昏黃淡無色、遠客布幞來買舟、佐賀城西本庄側、舟子貪利巧相欺、唯道今夜風潮宜、隣舟相喚同解纜、啣頭接尾陸續之、離岸猶未三四里、颶風急自西北吹、船頭驟叫雪山起、崔巍突在虛空裡、叫聲未盡狂濤至、一舟旋轉萍葉似、桅斷帆破檣飛去、人意與舟相生死、禱神念佛又呼親、號哭嗚々天地震、至誠通神々有感、流到磯頭天向晨、倚蓬戰立時回視、隣舟覆沒人溺死、十八人

内五人活、十人竟不﹅知﹅其屍﹅、三人猶蕩白浪際」（颶風詩錄似﹅太一﹅、憲未定草、船窓小戲帖中に收め貼せらる）田近竹村曰く（南宗書志所載名蹟志）「予之を鄕里の故老に聞く。田翁覆沒の災を免れ、漸く陸に上りて馬關に達するを得。時已に昏夜。衣袂潮に濕ひ、頭髮髼鬆、而して携帶の具失ふ所多し。僅に一門生を拉して、旅舍を求め宿を請ふ。宿主其形の陋を怪しみ、峻拒容るさず、纔に請ふて、納屋の片隅に臥するを得たり。時に地の代官は翁の舊知なりしを思ひ出し、一書を裁して、門生をして之を通せしむ。少焉して、代官某威儼然、從者數人を具して至り、問て曰く。先生何處に在るや。宿主倉皇拜跪して曰く。先生なる者を知らず。曰く、今夜宿を投ずる竹田先生有る筈なり。翁聲を聞て出て曰く。生此に在り。某亦驚て曰く。先生此に在るか。奚ぞ其室の陋倭なるや。因て之を責む。宿主叩頭陳謝。始めて免るゝを得たり。翁後に此を語りて曰く。一生の快事此時に及ぶ者無かりしと」。

祖父（月峰）翁（竹田）をして我が大雅堂に寓居せしむ。一日翁祖父と同行して伏見の西養寺に玉泉を訪ふ。途中茶店に息ふに、祖父は僧と雖も、俗氣ありて俗人に能く合ふ。翁は痩容、疎放風流にして、俗人の眼に入らず。或は奴隷視せらる。翁祖父に謂て曰く。上人美服盛裝、人之を仰ぐ。僕垢衣龍鍾、人之を輕んず。上人と同行するは不幸なりと。大に笑ふ。（六明道士記、南宗書志所載）

竹田翁常に客に接し、別に臨みて曰。今後拜謁の際は、予が書技を一步進め置べしと。この簡短の語にても、その勵みたりしを知るに足る。（久保田米仙書家逸事、繪畫叢誌所載）

竹田の詩及詩餘は、各〻その集に見るべし。今輯錄に遑あらず。左にたゞその和歌數首を載す。

ひとさかり果は有りける人の世を、櫻に見する春の夕ぐれ。
花の上の月はあまりのあはれさに、聲打出して泣んとぞ思ふ。
何事もやめて櫻の花を見む、世をも恨みじ人もとがめじ。
月も月花もはなり此世には、又ありがたき今宵なる哉。
賤が屋はひたふる木の葉うすみそれ、いつか拂ん春はまた花。
花あればわれも有けり今よりは、我身をすてゝ花を祈らん。
おしむ人のなきこそよけれ櫻花、ちるもおのれが心まゝにて。
はかなしやこの世は風にちる花の、はなれ〴〵にくちはつるとは。
もろともにこの世はいざやのちの世は、たすけて賜へなむ觀世をん。（以上九首花月帖）

まだ消ぬ露のこの身のおきどころ、花のみよし野、月のさらしな。（印譜）
今朝のにへははら黑からぬ民とてや、わが筑紫よりみつぎ初めけん。（腹赤魚の賛）
いくつ野邊手ごとにわけてひく千代の、今日の小松はたれかまきけん。（若松賛、後藤喜太郎君藏）
よひ〳〵の枕の上にさくら花、夢かはちかく見よしのゝ山。（櫻花賛、名古屋藤波萬得君藏）
世を嵯峨の奥ともしらで尋ね見よ、とふとき法の道もあるべき。（常盤雪行圖賛、以上四首「竹田と華山」）

第三百四十一　田能村竹田筆松溪聽泉圖

第三百四十二　同筆嵩山登覽圖

山陽が大いに竹田を賞せしことは上にも見えたり。畫乘要畧に曰く「作畫、放胸臆而尙風致、志慕清人、其山水梅竹、清奇可愛」續近世叢語に曰く「竹田作畫、高樹標的、不牽世人趨舍」雲烟畧傳に曰く「其書崇元格、最尊信王叔明、近取法清人、山水四君子等、皆清奇可愛」又曰く「竹田以全力悉作畫、雖寸絹尺幅、皆無不然、終身無爲市作者」臥游瑣談に曰く「見竹田畫頗多、各々變異、曲盡其能、實餘子所不能及」漱芳閣書畫銘心續錄に曰く「竹田則山水蘭石、皆與專門之士、可以齊駕而並馳矣」これ前人の竹田を評したる大概なり。要はその市俗の氣なきと、變化の多般なることを賞せるに在り。然れども竹田の畫風は、渇筆の烘染を以てその常法とし、用墨の豐潤淋漓なるは稀なり。間々設色ありと雖も、固よりその得意の處に非ず。深く評する價なし。元來詞人の餘技にして、疎拙を書卷醇古の雅韵として觀るべきのみ。固より行家の作と較べて、その巧整ならざるを云々すべきに非ず。竹田を評する者、この意を以てすれば則ち可なり。若しこれを以て眞に巧妙の畫として視る者あらば、そは耳食心醉のみ。猶大雅堂に於ける過褒に同じからむ。その山水の布置往々繁に失して、濃淡遠近の宜しきを失へるは、その弊殆ど大雅に異ならざるなり。

竹田の門人

竹田の門人には上にも見えたる如く、伊東李坪、大城雲樵、高橋草坪、伊東來太郎、松本九三、帆足杏雨、西島秋帆（初廣江敬藏）野口鎌之輔、矢上快雨、三宅瘦仙、田能村直入、及豐繪詩史に見えたる緒方竹外、後藤碩田、杜秋艇、「竹田と華山」に見えたる小石中藏等あり。今左に草坪、竹外、秋艇の三家を錄す。杏雨は造詣最深く、直入は名聲籍甚せりと雖も、共にこれ明治繪畫史上の人なり。碩田も亦明治史に附するを妥とす。その餘はこれを略す。

高橋草坪　師友畫錄に曰く「雨字草坪、豐後杵築人、家世業商、草坪特嗜畫、予嘗遊其邑、時年十九、修贄而問業、遂相隨寓遊竹田莊、爾後與予同東上、抵攝寓京、或過尾路、從遊歷年、廣摸古本、時或自運、初學藍蜨叟、後轉法元人、至其合作、予不敢及也、筱小竹器重、許以其姪女配、時草坪已病、遂不起、年三十一、未及見其業成也、著有草坪畫式、未梓、間作小絕、清雅可愛」豐繪詩史に曰く「字元吉、杵築人、幼好繪事、田翁遊杵築、一見奇之、携而歸家、授以六法、先生天資妙詣、薰陶有年、其學頗進、畫山水花卉翎毛人物、並臻妙、好用熟紙、勁毫柔運、濃淡如神、有出藍之稱、嘗在戸次、爲帆李蹊作雪中探梅圖、妙有清致、山陽見之、拍掌賞歎、（中畧）後隨田翁在大坂、一日翁訪紀春琴、（中畧）春琴曰、頃見高草坪者畫山水、筆墨蒼老、宛然明人、即爲清人、不下乾隆以後、稼圃孚九遠不及也、君知其人爲誰耶、翁曰、未知也、但其姓號與僕門生相符、殊可異也、春琴曰、目今果有若人、僕當北面師事之耳、時先生方待翁在堂外、翁呼而入見、春琴曰、秀才偶與古人同姓號、亦藝林之一佳談也、他日翁以先生所作之畫示春琴、春琴熟視良久、爽然自失、徐謂翁曰、此畫果爲前日秀才所作、則往者所觀之畫、亦必出秀才也、僕過矣、僕過矣、願爲吾謝草坪子、既而又謂翁曰、僕平生苦無佳嗣、兒不吝之子、以繼僕之箕裘、則僕有二女、單任渠之所擇、翁曰、有父兄在國、未可答也、春琴懇請不已、翁乃作書以問父母、父母不忍愛兒之遠隔、先生不屑冒他姓、春琴再三强之、事遂不諧、常以爲憾、翁嘗從容謂先生曰、落款之法、元以前、多不用款、或隱之石隙、恐書不精以傷畫局也、後來書繪並工、附麗爲觀、如倪瓚、字法遒逸、或詩尾用跋、跋後系詩、隨意成致、衡山翁行款清整、石田晚年題字瀟落、毎侵畫位、翻多奇趣、白陽已後、往々效之、但一幅中、必有天然侯款處、失之則傷局矣、但命題之法、古人必先命題而後畫、爲上品也、如元已後、或先題而後畫、或先畫而後題、題與畫交爲注脚、自題不工、不若用古、用古不解、不若无題、古有无題之詩、有韻之語已然、无聲之詩亦豈不然、要之、書卷之氣內蘊、丘壑之

情外發、是爲我宗之眞訣矣、山陽亦謂先生曰、子之筆已可、但乏書卷氣已、先此先生款題不用多字、單記姓名若銘題數字及年月而已、亦用師敎也、於是猛省勤學、穎意不怠、毎日課程、作詩一十首、讀書若干卷、臨池一千字、焚膏繼晷、必終其業而後就寢、未幾其業大進、欝然成觀、既而得病、未曾廢業、及疾病、友人勸歸國養痾、先生不聽曰、課期三年、今未過半、設令中道奄然、决不負初志也、遂以瘁死、時年三十二、聞其死者、痛惋嗟惜、稱爲田門之顏回矣、藤碩田甞謂余曰、僕與高雨帆遠田癡同爲田門之四子、而草坪爲之魁、蓋其人品寧靜、精神充積、其書熟者無燸熱之氣、生者無拙縮之痕、董玄宰所謂、生外熟者乎、杜秋艇亦曰、天若假年于草坪、則杏雨輩豈得博今日之名乎、其爲識者所惜如此、先生所著有摸古式書冊、後田中香谷羽倉可亭二氏、模古圖以補其闕、編爲五卷、曰古今名公書式、公于世。草坪の竹田に從學せるは文化五年にて十九歲、歿する時三十一(師友書錄に從ふ)なりと云へれば、天保五年に世を去りしなり。

緒方竹外　豐繪詩史に曰く、「肥人緒方竹外素好書、初於琴山所見先生(竹田)、請受敎、先生曰、卿試作書、使予觀之、竹外乃把筆一揮、筆駛如電、瞬間書成、先生咲曰、卿非吾徒也、那老拳可謂形容書史耳、駛筆如個、怎麼紙的受筆、筆的和墨乎、二者相乖相鬪、胡亂作畫、畫理何有、竹外聞而有悟、請復作、行筆較緩、先生曰、是可敎、乃斂贊如弟子、熊藩距岡城幾二百里許、險山阻澤、道路殊艱、竹外仕官、不得遠從師、於是、毎月朔望休暇前一夕發家、夜間疾步、明旦達岡、敲門而受敎、畢則馳還家、翌日例時登廳、數年間率以爲常、人皆感其信深志篤也、故所師承、終始不違、點染皴擦、不敢出私見、蓋南方之畫史莫出其右者、然身見羈絆、不遑多作、流傳者甚尠、惜矣哉」。

杜秋艇　前出杜五石の子なり。豐繪詩史に曰く、「名淑、字叔水、稱藤右衛門、後改謙介、日田人、杜本用森字、山陽曰、邦訓森杜相通、杜字爲雅、遂改之云、其所居後園有樓、俯于淮水、仰于龜山、風景佳絶、竹田翁來寓此樓、命名曰對鷗閣、後海屋扁額曰水石含暉(中畧)先生性愛書畫、最長鑒古、家固素封、收藏甚贍、其所藏明雷化龍畫山水、孫無逸山水圖卷、尤爲絶妙、其著本朝繪事分宗一卷、論趣精確、有益後進、其言曰、輓近清人善畫者、往々來游崎陽、所謂江伊張費、世稱爲舶客四家、於中秋谷水墨諸品、清秀可掬、後改號秋穀、著色取媚、似出別人手、故世疑其必非一人、案張崑書生時、氣宇灑然、其書亦自超凡、歸西以後、筆墨營業、麗艶求售、亦自然之弊、不可免矣、當時不信其言者皆謂、張氏雖同姓、而一爲名崑、一爲名莘、豈可以谷穀同音、强爲一人乎、及後墨林今話舶載、人皆服先生之鑒識、田翁來寓之時、先生與同族荆田平原等、爲文墨之游、質六法於翁、期日集會、曰某日披麻會、某日骨突會、禁談丹青外之事、終日把毫、專倣古人一家法、故先生所藏翁之眞蹟、皆有源流(中畧)先生終身所作山水、率由披麻、亦奉其敎也、先生以慶應乙丑(元年)八月十二日歿、壽八十四」。

大窪詩佛

大窪詩佛名は行、字は天民(忌辰錄曰、「薙髮して天民と稱す」)詩聖堂、痩梅、江山書屋等の別號あり。通稱柳太郎。常隆の人。江戸に出でゝ下谷練塀小路に住す。(香亭雅談曰、「御徒巷南接練屏巷處、萩原秋巖居焉、又南隔三四家、有大窪詩佛故居」、古書備考曰、「住神田於玉池」)詩を以て天下に鳴る。又墨竹及草書を善くせり。(畫乘要略、古書備考、忌辰錄)畫乘要略に曰く、「好畫墨竹、氣韻可觀」。古畫備考(增補)に曰く、「後秋田藩ニ聘セラレ。詩聖堂詩話ヲ著ス。其墨竹四葉對生スルヲ以テ、世ニ詩佛ノ蜻蜓葉ト稱ス」。(必しも然らず)天保八酉年二月十一日歿す。歲七十一。淺草光感寺に葬る。(忌辰錄、同書曰、「詩人にて洒落なる、此人の上なし(中畧)男大窪兼助名謙、字自牧、號有山と云、秋田侯に仕へて教授なりき、明治十八年詩佛の亡骸、相州藤澤驛東坂戸町三百十五番地大窪甲子郎方へ改葬」)左に逸話を集錄せむ。

詩佛畫竹、北原秦里題七古一篇、來請跋語、余以書詩兩佳、遂留不還、裝潢藏之、詩云、畫家自古難墨竹、怪底此翁特擅名、筆法知從書法得、與詩併來天下鳴、醉後臨紙時一掃、傍若無人意氣傾、自言我竹非有意、一竿兩竿隨手成、个々點來疎又密、已覺清風戞有聲、寫罷詩句題其上、五字七字玉崢嶸、墨痕未乾捲且走、

恐遣人奪手高擎、世間豈無畫竹者、何如一幅三絕幷、只道此翁眞墨妙、誰知坡老是再生、

詩佛近日購得明人婁堅書幅、價比趙璧、衣箱書簏爲之一空、日則背而出、夜則抱以寢、自紀其實云、嘉定婁先生、遺墨爲我藏、一千三百言、百二十六行、書之以光絹、墨潤若有香、聞公當書字、時會必商量、風日恰晴美、筆墨亦精良、欣然方染翰、不受人羈纆、今覩此遺墨、想見公淸揚、一點無懈筆、字々極端莊、書法妙天下、此論非過當、公幼而好學、學出歸有光、經明兼行脩、實是世棟梁、皆推爲大師、儀表衆所望、五十貢春官、不仕去歸鄕、吳中稱二絕、程詩公文章、尺蹏與寸簡、人爭比珪璋、何料此珍寶、傳在我東方、有人偶來售、百計價纔償、文房爲之空、典賣及衣裳、世人無眼睛、謂我爲顚狂、奇遇屬因緣、赤貧亦何妨、願新營一間、以婁顏其堂、（五山堂詩話）

大窪詩佛性嗜酒、寓奚疑塾日、密以小壺貯酒、時出飲之、一日詩佛外出、北山視塾、乍見之曰、誰居在我門、用是小胆磁壺、凡好小者、焉足與語天下之大乎、已而詩佛歸、或告之、詩佛怫然復出、頃焉挈一大空罇而至、置之於案上、且買酒少許、注之罇中、而輒々抽枘、且斟且飲、大聲放言、自此以後、日如是、其狂逸率此類、

詩佛初學蘇米書、築筆極勁、以故稍有局促之失、如伊孚九池大雅山水畫譜序、可以觀焉、後獲孫虔禮自叙帖零本學之、自此書法大變、晩年以停雲館帖補零本脫落、上木行于世、

詩佛至京師、時賴山陽立詞壇執牛耳、諸文人皆雌服從之、或說詩佛曰、先生先面賴子、而後介之以見諸子、諸子必善待先生矣、於是詩佛先抵山陽、山陽設席、列弟子而延之、坐定、詩佛取銀子一星於懷中以爲禮、山陽儼然固辭不受、詩佛直前、撫其背曰、不亦可乎、山陽見其胸襟洞豁、笑而受之、是梁星巖塾中所傳之談也、

東坡書朱竹、後人喜倣之、近世詩佛亦能之、予覩不爲鮮、

詩佛遊浪華、問一書博士、博士有錢癖、必議價而後秉筆、詩佛先行潤筆、請作一幅、將去、詐跌翻墨、扯其所書幅、抹拭之、博士赧然、

詩佛將北遊、適某老書來告窮、詩佛叉手沈思、忽曰、吾有一策、請安之、乃詣文晁借外套、文晁爲田安府僚屬、外套係公所賜、詩佛令老書被之、僞稱文晁、俱遊上州、方是時、文晁名聲動都鄙、故各邑素封家、爭延以乞揮灑、以其服葵章、無有疑者、及去金帛滿行李、既歸、詩佛語之文晁、文晁寬雅、咲而止、詩佛又移書所過諸氏曰、向老革非眞寫山翁也、適者生理蹇澁、糗糧不繼、僕深憐之、因授計、詐稱扶蘇項燕、姑收人望、以救急耳、然以此頗助興復之計、不敢不謝、諸氏素知詩佛飄逸、亦咲而止、

詩佛西遊至津、遭忘却先生者、臭味投合、情太相得、見拙堂文中、或曰、詩佛接人、不設城府、新舊交友如一、其遊京攝、與諸文士交臂劇談、如熟識者（香亭雅談）

山崎雲山

山崎雲山は畫乘要略に「名吉、能登人、住平安、善山水梅竹、有池大雅風趣、運筆奇逸、又工書」とあり。その傳記は仁科幹（白谷、備前人）の撰に係るもの（能登中橋饒石藏、未刻）に精し。左にこれを揭ぐ。

知我者希、則我貴矣、老聃之語、不其然乎、雲山翁、初出于京師也、爲山陰佐野氏所知、其後以山陽賴氏爲知己、雙林寺月峰、以書鳴于世、々爲大雅高足、乃稱雲山老人書有逸氣、紀藩野呂介石、曠逸之士、亦善書、及見雲山翁畫山水、欣抃曰、奇矣奇矣、山陰山陽、一代通儒、月峰介石、一世書傑、皆能知之、而世俗人不之知、不止不知而已、且笑其許之、時有竹洞者、亦以巧書出于京師、或有以竹洞雲山稱者、雲山艴然不悅曰、竹洞書師、我非書工也、何並稱之有、其自許如斯、竹洞書

高于世、々俗人以其高爲巧、雲山書低于世、々俗人以其低爲拙、是以高益高、低益低、四家稱譽、無益于雲山、如斯、而亦爲我輩所知、命矣哉、雖然百歳之後、毀譽自有分矣、翁一日有不喜之色、謂予曰、我書逸氣超脫、非世俗所能知也、老子曰、知我者希則我貴矣、故古之人以得一知己爲幸、我前蒙山陰之知、次受山陽之知、而幷君爲三、介石月峯信友也、足矣、請還鄕、々能州瀧村、歳餘而聞訃、傷哉、墓在加賀金澤春日山、天保丁酉（八年）九月十九日沒矣、行年六十七、翁姓山崎氏、諱吉字元祥、以雲山爲號、雲山質愨眞率、與人言、々其所欲言、其於書最長山水、至花鳥草木、靡弗自放、磐礴唯意所命也、介石月峯以奇逸稱之、不亦信乎、世書工輕薄、無所不至、或如汨董家、或如貯妓翁、而毫無所愧、不獨書工爲然、以儒命者、其如何哉、雲山憤曰、我非書工也、不亦宜乎、雲山有一子、名達、々自能來曰、先人瀕危之日、命小子、碑文請諸白先生、遺言也、余愀然援筆而書之、銘曰、知希則貴、維厥壽與、一世所毀、四子所譽、秋季之逝、春日之墟、嗚呼雲翁、神遊大虛、

天保年間飢僅の時、雲山父子京坂に漫遊し、偶〻上林爲章（室町御地）が家に寓す。性淡泊豪放にして、潤筆の金得るに從ひて散じ、生計に困するも毫も意に介せず。爲章仍りて手代をしてこれを監護せしめ、金若干を得たるを以て、歸國の途に就かしむ。雲山喜びて辭し去り、三條橋畔に至り、饑餓の人を見て悉くこれを施せり。爲章止むを得ず、旅費を給して歸らしめき。その餘奇事異行大雅こ似たるここ多しこ云ふ。（繪畫叢誌）

立原杏所

立原杏所の傳は、野口勝一の撰に係るもの（繪畫叢誌に載在）最精し。左にこれを錄す。

先生姓立原、名任、字子遠、通稱甚太郎、後改任太郎、杏所其號也、系出平氏、世仕水戸藩、父名萬、任彰考館總裁、以博學能書聞、人稱翠軒先生、而不名焉、天明五年乙巳十二月二十六日、先生生水戸、享和三年癸亥三月承家、襲祿二百石、後加五十石、歷先手頭扈從頭、事武公哀公烈公三世、爲人慷慨尙氣節、風襟洒落、胸中無芥蔕、初哀公逝、宗主未定、權臣有得幕府公子謀爲嗣者、志士患之、微行詣江戸邸、將有所議、以先生向背不測、遲疑未發、偶密語漏聞、先生大聲罵曰、君等所言者、豈非國家大事邪、國事宜公言也、何陰室絮々之有、於是乎衆意始安、遂相謀、沮權臣之議、繼嗣則定、謂之烈公、先是、翠軒先生與藤田幽谷先生少有隙、二老沒後、弟子數百人、互分黨與、欲啓爭端、先生大憂曰、門派軋轢、他日禍害叵測、因直抵東湖先生第、告以意、東湖亦感激、共爲斷金交、是以門人各解怒、藩內免洛蜀之爭者、實賴先生之力矣、先生殊受烈公之知遇、公留心於海防、練水軍、習火術、因招致技能之士、先生與知名士青地林宗、幡崎鼎、坪井道春、渡邊華山等、談論時事、又與鹽田隨齋、市川米庵、卷致遠、高久靄崖、菊地澹雅數人、爲文墨遊、務聞洋說、廣搜異聞、奔走周旋最勉、凡公所舉行、偉業鴻績、警醒一世者、先生與東湖諸臣、啓沃將順之勞、蓋不爲少也、如此以身任國事、苟不暇顧他、仍如書畫、出其緒餘、然天眞爛熳、發于筆墨、人物山水花鳥、大作小景、無一不能焉、無一不妙焉、灑々落々、如光風霽月、且書法篆刻、各自出機軸、藝絕而品亦奇也、先生弱冠時、武公就國、召見命畫、援筆立就、公奇賞不措、哀公亦愛文雅、嗜書畫、先生承旨、赴于鎌倉、臨摹名山古刹之珍秘、而進者數百張、常侍左右、撿古帖名畫極多、依之鑒識大進、覆幅而射作者、展至數寸、則指其名、或辨眞贋、百不失一、人服明慧、稱爲宋漫堂流亞、書畫倘有疑、則來取決、爲之公親書天下一之三字、以使爲華押、其當爲先手物頭也、烈公一夕張宴、召而命畫、先生意頗不平、謂吾爲先鋒隊長、天下有事之日、率兵先驅、致命矢石、固其分也、亦有何所避、今以畫工見遇、豈是待士之道乎、乃謂曰、臣性嗜酒、飮而後畫、請賜盃酌、因滿引巨斛數回、淋漓大醉、睥睨一座、曰、公爲臣磨墨、公强應之、時搜手巾於袖、而蘸之硯池、舉腕揮摧、則墨痕滿箋、只見如崩雲落星、初不解其何狀、旣而幹成枝生、莖蔓聯接、宛然現出葡萄樹、蕭灑奔放之態、眞覺逸氣軒昻、而又染翰書巨竹、精神咆勃、紙鳴筆走、恰如虬龍躍、墨瀋迸汚公袴、公流視焉、乃投筆再拜曰、臣技止此矣、抑有提封三十五萬石之富、而有爲一弊袴變色侯伯乎、遂論陳政務得失、諸臣能否、及人所難言者、公怒起將入內、猶引其裾、切々諷規、此夜歸家、戒妻子曰、吾托事諫

君、方觸逆鱗、明日當有命、吾固分死、々之後、汝等謹勿有怨言、五更有人、叩門傳命、曰吾死、即訣家人、整服待旦而出、公温顏慰諭曰、昨宵之事予過矣、汝則恕之、因賜親書、賞其直言、且盃酒釁歡、先生感泣而退、聞者歎君臣遭遇之美、皆思盡忠、先生平生欲作得意書、則先吟誦古人詩文、沈潛玩味、及心神融會、屏居閑室、默坐良久、而後下筆、其運用靈活、雲行水流、千奇万變、時露于絹素之表、而其用墨設色、秀潤端麗、獨得之天性、他人雖學、竟不可及、可謂先生者實近世之名手也、天保十年巳亥先生患脚疾、辭職、不允、優命養病、翌年庚子五月二十日、歿江戸小石川邸、年五十六、葬武藏國豐島郡海藏寺、男百里嗣家、女一曰竹沙、仕烈公、一曰春沙、仕加賀侯、三子共善書畫、有父風、野史氏曰、余未嘗爲杏所先生不悲其不幸也、悲其遇明君、悲其得賢友、倘使先生不仕、縱筆墨之力、不許寫山椿山之徒、馳聲譽於當世、又閑處草野、以其所蓄積、唱尊攘之義、志士之稱、豈讓星巖天山之流乎、然而得君若烈公、得友若東湖、啓沃將順、以過一世、故使畫不多名不廣、抑亦可謂不幸哉、雖然余所悲者、先生所歎者也矣、先生器識高遠、爲東湖先生所推服、平生心事、不在技藝聲名、而在國家、既有明君賢友倶焉、縱雖筆挫名滅、其中心之快、何以易之、况於其畫以足傳千載乎、

杏所の逸話少からず。左にこれを錄す。

墓碑は鹽田華隨齋と號す、藤堂侯儒臣撰文、卷大任菱湖と號す、越後新潟人書なり。これ鹽田卷二氏皆先生の親友なれば、遺命して之を屬せるなりとぞ。先生尾州藩士松平元儔の女を娶て、一男三女あり。長女は春沙と號し、詩文及び書を能くし、花鳥の畫に妙也。その筆意父に彷彿たり。賢女の評あり。一生嫁せず。加州家に仕へて歿す。次女は主家に仕へて、源烈公の愛妾たり。五郎麻呂、後因州侯となる餘一郎麻呂後喜連州侯となるの實母なり。三女は同藩友部八太郎名は熈、忍廬と號す、博學詩文を能くすの妻となる。季は男にて家督を相續し、朴次郎と稱せり。先生小年學を好まず。遊戲を事とす。父翠軒先生常に之を譴責す。十五六歲の頃より、大に憤發勉勵しけるが、其の進歩の神速なる事、人の耳目を驚せり。三十歲の頃に至りて大家となり、始て世に用ゐらる。先生性博聞强記、一たび眼に觸し耳に觸し事は、終歲忘れざりしとぞ。故に書畫の鑑定に至りては、妙を得て甚信用せられたり。詩文を能くし、篆刻に巧みに、書畫の技に至りては、支那人も深く歎賞せりといふ。書は張瑞圖を學べるなり。然して尤篆隷、草書に長せり。其尺牘の如きは、一筆二三行をかき去り、每行必斜めに連接し、大方一行中孤絶したる文字なし。水戶藩の俗、友人の家に慶凶あれば、互に相訪て、主人の爲にその報知狀を認むるを例とす。之を爲知狀といふ。常に交際汎き家は、報知狀を要する亦隨て數多し。先生壯年の頃、此囑に應ずるごとに、人未だ十通を書了らざるに、乍ち七八十通の書狀を成せり。滿座これが爲に愕然たり。年四十餘、芳名天下に普く、或は遠國より、或は諸侯より、書畫の揮毫を乞ふ者多し。而して心中閑なる時は、數十百幅の書畫、立所に成るといふ。是等を以て、その非凡の速筆なりしを知るべし。或時、親友鹽田隨齋、卷菱湖二氏、上野の梅花を賞せんとて、先生を誘ひければ、先生喜で之を客室に招じ入れ、少時奧に入り、衣を改めて出來るを見れば、先生は黑縮緬紋付の仕立おろしの長羽織を着たりしが、丈長ければ、二氏餘り當世風なりと笑ひけるに、何寸程長きやとて、直にぬぎて、左手に羽織を握り持ち、此位長きかと問ふを、二氏然りと答へければ、帶したる小刀を拔て、椽の鴨居に押當て、たゞ一刀に切捨て、其まゝ着用し、終日遊び暮して歸りしとぞ。其心中の無造作なること、大方是等の類なり。又或時諸侯より加州家なりと云金屛風一双を遣して、畫を乞はれけるに、先生承諾して、歲餘に至るまで顧ず。諸侯の臣五六回來りて、催促息まず。先生每度ヨロシイカキマスの一言を以て之に對ふ。終に留守居役某敬しく先生を訪ひ、さて云やう、御繁忙中申出るも恐縮なれど、彼の屛風は、近日招客の席

に用ゐるの心組にて、主人より兼て懇願したるなり。然るに歳條に至りて未成ざれば、拙者の怠慢の如く相成り、如何共主人に對して申譯なし。願くは拙者を憐察して、强て揮毫し賜はらば、無上の幸甚なりと云ければ、先生驚きて云はく。サウカ、然る事とは存せず、甚失敬せり、待たまへ、只今よりかくべしとて、書生及び奴婢に命じて墨を磨せしむ。席上には大なる井二つを置き、その磨したる墨汁を之に移し〳〵して、忽十分に滿ちぬれば、傍に命じて、庭に行きて古き馬沓二三個を能く洗ひて持來らしめ、先生左右の手に馬沓を持て、彼の金屏風に墨汁を沃ぎければ、席上は勿論、毛氈疊障子に至るまで、悉く墨痕に汚れ、足の踏むべき餘地もなくなりぬれば、留守居某は呆然と顏色土の如くなりき。先生愉快〳〵、是にて出來マシタと云へば、某は一言の答もなく、此上は邸に歸り割腹して、主人へ申譯せんとて、立去らんとする時、先生暫くとて之を止め、莞爾として笑て云く。然らば之を書に作らん、諦看よとて、二管の筆を掌中にし、電光の如く紙中に走らすれば、忽然として美麗なる葡萄秋色の圖となりたり。某は且怪み且驚き叩頭して謝し去りしが、絕世の名畫なりとて、その諸侯の愛藏する所となりて、今なほ在りといふ(繪畫叢誌、鈴木弘恭)

柳原を過るとき、骨董舖に明人の畫幅あるを見て、その價を問へば、極めて廉價なるを以て、諭して曰く。是れ名畫幅なり、斯く價安きものにはあらずとて、其幾倍の金を出して購ひ歸れり(繪畫叢誌)。

或るとき、市川米菴が藍田叔の畫を獲たりと聞き、往て見んことを請へば、米菴は拒んで示さず。强て懇望せしかば、止むことを得ずして之を出し、開て半ばに至り、杏所妙と呼びたるを聞き、米菴喜色眉に上りて曰、予が一言の擯斥を受ば、此幅廢紙に等しかるべし、故に前は拒みしなり、今賞賛を得て、予が心始めて安んせりとて、大に喜びたりとぞ(同上)。

第三百四十三　立原杏所筆蘆花翡翠圖。

杏所は山水花鳥を兼ね善くせり。その山水は礬石磊砢、淸初浙派の臭味を帶べりと雖も、渴染の擦皴頗る盛茂燁等の風に似て、勁竦の趣一家の特色あり。花鳥淸妍亦賞すべし。

文士の餘枝と行家の精藝と

明淸風最勝の四大家及その格調の比較

渡邊崋山

本時代に於ける明淸風の畫家は、その數極めて夥しく、世に第一流の大家と稱せらるゝ分際の者のみを擧ぐるも、双手の指到底屈するに足らず。然れども、その中、或は寧ろ人品の奇を以てし、或は專ら文學の譽を以てして、その名聲の盛直ちに畫名の大を致せる者少からず。大雅、竹田の如きは即ちその双絕なり。半江、海屋の徒に至りては、その亞流たるに過ぎず。若夫文人一流の癖見を脫卸し、審美學上の立脚地より、藝術の力量を以てこれを論ずれば、蕪村、華山、文晁、梅逸を推して、斯派最勝の四大家と謂はざるべからず。これ實に文士の餘技と、眞の行家の精藝との逕庭なり。而して文晁、梅逸の二家は、縱橫の技に誇りて、覇氣の稍品格を損するあり。蕪村は輕雅の致に耽りて、逸氣往々莊重を少く、獨り華山先生に至りては、技巧餘りありて而も俗韵なく、能く淡泊と渾厚との絕好調和を得たり。これを文晁、梅逸に比すれば、學者と工匠との如く、これを蕪村に比すれば、俳家と詩人との如き格調の相異あるを見る。夫れ藝術の作品は、人格心操の影象にして、具眼の前には假托瞞過を容さゞるものなり。華山先生の畫品は、蓋しその人品の高尙より來る。親に事へて孝子たり。君に奉じて忠臣たり。識見は早

く泰西の文明を看破して、開國の端を啓き、政蹟は直ちに救荒に現れて、闔藩一人の餓孚を出さず。田畯農を導き、勤儉民を敎へ、廉潔清貧を甘じ、仁恤破産を復す。悼しい哉、聖明の世に遇はず、寃を奸邪に蒙り、罪を言議に得て、不幸にして命を全うせずと雖、天定まりて明主位を贈り、民慕ふて貞石頌を勒す。その氣烈は百世の下人をして興起せしむるに足れり。翰墨の先生に於けるは、泰岳の一面のみ。これを尋常の畫家に比すれば、高下の差霄壤啻ならざるも亦宜ならずや。かゝる先生の品操は、おのづから常にその筆端に漲りて、丹青の上に流露せり。遺作の典雅崇高なる、固よりその處。更に喋々の讃辭を呈するに及ばざるなり。

先生通稱は登。諱は定靜、字は子安、又伯登、崋山（文政六年の畫款には華山とあり、同十年には既に崋山と署せり）はその號なり。寛政五年九月十六日生る。家世々三州田原藩の臣たり。先生亦仕へて老職に至る。初め書を白川芝山、金子金陵に學び、後みづから一家を成す。天保十年無人島に渡航して外人と貿易せむとすと讒せられて獄に下され、更にその稿を起せる愼機論等の政事を議するを以て罪せられ、田原に蟄居を命ぜられ、後その畫を售るを以て不愼と訐せられ、累を君侯に及ぼさむことを恐れて、同十二年十月十一日自殺せり。

先生の遺著簡牘の類は、その斷片零楮も尙拱璧に値するを以て、存するもの甚多く、その傳記を詳述せむは、本書の如き古今を通じたる作品の集載を以て準志とするものに在りて、極めて便ならざるものあり、別に華山先生の遺作集を發行すべきを以て、詳傳はこれに譲りて本書に敍せず。左にたゞその佳作數點を掲げて、先生の面目を髣髴せしむべし。

第三百四十四　渡邊華山筆一掃百態圖（其二）

第三百四十五　同筆蘭竹圖

第三百四十六　同筆溪澗野雉圖

第三百四十七　同筆陽明洞圖（全圖及一部分）

第三百四十八　同筆月夜山水圖

第三百四十九　同筆蘆雁圖屛風（一雙及一部分）

華山先生終生作る所、圖様、畫風共に毎品必變化を期せり。今揭ぐる所に觀るも、大作に在りて陽明洞圖と月夜山水とは殆ど別手の如く、更にこれと蘭竹圖及蘆雁圖等の草略の作とを較ぶれば、愈ゝ變化の自在を認むべく、山水の外花鳥に兼ね長せしことは、野雉圖以てこれを知るに足り、又更に人物の縱横に至りては、廿五歳の時一日二夜にて畫けりと云へる一掃百態を觀て、誰か驚歎せざるものあらむや。これ等の諸品、以て略先生の伎倆

を窺ふに足る。

渡邊如山

華山先生の弟に如山あり。諱は定固、字は叔保、通稱五郎。天保八年七月十二日、歳僅に二十一にして歿す。先生に學びて畫を善くせり。畫風先生に酷似して較〻穩柔なり。遺作多からず。參遠眞景卷（平阪恭助君藏、吉祥山、本宮山、自長篠望鳳岳、鳥居强右衛門墓（在長篠）、瀧川（この圖頗る宜し）、櫓臺（在長篠古城中）、自古城觀舟付山、横山（在須澤村）、鳳來寺山、狹石（俗にハ石ト云）、自松高院望藏王山、岩本院、藥師堂（松高院眺望下畧）等の諸圖あり、卷末款曰、「天保丙申（七年）秋日寫、渡邊定固」）及綠竹圖（柿沼谷藏君藏、題款曰、「根露青龍脊骨寒、葉盤丹鳳尾梢端、風雨未化秋塘影、魚鼈長猜是釣竿、于時天保乙未（六年）龍御月念二日寫、眞邊定固幷錄」）等あり。

渡邊小華

華山先生の次子小華亦畫を能くし、殊に花鳥に長ぜり。小華諱は諧、字は韶卿、通稱舜治。父歿する時僅に七歳。父の門人半香に養はれ、椞谷も亦これを庇保し、以て畫を學ばしむ。十七歳の頃より椿山の家に寓して、益〻研鑽を勵み、終に花鳥の妙手として、名を明治の世に知らるゝに至れり。後椿山その族大久保氏の女須磨を小華に女す。既にして小華は田原に歸りて、藩主に事へ、明治四年藩の大參事と爲り、縣治に改めらるゝに及ひてこれを罷め、爾來家を東京と豐橋とに構へ、その間に往來して、畫を以て業とせり。同十五年以後は專ら東京に在りき。（以上渡邊華石君談）同二十年十二月中山道熊谷に遊びて歸り、腸チブスに罹り、二十九日歿す。享年五十三。越えて三十一日谷中天王寺の墓地に葬らる。小華子なし。養子常太郎家を嗣ぎ、常太郎の子元吉現在せりと雖も、並に畫を作らず。門人小川靜雄（一掃百態跋）渡邊華石と稱して小華の畫業を嗣ぎ、華山先生以來の粉本等を傳へ藏せり。小華嘗て（明治十二年秋）父の畫きし一掃百態を摸し、これを印行せり。逸話一二を左に錄す。

優人市川團十郎、演華山一世事狀、或告小華曰、優人扮乃公演劇、盍往而觀之、小華悒然而曰、爲父將死之狀、子不忍聞之、況可坐視哉、急收行李遠遊、人皆感之（畵人逸話、繪畫叢誌所載）

渡邊小華と余は最も友交親密なりし。故に其在世の折は、時々往來せしが、或時余小華に謂て曰く。君等は流派の異ると健腕なるとにより、一日能く大作を爲すと雖も、余は一張の絹に向へば、其落成數旬に亘らざるはなし、實に健羨に堪ずと。然るに小華笑て曰く。君羨むと勿れ。余も亦大に羨む者あり。奧原晴湖女史是なり。晴湖女史興に乘じて、一日能く數十紙を塗抹すと雖も、余は其十一にも當る能はず。然れども晴湖女史亦羨む者あり。巖谷一六居士是なり。一六居士一日數百紙を一掃して惓怠の色なし。晴湖女史又其十一に當る能はざるなりと。俱に大笑せし事あり。（斷纓錄、同上）

華山十哲

華山先生の門人には謂はゆる十哲あり。今先椿山を敍せむ。

椿椿山

椿椿山諱は弼、字は篤甫。椿山はその號なり。居を琢華堂と云ふ。又休庵、（雲烟畧傳には四休庵、印文にはたゞ休庵とあり）羅漢松靑軒、（畧傳羅漢靑松軒に作る、今印文に從ふ）梧軒、碧梧山房、十石小室（幷に印文）等の別號あり。通稱仲太。幕府の槍奉行組同心（三十二人扶持）なり。小石川牛天神下（槍奉行組屋敷、今大和町）に住す。雲烟畧傳に曰く。

爲人愼密温厚、與物不競、年甫七歳失怙、零丁依母氏及長、深思鞠育之恩、孝養無所不至、比隣感其義、相謀具狀、告諸其長官、官賜物以褒之再次、爲人訥言敏行、於事無所苟、温和中陰有城府、交友不能窺其奧、有學識、兼善書畫、又受長沼流兵學於平山行藏、爺馬得印可、天保中有同僚三人選擇之命、椿山亦在撰中、即日以病辭、遂專志所好、無幾、應命者罷去、人服先見、初師金子金陵、金陵歿後、忌日必詣墓、終身不廢、後學華山、長草蟲花鳥、又依倣張秋穀、而本意在祖述徐崇嗣惲壽章王忘庵惲南田、而最心醉南田云、其所作畫、炳蔚深邃、紆徐妍麗、專崇韻致、無一點覇氣、猶其爲人、同時良工無出其右者、兼善肖像、肖像一派、華山草

創之、至椿山極其精云、嘗摸刻朱文公書像、以須同好、書摸晉唐、骨法端正、不愧漢人、嘉永七(安政元)年甲寅九月十日(表向なり、實は七月十三日)喀血歿、年五十四(牛込圓福寺に葬る)性淡於名利、而急於救人之艱難、親戚朋友若有難、所乞立辨、毫無所愛惜、平生預區處財貨、臨死一語無所言云、男名彰、字恒吉、號華谷、亦善書、早世、(古書備考曰號尙古)嘉永三年正月三日、廿六歳、父に先だちて歿す)次和吉(諱は隆、二山と號す、明治四十年頃歿す)、次順吉、門人小華山最稱名手、(又野口幽谷あり、明治の一作家なり)

大橋訥庵曰、余垂髫以來、與椿山交者、幾乎三十年、椿山羸痩若不勝衣、而精神極篤、嘗同余學片山流拔刀術於庄田某、又同學吹笙於丹羽某、椿山劇忙、余多閑、而皆不能望椿山後塵、一日問之、則曰、僕終日爲人作畫、不暇講他技、故嚴課程、昧爽夙起、習拔刀、至辰時而止、暮夜習吹笛、至三更後而息、是或所以羸君歟、余聞之憮然者久之、椿山爲事大率如此、其畫之超凡非徒然也、

藤森淳風題椿椿山畫竹詩曰、畫竹須畫竹性情、愁於烟雨喜於晴、拂雲脩竿風方起、便是此君長嘯聲、

大槻士廣曰、西村某家在椿山東隣、親見其孝養事、一日乞椿山畫曰、某不解畫、安知子畫巧拙、我惟獲孝子所筆以藏之足矣、椿山感泣、遂作名花十友圖以贈之云、(この事寧靜閣二集に詳なり、今繁を厭ひて錄せず)

漱芳閣書畫銘心續錄曰、椿翁花卉、傅色□澹□、而明艷如燃、是所不可企及也、至蟲魚、以渴筆□渲如生、而韻趣有餘、其一朶一葉不苟、姿態畢□、初作稿、以鉤勒、有少不滿意處、則黏紙改寫、纍疊至數十重、必期無遺憾、而後襯之□絹之底、及落筆、縱橫馳騁、鋒穎銛俊、絹素稜々鳴、其構想之際、或臥思、或坐想、半夜蹶然起下筆、故每其圖一出、必有驚人之筆、然焦慮苦思、竟至咯血斃、嗚呼、

銘心錄曰、壬春二月廿七日、過椿氏琢華堂、見眎藏珍數品、文伯仁山水橫卷、方蘭如石榴、戴兆芬墨竹、張秋谷墨桃、並佳品也、許箕字巢友、手書搨鄭軒詩草、細楷可見、詩亦清新、先生又愛古器玩、有鄭樵石盤一枚、蔣仙根木如意一柄、奇品也、先生近得明畫名石圖一軸、因自號十石小室、此卷原玄對邊瑛所藏、初二十石、分爲二卷、玄對暮年落魄、藏蓄多散逸、獨留此一卷及沈銓杏花雙燕幅、歿後先生獲之、

又曰(續錄中畧)余曾於松堂間部侯、觀畫石卷、臆其(前の十石卷)半斷、又有十石、依借之示先生、先生驚奇、自摹之、愈珍其藏軸、余亦戲謂曰、先生宜稱十少小室、問其故、荅曰、喫飯少、遊行少、眠臥少、言語少、磨墨少、着筆少、點色少、不飮酒、不近女、不喫烟、互大噱、今也此語爲先生小傳、又學先生畫者、於是尋繹、思過半矣、

又曰、有入門請教者、先生令讀書曰、畫而無書卷之氣、不如學浮世繪、故先生之塾、唔咿如儒塾、又好武技、嘗石造臼礮、置之庭上桐樹根、時操持而試觔力、又好音律、善吹笙、當筆倦意沮、向壁弄吹、而年之清和、新綠葱靚之際、先生拉二三同好、來余還上樂是園、合奏于柏棋樓上、以爲無上仙遊、拈筆大書□鷗二字爲匾、筆勢流動、看者駭爲非火食人筆、在廬每夜學書法不怠、門人幽谷者、素工匠、畫間事斧鋸、夜則學畫、後其技進步、或棄斧鋸搦管、先生聞之而警曰、棄素業學我畫者、我不能教之、生大惶勵焉、幽谷之號、原取一時題壁之字、々且不雅馴、請改之、先生曰、號之雅俗、不關畫之巧拙、奚爲改、生終身奉之、邊華山使其子小華入塾學畫、(この事誤あり)月遺其貲、先生緘而藏焉、及其去時、悉擧饋曰、聊報師恩、其義概如此、有業描金者、請學畫、先生曰、描金以細穎筆爲之、因以一面像筆作臨本與之、花蟲鬆縱、如用巨筆、始先生喜畫山水人物、同門半香專畫山水、先生不復作、雖然、如京洛名勝圖冊及日光眞景卷、華山猶避三舍、偶仿倪迂疏林幽樹、清逸無媿、

蔣潭淺野君尹京師日、以所挈椿山畫卷、眎貫名海屋、海屋賞賛不釋、喜題其畫果蔬卷、詩曰、蔬果將海物、雜錯欲爭奇、蘊藻檟爲籍、腥鯽各自持、大鯉猶撥刺、小鯉亦淋漓、嚇腮看呀呷、楊柳亦貫之、磊落紫瓔珞、嶄然錞綳兒、蟹爪擁黄鉞、鰕鬚振翠緌、螺叫相濡沫、菌蕈覺黏黐、口刓藕根臂、彭亨瓜吐皮、水茄漫鑪發、地栗亦追隨、人面桃花艶、金丸楳子垂、萊菔霜堪拭、雕胡雪可篩、他不遑悉擧、瞠目還揚眉、不用沒骨法、鉤點妙生姿、世間畫工衆、孰運箇妙思、自娯且娯人、惟有此翁知、

又題牡丹幅云、寫生正派世攸宗、傾倒雲溪外史風、腕妙心恬力能辨、近時獨有一椿翁、

緋浦漁者曰、世稱京攝畫贏關左、是耳食者之言也、雖然、京師閑寂靜勝、路無點塵、而江都則閙熱雜沓、加之京攝故家舊刹、多藏晉唐元明遺墨、而關左則武庫森然而已、文人所養所見、不及京攝者多、其畫之輸贏有由來也、然至超倫絕類之人、則未必擇地矣、所謂雖無文王猶興者、固不可取一而論也、如立高二山等畫、吾見其不輸京攝也耳、

又曰、惲南田平生爲人作畫、視百金猶土芥、苟非其人、則不市一花片葉也、有此識而作此畫、宜乎、爲世所貴重、世之倣南田者、胸間具此見解、則不患無進步矣、篤甫終身不爲所謂書畫會遊歴等、因之視之、畫品之高、在此而不在彼也、

又曰、聞椿山性至孝、母氏之命無不奉者、或母命宜携雨傘、雖白日必携行、時夜間外出、至酉牌則省念其勞心焦思、雖食中投箸而起、其用心怡養、大率此類也、

大槻如電翁その著「華山十哲」の中に錄して曰く。

小華は七歲より半香に養はれ、既に十四五(華石君曰、十七歲)となりたれば、半香、琴谷相議し、此兒は畫家となさん。されど之を托する人は、椿山の外なしと、二人打連れて、椿山に詣り、其意を告ぐ。椿山曰く。二三日待たれよ、妻と相談せし上にてとかうの御返事せんと。二人は師匠の兒を預るに、妻に相談してとはけしからぬ事なりと、互ひに腹に不平を抱きたれど、せんすべなく、其日は歸りしが、一兩日すぎし後、椿山より半香の方へ、先日の事承知いたし候間、今一度御意得たしと云ひ送りければ、半香、琴谷又兩人にて往きしに、椿山曰く。私は先師の令息なれば何の異議あるべき。されど妻が世話してくれねば、或は半途にて其功の空しくならんも計り難し。故に篤と夫婦熟議致したるに、妻も屹度御世話申さんと云ひたり。さらば心安しと思ひ、兩君の御足勞を再びせし所以なり。何時にも御伴ひ下されたし。倅共と一同に御養育申さんとありしに、半香琴谷兩人その用心堅固なるに、顔見合せて、先の日不平を抱きしは、今更耻がましく思ひたりと。

亦以て椿山の人と爲りを察すべし。江戸文人壽命附には「大極上々吉、壽九百九十年」として、「其業は人の知たる事なれば、愚な筆にいふに及ばず」と評せり。「香亭雅談」に曰く。

余問椿山先生男某曰、故先生爲人製畫至多、不知亦有所遺家耶、答曰、先人歿時予尚幼、其詳無得而知也、傳聞、先人性行謹愨、受人囑必果、及病篤、知其不起、以所有贈囑者、塞其責、故古人畫幅、有一二存焉、至先人之畫全絕跡、

椿山がその門人吉田柳溪(善四郎在甲府)に與へし尺牘甚多し。(或曰原本今在藤堂家(華石君談)、或曰原本散逸、同門飯塚椿田所傳寫者今存(華椿尺牘)、頃者神木鷗津君集刊之而須同好、題云華椿尺牘、予亦見惠一本)その門人の問に答へて、諄々として畫學を教へたるもの頗る觀るべく、以て椿山の性行、見識等を察するに足り、又その華山先生と往復せる書扎は、以て椿山の畫論を學ぶに篤かりしことを考ふるに足れり。竝に今こゝに掲ぐるに遑あらず。遺作は流傳甚多し。銘心錄言ふ所の京洛名勝圖册及日光眞景卷の外、

今現に參州田原巴江神社の所藏に係る山海奇賞(元四卷、今逸府中以東之一卷)あり。中仙道を往いて東海道を還れる所見の寫景にして、この種の物にては、華山先生の寫景よりも丁寧なること一層なり。二見浦圖の如きは最見るべしとす。椿山の印は今渡邊華石君これを藏せり。門人は四五百人もありきと云(華石君談)へど、世に著れたるは小華、幽谷に過ぎず。これに亞げるは人見棋堂(曾出椿山畫譜)あり。又前出柳蹊(江戸文人壽命附柳溪に作り、極上々吉壽八百五十年、甲州人、在江戸と記し甲州に畫名かゞやくよし田氏、山水ござれ花鳥猶さらと評せり)の外、遠州川崎妙照寺住持大草水雲(諱亮道、字皆令、別號桂華堂、天香書屋、能詩畫、初在京都學畫於梅逸、後請益於半香顯齋、又就椿山、花鳥酷似椿山、安政七年以病兩脚跛、兩目盲、明治七年十二月六日寂、五十八歲)及宇都宮の人葭田蔡泉(自幼好畫、宇都宮富人菊池澹如愛之、伴至江戸濱町之家、令就椿山學、椿山盡授着色之法、後小華常招蔡泉而問之云、中年病眼殆失明、將自殺、澹如之嗣長四郎扶養之、得明稍復、性正直、曾有一骨董賈、欲使蔡泉作椿山之贋筆、蔡泉作色而拒之、事詳繪畫叢志所載畫家逸話)

第三百五十　椿椿山筆天燭雙鷄圖

第三百五十一　同筆垂柳鶺鴒圖

第三百五十二　同筆久能山眞景圖

華山先生の門下多しと雖も、能くその箕裘を繼ぐに堪へたるもの、花鳥に在りては椿山、山水に在りては半香、顯齋、人物に在りては琴谷あるのみ。この數家は實に華山先生の兼該せし三科の一面を傳へたる者なり。而も椿山の花鳥最も秀でたり。その畫風、南田、秋谷の法を祖述す。華山先生嘗て椿山の畫(絹本大竪幅、石榴、葵花、百合等の圖)に題して曰く「徐家寫生、南田氏有起衰之功、而得其畜筆之法者、爲秋谷張氏、椿子能學之、片花隻葉、無所不取、諸家所謂獅子投象、以全力赴之者矣、過觀者不察也(辛卯首春華山外史登)」。椿山又常にその畫に題して、北宋徐崇嗣の法を摸すと云へり。されど、椿山が蓄筆の妙味は、南田、秋谷と雖も、未だ曾て詣らざりし所あり。その彩筆の輭雅淡逸なること、南田、秋谷が巧整の比に非ず。その蓄彩の豐潤淋漓たる趣、別に全く一家の創格にして、蓋し華山先生これを埛め、椿山に至りて大成せるなり。こゝに掲ぐる雙雞、鶺鴒の二圖、以てその特致を賞するに足る。山水は元來椿山の得意に非ずと雖も、眞景の描寫は頗る巧妙にして、前にも言へる東海、東山兩道の寫景の如きは、華山先生と雖も、多くこれに過ぎず。こゝに出せる久能山圖の如き、亦以てその一例を觀るべし。

編者言ふ。編してこゝに至り、餘り浩澣の恐れあるが故に、椿山の外、邊門十哲中の九人及その餘遺作を掲げざる畫人の傳記をば、姑くこれを省き、他日の增補を期すと云ふ。

高久靄厓の傳記は雲烟略傳最精しく、又大槻盤溪撰ぶ所の碑文あり。今先前者の全文を掲げむ。

高久徵、字子遠、稱秋輔、號靄厓山人、又有石巢、如樵、疎林(外史)等之號、下野國奈須郡小松庄杉渡戸村人、少寓仁連木及鹿沼等、受讀書於鈴木雪橋、性酷嗜繪事、學畫於雪耕山人、山人歿後、心醉池霞樵及清人伊孚九、私淑有年、最刻意於霞樵、筆硯規倣、人不能辨其孰爲眞、又入寫山谷翁之門、(碑文曰、弱冠出江戸、入谷文晁之門、從學四五年)谷翁崇北宗、子遠則確守南宗、其志趣不同、然亦終不肯背之、既而悟其未盡、直進師明清諸家眞蹟、沉潛窮究、不舍晝夜、凡聞有藏一名畫者、百方懇請、手自摹之、累年之久、摹本殆乎柱屋梁、後游東奧、娶今野氏、又游信越、得潤筆金百圓許、以爲可支四五年、於是與鈴木松亭、共研鑽畫學、年四

十餘游京攝、西人聞其名、而多乞畫者、子遠不應、就古寺舊刹、借觀其儲藏古畫、日夜臨摹、備後人某、重幣求畫、其家藏明人郭完雙幅、子遠欲借觀換幣、某乃寄幅、山人欣然作數幅、以酬之、其篤志如此、最愛沈石田楳道人、有大悟於其法、好作山水四君子、筆墨沉厚、布置深穩、韻高而意遠、平素持論云、皴法是筆向背明晦是墨、本邦從前畫家、多不曉之、故雖稱能品者、玩味筆墨、竟歸無法、然方今南宗大開、可以與漢兒並馳矣、蓋池大雅草創之、釧雲泉討論之、至潤色之、則余雖無似、不敢讓之他人、其抱負如此、子遠與立原杏所、菅梅關、大橋淡雅、椿椿山、渡邊華山等友善、每會以鑑識爲娯、衆皆稱其畫、以爲氣韻風格、不愧古名匠、而淡雅最爲知音、其未發名也、極力推奬、且能周其窮、是以子遠常得不乏云、歸自京師、卜居於江都藥研堀、築晩成山房、大唱南宗、當此之時、趣向既定、伎倆益進、其造詣殆將不測、不幸罹病、天保十四年癸卯四月八日歿、年四十八、其妻今野氏、不能具喪、淡雅爲經理之、葬于谷中天龍院、猶石谷於南田云、門人谷口靄山、川窪蘭涯、楚水、僧默雷等、有名于時、默雷請偈文訥庵、建石其觀專寺中、報師恩云、

大橋訥庵曰、山人即世數年、四方爭求其遺墨、零縑斷瀋、珍之如拱璧、識者評爲東方未曾有之畫、則山人其亦可以瞑也、夫山人爲人、坦率靖曠、不修邊幅、儕輩咸推重之、而絕無自滿之色、其出門、必以筆自隨、苟遇一畫稱佳者、不論南北、不問古今、摸寫以收藏焉、書亦清潤適美、有明人風趣、雖專門之士、不能先之也、

又曰、靄厓所居、與余廬相距數百步耳、故托其藏幅於余庫中、每朝來携一二幅去、輪轉循環、終而復始、如此者終歲如一日、亦足以徵其嗜好之篤也、

藤森淳風疎林外史墨竹詩曰、墨君本瀟洒、筆氣亦無塵、磊々高人意、超々靜者神、

縑浦漁者曰、方今文人畫盛行、所謂文人畫、胸有書卷、而謂通繪事者也、而今凡工目不知一丁字者、輙亦潛稱焉、是可笑也、子遠則讀書子、而以丹青著、可謂不負乎其名者、如其追思雪耕山人舊誼、爲建碑以報之、爲人亦可以識也、

又曰、或問子遠、谷氏畫品優劣如何、余曰、子遠伎倆雖止山水四君子、大有韻致、谷則無不能矣、惟欠韻致耳、是文人畫與畫師之別而已、噫、是亦可以判二家之優劣也哉、

碑文に曰く。

余與靄厓山人、結交於藝林者、不過五六年、而意氣之投、何其深也、蓋世之儒流、率乏書畫賞鑒、獨以余夙好之篤也、山人見以爲可與語者、每展觀古畫名軸、未甞不細論其眞贋粗、而余之言、間或有中其肯綮焉、是以有其子碑文之請、不託諸老師宿儒、而囑如余者、則吾又安可以淺學不文而辭之哉、(中略)蹤跡不定、而寓毛之鹿沼者獨久、以故人或以爲鹿沼人、(中略)山人之畫於遺水特妙、天機所致、一揮落紙、瀟洒磊落、如殆不經意、而謹嚴處、自不可磨滅、蓋山人非今世畫家之流也、求之梅道人、白石翁之際、而始得其髣髴者歟、晩年卜居於江戸藥研港、方將以六法成名海內、而一朝罹疾、溘奄然盖棺、是以世之知山人者鮮矣、但立原杏所、渡邊華山、近世精畫論者也、皆稱山人畫云、氣韻風格不愧古名匠、余鄉菅梅關、固少所推讓、獨於山人、每嘆以爲精妙不及也、山人得此一二知己以歿、其亦可以無恨也夫、初山人之立業也、追思雪耕山人之舊義、爲建碑於其鄉、以圖不朽焉、其所以報師友者如此、則山人之於爲人、亦可想也、嗚呼山人果非今世之畫家也、(中略)今野氏無子、養川勝氏子隆古爲嗣、亦善丹青、不墜家聲、遂係之以辭曰、山人一去兮藝苑寒、抱持遺墨兮以磐桓、靄厓之下兮疎林路、會過山人兮於旦暮、山人有靈兮能莫我顧、

この餘靄厓の事に關し、諸書錄する所を左に集載す。

曾て東叡山の麓不忍池畔に筆塚あり。其碑に曰く。

靄厓山人復筆塚之銘

山人之妙於畫人知、其才之高而不知、得之於力學也、山人曾指閣上語余曰、吾之得今日周旋于聞人間者、此數束敗筆之力也、是以不忍棄之、欲爲築冢藏之、子爲銘之、余諾之、今山人墓木已拱、而内子其能記其言、來請前約甚力、余惜山人之不永、而感某之義而思山人之不衰也、爲作銘、々曰、不朽禽者、山人之才、不朽山人者禽之勳、雖然微物亦依以得傳、嗚呼是才人、嘉永庚戌仲秋、水竹拙者撰、玉岡道人臨晉右將軍王義之書(茶六隨筆)

高久靄厓遊于南總、有豪農某、携一大絹本乞畫、畫成、山巒樹木、屋舍橋梁、渲染緻密、加以淡青綠、某熟視、指一樹曰、是何木、靄厓忍笑曰、紫檀也、又指一樹曰、是何木、曰黒檀也、曰是何木、曰鐵刀木也、曰如此種珍木、諸屋舍之傍、栽覇王樹、靄厓曰、位置已全矣、無餘地可加、曰然則添一雙七面鳥、靄厓甚困、不得已、以白粉畫浮鷗二三隻於水際、某曰是何鳥、曰雎鳩也、詩曰、關々雎鳩、在河之洲、某大喜携去(畫人逸話、石亭雅談これを隆古の事とす)

初學于谷文晁、後別樹一幟、去晁之粗獷、取其雄爽、如蘭竹山水、逸而潤、絶無匠氣、近代巨宗也、又精鑒、所藏錢叔寶雨雪二景巨幅、及黄景昉寒山子跨雲圖、皆爲銘心絶品(銘心錄)

高久靄厓初め下野黒羽人小泉斐に畫を問ひしことあり。斐は擅山人と號し、寫生を善くし、其名常野の間に振ふ。寫す所の鮎を、猫の見て眞魚となし、飛付きたることありとて、人殊に之を珍愛せり。靄厓既に大家となりしかども、同地の人未だこれを知らず。其家に至り、盛に斐の鮎を稱して、猫云々の事に及びたるに、靄厓戯れて曰。余が畫は猫には好まれざるも、大名には屢々飛付かれたりとて、一笑せり。(繪畫叢誌)

某豪家あり。山人が元明の古畫を愛するを奇貨とし、名畫ある由を告げて之を招き、畫を作らしめんとす。山人喜で招きに應じ、其家に抵れば、坐客兩三輩あり。佳肴珍味排列して、佳人酒を侑む。須臾くありて、主人絹を出して畫を索む。將に筆を下さむとするとき、壁上古畫を掲ぐ。熟々視れば、嘗て知る所某氏の珍藏なり。此を借りて以て己を誑かすを覺とり、心頗る之を卑む。酔に乘じて蘭竹を作り、誤るまねして筆洗を覆し、佳人の衣に濺ぎ、畫絹も亦半ば汚る。山人省みず、衣を掃て去れり(東洋繪畫叢誌)。

第三百五十三　高久靄崖筆東坡誕辰圖

靄厓は雲泉に次いで、關東南畫隆興の木鐸たりし一人にして、八州の野を游歷し、斯派の嗜好を弘めしは、頗るこの人に待つありしなり。而もその造詣甚高く、華山先生に亞いで優に函左の第二位を占むるに足れり。こゝに掲ぐる圖の如きは、その遺作の尤品にして、一家の妙趣誠に超凡の伎倆を觀るべし。

菅井梅關

菅井梅關の傳記は、左にその墓誌銘を掲げてこれに充つ。

近世與人以畫聞於天下者、以梅關山人爲冠、山人仙臺人、菅井氏、諱岳、稱岳輔初東齋、考諱知則、妣鈴木氏、山人自幼好畫、日作菅神像自嬉、稍長附家務於弟智顯、專意繪事、而苦乏師友、會根本常南來寓仙臺、常南祖元人長山水、稱山人曰、頭角已見、必有所成、山人事之數年、畧得其法、既出江都、從谷文晁、文晁晩雜北派、山人不好去、游京坂遍訪名跡、臨摹甚勤、適觀清人江稼圃畫於市、奇之、聞其來在長崎、遂往而委贄焉、稼圃名大來、姑蘇學士、應試落第、絶意仕進、其書固重於世、喜山人有識、悉傳秘訣、兼授詩及書法、臨別使寫墨梅、携歸國、因贈以詩、山人於是更號梅關云、留長崎十年、還寓浪華、名噪遠近、尤與予及頼子成相親、

不欲與書師齒也、會報弟患目、老母侍養無人、乃遽歸鄕、則母已沒矣、執喪如禮服闋、遊信越又羽、稼圃弟芸閣、亦久寓長崎、與山人善、寄書乞畫、且數勸再遊、以弟病不果、弟既喪明、山人愛顧盡心、知舊有爭、調停完好、或告窮乏、爲畫累幅使鬻之、藩公族安藝君、愛山人爲人、月給米若干、山人終身不娶、平居澹然、時以酒助筆、豪放快樂、雅言吾無妻孥、以畫遺世、是子孫也、欲子孫壽故、不能惜墨、盖諷世之以輕妙飾拙者也、以天保十五年甲辰正月十一日終、年六十有一、葬于城東生因寺先塋之次、其友人佐々木知芳、狀山人行實、因人來示、請銘其墓、山人之自長崎還也、爲予畫山水及蘭於屛、予賞其老蒼絕俗、朝夕披對、後數寄書、予亦作詩酬之、謂源々往復、宜娯暮年、而忽得訃與墓銘之請、請或出於山人遺言、能不言黯然消魂哉、乃序其所能以畫成名者、系以銘曰、專心於藝能、擇師友遊歷多年、所得自厚、單身絕累、於倫無負、畫力有限、其人不朽、

弘化二年乙巳夏四月　　浪華篠崎弼撰

第三百五十四　菅井梅關筆梅溪高隱圖

梅關は東北書壇の雄鎭なり。仙臺に在りて能く名を天下に知らる。宜なり、その老勁の筆墨、造詣の頗る高かりしや。本圖の如きも遺作の一尤品、以てその盛名の虛士に非ざるを知るに足る。

櫻間青厓

櫻間青厓名は咸、字は善訥、（又通稱）別に迂亭の號あり。參州岡崎本多侯の臣なり。その先某は備前の人にて、慶長十九年の役に大阪城に入り、戰敗れて本多忠政の將稻垣掃部に捕へらる。訊問に遇ふも傲岸にして屈することなく、終に一語を發せず。掃部怒りてこれを斬る。忠政その勇を愛し、その子出右衞門を收めて家臣とし、祿五十石を與ふ。出右衞門二子（長能保、次源兵衞）あり。分れて二家と爲り、共に本多侯に仕ふ。青厓は宗家の次子（兄は練右衞門）にして、出でゝ支家（五代目藤兵衞の子新七郎不都合の事ありて絕家せむとす）を嗣ぎ、（天保初、四十六七歲）六人扶持を給はり、醫師格にて畫を業とす。畫は片桐桐隱に學びき。（藩主忠顯亦畫を桐隱に學び、その嗣忠考は畫を青厓に學びき）青厓の兄練右衞門（亦好文雅、能詩書）子女數人ありて家貧しかりければ、青厓は常に甚酒を好みて、みづから亦極めて貧しきに拘はらず、常に兄の計を助く。同門の友人多胡逸齋深く青厓の畫と爲人とを愛し、その赤貧を憐みて、年々三口の俸米を贈りこれを賑しき。かくて青厓は嘉永四年二月十八日、六十六歲にして歿す。墓は駒込蓬來町長元寺（日蓮宗）に在り。法名を神名院天心居士と云ふ。（以上如電翁青厓事略に依る）

第三百五十五　櫻間青厓筆秋景山水圖雙幅

華山先生すら山水は我及ばずと云へりし青厓の伎倆は、こゝに揭ぐる雙幅以てその槪を知るに足れり。渴筆の擦皴、淡雅の渲染、一種の特色、他の諸家に見るべからざる妙趣あり。

編者言ふ。青厓の逸話少からずと雖も、今これを畧し、且以下列叙の諸家傳、前例の詳に倣はず。姑く簡略に從ひて、亦他日の增補を期す)。

中林竹洞

中村竹洞名は成昌、字は伯明、尾張の人なり。元明の古畫を研鑽して、みづから一家を成し、京都に住す。嘉永六年三月二十日、歲七十八にして歿す。

第三百五十六　中林竹洞筆富岳圖

第三百五十七　同筆錦鷄圖

第三百五十八　同筆敗荷雙鷺圖

竹洞、梅逸は尾州書人の雙白眉なり。竹洞の力量は稍梅逸に及ばずと雖も、雅味は則勝れるものあり。老勁の用筆、明淨の設色をその特徴とし、山水、花鳥の兩科に亘りて、技巧頗る自在なり。こゝに掲ぐる三圖、以てその作風を鑑賞するに足る。

第三百五十九　山本梅逸筆秋景山水圖（四季四幅對の一）

山本梅逸

山本梅逸、名は亮、字は明卿、尾張の人なり。竹洞と共に古書を臨撫して終に一家を成せり。安政四年正月二日歿す。歳七十五（忌辰錄、人名辭書等皆誤りて六十八歳とす）

第三百六十　同筆溪流叢竹圖

第三百六十一　同筆秋花雙鳩圖

第三百六十二　同筆木芙蓉雙凫圖

如何に裁搆の錯雜なる圖と雖も、朽筆を用ゐず、咄嗟に揮灑して一絲亂れず。山水花鳥に論なく、健拔縱横、京洛斯派の書壇に獨歩せし者を梅逸とす。力量の雄邁は、文晁と雖も、或は一着を讓らざること能はざるべし。こゝに掲ぐる諸圖、皆以てその自在の妙技を示し得て餘りありとす。

第三百六十三　小田海僊筆春嶽歸樵圖

小田海僊

小田海僊名は羸、字は巨海、又百谷と號す。通稱良平。長門赤馬關の人なり。初め畫を吳春に學び、後九州に遊びて歸り、畫風を改めて一家を成す。文久二年八月廿四日、歳七十八にして歿す。

第三百六十四　同筆水楊歸牧圖

海僊が中年以後の作は純然たる南畫にして、毫も四條派の殘影を存せず。その歷游の間に於ける修養の深かりしは、これを察するに餘りあり。今前半生の製作を取らずと雖も、こゝに掲ぐる所の二圖、以てこれを徵すべし、

第三百六十五　貫名海屋筆溪山幽鄎圖（全部及一部分）

貫名海屋

貫名海屋名は苞、字は子善、晩年菘翁と號す。通稱を泰次と云ふ。京都の儒者なり。詩及書に長じ、旁ら畫を能くせり。文久三年五月六日、七十八歳にて歿す。

第三百六十六　同筆竹翠溪聲圖

第三百六十七　同筆林下孤亭圖

第三百六十八　同筆夏冬山水圖屛風（全部及二部分）

近古京攝の文人にして畫を能くせし者、世半江、海屋の二家を推してこれを並稱す。然れども半江の畫は尙文士の餘技たる分際を超えず、書家の作としてこれを待つには、頗る生拙の嫌あり。海屋に至りては然らず。筆墨較〻老熟して、その畫風こそ同じからざれ、將に竹田の壘を摩せむとする概あり。こゝに出す所の諸圖皆佳なりと雖も、殊に屛風の山水の如きは、裁構の妙既に大局の美を成し、皴擦渲染共に變化の自在なるを見る。

第三百六十九　日根對山筆秋溪覓句圖

日根對山

日根對山名は長、字は小年、和泉堺の人にして京都に住せり。明治二年三月十三日、五十七歲にして歿す。

第三百七十　同筆西園雅集圖

南宗の畫家多しと雖も、作風多くは疎淡を好みて、明朝細麗の畫風を能くせし者あらず。對山獨りこれを取れり。巧整綿密の細披麻皴と、その青綠の流麗とは、即ち對山の特長とす。而も亦水墨を巧にせり。秋溪覓句圖は主山の妙味言ふべからず。西園雅集圖は巧緻及ぶ者少からむ。

南北合流

前に述べたる明淸風雜派の中、謂はゆる北宗の山水は、邊溱水、邊玄對、馬孟熙の徒に依りて、寛政前後盛に江戶に行はるゝに當り、一面關西には既に文人派の盛なるありて、釧雲泉等早くこれを關東に唱へしかば、その氣勢漸く揚り、將に江戶に華山、靄崖、靑厓等の南宗名手を輩出せむとすると同時に、一大巨擘の出でゝ南北を倂合せる者あり。これを谷文晁とす。宛もこれ淸初の王石谷に至りて兩派の一に歸せしが如し。

谷文晁

谷文晁通稱文五郞、畫學齋、寫山樓、蜨叟、一如居士等の別號あり。江戶の人、詩人麓谷の子なり。初め畫を加藤文麗に學び、後邊玄對、馬孟熙等を師とし、更にみづから機軸を出して遂に一派を創せり。縱橫の技倆一世を傾到し、畫門の盛なること、殆ど前古に比なし。天保十四年十二月十四日（表向は廿五日）歲七十八にして歿す。

第三百七十一　谷文晁筆谿山疊嶂圖

第三百七十二　同筆夏山圖

第三百七十三　同筆赤壁圖

第三百七十四　同筆蘭亭圖雙幅

第三百七十五　同筆陶淵明歸去來圖（全部及一部分）

第三百七十六　同筆樓閣山水圖雙幅

南北合流の祖、才分元來凡流に非ず。縱橫の技古今を睥睨する底の力量、固より評賞の言を費すに及ばざるなり。疊嶂圖の流麗、夏山圖の豐潤、赤壁圖の輕淡、蘭亭圖の典雅、陶明圖の健拔、樓閣山水の莊重、圖を出すごとに變化無量、手腕の底止する所、造詣の窮極する所、誠に測るべからずと謂ふべし。

因みに言ふ。夏山圖は樂翁侯の命を奉じて書きたる十二山海帖中の一頁、赤壁圖は同じく侯の書かしめし文一、文良、文雍、元旦等との合作帖壯觀錄の一圖なり。

文晁の門下甚多しと雖も、今竝に省略に從ふ。

第三百十　蘆雁圖　熊斐筆

絹本淡彩

竪三尺八寸九分橫一尺五寸二分

長崎　松本武助君藏

（第六百十二頁參看）

丙戌仲秋繡江熊斐寫

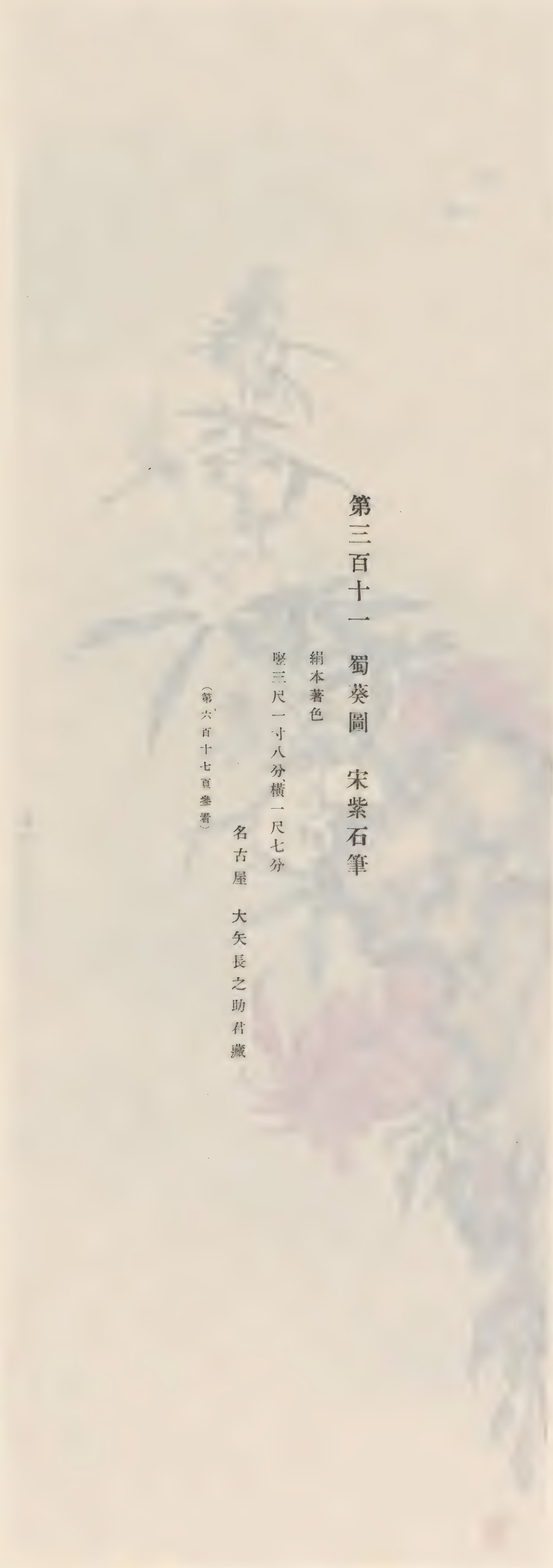
第三百十一　蜀葵圖　宋紫石筆

絹本著色

竪三尺一寸八分横一尺七分

名古屋　大矢長之助君藏

（第六百十七頁參看）

宋紫石寫時年六十有四

第三百十二　柳鷄圖　黑川龜玉筆

絹本著色

竪四尺六寸四分、横一尺七寸九分

東京　男爵都築馨六君藏

（第六百二十頁參看）

第三百十二 柳鷺圖 黑川龜玉筆

絹本著色

竪四尺八寸四分横一尺七寸九分

東京 帝室博物館藏

(第六百二十頁參看)

第三百十三　蓬萊群仙圖　柳里恭筆

絹本著色

竪四尺九分橫一尺八寸三分

豐後國戸次　帆足後作君藏

（第六百三十五頁參看）

第三百十四　牡丹孔雀圖　柳里恭筆

絹本著色

竪四尺七寸五分、横二尺七寸九分

播磨國龍野　原田宗兵衛君藏

（第六百三十五頁參看）

第三百十四　牡丹孔雀圖　柳里恭筆

絹本著色

竪四尺七寸五分　横二尺七寸九分

[illegible]

（第六百三十五頁參看）

第三百十五　秋景山水圖　渡邊玄對筆

絹本著色

竪三尺四寸二分、横一尺四寸九分

東京　安藤與惣治君藏

（第六百三十七頁參看）

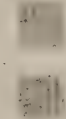
第三百十六　秋景山水圖　祇南海筆

紙本淡彩

竪四尺一寸四分橫一尺四寸四分

紀伊國　濱口吉右衛門君藏

（第六百四十三頁參看）

南海

第三百十七　松下觀月圖　彭百川筆

紙本淺絳

竪三尺六寸四分、橫九寸九分

京都　大辻久一郎君藏

（第六百四十四頁參看）

第三百十八　白雲紅樹圖　池大雅筆

絹本著色

竪四尺二分横一尺三寸二分

大阪　藤田傳三郎君藏

（第六百五十五頁參看）

（第六百五十五頁參看）

大阪　藤田傳三郎君藏

竪四尺二分橫一尺三寸二分

絹本著色

第三百十八　白雲紅樹圖　池大雅筆

白雲紅樹
九霞山樵寫
意

第三百十九　峽中棧道圖　池大雅筆

紙本淡彩

竪四尺三寸四分橫一尺八寸二分

紀伊國和歌浦　和中金助君藏

（第六百五十五頁參看）

峡中桟道

桀石

第三百二十　秋江釣舟、松下論古圖雙幅　池大雅筆

紙本淡彩

各竪四尺四寸三分橫一尺九寸二分

近江國大津　村田利兵衛君藏

（第六百五十五頁參看）

秋江釣舟

松下論古

霞樵

第三百二十一　清谿小集圖　徐夙夜筆

紙本淡彩

竪四尺三寸九分橫一尺八寸八分

紀伊國和歌浦　和中金助君藏

（第六百五十七頁參看）

第三百二十二　松下高士圖　木孔恭筆

絹本淡彩

竪四尺五分、橫一尺五寸七分

神戸　小寺成藏君藏

（第六百六十二頁參看）

遜齋孔恭寫

第三百二十三　秋山烟靄圖　謝蕪村筆

絹本著色

竪三尺九寸六分、横一尺六寸四分

近江國大津　村田利兵衛君藏

（第六百六十五頁參看）

東成謝寅

第三百二十四　谿山高隱圖　謝蕪村筆

絹本著色

竪三尺七寸六分横一尺四寸三分

近江國長濱　中村寅吉君藏

（第六百六十五頁參看）

東成謝寅

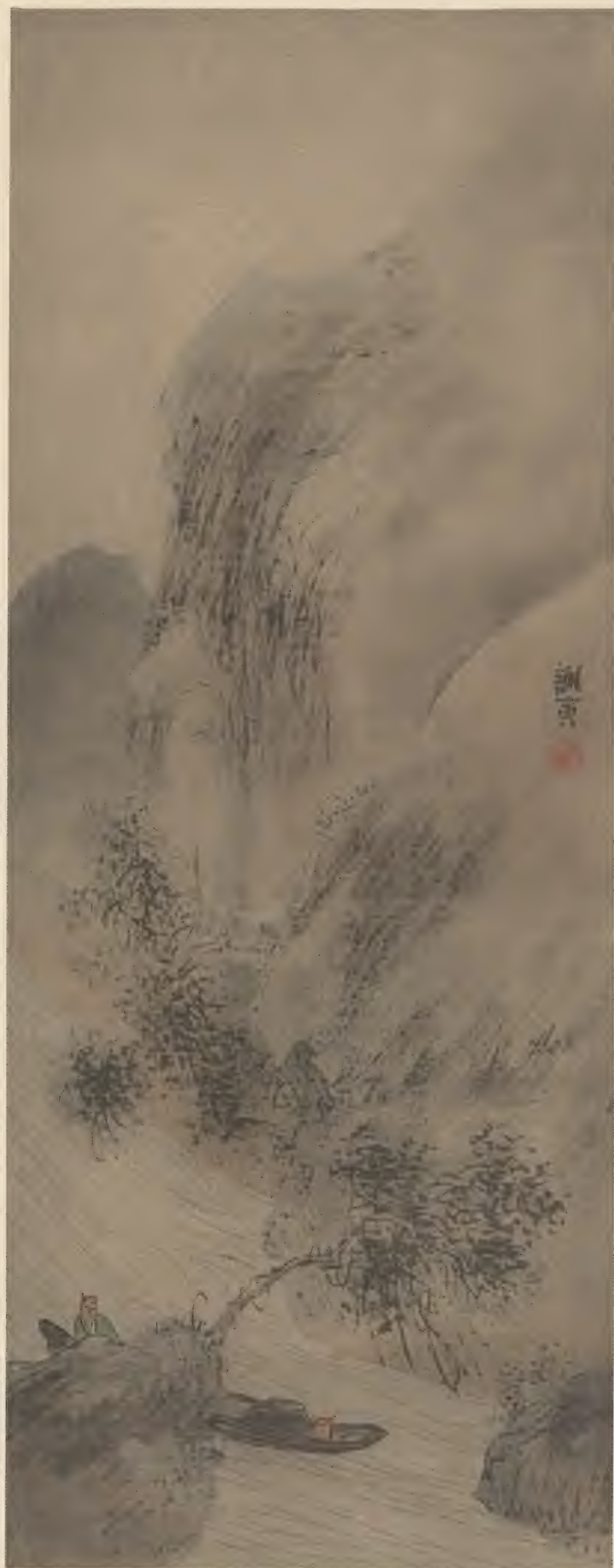
第三百二十五　秋谿漁舟圖　謝蕪村筆

絹本淡彩

竪三尺八寸七分橫一尺五寸三分

攝津國池田　稲束芝馬太郎君藏

（第六百六十五頁參看）

謝寅

第三百二十六　新綠杜鵑圖　謝蕪村筆

絹本著色

竪五尺八分横二尺二寸二分

近江國北比都佐　鈴木忠右衛門君藏

（第六百六十五頁參看）

第三百二十七　松徑歸樵圖　謝蕪村筆

絹本著色

竪三尺六寸九分横一尺二寸五分

攝津國池田　稻束芝馬太郎君藏

（第六百六十五頁參看）

東成謝寅

第三百二十八　花鳥圖　謝蕪村筆

絹本著色

竪四尺一寸九分橫一尺五寸九分

近江國大津　村田利兵衞君藏

（第六百六十五頁參看）

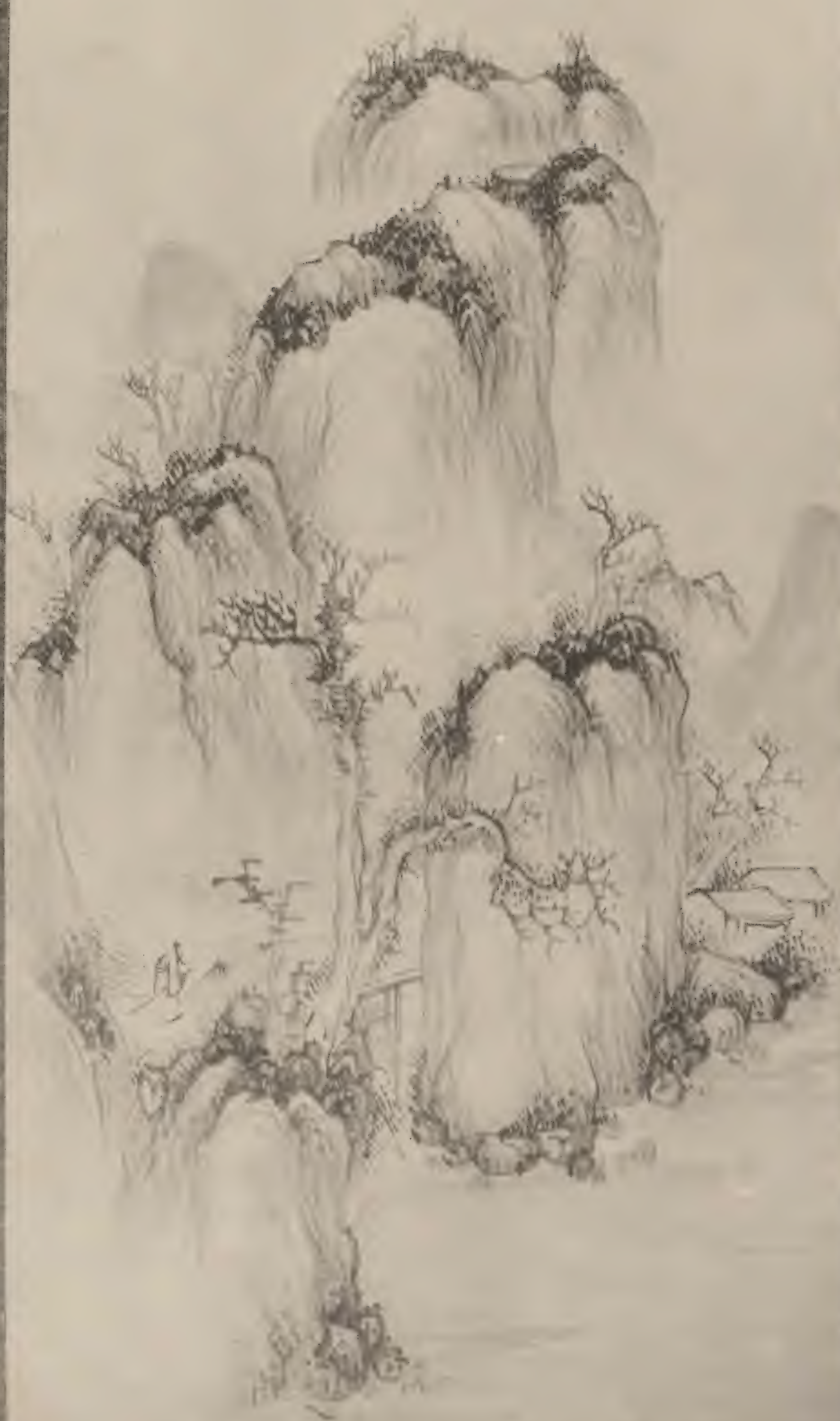
謝春星寫

第三百二十九　秋山探句圖　釧雲泉筆

紙本淺絳

竪四尺五分、横一尺八寸三分

肥後國熊本　岡本次七郎君藏

（第六百七十五頁參看）

第三百三十　松谿養鶴圖　岡田米山人筆

絹本淡彩

竪三尺七寸橫一尺一寸五分

京都　吉田茂八君藏

（第六百七十七頁參看）

米山人

第三百三十一　雪景山水圖　岡田半江筆

絹本著色

竪四尺九寸七分橫一尺八寸八分

京都　林　新助君藏

（第六百七十七頁參看）

第三百三十一　雲景山水圖　岡田半江筆

絹本著色

竪四尺九寸七分橫一尺八寸八分

京都　林新助氏藏

（第六百七十七頁參看）

第三百三十二　梅林村莊圖　岡田半江筆

絹本著色

竪一尺三寸五分橫一尺一寸五分

攝津國池田　稻束芝馬太郎君藏

（第六百七十七頁參看）

第三百三十三　騷風急雨圖　岡田半江筆

紙本水墨

竪七尺一寸橫二尺五分

神戶　竹中眞佐紀君藏

（第六百七十八頁參看）

第三百三十三 驟風急雨圖 岡田半江筆

紙本水墨

竪七尺一寸 横二尺五分

神戸 竹中眞紗[illegible]藏

（第六百七十八頁參看）

第三百三十四　浦上草堂圖　岡田半江筆

紙本水墨

竪五尺四寸九分横二尺一寸八分

播磨國明石　細谷立齋君藏

（第六百七十八頁參看）

第三百三十五　琵琶行圖　浦上春琴筆

絹本著色

竪四尺一分五厘横一尺六寸八分

近江國大津　村田利兵衛君藏

（第六百七十九頁參看）

第三百三十六　秋景山水圖　浦上春琴筆

絹本淡彩

竪四尺一寸二分横一尺五寸三分

京都　林新助君藏

（第六百八十頁參看）

壬寅立秋前一日寫

第三百三十七　那智懸泉、南山黄柑圖雙幅　野呂介石筆

絹本著色

各竪四尺二寸一分橫一尺八寸五分

大阪　生島嘉藏君藏

（第六百八十三頁參看）

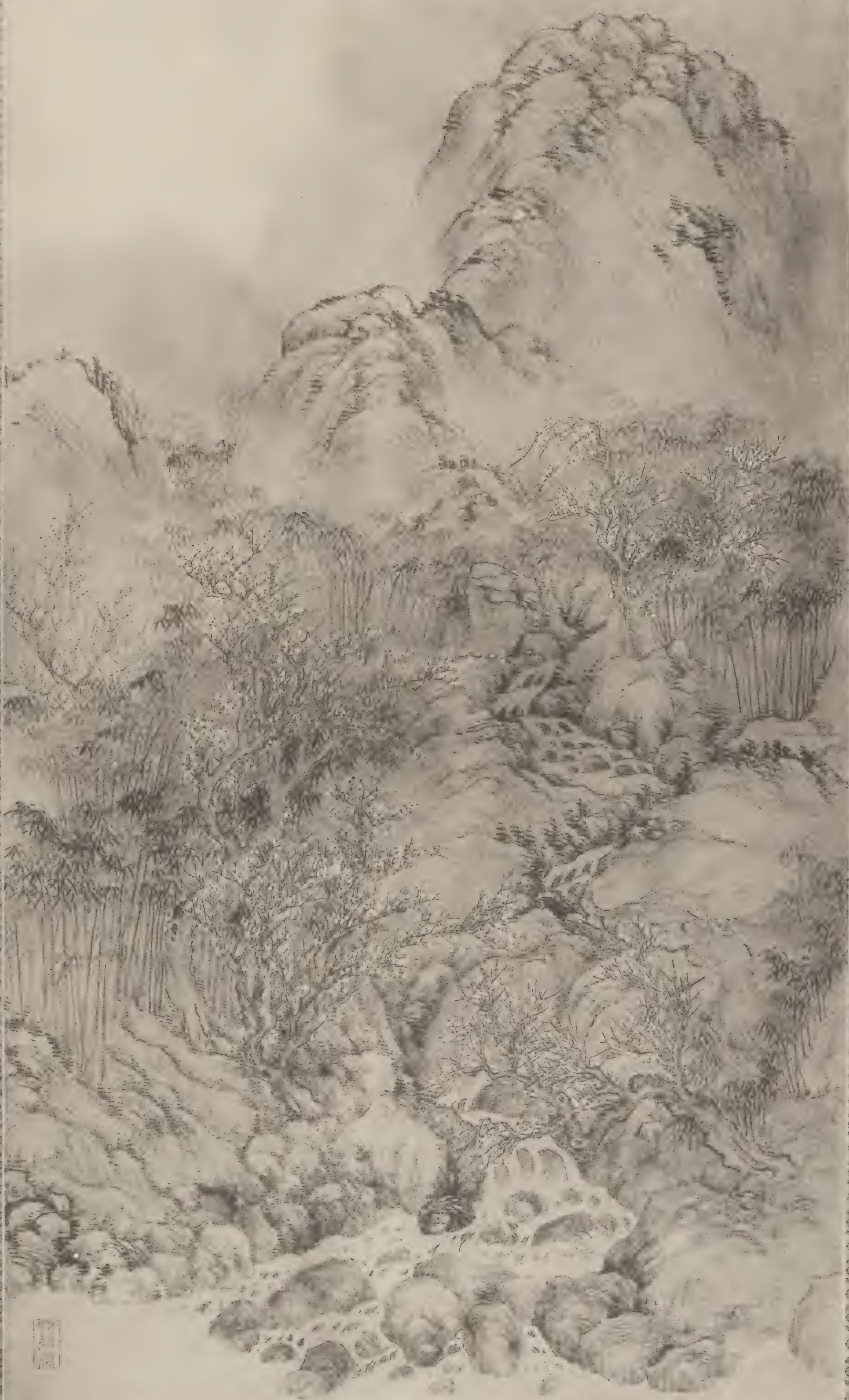
那智懸泉

第三百三十八　谿流梅竹圖　野呂介石筆

金箋著色

竪四尺二寸二分橫一尺九寸一分

紀伊國和歌山　島村富次郎君藏

（第六百八十四頁參看）

第三百三十九　竹莊閒適圖　木米筆

紙本著色

竪四尺四寸二分橫一尺一寸二分

神戶　竹中眞佐紀君藏

（第六百八十六頁參看）

甲申初夏書于
歸雲亭　米菴

第三百四十　溪橋歸樵圖　木米筆

紙本淺絳

竪四尺三寸、横九寸五分

京都　林　新助君藏

（第六百八十六頁參看）

第三百四十一　嵩山登覽圖　田能村竹田筆

絹本淡彩

竪三尺八寸六分橫一尺一寸五分

攝津國灘御影　嘉納治右衛門君藏

（第六百九十七頁參看）

司馬温公偕范蜀公游嵩山各攜茶往温公以紙爲貼蜀公盛以小黒合
温公見之驚曰景仁乃有茶器蜀公聞其言遂留合與寺僧邵氏聞見
録云温公與范景仁共登嵩頂由轘轅道至龍門渉伊水至香山憩石
臨八節灘多有詩什攜茶登覽當在此時
天保辛卯仲春寫於阪府之清住軒竹田生

第三百四十二　松溪聽泉圖　田能村竹田筆

絹本著色

竪三尺八寸橫一尺一寸九分

大阪　生島嘉藏君藏

（第六百九十七頁參看）

第三百四十二　松溪靈泉圖　田能村竹田筆

絹本着色

竪三尺八寸橫一尺一寸九分

大阪　上島直藏氏藏

（[illegible]）

松溪聴泉図

四年壬秋竹田生写

第三百四十三　蘆花翡翠圖　立原杏所筆

絹本淡彩

竪三尺三寸九分橫一尺九寸九分

東京　川崎金三郎君藏

（第七百二頁參看）

照水斑斕翠羽衣
花様来去一身微
寛息之如無化意
俯向蘆花深處飛
翠軒老人

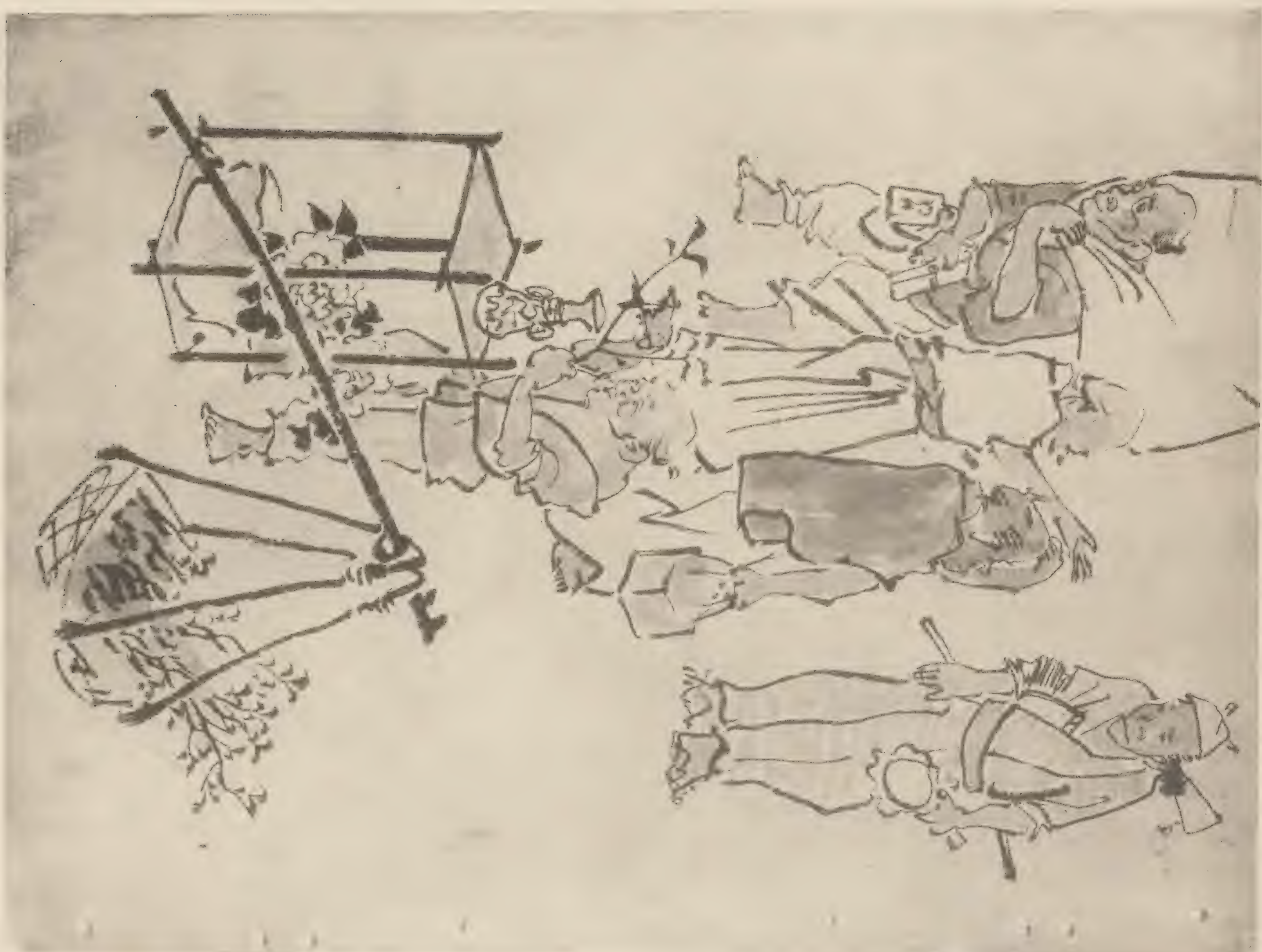
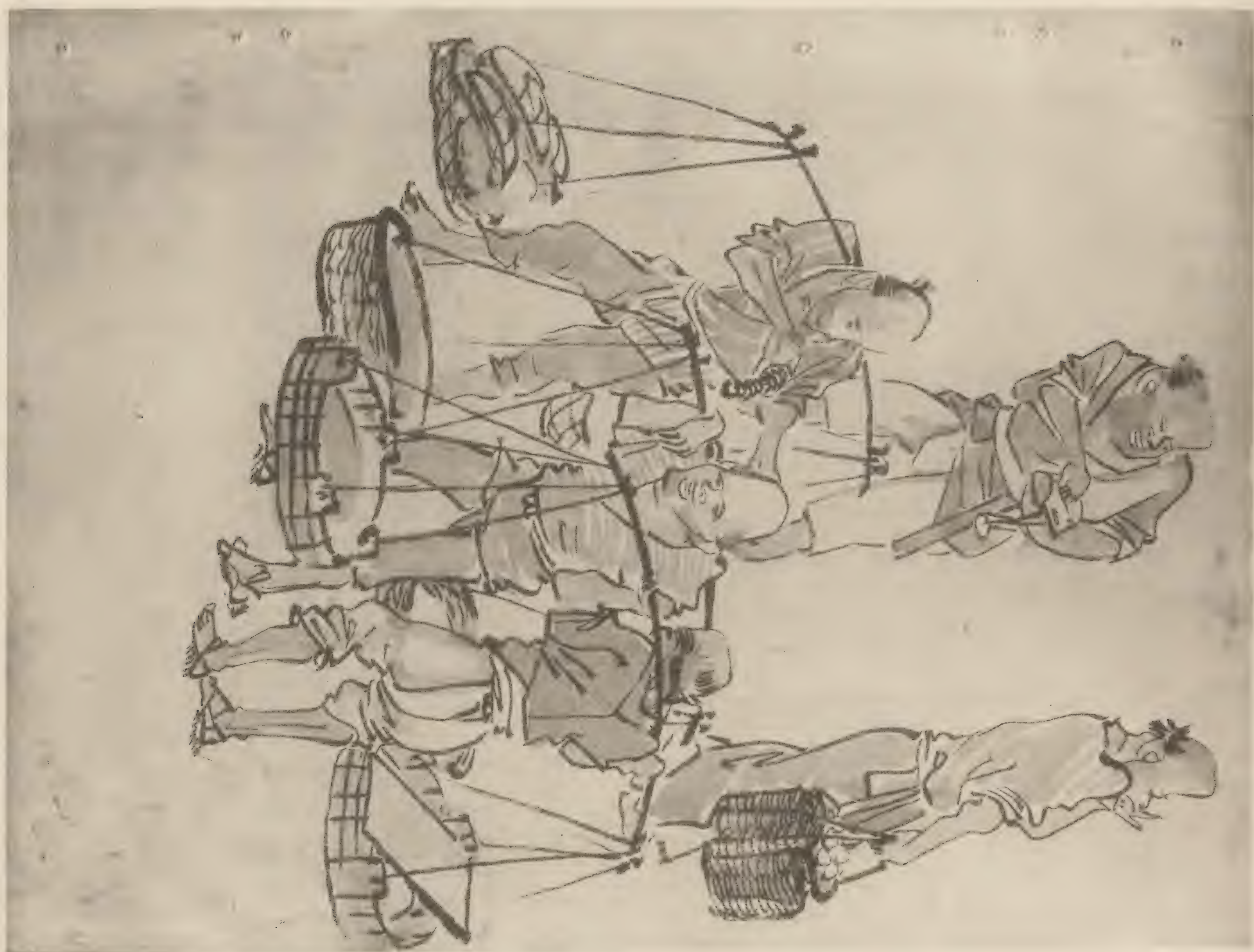
立原任筆

第三百四十四　一掃百態圖　渡邊華山筆

紙本淡彩

竪八寸八分橫六寸五分

三河國田原　渡邊元一君藏

（第七百三頁參看）

第三百四十五　蘭竹圖　渡邊華山筆

絹本水墨

竪四尺三寸九分、横一尺三寸六分

東京　子爵松平康民君藏

（第七百三頁參看）

第三百四十六　溪澗野雉圖　渡邊華山筆

絹本著色

竪四尺七寸五分橫二尺八寸五分

東京　說田彥助君藏

（第七百三頁參看）

第三百四十七　陽明洞圖　渡邊華山筆

絹本著色

竪三尺六寸八分横一尺三寸四分

三河國豐橋　糶子洋三君藏

（第七百三頁參看）

奔傾激石亦噴皆此是皆從元化來岩影掛簷輕
似練遠聲灘洞咽千雷氣含松桂千枝潤勢畫
雲霞一道開直疑銀河分派落叢蘭碎滴濺天台
乙卯蕤賓月獻寫 邊靜

第三百四十八　月夜山水圖　渡邊華山筆

絹本水墨

竪三尺八寸七分、横一尺八寸五分

三河國田原　廣中素介君藏

（第七百三頁參看）

萬拙時々中秋夜況是樓居
最上峯一片江山果奇絶矣
看明月涵碧寒巖
法高房山之意乃書右
詩 題安居士

第三百四十九　蘆雁圖屛風一雙　渡邊華山筆

紙本淡彩

竪五尺三寸八分横一丈一尺八分

下野國氏家　瀧澤喜平治君藏

（第七百三頁參看）

第三百五十　天燭雙鷄圖　椿椿山筆

絹本著色

竪四尺四寸五分橫一尺八寸八分

三河國豐川　中尾十郎君藏

（第七百七頁參看）

甲辰仲春倣沈
衡齋意寫

第三百五十一　垂柳鸕鷀圖　椿椿山筆

絹本著色

竪四尺三寸橫一尺一寸三分五厘

三河國豐川　中尾十郎君藏

（第七百七頁參看）

倣汝衡齋意
椿山生弼寫

第三百五十二　久能山眞景圖　椿椿山筆

絹本著色

竪四尺二寸二分橫一尺八寸五分

東京　說田彥助君藏

（第七百七頁參看）

天保𤍠年仲秋望作于琢
華堂 椿山椿弼

第三百五十三　東坡誕辰圖　高久靄崖筆

絹本淡彩

堅四尺一寸五分、横一尺六寸八分

信濃國長野　上野正隆君藏

（第七百九頁參看）

高崖樵者

第三百五十四　梅溪高隱圖　菅井梅關筆

絹本著色

竪三尺九寸二分橫一尺五寸八分

東京　朝倉文三君藏

（第七百十頁參看）

梅澗

第三百五十五　秋景山水圖　櫻間青厓筆

紙本淡彩

竪四尺三寸四分、横一尺二分五厘

石見國津和野　多胡　要君藏

（第七百十頁參看）

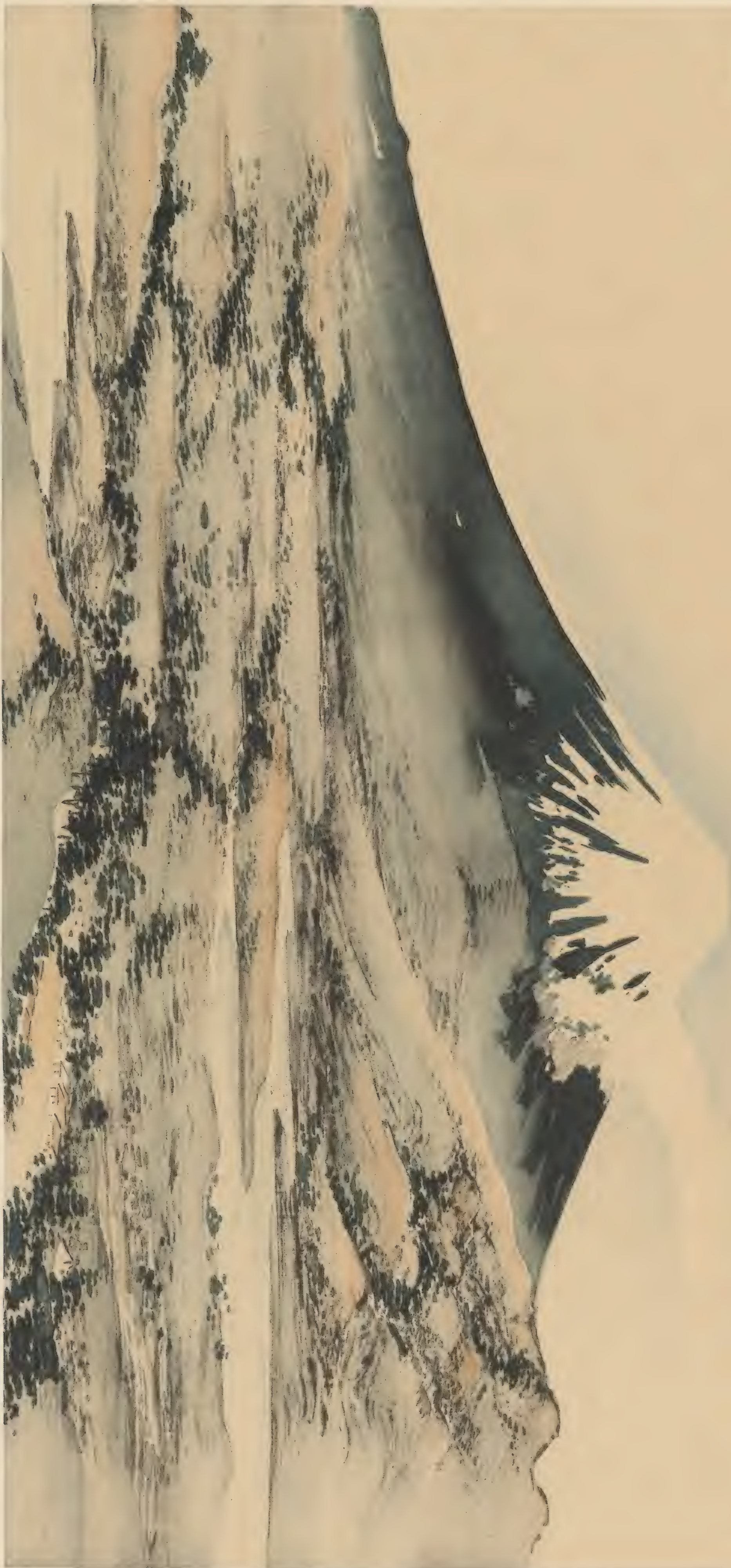
第三百五十六　富嶽圖　中林竹洞筆

絹本著色

竪一尺九寸九分五厘橫二尺八寸五分五厘

近江國瀨田　礒田淸左衞門君藏

（第七百十頁參看）

神洲奇觀
天保丁酉春三月倣藤彭南筆意
中林成昌

第三百五十七　錦鷄圖　中林竹洞筆

絹本著色

竪四尺五寸四分横一尺八寸九分

大阪　生島嚴藏君藏

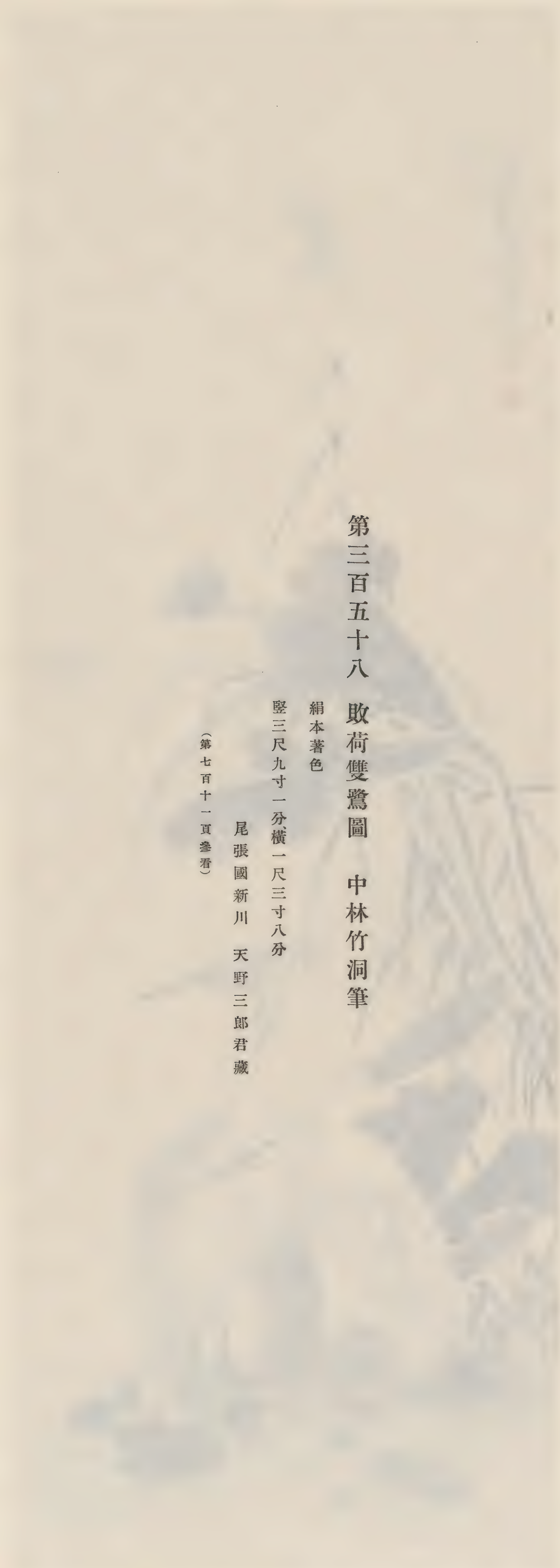
（第七百十一頁參看）

第三百五十八　敗荷雙鷺圖　中林竹洞筆

絹本著色

竪三尺九寸一分橫一尺三寸八分

尾張國新川　天野三郎君藏

（第七百十一頁參看）

沖澹老人寫於東山草堂

第三百五十九　秋景山水圖　山本梅逸筆

絹本著色

竪四尺二寸三分、横一尺八寸二分

尾張國新川　天野三郎君藏

（第七百十一頁參看）

第三百六十　溪流叢竹圖　山本梅逸筆

絹本水墨

竪四尺四寸四分、横一尺七寸五分

名古屋　大矢長之助君藏

（第七百十一頁參看）

第三百六十一　秋花雙鳩圖　山本梅逸筆

絹本著色

竪四尺三寸五分横一尺五寸四分五厘

尾張國新川　天野三郎君藏

（第七百十一頁參看）

第三百六十一　秋花雙鳥圖　山本梅逸筆

絹本着色

竪四尺三寸五分横一尺五寸四分五厘

壬寅菊月寫於玉禪書屋
梅逸山樵亮

第三百六十二　木芙蓉雙鳧圖　山本梅逸筆

絹本著色

竪五尺八分、横二尺四寸六分

加賀國金澤　男爵横山隆俊君藏

（第七百十一頁參看）

庚戌、徂秋寫　梅逸亮

第三百六十三　春嶽歸樵圖　小田海僊筆

絹本淡彩

竪四尺一寸二分橫一尺五寸三分

京都　林新助君藏

（第七百十一頁參看）

春巖歸雁

壬寅三月寫於

天香閣海僊

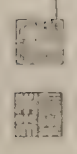
第三百六十四　水楊歸牧圖　小田海僊筆

絹本著色

竪四尺二寸二分、横一尺七寸二分

京都　八木重兵衛君藏

（第七百十一頁參看）

橋路烟霧晩牧牛
春水邊
嘉永三年庚戌小春
寫於天香閣中
海僊

第三百六十五　谿山幽鄍圖　貫名海屋筆

絹本淡彩

竪五尺六寸八分、横一尺六寸七分

京都　林　新助君藏

（第七百十一頁參看）

第三百六十五　溪山幽韻圖　貫名海屋筆

紙本淡彩

竪五尺六寸八分　横一尺六寸七分

京都　林　[illegible]君藏

（參看一百十七頁）

第三百六十六　竹翠谿聲圖　貫名海屋筆

絹本水墨

竪四尺一寸、横一尺一寸五分

紀伊國和歌山　島村富次郎君藏

（第七百十二頁參看）

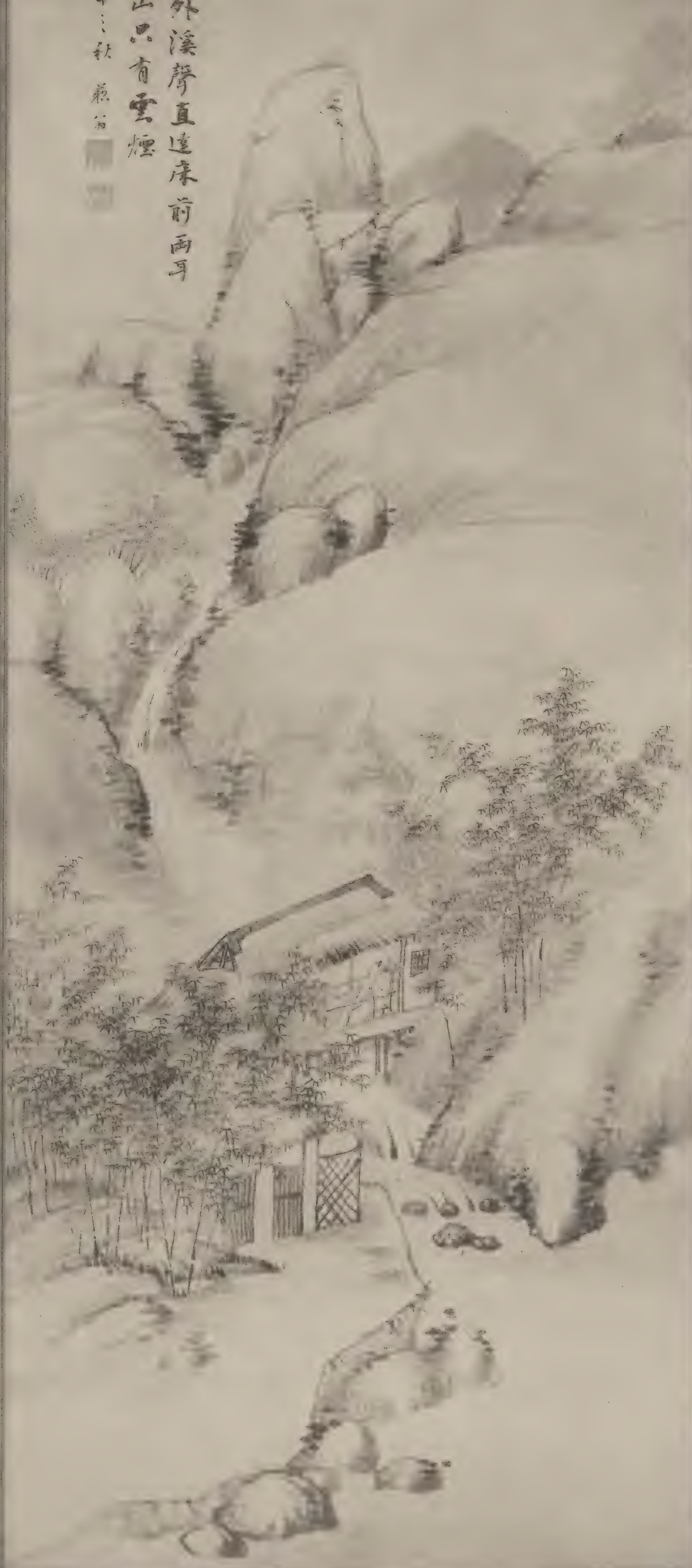
第三百六十六　竹埜遊鶴圖　貫名海屋筆

絹本水墨

竪四尺一寸横一尺一寸五分

[illegible]山　島村富太郎藏

（第七百十二頁參看）

竹翠周遭戶外溪聲直達床前兩耳
不聞車馬四山只有雲煙
戊午之秋 蘋翁

第三百六十七　松下孤亭圖　貫名海屋筆

絹本淺絳

竪三尺六寸三分、横一尺一寸二分

京都　吉田茂八君藏

（第七百十二頁參看）

林下長無一事床頭常足
經眠當雲歛點歸洞起風
餘聲在泉
癸巳冬月寫并題於松陵客館
海寧

第三百六十八　夏冬山水圖屏風一雙　貫名海屋筆

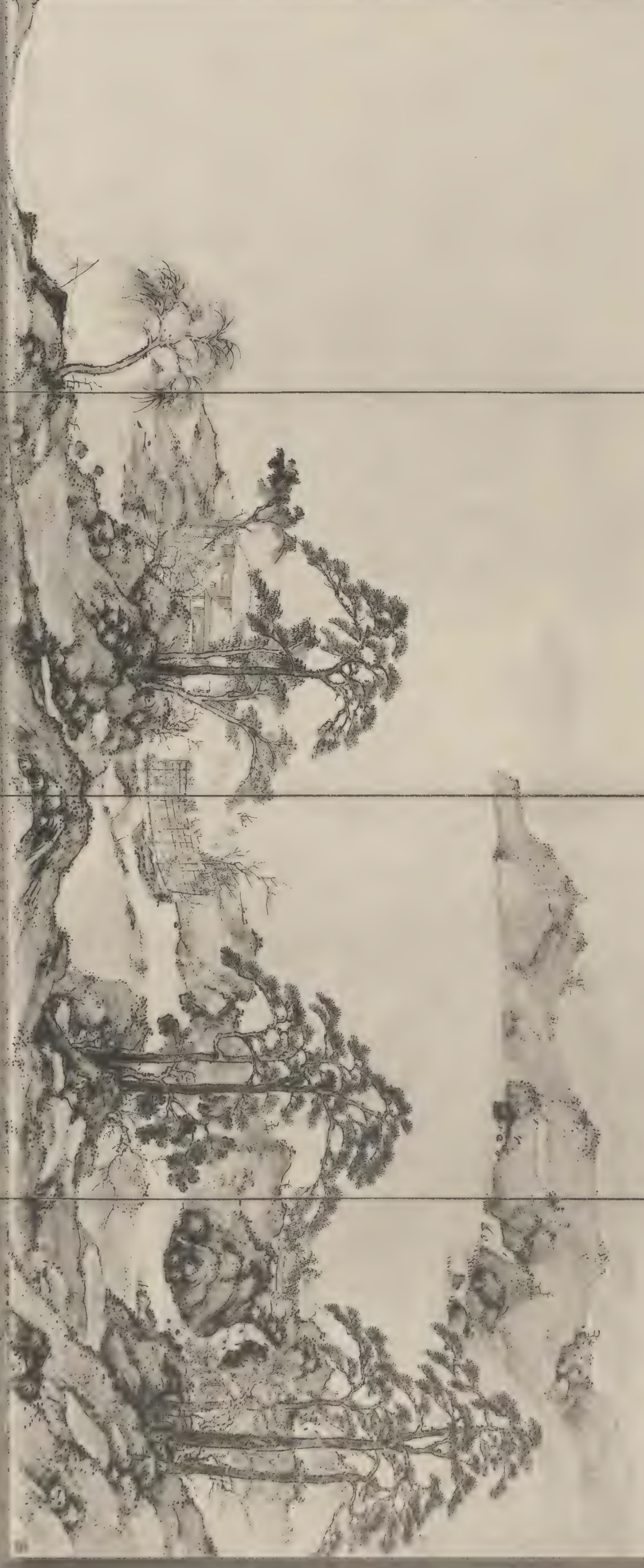
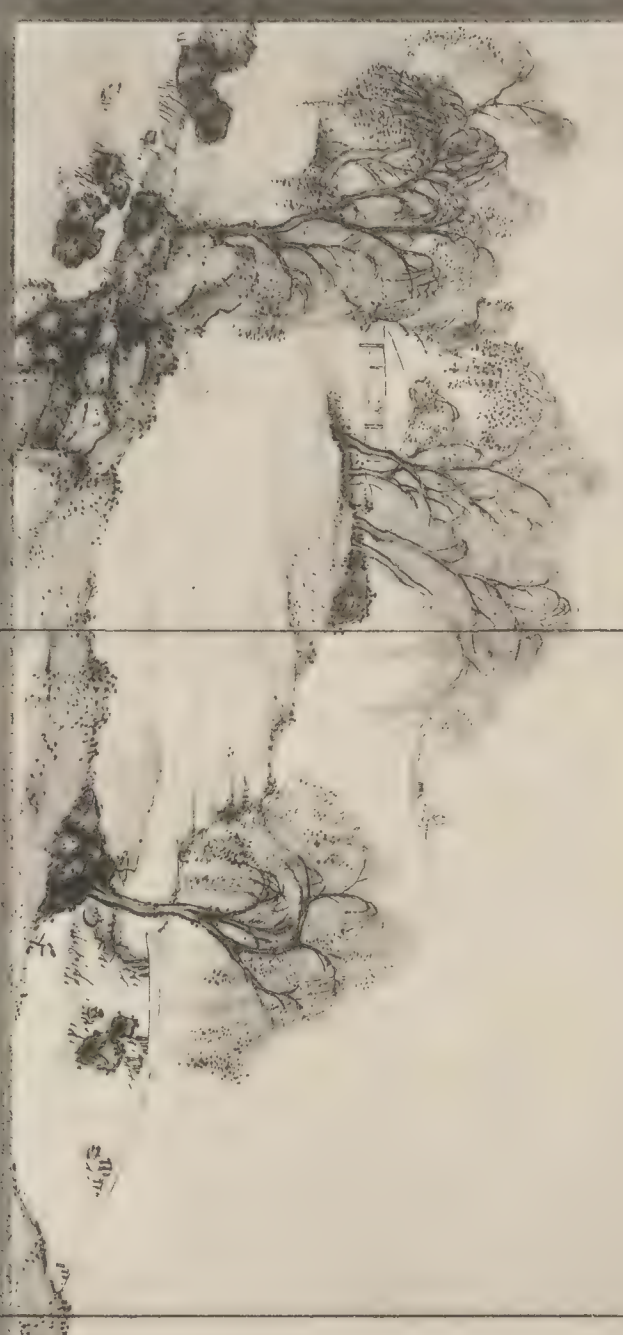
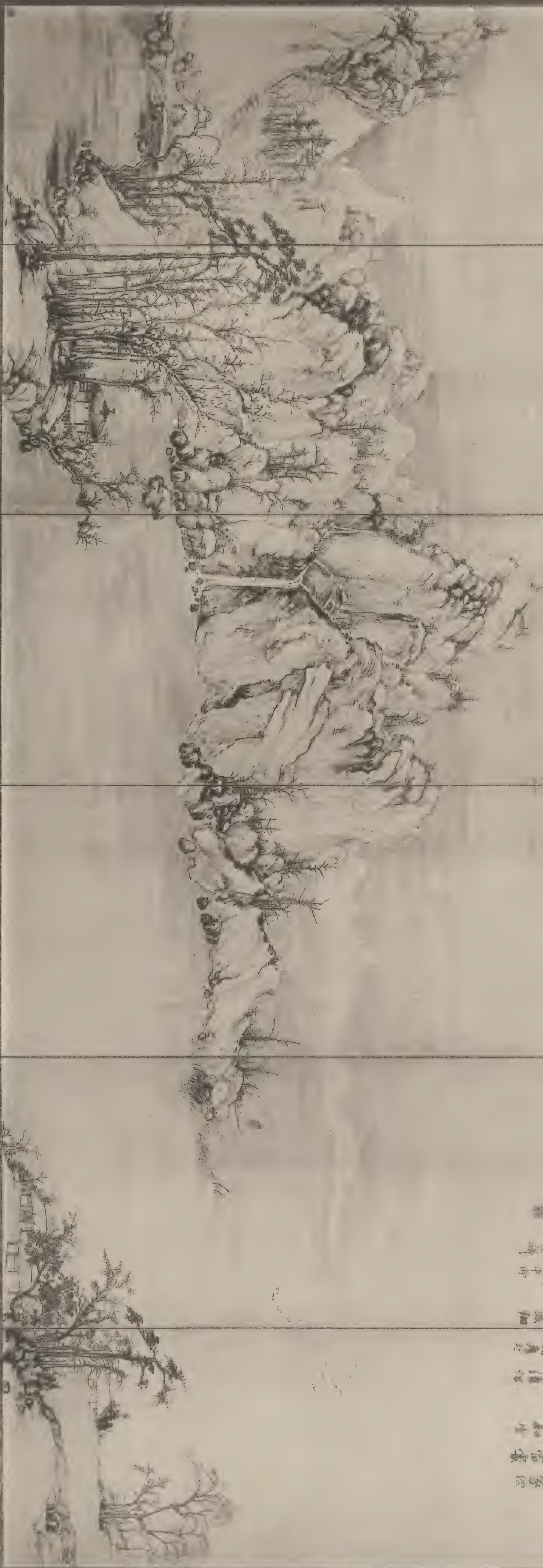
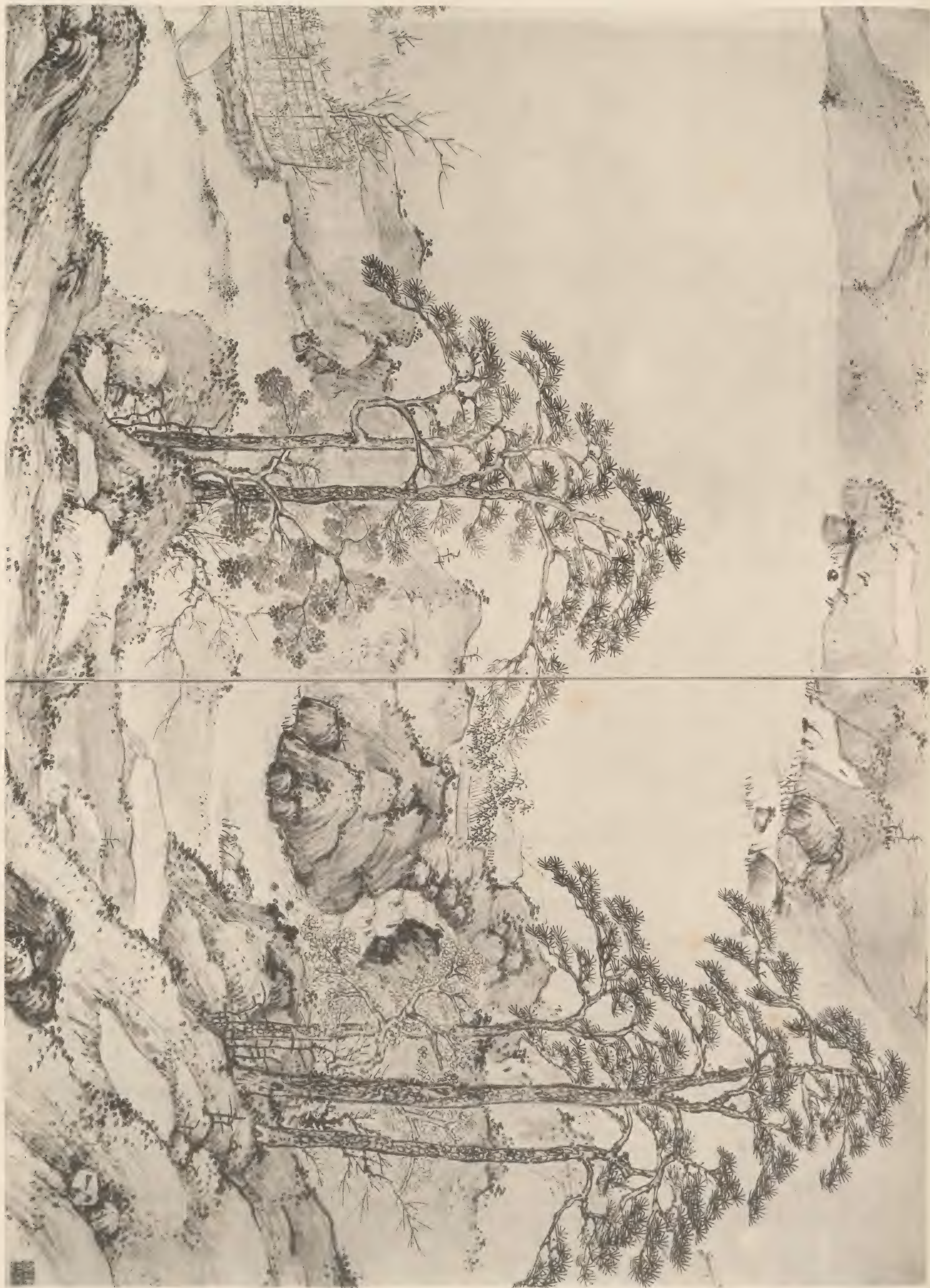
紙本淡彩

各竪五尺一寸、横一丈一尺二寸五分

東京　細野次郎君藏

（第七百十二頁參看）

野亭風暢晚晴開細
草仍花滿碧隈舟宕
柔芳已過去家臺餘
酒未帰来
柳色欝紆傍釣壇沙
痕滄漾雨初乾陽徑
高梢鳥雀屋満梨蕎
薇人倚欄
歳次甲午脩禊月湖東榭中
寫併題舊作時揮瓢
櫻花盛開臨谿研池
之上　海屋生

泛宅身世任浮家
四腮秋可詩當畫
色入蘆花
渴解宿醒
天保甲午之夏桐月中浣

第三百六十九　秋谿覓句圖　日根對山筆

絹本淡彩

竪四尺八寸八分橫一尺七寸五分

信濃國長野　上野正隆君藏

（第七百十二頁參看）

秋溪覓句寛政菊月寫於

第三百七十　西園雅集圖　日根對山筆

絹本著色

竪四尺一寸六分橫一尺三寸九分

京都　吉田茂八君藏

（第七百十二頁參看）

丁巳夏五寫于封山樓上
呂小萍

第三百七十一　谿山疊嶂圖　谷文晁筆

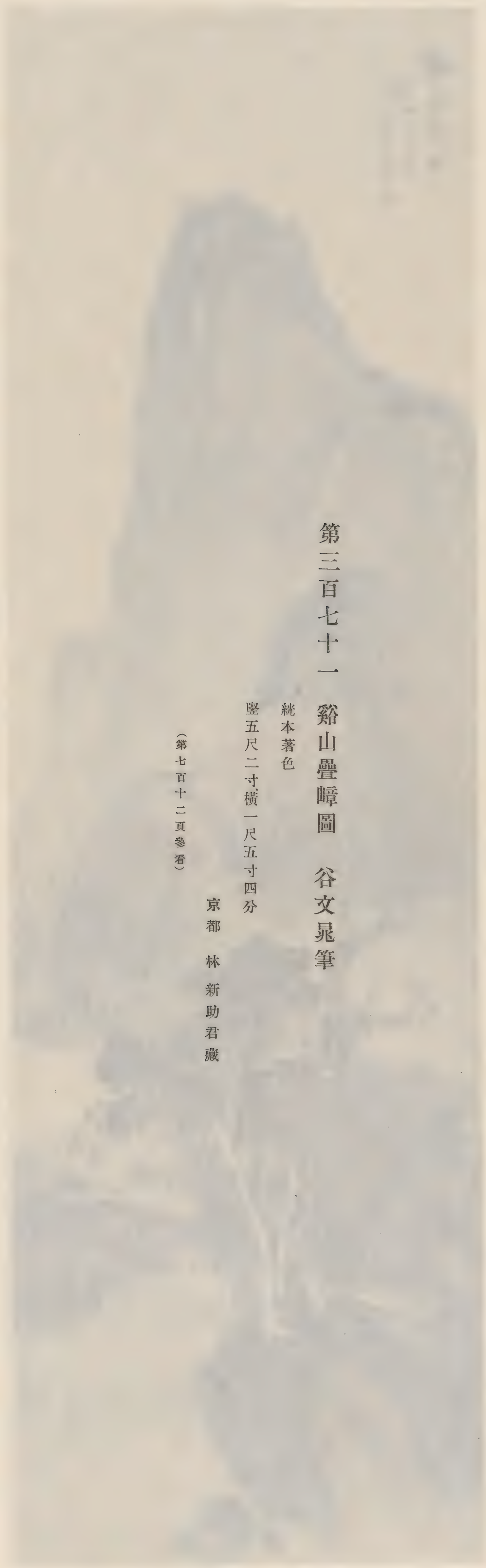
絖本著色

竪五尺二寸橫一尺五寸四分

京都　林　新助君藏

（第七百十二頁參看）

谿山疊嶂

乙卯秋日寫於寫山樓中 文鼎

第三百七十二　夏山圖　谷文晁筆

十二山海帖中の一葉

絹本著色

竪八寸六分、横一尺三寸四分

東京　子爵松平定晴君藏

（第七百十二頁參看）

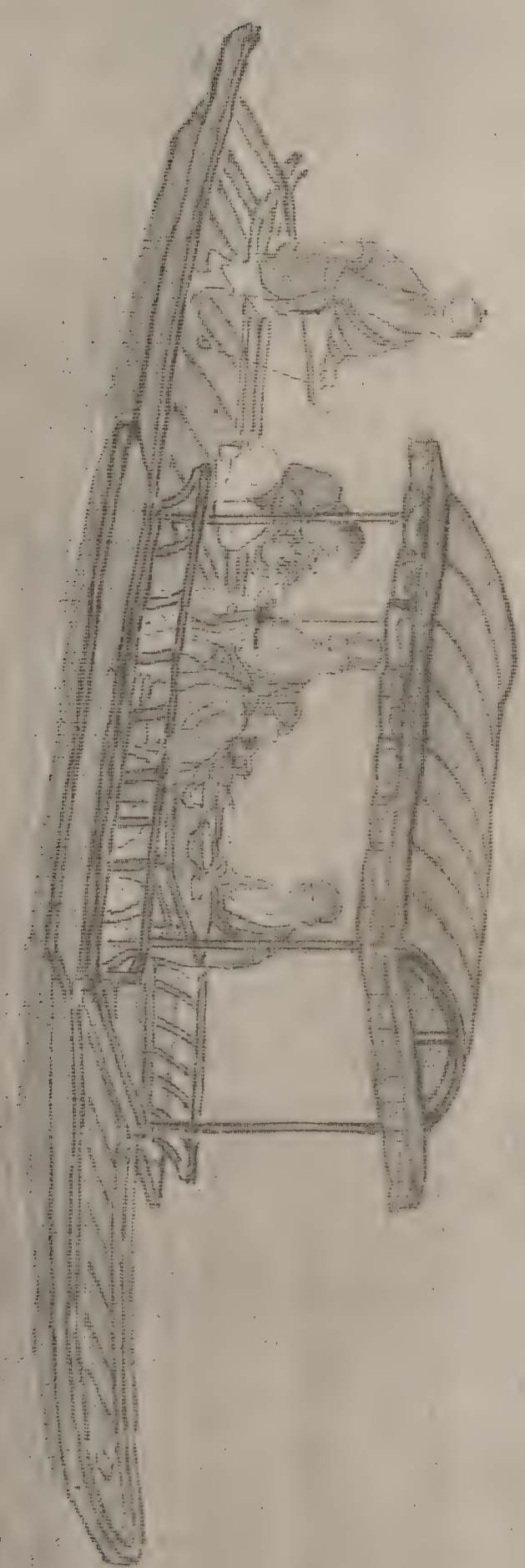
第三百七十三　赤壁圖　谷文晁筆

壯觀錄中の一葉

絹本著色

竪八寸七分橫一尺二寸九分

東京　子爵松平定晴君藏

（第七百十三頁參看）

第三百七十四　蘭亭圖雙幅　谷文晁筆

絹本著色

各竪三尺六寸、横一尺七寸

横濱　原　富太郎君藏

（第七百十三頁參看）

第三百七十五　陶淵明歸去來圖　谷文晁筆

紙本淡彩

竪五尺三寸九分横二尺七寸四分

東京　伯爵室町公藤君藏

（第七百十三頁參看）

第三百七十六　樓閣山水圖雙幅　谷文晁筆

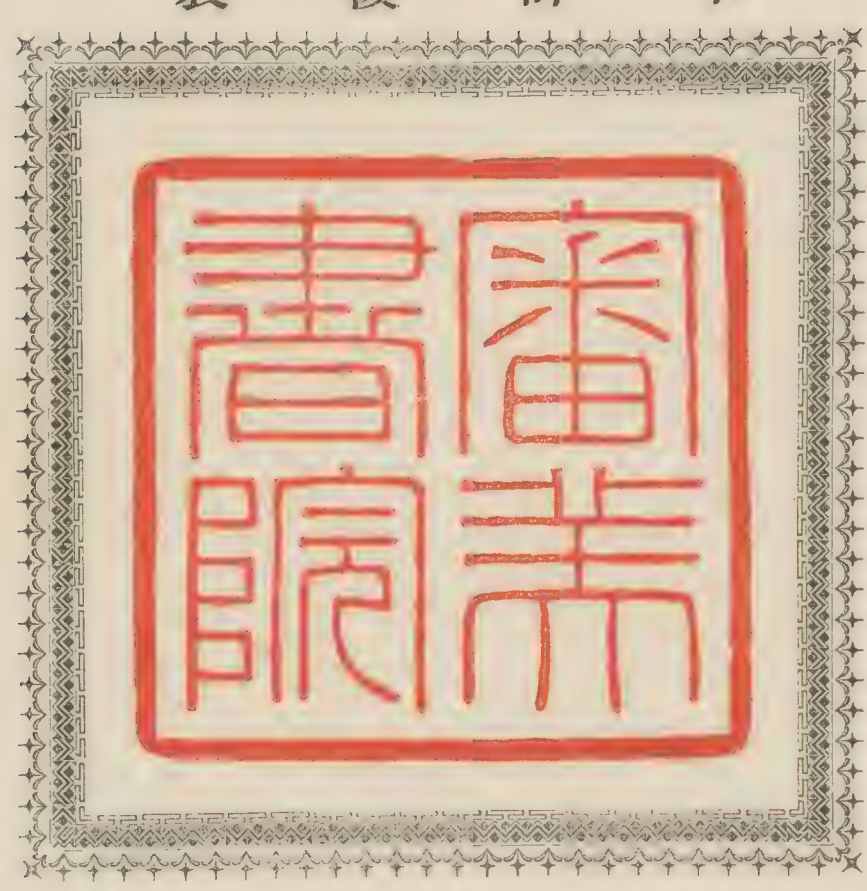
絹本著色

各竪四尺八寸七分、横二尺三分

東京　伯爵德川達孝君藏

（第七百十三頁參看）

明治四十二年十二月十八日印刷
明治四十二年十二月廿二日發行

（東洋美術大觀第七册奧附）

編輯兼發行者　東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社審美書院代表者　田島志一

寫眞版印刷者　東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社審美書院寫眞版部主任　中山音次郎

木版印刷者　東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社審美書院木版部第一工場主任　三井藤三郎

活版印刷者　東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社審美書院活版部主任　神田輝夫

印刷兼發行所　東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社　審美書院
電話（長）新橋三〇五五番
（新）新橋三五三九番

明治四十二年十二月十八日印刷
明治四十二年十二月廿二日發行

不許複製

發行印刷所
株式會社 審美書院
東京市京橋區新肴町一三番地
電話（新橋）三〇五三・三五九番

活版印刷者 神田輝夫

木版印刷者 三井桂三郎

寫眞版印刷者 中山省太郎

編輯兼發行者 田島志一